
理系少女と文系少年。

花澤文化

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理系少女と文系少年。

【Nコード】

N43720

【作者名】

花澤文化

【あらすじ】

俺は文系だ。

いわゆる文系少年。

男は理系が多い。だから俺への理系期待も高かった。しかし俺が得意なのは古典、現代文。意味がわからない理系への期待にイライラしながら高校2年生の春を迎えた。

そして

2年生始めの日、始業式に俺はバリバリの理系少女と出会った。

始まりの桜

男は理系と決められてるのはおかしいと思う。

確かに理系には男子が多い。うちの学校にも3年生で理系を集めて、男子しかいないクラスもある。しかし文系の何がいけないのだ？母に言われた、「数学できないの！？男なのに？理系じゃないのねー」と。友達に言われた、「お前物理とか得意そうなのにな」と。

どれも勝手な思い込みじゃないか。

俺が何にイラついているか。分からない。自分でもわからないのがむしゃくしゃする。だからやってやったよ。2年生に上がる前。高校1年生の時、選択科目はすべて文系のやうがとるような科目にした。古典、現代文などなど。

そして高校2年生の春。初2年生登校。始業式の時だった。クラス分けを見るために校門を通り、グラウンドにいくと……

「むー、これは背が低い人には向いていない作りをしているようだね……。ふむふむ」

ばりばりの理系少女に出会った。

○

朝。始業式だと言っても特に変わった事はない。いつも通りの時間に起きて1階におりる。俺、七実ななみ未空みそらは日本人らしい黒い髪の毛の寝癖を直し、長くも短くもない普通の髪を整え食卓に行く。

「今日クラス分けも発表されるんでしょう。楽しみね」

話かけてきたのは母ではない。寮母である。香織さん。まだ若い方だろう。ここは寮。俺の部屋は2回にあり、1階はみんなの食卓、みんなで過ごす部屋になっている。ちなみに住人は俺を入れて5人。

「ああー、別に変わんないっすよ。クラスが離れても友達とは会おうと思えば会えますし」

「ネガティブね・・・。新しい友達をつくれればいいじゃない」

「あーまー、そっすね。でもまた名前なまえで女と間違えられる・・・」

「いいじゃない女装したらかつこいい系の女の子になれるわよ」

「やめてください！俺の将来を汚さないで！」

と言いつつ、朝食を食べる。焼き魚の焼き加減がちょうどよく、温かくてとてもおいしい。

「今日は新しい子がくるの」

「新しい子？」

「この寮によ。2年生だったかしら。顔はかなり可愛いわよ。しかも女の子」

「学年の次の情報が顔って・・・性別が先でしょう・・・。ていうか俺のことなんか勘違いしてません？」

「まあいいじゃない。同じクラスになれればいいわね」

「会ったこともないのに同じクラスになりたいとは思いませんよ」

「確かにそうね……。クラス分け。次は理系文系も関係してるんでしょ」

「ええ」

「友達みんな理系なの？」

「ええ……。まあ。でも同じ階ですし会おうと思えば会えますよ」

「またそんなこと……」

「あ！じゃあ俺もうそろそろ行きます！」

「え！？もう時間？」

「いえ、はやめに行きたいなと思って」

「じゃあ、私は他の子を起こしてくるわね」

「はい、じゃあ」

「いつてらっしゃい」

そんな感じた。イラついている原因は友達がみんな理系だからだろうか？俺のいる寮のみんなも理系が多い。多いつてことは文系もいるんだけど……。女子だしな。仲はいいんだけど男友達みたいには関われない。男子同士だと遠慮がいらなからな。

「はあ……。もう着くよ……」

ちよつと気持ちはげんなりしていた。友達が同じクラスにいないと分かっているクラス分けなど楽しくない。しかも寮から歩いて15分の近場だ。電車など必要ない。家からだとも1時間以上かかるので寮に来たということだ。いや、理由はそれだけじゃないんだけど。

「えーと、グラウンドか……」

桜舞う学校。桜浪高校さくらなみ。そこに着いた俺はクラス分けの表があるグラウンドを目指す。入学当時の1年生じゃないので行き方もわかる。

そしてグラウンドに着くと、一面ピンク。桜が満開だった。

「1年前はかなり驚いたよな……」

この高校。桜浪高校の名前の由来。桜が浪のように咲いているから。そして桜の花びらも浪のように押し寄せてくるから。ほんと毎年みてもすごいと思う。まだ4月8日。それなのに入学式、始業式に合わせたように咲いている。

「えーと、クラスクラス……と」

俺はグラウンドまで歩いていく。そこにあっただのは人！人！人！の人ばかり。

「マジかよ……。こうならないように早く出てきたっていうのに……」

それは全てクラス分けを見ようとしている人たちの集まりだった。1年生は3日後の入学式でクラスが発表されるが、2年生、3年生は今日。2つの学年が一気にグラウンドの一部に集まると……。まあ、不快な光景になるだろう。

「しゃーねーか……」

俺は背が高い方じゃない。170はないと思う。だからといってよく漫画である背の低い可愛い系男子というわけではない。あれはつきりもの。俺がいるところは現実。顔なんて普通だ普通。

「じゃあ、人ごみの中を進むとしますか……」

俺は決意とともに歩き出した。すると・・・集まりの後ろのほうに背の低い女の子がいた。背が低いといっても150はこえていると思う。腰まである綺麗な茶色の髪。髪のしたのほうでリボンを使っている。あれじゃ結んでる意味ねえだろ。さっきからピョンピョン跳ねているのを見ると表が見れないんだろう。

> i 1 3 3 9 2 | 1 0 5 8 <

「むー、これは背の低い人には向いていない作りをしているようだね・・・。ふむふむ」

一番最初にきこえてきたセリフはそんなセリフで。次のセリフは・・・

「ここでごういう風に関数を使えば・・・三角比で・・・」
「おい」

俺は気がつくと言をかけていた。俺は人見知りなので自分から声をかけることはめったにないのに。しかも女の子だぜ。でもなぜか放っておけなかった。

「？誰？」

「誰かはあとで言うよ・・・。あのさ・・・」

「何？まさかこれが告白ってやつですか!？」

確かに顔は可愛い。しかし初対面だぞ、しっかりしろ。あれ？でも世の中には一目ぼれとかっていうのもあるのか。俺には信じられない。

「違う！そっじゃなくて・・・」

「じゃあ、何用ですか？」

「手伝ってやるのか？関数なんてもの使わなくても解決できるぜ」

俺はそう言っていた。俺は放っておけなかったのもあるが、数学で解決されるのが嫌だったのかもしれない。関数なんて使ってクラス分けの表を見れるのか分からない。でも見過ごせなかった。

これが俺、文系少年と謎の理系少女の出会いだった。

.....三角比ってどこで使うんだよ.....

始まりの桜（後書き）

どうも花澤文化です。はなざわふみかと読みます。

ちょっと変わった学園ものです。ラブコメでもありませんね。

今連載しているので純粹学園もの、ラブコメがないので書いてしまいました。

2話目からもっとはっちャけていきたいと思います！

王道ストーリーの小説とともに更新していくつもりです。

他の小説はなかなか続きが思いつかなくて止まっています。が日常系ならどんとこい！

でわ

第1片 理系少女と文系少年の出会い

「手伝ってやるうか？」

> i 1 3 3 9 0 — 1 0 5 8 <

俺は気がつくのと女の子に声をかけていた。桜舞うグラウンドでいきなりナンパ！？とか誤解されても困るので説明すると数学が気に入らない。それだけ。

「手伝う？」

聞き返すなよ。聞き返すほどの内容でもないだろうが……。

「何をですか？」

「いや、だからクラス分け表が見たいんだろ？だから手伝ってやるって」

「だいじょうぶです。今から方程式を使って……」

さっきは関数って言ってたのに。

「そんな方法よりいい方法がある。俺が力技で前へ行くからお前の名前も見えてきてやる」

「なんか軽く芝居がかった口調ですね……まあでもいい考えなんのでぜひともお願いします！」

芝居がかってるかな？俺の悪い癖だ。読んだ本の影響をかなり受けるため、口調が移ったりするのだ。最近青春ものの小説を読んだなあ。ということ遅れました文系少年こと七実未空ななみそらです。

「で、名前は？」

「きしじますうか
岸島数夏」

「どれ……………今いつやるからな……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………でいつ行くんですか？」

「うつうつるせえやい！」

めっちゃ怖気づいてました。普通に人が怖い！

「まあ、期待はしてませんでしたから私が先に分かっちゃいましたよ」

「何がだ？」

「クラスです」

「何言ってやがる。見てもいないのに……………」

「確率です」

「は？」

「私の前のクラス、行動、仲のいい友達とか含めて計算すると確率的に2年2組ですね」

「いやいや何言ってるんだかまだわからないよ」

「ちなみに今、集まっているクラス分けの表に集まっている人数は982人。それに人々の身長。先ほどまでの人がとどまっていた時間を計算したところあと2分程度であなたにも見えるようになります」

絶句。こいつは頭が悪い。

「お前はバカか？」

「しつ失礼なのですっ！バカなんかじゃないですよ！」

「そんなにくら数学が得意だからといってそんなの求められるわけがないし、できて暗算でできるような内容じゃない」

「むー……。失礼な人ですね！あなたは今日から失礼な人って名前です！」

「却下」

「私にちよつかいだしてくる人」

「なんかセクハラしてるみたいじゃねえか」

「私にいたずらする人」

「洒落にならんぞ！それは！」

首をかしげている。意味がわかってないのか。健全な高校生男子であるならばいたずらの単語も卑猥な言葉に変えられるんだ。油断するなよ。

「もうそろそろ2分後ですね。では私は教室に行きます。もう会うことはないでしょう」

「おい！見なくていいのか？」

「見なくていいのです！当たってるんですからー！！！」

といて走り出してしまった。……………
……………。2分後人ごみはマシになっていた。

「マジかよ……………」

そして2年2組には岸島数夏きしますづかの字が。

「あーあ……………当たってやがる……………」

ん？と気付いたことがあった。あいつは一つだけ計算を間違った。それは文系少年だからできたのだろうか……。いやあの理系少女は異常だ。たまたまだろう。

○

「お前一生会うことはないって言ったよな」

「い、言いましたよ」

「へー、ふーん」

「いつ言いたいことがあるのなら言えばいいのです！」

「いや、お前の計算外れたなあってな。俺とおまえは同じクラス。会うに決まってるじゃねえか」

「私の計算をはずすとは……。人外か何かですか？」

「人内だ」

「その表現もおかしいですが……。困りましたね……」

「何がだ？」

「いえ、なんでもありません」

ここは2年2組教室。これから始業式だ。まさかのこいつと同じクラスだとは思わなかったが。2年1組と2年2組、2年3組の3クラスは理系と文系が混ざっているらしい。だから理系のこいつとも一緒になれた。

「それにしてもすげえな。計算」

「当たるとは言いましたが、所詮計算です。外れることだってあるんですよ」

「文系の俺には信じられないね。普通の計算ですら危ついのに応用なんてできるかよ」

「つてことは数学は点数悪いんですか？」

「ああ」

「何点？」

「なんで言わなきゃならねんだよ！」

「私に毎晩いたずらしくくる人と呼んでもいいのですか!？」

「39点……………」

「……………」

「無言はやめてくれる!？」

「いえ、無言というか声が出なかつただけですよ。驚きです人類にもいたんですね、数学できないひと」

「お、お前だつて古典、現代文は全然なんだろ！」

「そつ！そんなことないです！」

「何点？」

「いいたくありません」

「お前のことを変なあだ名で呼ぶぞ」

「私は無視しますから別にいいですよ」

「……………」

無視されてるのにあだ名で呼びつづけるバカになるのは勘弁。だがどうしても知りたい。この気持ちどうすれば……………。

「じゃあ、教えてあげましょう」

「地の文を読むなっ！」

こいつが人外じゃないかと思う時が多々ある。

「49点 - 10点 + 1点 - 3点です」

「きつたねえ！そんな早口で言われて計算できるか！」

「私にはできません！あなた・・・えとえと・・・」

「名前言っただけじゃなかったか？俺は七実未空」

「なんか女の子みたいですね」

「うるせえな・・・」

「七実さんはおもいつきり文系ですね」

「まあ・・・な」

「どうしました？」

「いや、岸島は完璧な理系だな」

「そうですよ！日本語なんて分かりません！」

「日本語は確かに難しいよな。日本人だって使いこなせてないし・・・」

「」

「日常の会話でさえ危ういですよ。もつちり・・・」

「もつちりってなんだよ。まったく・・・って言いたかったのか？

ボケとしては雑だし、ボケじゃなかったら病気だ」

「おーい、始業式始まるぞー」

というわけで俺の新しい生活はこんな感じで始まった。女子は文系の方が多いのにこいつは理系でいいのだろうか。俺は苦痛だった悩み。仲間はずれにも似た感覚。それを感じてないのだろうか。

「まったく面倒だな・・・」

そういつつ廊下に出る俺。校長の話とかきいてられねえよ。見た目通り子供っぽいやつなのかな、岸島は。だとしたら深刻な悩みはないかもな。でも俺は思う。こいつは何か抱えてるって。悩みがある高校生の勘だけだな。

「あ、いい忘れてました」

「ん？」

「あのですね・・・さつきはありがとうございました」

「は？何がだよ」

「私のためにクラスわけ表見てくれようとしたじゃないですか」

「あー、でも失敗しただろ」

ずーんというような効果音が流れそうなほど落ち込む俺。

「あつ！いえ！その・・・助けようとしてくれた気持ちで十分なのです。ありがとうございました」

笑顔でいう岸島。でもそれはどこか寂しそうで、そして俺はそれに見とれてしまった。こいつ顔だけは可愛いからな。うるさいけど。バカだけど。アホだけど。

「ああ、どういたしまして」

さてこれから戦うべく校長の話にむけて気をひきしめる俺だった。

第1片 理系少女と文系少年の出会い（後書き）

はい、こんにちわ、花澤文化です。

日常話は書いてて面白いですね。

出会いが終わったので次からようやく日常の中の日常に入れます。

でわ

第2片 理系少女とタニエルの悪夢

爽やかな朝！気持ちのいい風！どうもこんにちわ！七実ななみそら未空です！
さて今日はどんな楽しいことがおこるのかな？

「んーっ」

と漫画のようにのびをする俺。あれから2日。俺はクラスにあまり馴染んでいなかった。というかまわりのやつらもそうらしくいくつかのグループができてしまっている。そんな教室の中俺は窓際の席で空を見ていた。

「小鳥のさえずりが俺の心をいやすよ」

「何気持ち悪いこといってんですか……」

「おうあっ！」

俺に辛辣な一言を送ってきた見た目中学1年生の高校2年生、岸島きしじま数夏ますつが。理系の中の理系である理系少女。なんか出会ってからよくからんでくる。この2日間はこいつと話してばっかだったな。付き合ってるわけじゃない。好きでもないし。でもなんか俺と似てる。こ
う……オーラがね。

「お前……！驚かすなよ！」

「いえ、七実さんの目がキラキラしてたもので阻止させていただき
ました」

そのまま輝かせて！お願いだから俺の一等星に手をださないでっ！

「ていうかどうしたんですか？春だから頭がおかしくなったんです

か？」

「違うわ！だからそんな哀れみの目で見ないで！」

「まあ、いいですけど。ほんとうにどうしたんですか？」

「いや、なんか起きた時すごい清々しかった時ってないか？理由もなく」

「ラリってんですか？」

「つめてえな！」

本当に失礼なやつだった。ていうかあるよね！そういう時！

「確かに目ざましよりもパツて目が覚める時ってありますよね。そういう時は確かに清々しいです」

「だろう。今日がその日だったんだよ」

「それで少女マンガの目みたいになつてたんですね」

「そうだよ。いいか岸島。世の中には理由というものがある。だがそれを超越トラスグロウするのがこの『なんか起きた時清々しいな現象』だっ！」

「略して『ナンシー（なんしい）』ですね」

「外国人の名前みたいだな」

しかも大事な部分まるまるカットだった。清々しいとか重要なんだけどな。

「いいんですよ、世の中には『はが〇い』『やら』と〇モノ』とかつていう略し方もあるんですから」

「お前自由だな」

伏字使うような例え方するなよ。どっちも有名だけどさ。ていうか地の文読まないでくれる？恥ずかしいから。

「ところでナンシーさん」

「俺の名前は七実だ。だれがナンシーだ」

「七実さんは『ナンシー』になることによって大分テンションが違いますね。私は『ナンシー』になってもテンション自体はたいして変わらないですよ」

「そうか？気づいてないだけだっつて」

「いえ、七実さんの『ナンシー』は異常です。きつと寝てる間になんかあるんじゃないですか？」

「例えば？」

「エロい夢見たりとか」

「俺のことなんだと思ってるの!？」

それを『なんか起きた時清々しいな現象』とかって名付けて恥ずかしいだろっ！

「じゃあ、お前も『ナンシー』になったら教えてくれ」

「分かりました」

というところ時間目担当の教師がきた。さーて、今日はいいい日だなー。

○

「おはようございます……」

「ああ……お、おはよう……」

次の日。岸島はよつれよれだった。弱っていた。昨日と同じ俺の窓際の席の近くで岸島はやる気のなさそうないさつをした。

「ええと……どうしたんだ……？今日は早いじゃないか」

「なんか……起きた時すごいやる気がでない時ってありません？」

ああ……朝に宿題やってないこと思いだしたり、ちゃんと起きれなかったり、時間なくて朝ごはん食べれない時とかね。朝から失敗続きだとなんか今日死ぬんじゃないかって思うよね。

「で、それが今日だったと……」

「はい……。だってなんにもしてないのにえらいやる気でえへん現象』です」

「略して『ダニエル』だな」

そしてなんで大阪弁？

「『ダニエル』なんて失礼な……。ふざけてないでください。深刻なんです」

「その失礼なことをお前は前日俺にやっているんだ、気づいてた？」

自分のことを棚にあげがって。

「棚に上げる？」

「お前は早急に国語の勉強をしろ」

急激に心配になりました。

「で、どうしたんだ？」

「いえ、宿題を忘れ、寝坊して朝ごはんが食べられず、朝ベッドから落ちました」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「はい、私なら大丈夫なんで・・・」

「典型的な『ダニエル』だな」

「典型的な『墮天使』^{だてんし}です」

「中2病!？」

なんで自分だけかつこよくしてるの!?!ずるい!こっちは『ナンシ
ー』なのに!

「くう・・・計算で今日だと昨日分かっていたんですけど・・・
無念。回避不可能でした」

「それも計算で出したのかよ!」

「簡単な計算ですよ。ただ鼻血とか出しましたが」

「サオーウォーズ!？」

どっかの映画で見たことあるやつを昨日ちよつとしたことでやりや
がった。せめて世界を救うとかでやって欲しかったよ。

「で、今日はそんなテンションだったと」

「はい・・・」

「俺は1年生の最後からテンションそれほど高くないからなあ・・・
そんなにテンション変わらないと思うぞ」

「なんかさらつと悲しいこと言いましたね」

「だって友達が全員理系だったしな」

「さらつと涙ぐむこと言いましたね」

「でも結果文系と理系が混ざったクラスだったからな」

「じゃあ、お友達もいるんじゃないですか？」

「一人もない」

「さらっと泣いていいですか？」

と喋って岸島は泣きマネをし始めた。そんなに悲しいことなのか？

「でも男友達はいないが同じ寮のやつならいるぞ」

「ってことは女の子ですか、このハーレム野郎」

「さらっと暴言吐くな。そしてどこがハーレムだ」

「その子と私」

「さらっとお前も入ってるんだな」

ずうずうしかった。ていうかお前ふざけてるだろう。

「なあ、ダニエル」

「ダニエルじゃないです。岸島です」

「じゃあ墮天使」

「中2病！？いやです！恥ずかしいです！……くっ！やめろ……
疼くな……右腕」

「中2病じゃねえか！ていうか疼いてるってことは俺を殺そうとしてるよね！？」

「で、なんですか？」

「さらっと流すな。お前、俺と一緒にいるが、お前もこのクラスに友達がいないのか？」

「学年にもいませんよ？」

「大号泣なんだが！」

俺よりひどかった。

「私はこれでも数学、理科系などで学年1位ですからね！近寄りが

たいんでしょっ

「自慢かよ」

「お嬢様っぽい高飛車な人に近寄りがたいのと似ています」

「『うわ、やべえこいつと関わるとめんどくせえ』のと同じだと思
う」

「それもしかして七実さんの感想じゃないですか!？」

「もしくは『イカれてやがる・・・こいつ仲間を喰って進化しやが
った・・・』と同じ」

「化け物に対する感想ですね!近寄りがたいというか近づきたくな
いですよ、そんな化け物」

「だからそれと同じだって」

「近寄りたくない!そういうことですか!」

いや・・・まあ・・・そういうことだよ、基本。なんでも
計算ですまそうとするやつにはちよつとね・・・。

「あー、傷つきました。今日はもう最悪な日です・・・」

「いや、すまんすまん。ボケだボケ」

「ザ○」

「死の呪文!?怒ってらっしゃる!」

「ザ○キ」

「呪文のレベルが上がった!？」

死ねということですか!?ねえ!岸島さん!

「もうMPがやばいですね。席につきましょっ」

「ゲームと現実を一緒にするな」

「ギャルゲやエロゲと現実を一緒にしてる人に言われたくないです」

「俺最低じゃんっ!」

「出会いがしらにえっちいこと。あいさつがわりにえっちいこと」

「本格的に俺、末期だな」

「やめてください。見ないでください。妊娠します」
「節操ねえな！俺！」

そこまでじゃねえよ……。というか一緒にしてねえわ！

「ところで『ダニエル』はなおったか？」

「え……。？あ……。」

そう俺はだてにふざけてたわけじゃない。こいつが本当に辛そうだったので元気づけようとしていたのだ。ふふ！どうだ、このかっこのいい作戦は！

「あ、ありがとうございます……。」

「気にすんなよ。もう授業始まるぜ」

「はい！ザラオーマ！ザラオーマ！」

「死の呪文連発！？しかも全体にきくんだけれど！」

クラスメイト大ピンチだった。そうして元気にスキップしながら席に戻っていく岸島。

「死の呪文で照れ隠ししたのか。素直じゃないな」

といいながら元気が戻った岸島を見て俺は安心していた。ていうか死の呪文で照れ隠しして普通じゃないだろ。

「さーっ！授業始めるぞー」

と言いながら古典の教師が入ってきた。さてと……。授業授業……。？あれ？なぜだろう岸島から恨みの視線を感じる。

「あ……！」

そこで思いました。今日、こいつは朝早めにきていたんだ。俺は寮から近いので早めに行こうと思えば簡単に行ける。しかしこいつは違うはずだ……。じゃあなんでわざわざ早めに来たか……。

「はいはい！宿題集めるから列の後ろのやつが列のやつ集めてこいよー」

宿題しようと思ってたんすね……。忘れたっていったもんな、宿題やるの。でも俺がふざけたせいでそのことを忘れていたと俺はこの授業が終わったら男子トイレに逃げようと思った。

「岸島、宿題忘れたのか！？今日はお前にみんなの倍の宿題ですからな！」

ごめん……。でもさ、俺は元気づけたぜ。そう！いいことをしたはずなんだ！でも俺はその助けた奴から逃げなければいけない。死の呪文をかけられないように。運命ってのは残酷だね！

第2片 理系少女とダニエルの悪夢（後書き）

というわけで日常色でお送りいたしました。

なんか長くなってしまいましたけどどうでしょうか？

すらすらいくのどどつしても長くなってしまいました。

でわ

第3片 文系少年と新・寮生の引越

「今日、例の子来るから」

「はい？」

4月下旬の日曜日。寮母である香織さん。まだ20代前半ぐらいでポニーテールの年上好きならたまらない人だ。しかもナイスバディ。日曜日なので思いつきり寝坊して今日は寮のみんなと朝食を一緒に食べられなかった。食事の時間は決まっている。遅れても香織さんは朝食を出してくれるのだ。なんて優しいお姉さんだろうか。

「話きいてた？」

「いえ、すいません。みそしるがうるさいもので……」

みそしるに責任転嫁した俺。みそしると会話できる悲しいやつとは思われたくないが……。

「だから、今日は寮に女の子が入ってくるから」

「あーそつえば」

そつえば言っていた。始業式のとくに朝言われたおぼえがある。

「確か可愛い子でしたっけ？」

「そこだけおぼえてるのね……残念な子……」

なぜそんな目をしているんですか、香織さん……。なんか香織さんからの好感度が下がった気がするのはいのせいだろうか。

「なんでこんな中途半端なとき？」

ああああん！」

○

ピンポーン

下の階からインターホンの音が聞こえる。ここは俺、七実未空ななみそらの部屋。ゲームやら何やらと少し汚いが寮にしては広いと思う。ベッドもついているし。

「はい」

香織さんの声だ。俺も暇だったので1階におりる。1階は食堂にテレビ、ソファがあるかなり広いリビングみたいなものになっている。みんなが夜や暇なときに集まる場所。みんなの部屋だ。香織さんにも一応部屋があるから深夜には無人となってしまう。

「香織さん誰ですかー？」

階段をおりながらきく。

「未空君！ちょうどいいわ。今日からこの寮に来る………」

「岸島数夏です………てっあああああああああああああああああああああ
あああああ!！」

「あああああああああああああああああああああ!!!!!!!」
「あれ?なにあなたたち知り合い?」

なにこの展開。どこのラブコメ。よく今さらこんな古いことできた
な、神よ。

○

「クラスメイトだったんだー。へー、未空君に女の子のと・も・だ・
ちねー」

「あ?ごめんなさい。ハウスタストと会話してまして。もう一度言
ってください」

「七実さんはそんな特技があるんですか!?!」

「いや、もういいわ。だから現実逃避するのはやめなさい。そして
数夏ちゃん信じない」

というわけで3人で食堂の机をかこんでいた。どういっわけだこれ。

「数夏ちゃんの荷物は2回にもうあるから力仕事はお願いね」

「はいはい」

「七実さんが手伝ってくれるんですか？ありがとうございます。この間、堕天使と戦ったときは別人なぐらい優しいですね」

「堕天使！？未空君、学校で何してんの！？」

「少なくとも堕天使とは戦ってねえよ！！」

こいつのせいで会話が成り立たなかった。確かに戦ったけどあれは『ダニエル』じゃないの！？いやーそれにしても驚いたなこんな古典的なラブコメ展開があったとは。ただちょっと違うのは俺は別にこいつのことが好きなわけじゃないということだ。

「それにしても数夏ちゃん可愛いわね、ぶにぶにさせて」

「ほっぺをつつかないでください！」

「香織さんは可愛いもの好きだからなー」

「七実さんも何をそんな温かい目で見てないで香織さんを止めてください！」

○

「さて、まずはこのタンスだな」

「ああ・・・私のタンスがどんどん脱がされていく・・・」

「やりづれえな、おい！ただ包装されていたのを破いただけだよ！」

最初っからこれで今日中間に合うのだろうか・・・。

「さーて私は何をしたらいいのでしょうか？」

「は？石でも食べてたら？」

「私への指示が雑すぎます！！」

「と言われてもなあ……………」

荷物はテレビ、ベッド、それに本棚、机など、主に重いものばかり。正直言つて岸島の出番はないんだけどな…………でもなんだろうこのやる気に満ちた目は……………ふつ……………分かったぜ…………。負けたよ。お前の熱意にな。

「よし、分かったお前はその本を持って！」

「えーめんどくさいです」

「……………」

「分かりました！分かりましたからそのタンスを投げないでくださいー！」

「ったく……………」

俺はタンスを持って部屋の中に入る。タンスの中にはまだ物が入ってなく、少し小さいので俺1人でも持てるくらいだった。

「計算によると1mmぐらいのずれなら許せますね」

「は？」

「いや、私の部屋の構図ですよ。計算通りにおいてもらいます」

「無理だよ！俺人間！わかる！？機械じゃねえんだよ！」

「いや、でもそうしてもらわないと夜な夜な出てきますよ」

「何が！？」

「桜高軽○部」

「ぜひ出てきてほしいよー！」

大歓迎だった。食事だつて出してやらあ！

「あ、そこはあと2mm横ですね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そしてやらされてる俺。何これ。俺手伝ってるんだよね？扱いがひどくないっすか。というわけで一応タンスを設置することができた。

「ふう・・・・・・・・疲れましたね・・・・・・・・」

「俺がだよっ！！」

こいつは何もしていない。頼んだ本すらまだ終わってないのだ。どこで疲れたんでしょうか。それが気になります。

「ほら、次はベッドだ。俺1人じゃ無理だから2人でやろう」

「ベッドで何をするつもりですか！」

「何言ってるんだ！ベッドじゃねえ！ベッドを！運ぶんだよ！」

「未空君・・・・・・・・」

「香織さん！？」

「その・・・2人とも同意の上でじゃないとだめだよ」

「あんたは何をきいていたんだ！」

「七実さん。むしろきいていたからこうなったんじゃないんですか？」

タンス1つ運ぶのでこんなに時間かかるとはな……。まだやることはいっぱいあるのに……。香織さんの誤解を解きベッドも設置成功。こいつ計算を事前にしてたんじゃなくてここでしてやがる。しかも全て暗算。驚くべき才能だよ、まったく。

「えーと、ここの幅が37cmと。だったら・・・・・・・・」

「そろそろ休憩するか？」

「いえ、七実さんのせいで遅れているのでもう少しあとにします」
「俺の優しさが!!！」

しかも責任転嫁してやがる。すまん、みそしる。こんなに理不尽なことだったんだな。すまん、ハウスタスト。俺はお前相手に面白い話の1つもしてやれなかった……。

「なんかしんみりしているところ申し訳ないけどクッキー焼けたわよ」

「クッキーイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!！」

「子供か!!あと遅れてるんなら作業続けるよ!!」

3時のおやつに家に帰る子供みたいだった。それを見て香織さんはまたほつぺをぷにぷにしていた。ほんと、高校2年生には見えないよな。髪は長くて茶髪で大人っぽいかと思いきや、その後ろの髪がすごい下の方でつかいリボンを結んでいる。あれが子供っぽさを出しているのだ。

「お前、今日のリボンは水色の水玉なんだな」

「はい!このでかいリボンは毎日変えていますからね!!」

「ああ、一昨日は赤色だったな」

「なんでそれを!?!もしかしてのぞいてました?」

「学校で会っただろうが!」

ちなみに昨日は土曜日なので会っていない。だから知らないのだ。なのにこいつは……まったく失礼なやつだな。そして俺も1階へ降りていく。

「ああ、七実さんは引越しを続けてください」

「その……あの時、食べてなかったですよね？」

「ああ……むくむく」

「その……それ今日引越しのあいさつに持ってきたんですが……」

「」

「ああ……そうなんか。ありがとう」

「未空君！」

「ん？」

なんか香織さんに怒鳴られてしまった。「まったく鈍感なのね……」

・「と呟く始末。俺は何か悪いことしたのだろうか？」

「どうしたんだ？」

「いえ……その……なんでもないです……」

テンションが下がって部屋に戻る岸島。どうしたのだから……

「ツアイ！」

なんか変な声出してしまった。香織さんからのとび蹴りだ。

「なにすんですか!？」

「それはこつちのセリフよ!どんだけ鈍感なのよ!」

「何がですか!？」

「あんだけもじもじして女の子がクッキー渡すってことは手作りでしょうが!」

「どこの世界の常識!？」

「まったく。たとえ好きでもない人だとしてもクッキーを渡したら感想がほしいじゃない!具体的に言つとおいしい!っという一言が!」

「好きでもない人から感想をほしがるんですか?女の子というのは」

未知の生物だな」

そうか……それであんなに……。

「岸島！」

俺は階段を上がる。それをニヤニヤした顔で香織さんが見ていた。

○

「岸島」

「………なんですか？」

ここは岸島の部屋の前。さつきからなかなか入れてもらえない。

「さつきのクッキーさ。おいしかったよ。お前の手作りなんだって？」

「………香織さんの焼いたクッキーの方がよかったですでしょ？」

「はぁ………たく………」

俺はためいきまじりにその場に座りこむ。部屋に入れなくていい。声さえ届けば思いは伝えられる。

「嬉しかった。本当に心の底から」

「・・・・・・・・・・」

「ものなんてもらったことないんだよ、友達から。しかも手作りだなんて。本当に嬉しかった」

「・・・・・・・・・・」

「香織さんのクッキーはおいしいがお母さんからもらったって感じだな！お前のはどっちかっていうとバレンタインにももらったって感じだよ」

「ぶふっ！バ、ツバアババババレンタイン！？」

「もちろん義理だろうがな」

「そっ！そうですよ！義理に決まってんじゃないですか！」

「若い味っていうのか同世代の子って感じがした。ほんとうに嬉しかった。ありがとな」

「・・・・・・・・はい」

「いつもありがとうをもらってた。でも今その分だけ。いやそれ以上で感じてるよ。ありがとう」

「はい・・・・・・・・」

「そしてようこそ・・・・・・・・」

「あじさい荘へ！」

「はい・・・・・・・・ありがとうございませすー！」

元気が戻ったようなので俺は1階におりる。すると香織さんが笑顔で待っていた。

「香織さん。ありがとうございます。あなたのおかげで……」

「だあれが母親ですってえ？」

「ひっ！」

「こつ見えてもまだ22よ！お母さんって歳じゃあないんだから！」

「ぐわぁああああああああああああああああああ！！！」

女の子はやはり未知の生き物ですよ。

第3片 文系少年と新・寮生の引っ越し（後書き）

どんだけ更新すればいいのかと思っていませんでしょうか？

楽しくてしょうがないですよ！

ちよつと最後にシリアスを入れましたが基本は日常をテーマにやっていますので。今回のもおまけみたいなもんです。

でわ

第4片 理系少女と文系少年の授業中

七実未空ななみそら高校2年生だ。理系ではなく文系の少年。文系少年です。今は授業中。教室にいる人数は教師をいれて41人。理系半分、文系半分の教室である。現在は英語の授業中。

「じゃあ基本的な問題をしていきましょう。動詞との関係をわかるためにえーと・・・岸島数夏さん」
「はっはい！」

岸島数夏。理系少女である、彼女は英語が苦手である。まあ、といつてもすごい苦手ってわけじゃあないんだろうがな。

「Do you eat breakfast? これを日本語に
なおしてください」

しめた！やったな！岸島！これは中学1年生レベル！答えは『あなたは朝食をたべますか？』だ！いける！さすがの理系少女でも答えられる！

「えー、あー」

！？

う・・・そ・・・だろ・・・。いや！落ちつけ！落ちつくんだ七実未空！きつと計算をいつものくせでやってしまってるんだ！まったくドジっ子だなー、岸島は。H A H A H A H A !

「『恋？何それおいしいの？』」

先生の顔がひきつつてる……。女の先生で若いしめったに怒らない先生なんだがこれはもう無理だ。怒るに決まってる。俺の成績が削られるー！

「『私を食べてもいいよ……。？』」

「岸島 ああああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああ！！！！」

俺は思わず叫んでいた。あれ？これやつちまった？

「七実さん！あなたの答え間違っていましたよ！まったく……。」「いや岸島。今この状況で俺に文句を言えるハートの強さはわかったから先生の怒りを鎮めてくれ」

「どうしたんですか！？」

そこにかけてきたのは数学の先生、脇道だった。

「いえ、なんでもありません」

答えたのは岸島。お前にきいてねえよ。

「なんでもないんですよ」

といつつ俺も言う。

「脇道先生！」

英語の先生である長瀬先生がかくかくしかじかって話してるー！や

ばい！これは非常にピンチだ！

「分かりました。おい、七実、岸島」

「は、はい」

「はい」

「この問題を解けたら許してやる」

そうして一面びっしりと書かれる数式。かかかかというチヨークのおとがする。ていうか英語の授業潰れてますよー。いいんですかー？ねえってば！

「これでいいだろう」

「これは？」

「大学の超難関レベルの数式だ。外国の大学だぞ。ちなみに数学だ。しかも文は英語。やってみろ」

ニヤニヤと意地悪く笑う先生2人。こいつら解けると思ってたねえな・・・。確かこの2人の先生は今年この学校にきたはず。ならばこいつのすごさはわかるまい。

「英語読めませんよ」

うん、そうなんだよね。問題はそこなんだよね・・・。ったくしよ
うがねえ。

「ちょっと静かにしてろよ。岸島」

「？はい」

「えxぴえr p cふいねv.j.ヴいrじえいふお.j.v.r.f.r.hじよぎ
しいgg.j.v.r.r」

「!！」

「n e h r p n f q i o e m o m n f i j e b n r n p p g t m i q
んしうん f ね k m x もい w q d ンお w の、お k c み g x d め」

「何・・・してるんですか？」

「分かった。岸島耳をかせ」

「え？」

そして岸島に英語の意味を教える。

「あ、その問題だったんだ。何回かやったことありますよ、答えは

5」

「なっなんだと・・・」

「せ、正解だ・・・」

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおお!!!

教室に声が響く!教室中から歓声がわく!

「でもあの英語の意味よくわかりましたね」

「残念だけどあれは高校3年生レベル。勉強してれば俺でもいけるよ。それに俺は文系少年だしな」

「すごいですね!久々に見直しましたよ、文系少年」

「一言余計だな、理系少女」

そして俺と岸島は笑顔で笑いあい・・・ハイタッチする。

・・・
いわけがないんだよね。教室の騒ぎをききつけた校長や他の先生たち
ちがきてこっぴどく怒られた。

「なんていうか世の中って理不尽ですね」
「ああ・・・そうだな」

でも俺らは笑顔だった。それがさらに先生の引き金をひきましたね、
うん。

第4片 理系少女と文系少年の授業中（後書き）

またまたこんにちわ。

今回はバカ騒ぎさせてみました。

次も基本日常で！

でわ

第5片 文系少年と妄想少女の幻想

「七実さんっ！」
「ん？」

桜波高等学校。ここは2年生の教室。2年2組だ。現在は昼休み文系と理系が入り混じったこのクラスで理系少女こと岸島数夏きしまつるかが俺、七実未空ななみそらに話しかけてきた。

「どうした？」

「私、気になることがありまして……」

「気になること？」

「その寮に入ってから3日たっているんですけど……」

「ああ」

「他の寮生さんを見たことがないんですが」

「あー、忘れてた」

あじさい荘。俺らが今現在住んでいる寮だ。しかしそこに住んでいる人はひと癖ふた癖ぐらいある人ばかりなので会わないのもしよугがないのかもしれない。最近は朝食や夕食までバラバラ。香織さんだって寂しそうだったしな……。

「分かった。会わせてやる。ていうかこのクラスにいるって話したよな」

「ああ、そういえば。で、どこですか？どこですか？」

俺は教室の前の方に歩いていく。一番前の席。廊下側。そこにいたのは長い髪を後ろでゴムを使い、ひとつにしばっている少女。小柄というわけではなく、中くらい。しかしその見た目とは違い性格は・

・

「おや？おやおや。久々に七実くんの臭いがするぞ・・・」
「俺だ。そのアイマスクをとれ」

> i 1 3 3 8 8 | 1 0 5 8 <

俺はアイマスクをとった。顔はいい。だがいつでもどこでも寝ているようなやつなので誰も相手にしない。いや、できないのだ。このように性格はめちゃくちゃだ。

「岸島。こいつは山梨戸張^{やまなしとほり}。俺の隣の部屋のやつだ」

「ん？んん？そのかわいい女の子は誰だい？紹介しちゃってよー」

「ほら」

「あ・・・！えと岸島数夏です！よろしくお願いします！」

「数夏ちゃんだね、だね！私は山梨戸張！戸張でいいよん！」

「というわけでこいつが寮生の一人」

「え？数夏ちゃんも寮性なの！？いやー、いやいや、これは失礼。

私よく寝ちゃうんだよねー。だから朝食も夕食も遅くなっちゃうのさ」

「お前少しは起きてろよ。香織さん、寂しそうだったぞ」

「いやはや、面目ない」

さて、次の寮生でも紹介しようとしたとき・・・。

「ところで数夏ちゃんと七実くんって付き合ってるのかい？」

「「ぶふっ」「

「な、違いますよ！私たちはその衣食住をともにしてるだけで・・・」

「なんとっ！そこまでいつちゃってるのかい」

「おいおい、寮だから当然だろ」
「ただ食べられたり、食べたり」
「食べるっ!?!?」

「お前もうしやべんなよ!この前の英語をひっぱるな!」

もうやだ、こいつら!混乱したらまともにはしゃべれねえのかよ!

「ふふふ、そういえば数夏ちゃんは理系だったよね」

「そうですけど・・・」

「確か、理系学年1位。数学は特に得意だとか」

「はい」

「私はね・・・文系の妄想少女って呼ばれてるんだ」

「妄想・・・少女?」

こいつは文系。主に小説分野を得意とする。物語の登場人物だけでなく物やこと的心情までわかるというおかしい少女だ。それは想像力が豊かじゃないとできないというわけだ。

「それなら想像少女・・・じゃ?」

「こいつは変態なんだ」

「違う違う!私は変態じゃないよ」

「なるほど・・・変態だから妄想ですか・・・」

「こらこらこら!七実くんのせいで私が変態になってるよ!」

「当然だな」

「まあ、私は変態だろうが私なのでね、めげないよん」

「開きなおるのはやいよな、お前」

「ところで変態さん」

「おい、山梨。呼んでるぞ」

「あれ!?私の名前いつから変態になったの!?!」

「違います。七実さんのことですよ」

「俺かよ！」

いつの間になつた。俺は変態なことを1回でもいったらどうか。・・・覚えてないな。

「七実さんも文系ですよね」

「ああ、そうだけど」

「じゃあ、七実さんは何少年なんですか？」

「は？」

「そういえばっ！私は妄想少女という最悪な名前がつけられているのに七実くんには最悪な名前がついていないよっ！」

「最悪なという単語は必要かな!？」

「でも数夏ちゃんも理系少女だし、七実くんも何か決めないと」

「俺はいらねえよ」

ていうかこつちの地の文で文系少年といっているので、これ以上増えるとややこしくなるんだよ。

「非行少年はどうですか!？」

「確実にグレてるよな」

「じゃあ、飛行少年でいいよね」

「頭悪そっ！夢見てんじゃねえか」

「小学1年」

「少年だけど、名前が少年じゃねえな」

「んー・・・はっ！ニート少年！」

「いいアイデアみたいにな！」

「じゃあ何がいいんですか？」

そうきかれると困るな・・・。

「無いんだっ たら変態少年で決定ー」

「お前の称号だろう！それは！」

「失礼な！妄想であって変態じゃないんだよ！」

「文○少女」

「おい！それはだめだろう！性別も変わってるし！」

「わかったよん、こんなのどう？・・・・・・七実くんスー

パーエピソード！」

俺、七実の体は限界をむかえていた。もうこれ以上はもちそうになかったのだ。

「あの窓の木の葉が全部散ったとき、俺は死ぬだろうな・・・」

頑張る気力、そういうものが根こそぎ奪われていた。俺の病気は絶望的。かかった時点で死が決まっているという恐ろしい病気。

「ふ・・・」

でも人間とは生まれたときからいつ発病するかわからない死の病気を持っている。寿命という病気だ。そういうことなら俺の寿命はここまでなのかなと思える。死の恐怖などない。死というものがわからないからかもしれないが諦めているのがほとんどだろう。

「どのぐらい続くのだろうか」

生き地獄だった。いつ死ぬかわからない体で、何もできずただただ生きてるのが辛かった。ここにいるだけでお金をとられている。それだけで俺は死のうと思っぐらいまで弱っていた。

「七実くん……だよね」

数日たったある日、綺麗で可愛い女の子が一人病室に入ってきた。名前は山梨とば……。山梨トビウオ。そうそんな感じだったはずだ。

「山梨。どうしたんだ？お前」

山梨は入院している。同じ病室のやつなのだが今日初めて会った。ほとんどが手術室にいたりなど忙しい病気らしい。手紙でのやりとりは何度かして親友とまで呼べる存在だった。そんな彼女がここにいる。絶対安静の彼女が。嫌な予感がした。

「いや、ちよつとここにきたくて……」

「でも点滴は？お前絶対安静だったはずだろ」

「今日だけは許されたんだ。そして一番会いたい人に会いに来たの」「そ……そうか」

落ちつかなかった。裏に何かがありそうな気がしたのだ。すると……

「七実くんはさ……死ぬのって怖い？」

「いや、別に……平気だけど……」

人間は生まれながらに死の病をもっている。この前自分で言って結

構かつこよかったセリフを言いたいが寒いのでグツと我慢した。

「へえ・・・七実くんは強いね」

「そんなことない。もう諦めているだけさ。お前は？」

ふと、きいた。深い意味はなかった。でも彼女は俺の胸に飛び込んできた。

「お、おい・・・・・・・・」

「私はね・・・・・・・・怖い・・・・・・・・死ぬのが怖い・・・・・・・・」

「山梨・・・・・・・・」

泣いていた。本気で泣いていたのだ。

「生きてたい！こうして七実くんとも会えたんだし、いっぱい遊びたかった・・・・・・・・」

「だってまだ死ぬって決まったわけじゃ・・・・・・・・」

「決まってるの」

「へ？」

「今日、明日中だってさ。悪あがきもできたんだけど、可能性がなくなってるさ。お金の無駄だから無理いって断ってもらったの」

嫌な予感は的中だった。絶対安静の彼女が自由なはずがない。

「でも・・・・・・・・七実くんと会ったらもっと長生きしたくなっちゃった・・・・・・・・断った事後悔してるんだ。意味ないのに・・・・・・・・お金の無駄なのにね」

「そんなことない」

「え？」

「お前は頑張ってる。現在進行形でだ。その頑張ってるやつに無駄

なことなんてない」

俺は強く言った。自分にいいきかせるように。強く、強く。

「七実くん……………」

その後、山梨は大泣きした。俺も泣きそうだった。

山梨は死んだ。結局悪あがきはせず息をひきとつたらしい。

「だいじょうぶですかー？」

俺は今しゃべれなくなっていた。それどころか腕すらも動かせない。死は目の前だった。そんな俺をお世話

してくれているのはちっこい看護婦だった。確か名前は……岸島す……………。岸島スリランカ。そんな感じだったはず。

「先生！七実さんがピンチです！」

俺はもう死ぬことがわかる。窓の外の葉も残り一枚。死んじゃうんだなあ。せつかく……………せつかく生きたいという思いがでてきたのに。生きたいって思えたのに……………。そのときにはもうすでに声もだせないなんて……………。誰かに伝えることもできないなんて……………！

「七実さん！大丈夫ですか！？」

そうだメツセージを残そう。俺は最後のちからを振り絞り、手を伸ばす。字は書けない。でも・・・でも伝えたい！俺が生きていたこと！そし山梨が生きていたことを！

そして窓の外の葉は散った。

俺は最後にちっこい看護婦のお尻をつかんで死んだ。

そしてこの少年はのちにこっけと呼ばれた。

『変態少年』と・・・

「結局かよおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

ツッコミだった。というか結局変態少年だった。あんだけひっぱい
といて！

「しかも綺麗で可愛い山梨さんって誰だよー！」

「ここにいてしょ」

「間違いなくお前じゃねえよー！」

「ツイーター!？」

しかもそれだとお前がセクハラしたことになるか?とか言いたいことがあったけど岸島は走りさってしまった……。

「さ、さーて、妄想少女はこれにて……おやすみ……」

「おい!お前!どうしてくれんだよおおおおおおおおおおお
おおおお!!!」

え?これ続かないよね!?大丈夫だよね!次の話では都合よくリセットされてるよね!?岸島と気まづくなってるよね!こうなったら語り部の力で無理にでもリセットだああああああ!!!!

……でも、ちょっと可愛かったぜ、ちくしょう
め。

第5片 文系少年と妄想少女の幻想（後書き）

というわけで今日も更新です。

それにしてもこれ、ネタなくならないようにしなくちゃいけませんよね……。
といってもほとんど思いつきなんです……。。

次の話はどうなるのか！？リセットされてるのか？（笑）

でわ

「まったくもって迷惑だな」

「……………」

「あ……いや、違うんだ。すまん」

「……………zzz」

「寝てんの!？」

立って寝ていた。こいつ睡眠少女なんじゃないだろうか。ところでzzzなんてどうやって口から音を出せるんだ？

「ちつ……こいつはあてにならねえ……………よし!」

俺は他のクラスのアジサイ荘にいる仲間を訪ねることにした。

○

「……………」
「あ……また変態の妄想のせいで犠牲者がでただけど……………」

ここは2年1組。俺が話かけてるのは銀色の髪というめずらしい色の髪。ちなみに地毛。その綺麗な髪をまとめずそのまま長い状態にしている少女。もちろん可愛くどっちかっていうと小柄。でも俺か

らみたらたいして小柄じゃないんだが。俺も背が小さいですしね！

「……………わかった」

こいつこそ無口みたいなキャラ！そして動作も加えて話すためなんか可愛い子だ！うなずくんだぜ！そんな素直なやつ……………岸島は子供みたいにならずくな……………そういえば。

「ありがとう！」

そして2年2組の教室にて

「あのー、岸島さん……………」

「な、なんですか……………変態さん」

「な、こんな感じなんだ。俺のこと変態だと思ってるんだぜ」

「……………合ってる」

「合ってねえよ！」

俺のイメージが身にしみてわかるな。

「あの……………この銀色のかたは？」

「2年1組の結露^{けつろ}緋色。あじさい荘のメンバーだぞ」

「はあ、岸島数夏です」

「……………よろしく」

「声が小さい方なんですな」

「こいつは何少女かしてるか？」

「すみません。私変態少年しか知らないもので」

「だからあれは作り話だったの！！！」

偏った知識すぎる。変態少年じゃねえって。

「じゃあ、やっちゃってくれ、緋色」

「緋色？」

「いやだからこいつの名前。結露緋色。俺とは一応幼馴染なんだが」
「だから名前で呼んでるんですか。へーふーん」

なんか言葉一つ一つ痛い。なんだというのだろうか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・数夏」

「ああ、はい！」

名前で呼ばれたのでびっくりしただろうがこいつは名字までおぼえられないだけなんだ。ここで分かっただろ？こいつは理系だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・私の目を見て」

「はい！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「じーっ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・氷結」

パキン

どこかでそんな音がきこえたような気がした。

「・・・・・・・・未空・・・・・・・・・・なおったよ」

「ほんとか!？」

「あれ？変態さん」

「なおってねえ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・違う。これは最初から未空が変態と思わ
れていただけ・・・・・・・・・・」

「余計ショックだよ！」

あいつの妄想のせいだけじゃないということか！俺はいったい何をしたんだ！

「でも頭がすつきりします。なんだかわかりませんがありがとうございます。ございました、えーと緋色さん」

「……………どういたしまして」

「岸島、こいつは『氷結少女』みでつしよじょうぢゆうって呼ばれてるんだ」

「氷結？なんでまた中2病みたいな名前を……………」

「こいつは自分の脳や自分の目をみた人間の脳を一瞬停止させ、すつきりさせるんだ。妄想少女唯一の対策だ。幻想だつてもちろんなくなる」

「でもなんかすごい能力なんですね」

「……………私は何もしてない」

そしてハンドベルのようなものをだす。

「……………これをならしたらいいの。そういう音波をだすもの。科学的に証明されてる」

「脳を停止させることが凍りつかせるのと似ているために……………」

「氷結……………ですか」

「ま、これで俺はお前のお尻をさわってないとわかっただろ」

「はい、もとからやってないと分かっていますでしたがなんかポワンとして……………」

「やっぱりあの妄想野郎かよー！」

あいつ氷結少女の名前をひそかに狙ってんだよな。無理だ。お前に氷結は似合わない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・未空。この子うちの寮にいるんだよね」

「ああ・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・夜会いについても「だめだ」

緋色がいい終わる前に言っただけだ。

「嫌がってるだろ。嫌われちゃうぞ」

「・・・・・・・・・・それはやだ。・・・・・・・・・・我慢する」

「なんか寮に帰るのが怖くなっただんですが・・・」

「・・・・・・・・・・大丈夫」

「本人が言っても信用できませんよ！私は男の子が好きなんです！」

「・・・・・・・・・・私は両方いける」

「だあーかあーらあーですわね！」

寮がにぎやかになりそうだな・・・・。香織さんも大喜びだね！さて俺の疑いははれたし席につこうかな・・・・。

「ひゃうっ！やめてください！」

「・・・・・・・・・・可愛い」

「あっ！・・・・・・・・・・そこは・・・・・・・・・・！だめ・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・・・大丈夫」

あれ？これ止めないと本気で岸島危なくね？

「おーい！緋色！やめろって言ったばかりだろうがー」

「な、七実さん・・・・・・・・・・」

「なんでお前そんなエロい表情になってるの！？」

「・・・・・・・・・・なにもしてない」

「いや、嫌がるやつに何かするようなやつじゃないからな、信じら

ウウウウウウウウ！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・可愛い」

「きゃあああああああああああああああああああ！」

「あつ！あつた！えいや！」

騒がしいな！おい！つたくしょうがねえ・・・助けてやるか。

「おい、岸島大丈夫か？」

「おわっち！ハンドベル落ちちゃった！」

「え？ちよ・・・・・・・・それ・・・・・・・・あ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ」

「あれ？ハンドベルどこやったー？・・・・・・・・あ」

「ん？どうした？・・・・・・・・あ」

そこにはあつたエデンが。

緋色はさんざん岸島とやりあつてたせいかスカートがめくれて微妙に黄色の下着が見えていた。

山梨はハンドベルがちょうど胸の中にすぽつと入ってしまい、見ていられない姿になっていた。

岸島はそのいろんな衝撃で制服のセーラー服がめくれ、その上の下着というかブラ・・・ブラジャ・・・いや落ちつけ俺！それが見えていた。ちなみに白の無地に水色の水玉だ。

そのせいで胸なんて岸島にはないものかと思つていたのに、女の子らしい微妙なふくらみがちゃんとあると気付いた。微妙にぷくつて感じで。

「あの……その……ね。不可抗力っていうか
ね」

「え……」

「え？」

「えっちいいいいいいいいいいいいいいいい！！！！！！」

「！！」

「……えっち」

「今回も俺のせいだよ！でも誤解を解く自信なんてない！」

某主人公のように不幸だぁああああああああああ！！と
叫びながら帰っていった。幸い校舎にはもう誰もいなくて、部活の
やつらも外だったため誰にも気づかれなかった。

あれ？変態少年が定着しちまうよ！このままじゃ！でもこういう物
語にはお色気の話は1つぐらいいるだろ？喜べ読者ども！でもこれ、
どうしよう。リセエエエエエエエエエエツト！

注・翌日3人に怒られました

第6片 理系少女と氷結少女の争い（後書き）

サブタイはなんかバトル！みたいな感じがしますよね。でも日常です。しかもお色気です。

というわけでキャラ紹介もあり、なかなかバカ騒ぎができませんでしたが次はキャラ紹介1回中断のバカ騒ぎにしようかなと思ってます。

でわ

第7片 理系少女と文系少年の5月5日

「今日は何の日だと思います!？」

そんな一言から始まった今日。この際、なぜ俺、七実ななみみそ未空の部屋に理系少女である、岸島きしじま数夏すうかがいるのかはおいておこう。はて?今日は何の日だっただろうか。

「なんか楽しそうだな」

「はい!今日1日楽しみましょう!」

やべえ・・・ますます今日は何の日かわかんなくなってきた。どうすりゃいいんだ。いや、普通に今日が何の日かきけばいいんだ。

「岸島、いつたい今日は・・・」

「戸張さんや緋色さんも今日が何の日かわかってくれてたんですよ!嬉しいな」

「・・・」

「でなんですか?」

「いや・・・」

ダラダラダラダラダラダラダラ。汗が止まらない。どうしよう聞きにくい!なんでこんな嬉しそうなの!?正直いって今日が何日かもわからないんだけども!

「その今日という日は何をすべきだと思っ?」

「何を言ってるんですか!今日はとりあえず魚をあげないとっ!」

誰に!?!え?魚ってなに!?!いや、魚は知ってるよ。なんで魚を他

人にあげるの？上げる？揚げる？なに？今日は天ぷらパーティーなの！？

「そのあと！そのあとは！」

「そのあとはー・・・勝って兜の緒をしめる、ですかね？」

分からないっ！こいつ国語は絶望的なのはただでも・・・じゃあ何かと間違えてるのか・・・。あああああああああああああああああ！！どうしようっっっっっっっっっっっっっっっ！！！！

「ああ、確かにしめなきゃな」

「はい！」

知ったかぶりしちまった・・・。意味わかんねえ。せめて日にちを確認できれば・・・。

カタッ

「ん？」

するとそこに携帯があった。しめた！俺は急いで携帯を開く、そこにあったものは・・・。

『5月5日』

「魚じゃなくてこいのぼりだし、勝って兜の緒なんてしめねえよおおおおおおおおお！！！」

「ええええ！？そうだったんですか！？そしてなんでいまさら！？」

今日は子供の日です。

みんなの食堂にて。今日は俺、岸島、山梨、緋色の4人がいた。朝ごはんを食べる。

「今日は子供の日だね。兜は男の子の日でもあるから用意したけれどいるかしら？」

「香織さん。ここに男の子がいるんですが」

「いますよ！男の子がいなくても飾りたいのです！」

「いや、いるからね」

「はいはい！私も飾りたいです。どっちかっていうと七実くんって女の子サイドだと思います」

「いや、純粋な男だから。ハーフじゃないから」

「……………数夏、子供みたいでかわいい」

「お前はいい加減目を覚ませよ！」

俺の存在を主張するだけで精いっぱい。そして最後は思いつきり私情だったしな。

「朝ごはん食べたらとりあえずみんなでこいのぼり飾ろうか」

「はい！頼りにしてますね、七実さん！」

「七実くん、ファイト！」

「……………未空ならいける」

「完璧に人任せじゃねえか！手伝えよ！」

「でも高いところに登らなきゃいけないし、こういうのは男の子のほうがいいんじゃない？」

「香織さん。俺、残念ながら高所恐怖症なんですけど」

「情けないですね」

「残念だよ」

「………未空、幻滅」

「うん、これは俺もヘタレだと思っよ……」

もはや言い返せる力なんてなかったんだ。だって本当に情けないし。

「さーて！ やつりにいこうっぜー！」

『おー！』

「猛獣狩りにいこうーよ！」

「いかねえよ！」

ご飯を食べ終え、片づけをしてから準備をして外にでる。寮のまわりは比較的広くてなんでもできそうなイメージがある。寮自体もまだ新しくパツと見かなり豪邸って感じがする。

さてここで服装をまとめておこう。今日は休日なのでもちろんみんな私服だ。

まずは俺、ジーパンに普通のTシャツ。以上。

岸島はフリフリのワンピース。肩にかかっている部分はひもで脇わきなども見えるわけだが脇フェチでもない俺は別になんとも。でも目が行くのはなんでだろう。ワンピースでもひざちょっとしたぐらいで白色の綺麗なワンピースである。胸は少しふっくらとしてる。そして今日のリボンはハートだ。

山梨はダボダボなズボンに半袖のTシャツ。チェーンがついていてなんかあかぬけてる感じ。こいつ胸だけはすごくてTシャツがきつ

そつだ。というかやばいなこれは。凶器か。

緋色はふわふわのスカートにパーカーという格好。胸はそんなに大きくないがパーカーのせいではけいに見えなくなっている。そしていつもは髪を束ねないけれど今回はツインテールにしている。かくツボだ。

どうだかなりレベルが高いだろ！これだけで目の保養になるぜ！

「なんかいやらしい目をしていませんか？」

「いつつものことだよ」

「……………未空は変態」

「うるせえな、ていうかスカートにダボダボズボンってお前らやる気あんのか？」

「ありますよ！じゃあ、トップバッターは岸島が行きます！」

そして屋根にのぼろうとはしごに手をかけた。

『おいおいおいおいおい！！』

全員で止めていた。

「……………数夏、パンツ見えるよ」

「そつだよつ！無防備だよ！」

「ああ……………ほんと気をつけるよ。男がいたらどうすんだ。

ま、今はいないからいいけどよ」

「……………未空、ここぞとばかりに女の子にならないで」

はっ！しまった！あぶねえ、本能のままに動いてたぜ……………ふう。

岸島は顔を真っ赤にしてうなずいた。ていうかこいつアホ毛がある

んだな。今はしおらしくなっている。生きてんのかこのアホ毛。

「ここはこの山梨がいきますとも!」

「……………気をつけて」

よいせつ!といいながら屋根の上に登る。運動神経いいからな……こいつ。でも一歩動くたびに胸が……………。

「……………私が行く」

「お!おい!ちよつと待てよ!」

急に緋色がはしごを登り始めたので下をむく。こいつもスカートなんだよなあ。やりづらい。

「その……………」

「ん?」

岸島が話しかけてきた。俺は一番最後らしい。

「その……………胸って大きい方が好きなんですか?」

「へ!?!?」

思わず声が裏返ってしまった。どういうことだ。なんだこの状況。まさか、俺を攻めて楽しんでるのか?ドS!?!ドSなの!?!ここで新たに性癖発見!?!でも恥ずかしがってるのはおかしいよな。

「いや、俺は胸なんて関係ないぞ。そして俺は小さくても大丈夫な男だぜ!岸島のは特に大好物だ!」

うん、発言してから気づいたけどこれただの変態だよな。クラスメ

イトに発情した変態少年だよね。これは嫌われましたね。うん、さようなら俺。

「そつ！そんなことはきいてないのです！わ、私の胸の話なんて・・・」

あ、あれ？怒らないの？顔が赤いよ！これはやっぱり怒ってるのだから？セクハラだったしね。怒られてもしょうがないよね。

「で、でもそうですか。へえー、私のぐらいのがいいのですか。ふふーん。じゃ、じゃあ、もう牛乳とか飲まなくていいですね・・・」
「ん？なんだつて？」
「なんでもないです！」

そして登り始めやがった！俺は思わず下を見る。ほんとヘタレだな・・・。思いっきり上をむけば楽園なのに。でもなんか今は見れなかった。岸島の笑顔が見れたから。あいつは笑っていた。それだけでもう何もいらなかった。

○

「いやー無事こいのぼり飾れたねー」
「・・・」

「いやー綺麗ですねー！ほんとに魚さんです！」

「ああ、ほんとよかったよ。お前らがはしごを片づける前まではな

「……………可愛い」
「ベタぼれだな」

そして飾り付け開始。

「このひもはどこのだ？」

「……………」

「お、そこか。さんきゅ。ってこの刀はどこに置くんだよ」

「それはここじゃないですか？」

「おお、そうかさんきゅ。」

「七実くん、私も分らないところがあるんだけど……………」

「ん？どこだ？」

「この部分なんだけどどこのパーツかわかる？」

「パーツってなんだよ！？プラモデルじゃねえんだぞ！」

普通あるはずのないパーツがそこにはあった。

「どこで壊したんだよ」

「壊してないよー。私かよわい女の子だしー」

「お前！ツノの部分ごっそりやつちまってんじゃねえか！どこがかわわいんだよ！」

「握力が650以下ならかわわいです！」

「ゴリラかー！」

ゴリラもそんなにねえよ！だれなんだよ、そのEX！りんごなんて簡単につぶせるじゃねえか！

○

そんなこんなで兜完成！

「ひとまずこんなところだろ」

「はい！すつごく楽しかったです！」

「んー！疲れたー！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・久々に動きました」

大分楽しんだ。かなり楽しかった。誘ってくれた岸島に感謝だな。

「おい、柏もちできたよー」

香織さんの言葉で全員が1階にあつまる。

「いやーおいしいですよ、香織さんの柏もち！」

「ほんとです！おいしいですー！」

「ほんと？ありがとねー」

そういつて岸島の頭をなでる、香織さん。

「えへへ」

「俺もなでてやるつか？」

「な、なにいつてるんですか！だめですよー！」

涙目な俺。

「ははは。嫌われちゃったな」

「……………未空、哀れ」

「うるせえよ！」

それにしてもひっかかることがあった。岸島は喜びすぎじゃないか？1つ、1つ初めてみたいな反応だった。後できいてみよう。

「あ、ちよつと部屋に一回戻りますね」

するといいいタイミングで2階へあがっていく岸島。よし今がチャンスだな。

「俺も！」

俺は2階に上がるすると岸島は部屋に入ろうとしてるところだった。

「岸島！ー！」

「はい？どうしたんですか？七実さん」

「その……………もしかしてこどもの日を祝うのって初めてか？」

「……………はい」

「そうか……………」

「理由はきかないんですか？今現在16歳の私が今までなんで祝えなかったのか」

「お前が話したくなったら聞く。そういうもんだろ」

「……………親が忙しかったんです」

「え？」

「典型的な共働き家庭なのですよ。子供の日どころか最近誕生日さえ祝ってもらえません」

「私の誕生日です。楽しみにしてますよ。最高の日」

「岸島………おう！任しとけ！やったるぜ、今から準備開始だ！」

「ふふっ」

岸島はちゃんと笑ってくれた。俺らは一階におりる。岸島は二階の鏡をみたかったらしい。それが終わって一階にいくと……

「俺が最高の日にしてやるぜい！だつてさ！」

「………未空、かつこ悪かったけどかつよかった」

「やるじゃない！あんた」

きききききいてやがった！……！

「おおおおおおお前ら……！」

「はははは！最高のおっぱいだ！」

「最悪だよちくしょ……！……！」

「他にも言つてましたよ」

「なっ！岸島！裏切るな……！」

岸島はきつと何か抱えてる。俺と同じように。でもいいんだ。今が最高の笑顔だから。今を楽しめばいいんだから。

「………今を楽しめばいいんだから」

「緋色！？地の文読むなっていつてんだろおおおおおおお
おおお……！」

にぎやかすぎて近所迷惑にならないか気になるこのごろです。

第7片 理系少女と文系少年の5月5日（後書き）

またまた更新です。

今回は意外と長くなってしまいました。

ほかの寮生もはやく登場させたいところです。

でわ

第8片 理系少女と文系少年の議論

「私の影が薄くなっていることについて議論を始めます！」
「いやいやいやいや」

昼休み。また理系少女である岸島数夏きしじまなつかの言葉から始まった。そしてそのセリフはツツコミどころしかなかった。俺、七実ななみみそら未空はいいたい事が山ほどある。

「なんですか？」

「いや、お前十分影濃いと思うぞ。影が濃いつていうのもおかしいがなんでもかんでも計算でやるうとするところとかなんかもう・・・」

「その計算だつて最近だしてませんよ！」

「あ・・・」

そういえば最近なんだかんだでその特技を披露してなかったな。妄想少女やら氷結少女つていう意味のわからんやつらのせいで出せなかったと。

「5月5日のときにも出せばよかっただろ」

5月5日。子供の日。あの時は軽く俺のトラウマになりつつあるんだがまあいい。あそこならこいのぼりやら兜やらで計算を使えたはずだ。

「いや、兜もこいのぼりも実物を見たのは初めてでして。どういふふうにするばいいかわからなかったんです・・・」

「・・・」

「……いや、でも」

「間が長いですよ！次の言葉が信用できないです！」

「岸島は昼から元気だなあ」

「誤魔化し方が下手すぎます！」

「活発な子供は将来大きくなるぞー、高校生が楽しみだな」

「もう高校生ですよ！背で判断するのはいけないことです！」

それは俺も若干賛成。なぜなら俺自身背が高いわけじゃないからだ。自分で言っただけで反省。

「とにかく！私は影を取り戻します！」

「そうか」

「あなたにも手伝ってもらいます！」

「なぜ!？」

「だから意見を出していただきます」

だから議論とか言ってたのか。どうすりゃいいのか……。議論なんて苦手中の苦手。文系だとそういうのも得意だと思われがちだが俺は妄想少女みたいに天才じゃあないんだよ。

「じゃあ、全国のジムというジムをまわり、ポケットなモンスターを使ってマスターを目指すとかは？」

「それはもうすでに永遠の10歳がやってますよ！」

「軽音部を設立して、お茶しながらのゆるーい学校生活をおくるのか？」

「それもすでにやってますよ！そしてその人気には勝てる気がしません！」

「むむむ……なかなか難しいな」

「そうでしょうか!？ふざけてません!？」

「じゃあ……そうだ、お前に似たキャラを言って

いくぞ」

「それに何の意味が？」

漫画、アニメなどで活躍している有名な人をあげていけば自信が戻るはずという計算だ。お前と似たキャラのやつなんてそうそういないが探し出してやるぞ。

「なるほどです」

「じゃあ、いくぞ」

「はいです！」

「イ〇娘」

「なんでですか！！」

「最近のやつだし、匂だろ」

「そうじゃなくて、私とどこが似てるんですか！」

「背、胸、触手、頑張ろうとすると空回りするところ」

「背も胸も小さいということですか！？そして私に触手はないです！最後のはあなたの感想ですよね！？」

「背と胸は認めるんだな」

「くっ……い、いいですもん！おっきくなるもん！」

「俺は今の状態がベストだと思うけどな。顔にも雰囲気にも合ってるし」

「褒めてるのかけなしてるのかどっちなんですか……」

褒めたつもりだったんだが……。人を褒めることになれてない悲しい俺は次のキャラクターをあげることにした。

「いくぞ」

「どんとこいです！」

「ク○ナドの伊○風子」

「それはなんとなく言われると思ってましたよ！」

「背も胸もそっくりだが髪型も性格も似てるよな」

「背も胸も将来的に成長しないということですか！？髪型はたしかにまんまそっくりですが」

うしろ髪の下の方をでっかいリボンで結んでる岸島はほんとうにそっくりだった。

「で、自信ついたか？」

「つきませんよ！」

あつれー・・・？おつかしいな。いいアイデアだと思ったんだが・・・。逆効果になってしまった感がある。俺はここまでなのか・・・。

「そうですね・・・ゴム○ムの実でも食べてしましましょうか・・・」

「それは食うなよ！ていうかあるの！？」

「ありますよ。今日もサラダにして持ってきました」

「実用的だなおい！」

「マヨネーズと合うでしょうか？」

「知らないよ！知ってたらゴム人間だよ！」

こいつもふざけ始めていた。というかもう案がないのである。

「もう案がないんだろ？だったら無理なことはするなよ」

「無理じゃないです！」

「だせえ！それはもう誤差の範囲だろ！」

「じゃあ、三色剛拳^{しじやんけん}」

「かつこよく言ってるじゃねえよ！」

「効果は三〇モニじゃんけんぴよんのみ勝率が2%上がる」

「だから誤差だろう！そしてかなり限定されてるじゃねえか！」

「むう、なかなか難しいです……」

「俺はもう疲れたんだが……」

これほど無意味な昼休みはあっただろうか、昼寝とかしたかったんだがな……。まあ、こういう無意味な時間こそ卒業したときに「そうです！」って俺がまだ語ってるだろうが！邪魔すんなよ！

「で、何がそうです！なんだ？」

「語り部を交代してほしいのです！」

「は？」

「いや、だから語り部を……」

「聞こえてるけどさ……。マジでやんの？」

「はい！だって七実さんなんてたいして特徴がないのに語り部のおかげで影が薄くないじゃないですか」

「な！？」

「ふふふ、これで七実さんはただの男の子。私は神へと進化するのです！」

「思想がなんか危険だよ！」

ということとで岸島の語り部が決定した……。不安がつのるなかまえ？理系少女が語り部？ほんとうにやんの？不安がつのるなかまえかの次回へ続く！

第8片 理系少女と文系少年の議論（後書き）

こんばんわ、ですね。今の時間は。

タイトルの第〇片の片。これは花びらを表しています。
一応報告ですね。

というわけでまさかの続きもの！

でわ

第9片 理系少女と文系少年の語り部

おおー！わあ！すごいです！これが語り部！これが地の文ですか！おっと、こほん。どうもです、理系少女の岸島きしますうか数夏高校2年生、16歳です。これで私は主人公なんです！私が語り部になったからにはえつちい事件なんて起こさせません！いや、そういう物語じゃないんですけどね・・・。

「ふー、なかなか疲れました」

翌日の昼休み。さて、では早速七実さんでも見つけて褒めてもらいましょう。語り部をやったとなれば褒めてくれるでしょう！あっ！いや、その、褒めてもらいたいわけじゃないんですけどね！どうしても褒めたいっていうのなら褒めさせてあげますが・・・。

「あ、いました。七実さん・・・」

よく見ると七実さんは廊下で他の女の子としゃべっています！戸張さんです。先を越されてしまいましたか・・・。

「でも話し終わるのを待っても遅すぎることはありません」

話が終わるのを待つことにしました。・・・・・・・・・・・・・・・・

「山梨は最近規則正しくなったよな」

「いつでも寝てるってわけじゃないからねー。七実くんも丸くなったよなー」

「いや、俺は不良かよ」

「そうじゃなくってなんか明るくなった」

「そうか？」

「うん」

「そう・・・か」

「よかったよー、明るくなって。私もいじりがいがあるし」

「最悪だな！感動がまるまる吹っ飛んだよ！」

「うそうそ。ほらそのツッコミとかさ。いい感じだよね」

「そ、そうか・・・なんかはずかしいな」

「な、なにがさ」

「いや、なんでも・・・」

イライライライライライライライライライライ！なんでイチャついてるんですか！長すぎます！でもなんででしょう・・・。最近、七実さんが女子と話してるのを見るとモヤモヤします。なんか心臓あたりが痛くなります。私は病気なんでしょうか？チクリと針で刺されたような感じがします。

「ふーっ！」

なんか犬みたいに威嚇いかくしてました！自分の行動にびつくりです！でも邪魔したくてしょうがないですね・・・。なんなんでしょうか、ほんと。・・・。まさか、これが『どえす』というやつですか！？なんてことでしょう。数夏16歳にして『どえす』に目覚めてしまいました！

「じゃ、じゃあ俺2組に戻るわ」

「うん。私は水道いつてくるねー」

「ふう、今のうちに明日の宿題を・・・」

「七実さん！」

「ん？岸島か？どうした・・・」

現在は放課後です。帰ろうと身支度をしていると……。

「あーそれは今日じゃなくてもいいよ」

「そうか、ありがとう」

「おう」

また女の子としゃべってました！しかも今回はクラスの委員長です。男勝りな口調ですねえ……。

「いたっ……」

おかしいですね……。また心臓が痛いです。なんででしょうか？
くっ……。それにしても委員長さんのおっぱい特盛りじゃないですか！……。やっぱり七実さんも大きい方がいいのでしょうか？口では私ぐらいでもいいと言ってくれますが、本当にぶっくりとしかないんですね……。

「はぁ……。あれ？なんでテンションが下がっているのでしょうか？」

私らしくないですね！『人類滅亡してもずっと笑顔』がポリシーなこの私が何を暗くなっているのでしょうか！

「人類滅亡しても笑顔……人類滅亡しても笑顔……人類滅亡しても笑顔……」

「お前、何こわいこと呟いてんの！？」

近くに七実さんが！？そのせいで七実さんに気付かれてしまいました。

「だいじょうぶです！私はまだ笑えます！」

「だからなんでそんな意味ありげにいうんだよ！」

「さー、あじさい荘へ帰りましょう！」

「ああ、まあ、帰るけどさ………」

さーてあじさい荘に着いたら何をしましょうか……。むむむ
考えなければです！

「七実さんは帰ったら何をしますか？」

「えーと………」

「いや、まってください！確率であてます！うーん……。ドアノブを
触る！」

「確率で出すようなことかなあ！？」

「じゃあ、ドアノブに触れないように寮に入ってくださいね」

「無理だよ！そんな高等技術できるわけねえだろ！」

「他人のカバンにでも入っていればいいじゃないですか」

「俺はエ○パー伊藤か！無理だよ！体かたいし！」

さつきから文句ばっかりですね……。まったく。あ、でもなんか分
かりませんが他の人のカバンには入ってほしくないです！

「私のカバンに入ることしか許しませんからね！」

「お前のカバンにも入らねえよ！ドSなの！？」

「だって私のカバンの臭いが好きなのでしょう？」

「高度な臭いフェチ！そんな悪趣味はないよ！やっぱりドS！？」

なんかあらぬ誤解を受けてるようですが別にいいです。さあ、もう
すぐ我が家であるあじさい荘ですよ！まずは七実さんが入れるよう
なカバンを探しましょう。

「ただいまですー」

「ただいま」

「おー、おかえり」

「香織さん、今日はもう疲れたんで寝ていいですか？」

「今寝たら夜寝れないでしょ」

「相変わらずお母さんみたいですわね！私感動しました！」

「数夏ちゃん。私は22よ。お姉さんといいなさい」

「おばあちゃん……」

「こら！七実未空！今なんつった！！」

「私も逃げます」

「ああ！分かりやすく逃げるって言うてくれたのに捕まえられる
」！」

香織さんもおかしい人ですね。つと……あ！！

「……私の嫁」

「緋色さん！？目の色がおかしいですよ！」

「やべっ！あいつ学校帰りで疲れてるからいつもの10倍の攻撃があるぞ！」

「なんと！危機じゃないですか！」

「岸島逃げる！ここは俺が食い止める！」

「少年漫画の主人公の味方みたいでかつこいいですよ、七実さん！」

「そんな感想どうでもいいから逃げるおおおおおおお
おおおおお……」

「はいっ！」

シュタツ！と走ります。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああ

ああ!」

「七実さあああああああああああああああああん!」

七実さんが緋色さんの下着を見せられて倒れてしまいました! . . .
. あの方はバカなのでしょうか? 食い止めてないじゃないですか!

「. 見つけた」

「ひっ!」

「. どうして逃げるの?」

「なんで追いかけてくるんですか!?」

「. 触りたいから」

「だからにげてるんですよおおおおおおおおおおおおお
おおおおお! ! !」

私は生きれるのか! 手に汗握る展開ですね!

○

あのおとかけつけた香織さんのおかげでなんとか生きれました。ふ
う.

「なあ、岸島」

夕飯準備ちよつと前。七実さんが私に声をかけてきました。

「なんですか?」

「お前、今日なんかちょっとおかしかったぞ？」

「なっ！？失礼な！ちよつと蠟人形にしようとして、カバンにつめようとして……」

「それがすでおかしいことだろうが！」

「緋色さんの下着見て倒れた人がおかしい……ですって。ちゃんちやらおかしいです」

「くっ！あれはしょうがないはずだ！お前を守るためであってな……」

ん？なんか今少し嬉しかったですよ？ポワンとしました。どこにそんな要素があつたのでしょうか？

「もう一度いってください！」

「は！？なんで？だからお前を守るためであって……」

あれ？やっぱりなんかポワンとします。なぜでしょうか？今日は心臓が忙しい日ですね……。

「で、何があつたんだ？いいことがあるならいってみる」

「いや……その……」

本当に何もないから不思議です。理由がないので話すこともないんですが……。

「数夏ちゃんは晩御飯何食べたい？好きなもの言って」

すると台所から香織さんの声がしました。ここはリビング。みんなでソファに座ってテレビを見ています。戸張さんと緋色さんはテレビに夢中でこちらの会話は聞こえていないようです。

「香織さん！私はハンバーグが好きです！」

「わかった！じゃあ、今から作るね」

「子供みたいだな」

「うるさいです、自意識過剰さん」

「それ、お前のせいだからね!？」

そんなこんなで1日が過ぎていきます。語り部は疲れますね。もうあんまりやりたくないです。

第9片 理系少女と文系少年の語り部（後書き）

というわけで語り部編？とっていいのでしょうか？
まあ、2話にわたってやらせてもらいました。

次あたりに新寮生でも出そうかな・・・と思います。

でわ

第10片 文系少年と雷瞬少女の優しさ

どうも1話ぶりです、七海未空ななみそらです。この前はうちの理系少女が迷惑をかけました。しかも最後には告白モドキをやりやがって……。一瞬本当に告白かと思っちまったよ。結局俺らの勘違いなんだけどさ。

「岸島」

「なんですか？」

可愛らしく小首をかしげてきいてくる。今は放課後。俺らの学校の制服は男子が黒の学ラン。女子が白を基調としたセーラー服だ。えりりぼん、スカートがあい色である。その制服が似合わないこの少女は岸島数夏きしじまなつか。見た目中学1年生の高校2年生だ。黒タイツをはいている。タイツフエチにはたまらないね！その岸島の席の近くで話しかけている。

「図書館いくぞ」

「なぜです？……はっ！まさか告白！？」

「最初と同じ間違いしてんじゃないやねえよ！あじさい荘のメンバー紹介だ！」

「おお！まだいたのですか」

「お前と俺をいれて6人。緋色と山梨を入れて残り2人だ」

俺は図書館へと急いだ。1階だから2年生の教室がある3階からは少し遠い。そして図書館の前へ。たしか放課後でも開いているはずだが……。開いてるな。そして中に入り目的の人を探す。

「お、いたいた」

図書館では大声をだしてはいけない。そういうマナーをちゃんと守り、その場所へと歩いて行った。図書部という部活に入っている女子。

「よお、高松」

「あ、七実くん」

たかまつこたけ
高松小鳥。髪は黒色でおさげのような位置でしばっているのが2本。下の方で黒いゴムで結ぶツインテールだ。顔は可愛いがどこをとっても普通。というような感じ。身長も胸も普通。顔だけがズバ抜けている。制服もきちんときこなしている。岸島は黒タイツで足全部を隠しているが高松はひざ下の靴下。なんていうんだっけ？そういう靴下。ていうか靴下なのだろうか。それと恥ずかしがり屋だ。

「そ、その、どうしたの？」

「こいつ、新しい寮生なんだ」

きしじますつか
「岸島数夏です。初めまして高松さん」

「こ、小鳥でいいよ。よろしくね、数夏ちゃん」

「小鳥さんはいい人です！」

「お前のいい人基準は低すぎるな」

「失礼な両足ジャンプで飛び越えられるぐらい高いですよ！」

「ちよつとした段差じゃねえか！」

「あ、あの・・・図書館だから・・・」

「あ・・・スマン」

「ごめんなさいです」

「場所、変える？」

「そうしてもらえるとありがたい。いつもの癖でシッコミが出てしまっ

「どこのベテランお笑い芸人ですか」

そういつつも図書館の近くにある自動販売機つきのでかいホールへと移動する。ただの紹介のはずなのになんで毎度毎度こんな感じになってしまふのだろう。

「で、こいつが寮生を紹介してほしいっていうからここに来たんだ」
「そ、そうなの……。ごめんね、一度も今まで会えなくて……」
「あ、いえ！大丈夫です！今、こうして会えたところですし……」
「ありがとう」
「いえ……」

岸島が目で合図してきたため、そちらを見る。するとアイコンタクトほどのことじゃないが目から今のこいつの心情が読みとれた。てかホント背低いな。俺も低いがその俺が低いと思うぐらいだから間違ではないだろう。

(まずいです、七実さん！この方普通すぎます！)

(わかってるよ！突飛なことがないからなんかやりづらいんだろ)

(はい……。今までは妄想やら氷結やら百合やら梅やらいろんな要素がありましたか……。この方は無です！)

(でもな、あじさい荘にもまともなのが必要だと思うんだ)

(そうですね！)

(それにこいつは無じゃないぞ？)

(へ？)

(いや、確かにまともで変人じゃない。でもこいつも○○少女って名前がつけられるぐらいにおかしなところがあるんだ)

(なんと！っていうかその○○少女と違って誰が毎回決めているんですか！？)

(先生方。それが生徒にも広まって有名になるんだ)

(なるほど)

(とにかく百聞は一見にしかず。見せてやるよ)

(え！？今からやるんですか?)

(ああ、見てる)

俺はおもむろにポケットから小銭をだす。自動販売機にそれを入れ、ジュースを買う。俺はそれを辛いながらも一気飲み。ああー腹が気持ち悪いー。で、その残ったパックを・・・

「あー、近くにゴミ箱がないからこころへんにすてるかー」

「演技が下手すぎますー!」

岸島のツツコミをおいといて俺はそこらへんにゴミを捨てる。そのゴミは徐々に落下していき、地面につく。・・・かつかなにかぐらいの位置でゴミが消えた。

「え!?!」

「でたな・・・」

「七実くん・・・ここで捨てるのはよくないよ」

高松がキャッチしていた。おそるべき速さで。すごい反射神経で。地につく前にキャッチしたのだ。人間技とは思えない。そしてアイコンタクト開始。

(どどど、どついうことですか!?)

(こいつはな2年1組。緋色のクラスだな。そこの学級委員長なんだよ)

(はあ、そのどどこが先程の動きと関係してるのですか?)

(幼稚園のころから常に・・・な)

(!?!?)

(一応、こいつとは幼稚園からの知り合いなのだが・・・こいつ

はずつと委員長でな。小学校も中学校もずつとずつと委員長なんだ

(委員長と人間のハーフですね)

(委員長なんて人種はいねえよ!で・・・な。それで昔から悪いことをなくしていったんだ。今みたいにゴミを捨てようとしたらゴミを捨てるという行為を終わる前に防ぐ。それを繰り返していたら・・・)

(あんな瞬発力、反射神経になつたと・・・)

(高松はな、いいやつなんだ。だから人が悪いことをおこそうとするとする前に防いで悪いことをしようとしたこと自体を消そうとするんだ。どの人だつて守るんだよ)

(いい話ですね)

(もつしてしまった後ならしょうがないけれどな。でもそれでも神のような速さで防ぐんだが・・・)

(結局普通ではないんですね・・・)

まあ、そうなんだけどさ。性格は一番普通なんだよ。突飛なこともしようとしないし。いいやつなんだぜ。

(人々は敬い、尊敬をこめて『雷瞬少女』らいしんしょうにょと呼ぶんだ)

(とうとう中2病じゃないですか!)

(名前をつけた先生は邪気眼をおもちの中2病だったとか。RPGも好きな先生だったんだ)

(小鳥さんがかわいそうなんですけど)

(本人も気にいってないんだよ)

「あの・・・どうしたのかな?・・・」

「あっ!いや、その今日もお前は綺麗だな」

「パツとでた言葉がそれつてどこのナンパ野郎ですか!」

「あ・・・恥ずかしいよ・・・」

「いや、すまん。動揺するついな」

「化け物ですね。えっちな化け物」

「くだらうが!」

「私でもす!好きでもないですけどあんなにキツパリ言われたら傷つきますよ!」

「お前、男子のガラスのハートなめてるだろ。ちょっと女子に冷たくされただけで2週間はひっぱるぞ」

「そんなハート壊れてしまえばいいのです!こっちは繊細な女の子ですよ!」

「ほう・・・なかなかゆずらねえじゃねえか。黒タイツ」

「黒タイツだつて需要あるんですよ!け〇おん!の平〇唯ちゃんだつて黒タイツでしょう!でもそつちこそやりますね・・・」

「三色じやんけん剛拳で勝負か・・・」

「そもそも勝負だったのか分からないですけど、その漢字でじゃんけんと言われたら断ることはしませんよ」

「せーの」

『じゃんけん・・・・・・・・・・あ! UFO!』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「卑怯だぞ、岸島」

「そつちも同じじゃないですか」

そんなこんなで帰宅する俺たち。俺はこの日常を気に入つつあった。かけがえのない時間。この無駄な感じが俺を心地よくさせていた。

○

そんな2人が騒いでいるのがきこえる図書館。

「楽しそう・・・」

私、高松小鳥は本の整理をしながら騒ぎをきいていた。それをきくだけで楽しかった。

「七実くん、元気になってよかった。それを変えたのが数夏ちゃんかな・・・」

少し数夏ちゃんが羨ましかった。私じゃ彼を変えられなかったから。元気にさせることができなかったから。出会ったばかりとは思えない会話。どれも羨ましい。

「七実くんとクラス同じじゃなかったしな・・・」

1年生のときは同じだったんだけど・・・。2年生に上がったらバラバラになっちゃった。

「七実くんは明るい方がいいよ。私はそんな七実くんが輝いて見えたんだから」

今、彼に届くはずもないのに呟いた言葉。独り言だとわかると妙に恥ずかしくなって、そしてどこか心が満たされていくような気がした。

第10片 文系少年と雷瞬少女の優しさ（後書き）

というわけで新しいメンバー登場の話。

どうでしたでしょうか？

次はまたバカ騒ぎ目的のものにしようと思います。

でわ

「今を大切にすることによって明日への道も開ける！」
「未空宗教が始まりましたね」

そんな感じで昼休みになるちょっと前。授業中にも関わらず岸島と話していた。教師が用事で帰ってしまったため自習だった。教室は授業中とは思えないくらいうるさかった。岸島の席と俺の席とは離れているが隣の席もりはまの森林しんくんにとけてもらった。すまん……。

「で、なんでそんな話になったんでしたっけ？」

「そこは忘れるなよ！俺が恥ずかしいじゃねえか！」

「あ、そうでした。チヨコレートはビターがいいかミルクがいいかでしたね」

「……………」

どっちにしる恥ずかしかった。どこをどうやったら俺は宗教を開いたんだ？チヨコレートの話題がなんで明日だか今だかの話になるんだよ。

「ま、そういうことで俺はどっちも好きなんだ」

「優柔不断ですね」

「チヨコレートの話でそこまで言われるとは思わなかったよ」

「まあ、いいです。ところでのどが渴いたんですが……」

「あー自動販売機近いし、先生にバレなけりゃいいだろ。今行くか？」

「はい」

そう言ってコソコソと教室を出る。ここでバレるわけにはいかない。そして自動販売機前へ。そこで飲み物を買って戻ろうとしたら……

「あの……すみません……」

「どうした？」

「その非常に言いづらいんですけど・・・」

「ん？」

「いや・・・だから・・・その・・・」

なんかはつきりしない。なんだろうなあと思ったら岸島は足をもじもじさせていた。黒タイツで包まれた足は元気ががにじみでている。しかも顔は真っ赤だ。

「あの・・・ですね・・・」

「ああ、なるほど。トイレだな」

「は、はつきり言わないでください！七実さんのバカーー！！」

と走りさってしまった。・・・・・・・・・・。なぜだかわからないけれど怒られてしまった。急にキレる若者怖い。これ前も誰か言ってなかった？でもこのまま教室に戻るのもあれなので廊下で待っていることにした。先生にバレないようしゃがんでいる。

「なんでリアルメタル〇アやってるんだ・・・」

しかしこのまま帰ってしまっていていいものだろうか。せめて謝らないとな。謝ることが見つからないけど謝ればなんとかなる。これ七実家の家訓。

「お、戻ってきたか」

15分後。ようやく帰ってきた。

「わ、わざわざ待ってくれてたんですか!？」

「ああ、そのさっきはごめんな・・・」

「あ、いえ、そんなに本気で怒ってるわけじゃないので・・・」
よっし！成功！

「女子のトイレって時間かかるんだな」
「謝る気あるんですか!？」

また怒られてしまった。

「それに男の子のように簡単にできると思わないでください。黒夕
イツだつてはいてますし・・・」

「まあ、確かに男だと立って終わるしな」
「この会話やめません!？」

というわけで教室にもう少しでつきそうだ。

「そうだ、そっちのジュースも飲ませてくれよ」
「え!?!いや・・・これ私がもう飲んじやってますよ・・・」
「少しでいいからさ。俺のもあげるし」
「その・・・そういうことじゃなくてですね・・・」

本日二度目。顔がまた赤くなっている。分からない。数学よりも全然わからない。女の子の不思議。本当に多いよな。

「ほら、じゃあ、先に俺のを飲めよ」
「いや、そのそういうことでもなくてですね・・・」
「はい」
「むぐっ」

今日の岸島ははっきりしないな。なので俺が親切に飲ませてやった。

ストローなので吐きだすこともないだろうし、ちゃんと考えてるんだよ。無理やり飲ませたくはないから軽く口もとにあてるように渡した。なので飲みたくなかったら飲まないだろう。だが岸島はしぶしぶといった感じで飲んでくれた。

「むー」

「なんで飲みながら機嫌が悪いんだよ」

そしてジュースを返してくる。

「……あの……ありがとうございます」

「ああ、いや、別にお礼言われることじゃないんだけどな。俺がほとんど無理やりだったし」

「その……私のでよければこれ……」

「お、さんきゅ。これ気になってたんだよね」

> i 1 3 3 8 6 — 1 0 5 8 <

「ちょっとは違うことも気にして下さい……」といいながらも俺がジュース飲むのを了承してくれたみたいだ。俺は軽く飲んで岸島に返した。

「これ結構おいしいな」

「そうですね……」

「どうしたんだ？」

「いえ、初めての間接はこんな感じなんですわ、とっついていただけです」

「？」

「分からなくていいですよ。分かってしまったら恥ずかしいとかその自分もなんで喜んでいいのか分からないんですから」

「？」

ますますわからない。と思いついていたら岸島が教室の扉を開けた。するとその瞬間バカ騒ぎしていてボール遊びをしていたやつらのボールが飛んできた。

「え……」

「ちっ！あぶねえ！」

俺はすかさず前にでる。ボールは運悪く顔面にあたった。その衝撃で少し後ろにかたむく。

「ちよ、大丈夫ですか、七実さ……」

ゴッチーン！

俺ら2人の頭はぶつかった。そして気付くと……

○

「今に至るわけだよちくしようめ！」

現在は昼休み。これはまずい。俺は今、外見は岸島数夏だった。そして俺の目の前にいる俺。外見、七実未空の岸島数夏がいるわけだ。未だに信じられない。だが皆さんのなかでは俺の声と岸島の声を逆転させていただと読みやすいかもしれない。……何言っ

んだろう、俺。

「どうでしょう・・・」

「その姿で敬語使うなよ！なんか自分で自分を見るのが恥ずかしい！そして低い声でのそれは気持ち悪い！」

「そつちこそそんな汚い言葉を使わないでくださいよ！高い声でそれは気持ち悪いです！」

声の違いも大変だった。女の子の声ってこんな感じなんだな。今、3階にあるでつかいホールに俺らはいた。ベンチみたいなイスと広い空間があるスペース。俺らの任務は入れ替わりがなおるまで知り合いに会わない。または入れ替わったと気付かれないということだった。

「お、俺はどうすれば・・・」

「俺なんて言わないでください！私が俺を使うのはおかしいです！」

「お前こそ俺が私って使うのはおかしいよ！」

ややこしかった。何がなんだかわからなかった。俺が私で私が俺？

「きつとまた頭をぶつけなければいいという簡単なオチだ」

「でもボールがぶつかったときと同じ衝撃でぶつかるのは難しいですよ・・・」

「・・・」

「・・・どうします？」

確かにボールはなかなかの威力だったからな。何回も挑戦しているとバカになりそうだ。もう諦めようかなって思っていると後ろから声をかけられた。

「うるさい小娘め。げへへ、食べちゃつぞおおおおおおお
おおおおお!」

「ト変態!?!」

岸島 ああああああああああああああああああ!?! そんなキ
ヤラじゃねえよおおおおおおお!!

それともお前にはそういうふうに見えていたの!?

「冗談です、お嬢様。ささ、靴が汚れてしまいますゆえ、私めが預
からさせていただきます」

「靴下が汚れないようにするための靴なんだけど!?!」

執事さん!?! 執事さんなの!?! お前も演技下手だろうが!

「なんか様子がおかしいね・・・」

『ギクツ!』

「うーん、なんか入れ替わってるみたいな印象があるんだけど・・・」

「

『ギギギクツ!』

まずい! 勘が鋭いなこいつ! 普段アホみたいなんだから気づくなよ!

「おかしくないよん もうそろそろチャイムがなるころじゃないか
なかな」

「すっごいあやしいんだけど!」

おかしい・・・。余計に不利になったよ。

(なんで竜○レナに+ なんですか!?)

(すまん……。誤魔化そうと思ったんだが)
(もういいです！ここは私に任せてください)

そういつて自信満々に挑もうとする岸島。不安がつもの。あいつやらかすぞ……。

「おい、いいから教室戻るぞ。俺はもう休みたいんだ」

キターーーーーーー！ーーーー！ーーーー！ーーーー！ーーーー！こいつ順応はやつ！いいぞこれならやれる！

「あ、あれ？いつもの七実くんか。なーんだ、入れ替わったわけじゃないんだ」

「入れ替わる何言ってるんだ？夢を見るなら寝てる時にしろ」

完璧に俺じゃね？自分で判断できないがすごく似てる！

「……………何、してるの？」

「えっ！？」

「あ……………」

岸島な俺と七実な岸島は凍りつく、それこそ氷結されたように。

『結露……緋色……!!』

ハモる俺ら。そして強敵登場。これが一番の難関かもしれないおおきな試練とぶつかる！こいつに嘘とか通じなさそうだな。感じる感情はただただ恐怖！そんななかバレないための戦いが始まる！

第11片 理系少女と文系少年の交換（後書き）

というわけで次回へ続きます。

なんか長くなったので分けさせてもらいました。

感想など待ってます！

でわ

「お、おかしくないですよ！私はいつもおかしいんですから！」

（ちよ、失礼ですよ！）

（うるせえ！今は文句いいあつてる暇ないだろう）

（確かにそうですけども）

「……………なんで見つめあつて
るの？」

アイコンタクトもバレた！？こいつの観察眼やばいんじゃないか。

将来は刑事か探偵で決まりだな。

キーンコーンカーンコーン

『チャイムだあああああああああああああああ！！！』

「え？何！？2人ともそんなにチャイム好きだったの！？」

『教室へ行くこうおおおおおおおおおおおおお！！』

「え、ちよつと押さないで！ひいろん、またね！」

そっぴいなながら教室に戻る俺ら。さあ、楽しい楽しい授業の始まり
だ！次はなにかなー？

「……………調査の必要あり」

○

次の授業数学でした。

「えーと、この公式を使って、球の体積と円錐の体積の応用問題を解いて下さい」

……。……。……。……。岸島の頭になったからか公式は様々なものが浮かびあがる。でも俺がその使い方を知らない。まったくわからないな。。。

「じゃあ、岸島さん、お願いします」

「は、はい！」

やっちまったあああああああ！この状況であたるとかどんな神のいたずらだよ！黒板の前にでる、すると後頭部に何かがある。紙くずだった。開いて見ると……。使う公式が書いてあった。岸島！お前が……。ありがとうありがとう。俺はこの感動を忘れない。

「よし！」

……。……。……。……。で、この公式をど
うしろと！？え、具体的な方法が書いてないよ！ねえ、岸島！気づいて！いや、親指立ててグッ！じゃないよ！それとそれ俺のからだ

でやるなよ！恥ずかしいだろうが！

「わ、分かりません……」

「おや、めずらしいですね。じゃあ他に分かる人」

岸島がすごい目で睨んでくる。いや、俺の体なんでやめていたいただきたいんですが。いや、だってしょうがないでしょ！そんな目で見んなよ！俺なりの全力なんだよ。でもね、文系なんだよ。俺。

○

数学の次の授業は古典です。

どうも七実未空になってしまった岸島数夏です。語り部はめんどくさいと思ってるんですがしぶしぶやることにしました。今、この状況で語り部なんてやってる暇ないんですけどね。それはお互い様ですし、しょうがないですね。

「この古文訳せるか？徒然草からの出題だぞー」

古典は何が書いてあるか分かりませんね。これだから古典は。私が理系なのを知っていてこんなひどい問題を出すんですかね、まったく。怒っちゃいますよ！

「七実、やってみろ」

「は、はい」

神様は残酷です。こんな試練を私に与えてどうするといふんですか。私は褒められて伸びるんですよ。身長は褒められても伸びませんけど……。

「えーと、ふっ、こんな問題、昼の墮天使と呼ばれた俺にはチヨロいぜ」

あれ？モノマネをより上手くさせようとしたら中2病で痛いやつみたいになってます。まあ、私の体じゃないのでいいです。なんか私の姿をした七実さんが涙目です。どうしたのでしょうか？

「それより、問題問題……」

えーとさっぱりです！本当になにとも分かりません。どうしましょう……。昼の墮天使としてここは答えないといけないですね……。

「分かりません」

諦めました。ええ、分からないものを悩んでいてもしょうがないのです。それなら潔い方がいいに決まっています！でもクラスの皆さんが雛段芸人みたいにズッコケています。なんででしょう。皆さんリアクションが上手いんですね。なんでコケたの分かりませんが……。

○

「なんで墮天使を名乗ったんだよ！」

「だってそういうキャラじゃないんですか？」

「いつ墮天使だって言ったんだよ！最初に言ったのはお前だろうが！」

というわけで帰宅途中。なんとかバレずにやりすごした俺らはあじさい荘に帰っている。敬語の男と男口調の女。異質の組み合わせだ。2人のときだけは素に戻る。この時間が一番楽だ。

「それにしてもあじさい荘に帰ってからは本当の試練のような気がしますね」

「ああ、畏とかあったりしてな」

「風〇のシレンそのものですね」

「だが緋色に山梨。それに香織さんまでいるんだぞ。どうすりゃいいんだ」

「あ、そういうえば高松さんに相談するのはどうですか？」

「ああ！その手があったか！唯一の常識人！」

「そして頭もいいのでしょうか？ 解決策もだしてくれるかもしれません！」

「おお！久々にいいこと言ったな！」

「七実さん、今軽くバカにしましたよね」

「そうと決まったら急ぐぞ！」

「ながさないでください」

「俺らの将来は薔薇色だ！」

「左から右へと受け流さないでください。そして薔薇色じゃなくて鮮血色じゃないですか？」

岸島のツツコミを流しながら歩く。そういえば桜はあまり見なくなつたな。5月の中旬。まだ咲いているところはうちの学校のグラウンドぐらいだろう。でももうすぐ散ってしまう。それはどこか悲し

いことだった。俺は忘れなくなかったんだろう、こいつと初めてあったときのことを。

「む、着きましたよ」

「ああ、確か高松はもう帰ってると思うけど」

そっぴいっつドアを開ける。1階には予想通り高松がリビングにいた。テレビを見ているようだ。香織さんはいない。買い物かな？

「高松」

「わあ！驚かせないでよ……七実くん……？あれ？数夏ちゃん？」

「小鳥さーん！」

「七実くん！？」

「おい！お前！俺の体で高松に抱きつこうとするな！」

「え？……何？どういふことなの……？」

「小鳥さーん！」

「なっ七実くん！その……ちよっと手が……」

「おまつ！胸にあたってんじゃねえか！そういうことは俺が体に戻つてからしたかったよ！」

「七実さんはやっぱり大きい方が好きなんじゃないですか！」

「ち、ちげえよ！どっちも好きだよ！じゃ、じゃあお前もませてくれるのか！？」

「そ、そんなことさせるわけじゃないですよ！」

「じゃあ、文句いふなよ！男として羨ましいと思っちまうんだよ！」

「あの……何？」

高松が非常に混乱しているため、事情を話す。ジュースのくだり、ボールがあたったこと。そして緋色と山梨には絶対に言っただけはないこと。言ったらバカにされること。今まであったことを全部話

「その・・・七実さんのにもあれはノーカンにしたいですよ・・・」

「あれ？あれってなんだよ？」

「かかつか、か」

「か？」

「か、間接キスです！」

「間接キス・・・」

「・・・ああ！ジュースのときか！ああ、これはやっちゃまってた！2人とも口をつけた上での交代だからな。岸島は女の子だし、悪いことをしてしまった。そして俺の姿で女の子らしいしぐさをするな。」

「悪い・・・気づかなくて・・・」

「いえ、いいんです。その・・・それで・・・」

「ノーカンじゃなくてもいいんじゃないね？」

「え？」

「いや、確かにあれは間接キスだったけれど、間接キスなんて男同士でもやるだろ」

「そんな趣味が・・・」

「ちげえよ！飲み物のまわし飲みとかさ、あるだろ」

「はあ」

「それと同じってことにすれば気になんないし、俺としてもいい思い出だ。なんてたって初めてだったからな・・・」

「七実さん・・・普通に気になると思うんですけど」

「くっ、いいからいいから。それに初めてをなしにしたいくはない。」

初めての友達、初めての恋愛。初めてつくことは忘れたくないことばかりなんだ。岸島が嫌だっというのならなしでもいいけど・・・」

「いえ、ノーカンにしません。私もいい思い出にします」

「そうか・・・」

「というかその座り方やめてくれませんか？黒タイツごしに自分のパンツが見えているんで」

「え？」

「下を見ないでください！油断も隙もありませんね！」

「今のは男の本能だ。俺の意思じゃない」

「なんでも男の本能で片づけようとししないでください！」

といういい話だったはずがバカ騒ぎになっていったところ。高松が帰ってきた。

「お、どうした？」

「な、七実くん！私とも間接キスしてほしいんだけど・・・」

「なんでだよ！」

「それは・・・その・・・」

「ていうか今の俺は岸島で、体は俺だけであっちは岸島だぞ」

「あ・・・」

こいつは本当に高松だろうかというほどの行動だった。かわいそうに・・・混乱してるんだな。確かに人間が入れ替わったら驚くよ。

「そして岸島に高松」

「なんですか？」

「なに・・・？」

「ひとつだけいいたいことがある」

「だからなんですか？」

「言って・・・」

「俺、トイレしたいんだけど」

「そんなこといちいち報告しないでください」

「そうだよ……。別にいつてきてもいいよ」

「そうか……。悪いな。じゃあ失礼して……」

そして俺は立ち上がり、トイレを目指す。さっきからずっとしたかったんだよ。ジュースも飲んだしな。そしてドアノブに手をかけようとした時……

『いやいやいやいや!』

3人で大合唱だった。まさかこんなにきれいにハモるとは。

「ちょ、何しようとしてるんですか!」

「そ、そうだよ……。それ数夏ちゃんの体なんだよ」

「え!?!お前らだつて簡単に流してただろうが!思わずマジでやるうとするところだったよ!」

3人ともなぜか涙目だった。これはまずい。何がまずいって俺の腹が。ちょ……。紙を使わない用事なのにこんなに苦戦するとか……。

「その……さ」

「なんだ高松尿意少佐」

「七実さん、混乱しすぎです。欲望と職が名前になってますよ」

「ボールがぶつかったときと同じ速さでぶつかればいいんですよ」

「ああ」

「それが難しいんですよね」

「数夏ちゃん、計算できないの？」

「!?!」

「!?!」

最悪とはまさにこのこと。最初からこれできたんじゃないか？

「岸島……」

「……計算終了しました。七実さんの頭なので若干時間がかかりましたが」

「そうか……」

もう、どういう意味だよ！とかツッコム気もおきない。

「どのぐらいだよ？」

「私がぶつかりますんで、じつとしてください」

「うん……」

なんかテンションが下がっていた。解決策がどうのこうのとかの問題じゃない。こつこつ苦労まるまるいらなかったのだ。

「いきます」

「よしこに」

ゴッチーン

○

「おいおい！お前自分だけ逃げるなよ！」

自分の部屋に戻っていく岸島。さて……と……。

「七実くん、間接……」

「……数夏を逃がした。許さない」

「もうひと踊りやっちまおう！」

「……あのさ、俺、トイレしたいんだ」

俺のトイレはいつになるやら……。ってあれ？トイレしたくないぞ？なんでだ。階段から走る音がきこえてくる。その正体は岸島だった。

「私が先です！」

そういつてトイレに入ってしまった。あーなるほどな。あれは岸島の体だったな。

『七実くん！）……未空（』

俺はこいつらをどうしようかとひたすら考えていた。

第12片 理系少年と文系少女の交換（後書き）

あれ？タイトルおかしくね？と思ったあなた。大丈夫です。

今回は入れ替わりの話だったため、あっています。

それと挿をどうしようか悩んでいます・・・。

素人の絵なんて期待はしないでいただきたいのですがそのせいで作品のイメージを壊してしまわないかと・・・。

今回で入れ替わり編終了。

また短編みたいな軽い話をかきたいな！

でわ

第13片 氷結少女と文系少年の笑い

どうも、こんにちわ。現在は放課後。そしてあじさい荘である。6月2日。もう桜も散り、夏へと移行しようとしている時期。そんな中俺はリビングでテレビを見ていた。かなり広いリビングは食堂もついている。

「なあ」

そんな中俺はある少女、氷結少女と呼ばれている結露緋色けつろひいろに話しかけていた。今、彼女もテレビを見ている。

「……………なに？」

「お前って笑わないの？」

今やっている番組はお笑い番組みたいなバラエティだ。なかなか面白い。だがこいつは笑わない。笑いのツボが違うかと思ったがこいつの笑っているところを見たことがなかった。

「……………笑ってる」

「どこが？」

「……………口元」

分からない！悪いけど分からないよ！銀髪につつまれた可愛い顔には変化がないように見えた。……

……………。笑わせてみるか。男たるもの大きな試練にぶつかってこそ燃える！そうさ！こいつを大爆笑させてやる！

「おい、緋色。見てろよ」

「……………うん」
「ブリッジー！」

体をそらせて橋をつくる。……………。

「どうだ！」

「……………面白い」

「嘘だっ！」

「……………もつやめていいよ」

「変な気づかいはやめる！」

「……………辛そうだし」

「うるせえよ！」

「……………凍れ」

パキイイイイイイイン

どこかでそんな音がきこえた。それは緋色の持っているハンドベルからきこえるものだった。ああー脳がすつきりするー。

ゴン

「いてえ！」

「……………大丈夫？」

「ここでそれやっちゃったら気抜いて頭うちつけるだろうが！」

「……………だってなかなかやめないから」

うっとしいやつに罰を与えたみたいな感じだった。俺が悪いのか？

「くっ……………ここまできたら逆に諦め切れねえ！」

「……………頑張れ」

「他人事!!」

「何してるんですか?」

そこにいたのは岸島きしまつが数夏。理系しかできない見た目がロリーな高校2年生だ。

「その説明は失礼じゃないですか!」

「相変わらず人の語り部にずかずか入ってくるよな!」

「まあ、それはいいです。で、何してたんですか?」

「ああ……………」

俺は説明することにした。

「実はかくかくしかじかで……………」

「かくかくしかじか?ちゃんと説明してくださいよ!」

「これ通用しないの!?!」

俺も何やっているのかわからなかった。

「何してると思う?」

「うーん…………七実さんが狂ったとしか思えません」

「そこ以外にも思うことがあるだろうが!」

でも第3者から見るとテレビを真顔で見続ける緋色。の横で頭をかかえながら悶えてる人。としか映らないだろうな…………。

「いやなに、こいつを笑わそうと思ってな」

「はあ…………なんで今?」

「いや、こいつと小さいころからいるけどさ。笑ったところを見た

「ことがないんだ」

「そういえばずっと真顔ですね・・・」

「だろ」

「それでブリッジをしていたと」

「うん」

「そこにベルをならされて気が抜け頭を打ちつけたと」

「うん」

「何やってるんですか・・・」

「あれ？」

よくよく考えてみれば本当にこれで笑わそうとしていたのだろうか。

「ブリッジって笑うところないですよね」

「うん・・・」

「まったく、これだから困るんですよね、素人は」

「お前は何の玄人ケツクなんだ？」

「まあ、私に任せてください」

「おお、自信ありげ！」

「ふっ・・・大阪に現れた笑いの申し子こと数夏が笑わせてみせませす」

「その恥ずかしい名前はいいとして期待できそうだ！」

そういつて緋色に近づく岸島。

「緋色さん。私を見てください」

「・・・数夏、なんで？」

「いいですから」

「・・・うん」

「いきますよ」

「・・・」

「あのですね……なんでちょっと前かがみになっているんですか?」

「……………数夏の用事が終わった後飛びこもうと思ってる」

「七実さん！私このままじゃ何もできないですよー」

「いや、うん。お前逃げた方がいいな」

「でもなんか獲物を狙うチーターみたいな目してるんですけど」

「うん、俺もそう思う」

「チーターに人間は勝てるんですか?」

「いや、無理だと思う」

「そう……ですよね……」

「……………で、なに?」

「いや、そのですね……」

「……………何もなければ私の用事をすませる」

「ちょ！その用事はだめです！絶対に!」

「岸島。俺がまた時間をかせぐよ」

「ああ！今日ばかりは七実さんが人間に見えます!」

「俺は普段なんなんだよ!」

そっぴいっつも俺が2人の間に割って入る。

「緋色」

「……………何?」

（今のうちだ）

（はい!）

緋色の注意が俺の方にむいた瞬間岸島を逃がす。よし！緋色はまだ気づいてないな……。

「俺がお前を笑わす」

「・・・・・・・・・・・・・・・・やってみて」

「いくぞ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

具体的なプランはなかったんだけどな。どうしよう・・・無茶ぶりをうけたお笑い芸人の気持ちはこんな感じなのか・・・。最悪だな、これ。そして緋色の澄んだ目。怖い！怖いよ！

「ピザって10回いってみろ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ピザピザピザピザ・・・・・・・・・・・・・・・・」

「じゃあここはー!?」

「肘」

「ぶつぶー、ここは細胞でしたー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・すまん」

最悪だった。うん、子供か俺は。これあーげぬ!と同じぐらいの幼稚さを感じたぞ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・私を笑わすには正解レベルの実力が必要」

「とんだ隊長格だな、おい！」

無理だった。これじゃプロでも笑わすことができないな。

「面白いこと・・・か」

「・・・・・・・・・・・・・・・・でも私、ちゃんと笑ったことがある」

「は？いつだよ。そいつ連れてきてそいつに逆立ちしながら全裸で町を徘徊はいかいさせてやるよ」

「……………未空のおかげ」

「俺！？」

……………逆立ちも全裸も徘徊もなしでいいですよ
ね！そんなひどいことさせちゃダメだぞ……………
……………ごめんなさい。

「……………昔、小学生ぐらいの時。未空、今みたいに私を笑わそうとしてくれた。そして私は笑った」

「ほー。そのころの俺はどんなことをしたんだ？」

「……………いうのも嫌なぐらい寒いこと」

「なんでちよつといい話みたいに言っただよ！」

俺、昔からドンズベリだった。今も変わらない自分が憎い！

「……………でもその一生懸命さに思わず笑った。あれはいい思い出」

「呆れられてるだけじゃないかな！？」

「……………昔から何も変わってないね」

「う、うるせえな……………」

なぜか非常に恥ずかしかった。でも昔の俺はこいつの笑顔を見ていたのか。羨ましいやつめ。こいつ笑ったら絶対に可愛いと思うんだよな。

「……………私、嬉しかった。だから悪いことじゃない」

「緋色……………」

「……………未空が高校1年生の最後の時。荒れてて嫌だっ

た。でももとに戻ったね」

「それみんなから言われるんだがそんなに荒れてたか？」

「……………この世を憎んだような目をしてた」

「……………そう、か……………」

「……………でも戻った。本当によかった。でもそれは……………」

「

それは？」

「数夏のおかげ」

「……………岸……………島……………？」

いつも最初はいい瀬んで……………と付くはずなのに今回ははっきりと
いった。俺にむかってちゃんと。

「……………そう、数夏。数夏が来てから関わり合うよ
うになってから明るくなった」

「気のせいじゃねえの？」

「……………気のせいじゃない。昔から一緒にいたんだ
から未空の変化ぐらいわかる」

「……………」

俺もどこかで分かっていた。あいつと一緒にいると悪いものがとれ
ているような気持ちになる。そうか。俺はあいつのおかげで……………。

「感謝、しなきゃな」

「……うん。そうすると数夏きつと喜ぶ」

「喜ぶ？まあ、お礼言われたらそりゃ嬉しいか」

「……ほんとうに鈍感。それは数夏にも言えること
だけど。あの子まだ気持ちに気付いてない」

「ん？なんかいったか？」

「……なんでもない。でも私じゃ未空を明るくさせることは
できないし、数夏を喜ばせることもできない」

「弱気だな。お前にだってできるさ。人を笑顔にするのは気持ちい
ものなんだぜ」

「!」

「ん？どうした？」

「……昔も未空そう言ってた」

「マジかよ！まったく成長してないな、俺は……」

そうやって落ちこみながら自分の部屋に戻って行った。

○

「……成長してる」

……私は緋色。未空が部屋に戻ったあと思い出していた。
昔のこと。彼のこと。

私は昔から笑わなかった。そこに彼はやってきて私を笑わそうとし
てくれた。準備の時間も昼休みも放課後も少し。時間の無駄だから

そんなことしなくていいよ、と私はいった。でも彼は・・・

『俺の好きでやってんだ。それにな、人を笑顔にするのは気持ちいいものなんだぜ』

そのセリフで私は笑ってしまった。な、なんだよう、という彼もどこか嬉しそうだった。私たちはしばらく笑っていた。そんな彼に私はずっと感謝している。本当にいい思い出。

「・・・・・・・・・・ふふ」

しらすしらすのうちに私は笑っていた。リビングには誰もいなくてよかったと思うと同時に私は笑いたくてもしょうがなくなった。笑うこととはいいことだ。笑うことは笑わせることと同じぐらい気持ちいい。

でもさつき正解レベルといった手前、笑うことはなんか悔しく、そしてはさしかかった。

第13片 氷結少女と文系少年の笑い（後書き）

こんにちわ？こんばんわ？とりあえずあいさつです。

今回は緋色にスポットを当ててみました。未空と緋色の昔のエピソードはまだあります。その伏線みたいな感じでやらせてもらいました。

ほかにも高松、山梨とありますね。

そしてあじさい荘の最後の住人。

これら全部やっていきますが、基本は日常のやりとりということをお願いします。

挿絵。順調にかけていますが上手くはないです。でもどんな感じなのかなーという軽いイメージにでもなれば幸いです。

でわ

第14片 文系少年の少女たちの探り

「えー、みんなに頼みがあります」

「んー？なにになに？」

「……どうしたの？」

「その……なんでも相談にのるよ……？」

ここはあじさい荘1階のリビング。俺はみんなに頼みたいことがあった。なのに高松はなんでも相談にのるよといっている。普段どういふ目で俺を見ているんだろうか。

「今日は6月7日。岸島の誕生日までちょうど1カ月だ」

「お、そうだったのかー！」

「それで誕生日に欲しいものをきいてほしい」

「……なんで自分でできないの？」

「俺はな。俺がきくとヘマすると思うんだ。なるべくならサプライズにしたいし、しっかりしてるお前らに頼みたいなあと思ってさ」

「じゃ……その……さりげなくきけばいいんだね？」

「ああ。やってくれるか？」

「やったるよー！私が1番手！ふふふ、ここで終わらせてみんなの出番をなくしてやるぜー」

そう言った山梨。明日の報告が楽しみだ。

○

「やっほー、山梨^{やまなし}戸張^{とばり}だよーん。翌日^{あした}だーっ！さあつてとさつてと。今

は昼休みこの時間にきいちゃいますか！

「数夏ちゃん！今、一番欲しいものなーに？」

なんか直球になっちゃったけれどまあいいや。ささ、教えておくれ！

「え、いきなりなんですか？」

「いや、ね。その・・・その欲しいものと極力離れたものを今すぐにもあげようかと」

「じゃあ、嫌ですよ！」

「いやーごめんごめん。でもさ、ためしに言ってみてよ」

「欲しいものっていうか食べたいものなら・・・」

「なになに？」

「シヨートケーキですかね」

「はい、じゃあ、これあげる」

「なんですかこれ？・・・ってスラムじゃありませんか！」

「どっつ？」

「どっつって本当に極力離れてますね！」

「でも捕まえるのに苦労したんだよ」

「え？まさかこれドラ○エのスラム!?」

「雑魚だから生け捕りが難しくくてさー。ほら新鮮なものをあげたいじゃん」

「いらなですよ！新鮮とか関係なしに！」

「むー、頑張つてメ○で焼いたのに・・・」

「メ○!?メ○が使えるんですか!?!」

「じゃあ、もっかい捕まえてくるね。今度はメタルスラムにしよ
うかなー」

「いえ、いらなですよ！」

「ルー○!」

「ルー○!?!あれ？本当にワープしたああああああああああ

岸島のこと好きな緋色なら本気で調べてくれるだろう！これは報告が楽しみだ！

○

……翌日。昼休みに2組にきた。数夏、どこだろ。

「……見つけた」

「おおわ！緋色さん!？」

「……ききたいことがあるんだけど」

「いきなり質問ですか……なんででしょう?」

私はいつもの2割増しぐらい緊張した声でいう。

「……数夏の好きな人つてだれ?」

「ええええええええええええええええええ!!?」

なんか質問が違うような……。でもいいのかな。

「わ、私はその……」

「……私?」

「それは違いますよ!友達としてなら好きですけども!」

「……じゃあ、未空?」

「っ!いえ、その……そんなわけにやいでしょう!あ……舌かんじやった……。なんで顔が熱くなるんでしょうか……」

相変わらずの鈍感さだと思う。それと相変わらず可愛い。あと、質

あじさい荘1階。テレビ前。緋色からの報告をきいていた。

「お前も異常じゃねえか！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・だつて欲しいものが私じゃないつて・・・・・・・・」

「そこでシヨックをうけて諦めるなよ！」

「おー、なんか松岡修〇みたいー」

「うるせえ山梨！お前だつて失敗してんだぞ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ごめん」

「あ、いや。そのな、責めてるわけじゃないんだ。協力してくれたことも嬉しかったし。本来なら俺がお礼言わなきゃな。ありがとう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ごめん。未空が欲しいの？つてきいちゃつた」

「そつち！？そして何きいてんの！？いるつていうわけないじゃん！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・分からない。いるつて言うかも」

「なんでだよ！そして俺のとなりで跳ねてる山梨がとつてきたスラ

〇ム！邪魔だよ！そして規制とかされちゃうから！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・じゃあ、私が連れて帰る」

「え？どうやって？」

「ルー〇」

「え！？ルー〇！？なんでお前も使えんの！？つてまた消えたあああああああああ！」

どういふことだよ！なんで俺のまわりみんなルー〇使えるんだ・・・・・・
。そしてあつちの世界にいったことあるのかよ・・・・・・。

「じゃあ・・・・私が最後だね」

「ああ、よろしくたのむぞ。高松」

「うん」

こいつは真面目だからな期待できる！さあ！楽しい楽しい夜明けの始まりだ！あれ？何が始まるんだ？

○

どうも・・・高松小鳥たかまつことじです・・・。その、少し恥ずかしいけれど語り部、今回担当します。よ、読みづらいかもしれませんがよろしく願います！

「小鳥さん！？いきなり誰に頭下げてるんですか！？」

「あ・・・数夏ちゃん、ちようどよかった」

「頭下げてるところにちようどいいって一体何の用なんですか・・・」

若干、不安そうだけどきいてみよう。

「あ・・・今、ほしいものってある？」

「欲しいものですか？・・・。なんか最近その質問よく聞くんですが・・・」

「き、きのせいだよ」

「そうですかねえ・・・。んー、実用的なものですかね」

「実用的・・・例えば？」

「聖剣とか」

「聖剣！？そんなのどこに使うの・・・？」

「ワ〇ピース全巻とか」

「実用的かどうかはわからないけれど全巻は多そうだね」

「じゃあ……ルー〇？」

「ルー〇!？」

「なんか最近私のまわりでルー〇を使う人が多くて……」

「そうなんだ……。でももつと手に入りやすいもので……」

「そうですね……。放課後ティー〇イムのアルバムとかですかね」

「確かにいい曲だらけだよね」

「私たちの物語のオープニング曲、エンディング曲に使わせてもらいます」

「アニメみたいだね」

「エンディングは私が思い人のためにチョコを作っている感じで！」

「それは驚きだね」

「曲はときめ〇シュガー」

「本当に驚きだね!というか思い人って好きな相手ってことでしょうか?」

「いえ、今は特にいません」

「そうなんだ」

「でもそれっぽく見せるだけでいいんですよ!」

「なんかさらっと黒いことを言ったね」

「そんな感じでどうでしょう?」

「どうでしょうって……。うん、いいと思うよ」

「じゃあ皆さんも想像してみてください!ときめ〇シュガーに合わせ
て!」

「誰に言ってるのかな……?」

これでバツチリかな……?

「ということなんだけど」

「振り回されてね!？」

あじさい荘1階いつものリビング。そこで俺は高松から報告をうけていた。

「うん、若干ね」

「若干っていうか振り回されてたよね!？」

「でも面白かった」

「そんな笑顔見せられたら何も言えねえよ!」

でもどうすつかな……。ほしいものは実的なものとしか聞いてないぞ……。

「その……さ。なんでもいいんじゃないかな？」

すると高松がおそろおそろ発言してきた。

「なんでも?」

「あの……そういうことじゃなくて。その七実くんが選んでくれたものならなんだって嬉しいと思うんだ」

「そうかな……」

「そうだよー!そうに違いないよ!だから好きなものを選ぶがいさー!」

「……結論はでた」

「……そうかそうだな。おし。でもお前らの成果も参考にさせてもらおう」

「うん……」

「おっけー！」

「………いいよ」

食べたいものはショートケーキ。欲しいものは実用的なもの。そしてルー〇………。ルー〇!?これは無理だよ!でもこの情報さえあれば選べるはずだ。

「それとー7月7日って七夕でしょー?」

「ああ、そういえばそうか」

「だから誕生日と七夕をませちゃおうよ!」

「………それはいい考え」

「私も賛成だよ」

「そうだな。みんなで岸島を驚かせようぜ!」

『うん!』

でもこの後気付いた。山梨と緋色ふざけてね?と。まあ、でも言わないでおいた。俺が頼んだのに文句は言えないっていう理由とみんなの笑顔に水を差したくなかったからだ。この笑顔に岸島がプラスされた光景が見たいと心の底から思ったさ。

第14片 文系少年の少女たちの探り（後書き）

ということと数夏の誕生日をにおわせる回でした。

そして作中でもでてきたときめ〇シュガー……。

あれはほんとうに想像してます。

なんか数夏が一生懸命チョコを作っている光景がエンディング風に浮かぶ……。

放課後ティータ〇ムさんすみません。

でわ

第15片 理系少女と文系少年の無駄話

青春。それは日常とイコールで結びつくのだろうか。日常は日常で青春は青春？日常が青春？俺にはよくわからない。分からないからこそ知りたいと思うのもまた好奇心が強い人間ならではだろう。しかしな、俺は人間だがそんなに興味が無い。興味というより考えなくともいいことだと思っっているからだ。だからさ、俺に聞かれても困るんだよね。

「青春ってなんでしょっか？」

そんな青くさいセリフから始まる今回の話は青春と呼べるのだろうかと七実未空こと俺はふと考えた。

「青春とは何をすれば青春なのでしょうっか？」

「しらねえよ」

なんでこんな流れになったのか。それは岸島が「高校生やってるなら青春しないと損ですよ！損！」と言ってきたからだ。しかしこいつも肝心な青春という意味は分からないらしい。

「これは謎ですね・・・」

「いや、正直どうでもいいぞ」

放課後。教室で岸島の身支度が終わるのを待っていたらいきなりそのようなことを言われた。

「青春っぽいものをあげていきましょっよ」

「いや、だから早く帰ろっぜ」

「恋」

「俺の意見は一方通行!？」

会話のキャッチボールというものを教えてやりたくなった。こいつとは成り立たなさそうだけどね。

「恋といえば・・・」

「おい!ストツプだ!マジカルバナナみたいになってるから!」

「おお・・・そうでした。青春でしたね」

「青春っぽいものな・・・友情だろ」

「よくそんな寒いこと言えましたね」

「お前もよくそんなことが言えたな!」

人にきいといて冷たい奴だ。

「他にもあるでしょう」

「例えば？」

「部活とか？」

「部活やってないやつも青春してるやつはしてるだろ」

「それもそうですね・・・じゃあネットですかね？」

「ネット?」

「2ちゃ○ねるとか」

「お前の青春は歪んでる!」

面白いけども!でも決して青春のくくりではないだろう。ネットとか・・・趣味だろ、それ。

「青春漫画とか参考に見ましようか？」

「青春漫画・・・あの、川のところまで殴りあって『なかなかやるじやねえか』『お前こそ』みたいなやつか？」

「なんか七実さんの青春って古風ですね」

「俺も言ってるって思ったけどさ他に何もないだろう」

「ありますよ！偏りすぎです」

「そうか？」

「朝にハンバーグ、昼にステーキ、夜に焼き肉を毎日続けてる人の食生活ぐらい偏ってます」

「それは命にも関わるな・・・」

「朝にコーンポタージュ、昼にサラダ、夜に野菜炒めぐらい偏ってます」

「急にヘルシーになったな。きっと医者に肉を止められたんだろ」

「なんか話が脱線してますね」

「お前が気づいてくれてよかったよ」

このまま食生活の話になるのかと思った。それは厳しいな・・・。
つまらなさそう。

「で、聖瞬の話なんですけど」

「なんか技名みたいになってるよ！」

「すみません、噛みました」

「おい、どこかで見たような流れになってるぞ」

「じゃあ、演じてくださいよ」

「・・・違つ。わざとだ」

「噛みまみた」

「わざとじゃない!？」

「神はいた」

「急に宗教的!！」

「という具合ですね」

「ただ化〇語から引用してるだけだろうが!」

最悪だ。青春の話から急にパクった会話になっていた。

「でもこういうのも青春っていうんですかね？」

「ん？」

「男の子と女の子で教室に残る。そしてバカ話。みたいなこの状況も」

「そうか？でも、ま、青春なんて案外こんなもんなのかもな」

「寒いです」

「ひでえ！」

「気温がですよ」

「もう7月になるんだぞ！お前の体感温度おかしいだろう！」

「私はとても暑いところから来たんでこのくらいでも寒くて」

「どこからきたんだよ」

「ブラジルじゃないでしょう」

「それ以外にもあると思うが、嘘はやめろ。純日本人だろうが」

「すいません。七実さんのセリフがあまりにも寒くて嘘を・・・」

「そのセリフで今度は俺が真冬の海に身投げするかもしれないぞ」

「冷たいのでカイロでも持っていけばいいですよ」

「カイロでどうこうできねえだろうが！死の危険があるんだよ！」

「か、勘違いしないでよね！あんたのためのカイロじゃないんだか

らっ！」

「ツンデレでも誤魔化しきれない！」

「ていうかもとの話から大分それましたね」

「まあ、そんな感じは途中からしてたけどな」

「でも会話だけでもいいんですよ」

「なんでだ？」

「私の声は可愛いからです」

「変な自信っ！」

「きつと野○藍さんみたいな声でしょうね」

「リアル伊○風子！」

「七実さんはどんな声なんでしょうか？」

「俺か・・・俺は有名どころで神谷浩〇さんかな」

「ずうずうしいですね」

「お前に言われたくねえよ！」

でも実際どつちもどつちだった。

「青春の話は？」

「忘れてました」

さつき言っただばかりだよー！

「青春とはえっちなことだということでしたっけ？」

「さも俺が言っただみたいにないなよ！」

「すみません。未来を見てしまっただけ・・・」

「未来の俺がそう言うのか!？」

「それはもうかっこよく！」

「青春とはえっちなことだっただけでどう言っただらっかっこよくなるんだよ
！」

「今、言いましたね」

「あうちっ！」

最悪だよ！もうバカだな俺！

「いくら考えても分かりませんね」

「そうだな・・・青春なんて最初から答えなんかはないのかもな」

「また寒いセリフを」

「だって俺らが考えて答えが見つかるようなものなら昔から見つか
ってるだろ」

「なんか私までバカにされてるような・・・」

「き、気のせいだ」

「まあ、いいです。もう帰りましょうか」

「びつくりするぐらい無駄な時間！」

「いいじゃないですか。最近あまりこういう時間がありませんでしたし」

「いや、そうだけどさ」

「ほら、立ってください」

「おう、よっと」

俺は席から立つ。

「私の黒タイツというか黒ストッキングみたいな薄くして夏にそなえたんですけどどうですか？」

「違いなんかわからないっての！」

「今のようなセリフで女の子は傷つくんですよ！」

「分かった。分かった！今度から気を付けるから！だから俺のすねを中心に蹴るな！」

今日も変わらずそしてにぎやかに過ぎていく毎日。そんな日がずっと続くんだと思っていた。でもそれは所詮妄想少女の妄想のように俺の幻想だったのかもしれない。

俺はすぐにこの心地いい時間をなくすことになる。

第15片 理系少女と文系少年の無駄話（後書き）

毎回毎回無駄話じゃね？

というツツコミは分かっていますので言わないでくれるとありがたいです。

というわけで久々の会話だらけ。

いつも通りとかいうツツコミも受け付けません！

そして次回も同じようなテンションで！

でもちよっと様子がおかしいかもです。

でわ

第16片 理系少女と文系少年の会議

「えー、というわけで第1回あじさい荘キャラ立たせ会議を始めます」

またまた唐突で悪いね 七実ななみみそら未空です。ここはあじさい荘1階のリビング。テレビの前のテーブルのまわりに5人が座っていた。

「すみませーん！この会議は何を話し合ってますかー？」

「山梨。お前、ことの重大さがわかっていないようだな」

いつも元気なはっちゃんけ娘である、山梨戸張やまなしとほしが発言する。ちなみに妄想少女の名前を持つ。

「……………私、やりたいことがある」

「岸島いじり以外でならいいぞ」

「……………」

結露けつろ緋色。残念な百合。いや梅。女の子、男の子両方いける無表情な女の子。氷結少女の名前を持つ。俺の幼馴染。

「その……………私も参加するの？」

「お前もだ」

おそろおそろ発言した大人しい女の子は高松小鳥たかまつことり。普通で大人しく、恥ずかしがり屋な俺の幼馴染だ。ちなみに雷瞬少女という中2病らしき名前を持つ。

「ってことは私もなんですな」

「ああ……ってお前が一番大事なような気がするぞ！」

岸島数夏^{きしじますうか}。恐るべき理系少女。そのまんま理系で特に数学がすさまじい。異常なレベルだ。理系少女という名前を持つ。

「そして俺が七実未空だ」

文系少年の名前をもつ。最近気になることは背が伸びないことだぜ！

「なんでそんな説明口調なんですか？」

「お前もそうだがみんなさ……」

「○○少女っていう名前があるんだからもっとそれっぽいことしろよー」

今回はそんな話。

「どういうことかな？私は個性ありまくりだけど！」

「お前の妄想はどうしたよ！初回から見えてねえぞ！」

「いや……それは……」

「緋色の氷結もだ」

「……私が出した」

「初回と俺の頭ぶつけたときだけだろうが！」

「私も……初回だけだね」

「認められるとツツコミづらい！」

「私は何回かだしてますけど」

「もつと出せよ！お前、みなさんに理系少女ってこと忘れられてんじゃないのー!？」

俺一人で大騒ぎだった。

「というわけで改めてキャラをたたせたいと思います」

「七実さんのもあんまりだしてないでしょうに」

「そこも含めて改善します！」

ていつか俺のはみんなと比べて普通レベルなので出す機会がないのだ。

「じゃあ、山梨から」

「えー、めんどいなあ・・・」

「お前たぶんルー〇しか取り柄のない女と認識されてるぞ」

「山梨戸張です、どうも」

急にしゃきつとしました。

「私はみんなに妄想を見せることができるんだよ」

「そうそう、そんな感じで」

「原理はよくわからないけれど私が妄想を話して聞いていた者は幻想を見ちゃうんだよ！妄想通りのことが起こったと勘違いさせちゃうんだ！」

「おお！それで！」

「実際妄想なんでそのうち解けるし、それにかかった本人もうつす気づいてるんだけどね」

「悲しいっ！」

「というわけで披露したいと思います！」

「ちょ！お前！ここで！？」

荒れていた。緑はなく、空の青もなくなってしまった世界。そこには生きるものなどいなかった。しかし2人だけ生き残りがいたのだ。

「山梨……山梨……!」

「七実くん。私の心配はいいからはやく逃げて」

そこは戦地だった。いつ撃たれるかわからない戦地の中。男は病気の女を連れて逃げようとした。しかし足をくじき、満足に歩けなくなってしまった男は女をおぶることができなくなっていた。

「だめだ!お前をおいてはいけない!」

「その言葉をきけただけで満足だよ……」

「山梨!」

「いいから……」

「おーい!ここに生き残りがいやがるぞ!」

「しまった!」

「はやく!私はいいから!」

「でも……」

ド
ン
ッ

「え……………」

気付くと山梨は俺の手に刃をさしていた。

「ちっ！はやく行けよ！もうあんたに用事はない。まったく遺産をまるまるいただく計画がパアだ」

「やま……………」

「じゃあな。今まで私の手の上で踊ってくれてありがとう」

「やまなし……………」

彼はひたすら走った。こんなの嘘だ！あんなに優しかった山梨がこんな……………。しかし彼は気付いていた。これは芝居なのだ。

「行きましたか……………」

「おい、女覚悟はできてんだろっな」

「私は愛する人を裏切った。十分罪になるでしょう。さらばです」

そして女は……………

「やまなしいいいいいいいいいいいい！！！！！！」

「あれ？聞きすぎたかな？」

号泣でした。これがこいつの妄想だ！

パライイイイイイイイン

しかしどこからかきこえてきた音によって俺はもとに戻る。

「……………これが私の氷結。脳を一時的に停止させ、頭の状態をリセットする音を出すハンドベルを振る」

「うん、まあそんな感じだな」

そして俺はゴミ箱にお菓子の袋を投げいれようとする。しかしそれは外れ地面に落ちそうになったとき……

シュンッ！

「えっとこれが私の雷瞬……」

「高松の委員長長魂の塊だな！」

悪いことを高速で防ぐ。悪いことをしようとしたやつが悪いことをし終える前に防ぐそれは雷神のよう。と中2病の先生が言っていた。

「だからゴミ箱からお菓子の袋が外れ地面に落ちる前に防いだということだ！」

「誰に話してるの？」

「ちよっとお菓子の袋貸してくれ」

いや、最近誰が誰なんだかわからない人がいそうでね……。不安
だったんだよ。

「いやー、参った。お前らすごいわ」

「いや、感情をこめてください!」

「さあ、みんなそれぞれ戻っていいぞー」

「……………未空のは?」

「え!?!」

「そうだよー!七実くんやってないじゃない!」

「いや、俺は」

「ずるいですよー!」

「そのね」

「やろつよ、七実くん……」

「高松まで!?!」

あれ?誤魔化すつもりが無理だった。急にピンチになったよ!

「その古文をやく理解できるとか……………」

「どのぐらいですか?」

「普通の人ぐらいです」

「……………幻滅」

「う、うるせえな!」

「七実くん個性がないねー」

「いや、俺は普通だから!」

「自己申告で普通って言われても……………」

また墓穴ほった!?!

「たーすーけーてー!?!?!?!」

またにぎやかになる俺の日常。それはやはり気持ちよくて安心でき
て……。

ピリリリ

「あれ？お母さんから電話です」

「お、岸島母からかー。俺も一度は見てみたいな」

「……………電話にでないの？」

「そつだよー！でなよー。七実くんはこつちに任せてー！」

「お前何するきだああああああああああああああああああああ

ああー!!」

「でもいいよ……………」

「高松！お前もそつちサイドなのかよー！」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

「岸島！お前はツッコめよー！」

ピッ

「はいもしもし。あ……………お母さんですか。どうしたんです？……………
……………え？それってどういっ……………
……………」

「お父さんが帰ってくるんですか……………!?!?」

6月下旬の今日。その日を境に俺の日常は崩れ出した。

第16片 理系少女と文系少年の会議（後書き）

というわけで2回目の更新ですが。

最後のほう・・・雰囲気が変わってきましたね。

でもまさかのここからバトル展開！にはならないので（笑）
ふつーに日常なんですけど少し変わってますよ。

でわ

「そうか？最近お前暗いけれど」

「私、根は暗いんですよ」

「それは嘘だとわかるぞ」

「いつもは明るく接してるだけなのです」

「急に重い！というかあお前はあきらか素で明るいだろ！」

「いいえ、暗いですよ。七実さんの心ぐらい」

「俺が病んでると！？そういいたいのか！」

「違いますよ。洞窟のように空っぽって言いたかったんです」

「そうか・・・いやいやいや！よくないから！フォローじゃなくて

さらに俺を追い込むな！」

「いえ、そのすいません」

「え？あれ？」

やっぱりいつもの岸島じゃない。普通ならまだつつかかってくるはずだ。

(おい、岸島の様子おかしくないか？)

(そうかにゃー？ん・・・確かに少しテンション低いかもだけれど)

(・・・・・・心配)

(何かあったのかな？)

緊急小声会議終了。

「やっぱりお前おかしいよ。もしかして『ダニエル』なのか？」

「まだその恥ずかしい名前使ってるんですか？」

「いいだろ、別に！」

「いえ、別にそういうわけでもないです。普通ですよ、普通」

「自己申告って信じてもらえないんだぞ」

「・・・・・・」

「無理に話せとは言わないけどさ・・・やっぱり心配なんだ。俺も

「ここにいるみんなも」

「……………」

「お前はもうこのこの住人であり、大切な仲間なんだから。だからって話したくないことはあるだろうがな、でもその傍らでお前を心配してる人がいることを忘れるな」

「はい……………」

「俺らはいつでもなんでも力になるさ」

「もちろんだよー」

「……………あたりまえ」

「うん、私も」

「みなさん……………ありがとうございます」

久々に笑った顔を見た。しかしそれは喜び、楽しみ以外のなにかも含んでいるようだった。

「しかし、七実くん。どさくさにまぎれてトランプを片づけないうでほしいんだけど」

「……………卑怯」

「は！？まだ終わってなかったのかよ！」

「あれ？そういえば香織さんは……………」

「ああ、買い物とかって言ってましたよ」

「ずるいぞー」

「いいだろう、別に。ババ抜き以外にもあるだろうが」

「でもでも、もう少しで上がれそうだったのにー」

「……………私も」

「だってこれで何回目だと思ってるの！？それで全敗してんだぜ！心が折れない方がどうかしてるよ！」

いつもの休日。いつものメンバー。そこで過ぎていく時間、プライスレス。いいこと言っただよな。

「そういえばあじさい荘の最後のメンバー紹介してもらってませんけど……」

『ああ……』

「なんで皆さんそんな微妙な反応なのですか!？」

「いや、そのな。岸島。残り1人は今ここにいないぞ」

「あじさい荘にですか?出かけてるとか?」

「あー、というより日本にいないかも」

「日本に!？」

「おかしなやつだからねー、私たち以上に」

「……私も最初会った時驚いた」

「戸張さんと緋色さんがそんなに言うなんて余程すごい人なのですね」

「おや?いま若干失礼なこと言われたような」

「気のせいです」

「そうかなあ?」

「……数夏が気のせいって言うてるんだから気のせい」

「緋色たちは相変わらず数夏ちゃんに甘いねー」

「というわけだよ……その……その人も悪気があるわけじゃ……」

「だいじょうぶですよ。私が来たのはいきなりでしたし、しょうがないです」

「ま、そのうち紹介してやるよ」

「七実さんよろしくお願ひします」

「おう」

ほんと残り一人は変わったやつだからな……。そういえばもうお昼か……。

知らない人だと……。。当然だよな。

「おや、反応が遅いな。これはどこかの神経が腐っているのかね」
なんだこの癪に障るような話し方。いちいちカチンとくるな。

「あなたこそインターホンが見えなかったんですか？ちゃんと押さないよ。小学校のころ習いませんでした？ピンポンダッシュは死ぬ気でやれと」

「七実くん！？ふざけてない!？」

「……………いや、本気だと思っ」

そう俺は久々にいら立っていた。だってなんか腹立つし、不法侵入だし。というか誰だよ。

「ところで目がやられてしまってる、あなたはどこの誰なんですか？」

「おや？目には自信があるんだがね」

「インターホンも見えない目はいららないですよ」

「そうか。せつかくひまわりが咲いているんだがな」

「ベッ〇ーか!！」

なぜ知らない人相手にツツコんでいるのだろうか。不思議でしょうがない。

「そして私は誰か？聞いていないのか？」

「は？なんのことです?？」

そうするとそのおじさんは煙草をとりだし火をつけて吸い始めた。

「私はな……………」

「お父さん……………」

「は？」

「おお、数夏！久しぶりだな」

台所から岸島がでてきた。それにお父さんって……………。

「き、岸島の親父さん……か……？」

「いかにも」

そうかそれならこの場所がわかったのも不法侵入したのもうなずける。いや、不法侵入はうなずけねえよ！なんでインターホンおさねーんだよ！ピンポーンの音を聞きたかった！

「でも……でもさ……………」

「どうした、元気な少年」

「なら、なんで岸島はお前のところに行かないんだ？なんで震えてるんだよ」

岸島の反応は親と会ったような反応じゃない。まるで恐怖そのものと対面したような感じだ。普通しばらく会ってない親なら抱きつくまではしなくても駆け寄るか照れ隠しの文句ぐらいは言うはずだ。

「お前、岸島に何をしたんだ」

「おやおや。おかしいな。親ということは証明されたのに・・・」

煙草をくわえなおして・・・

「君の怒りは消えてないようだね」

「七実くん・・・」

「・・・未空」

すると台所から高松がでてきた。

「みんな・・・何してるの？・・・って・・・」

「ああ、高松、こいつは岸島の親父でな・・・」

「何してるんですか？」

「え？おいおい、高松。包丁はおけよ。あぶねえぞ・・・」

「何してるんですか？」

高松の意識はこの親父にしかいていないようだ。

「じじ・・・禁煙ですよ」

そこかよっ！みんながずっこけた時に……

「すまんすまん。こんな汚いところなのでな。喫煙OKかと思ったよ」

次の瞬間。シュピイイイイイイイイイイ！という音がきこえた。煙草の火のついた先は切られゴミ箱に綺麗におさまった。

> i 1 3 3 8 7 — 1 0 5 8 <

「ここは禁煙です。2度目ですよ」

「ほう、その速さ雷のごとし」

高松の雷瞬。包丁で的確に煙草の先を切ったのだ。その速さ、まさに一瞬。

「ふむふむ。どうも私は歓迎されてないようだね」

「この状況で歓迎してくる奴の方がおかしいね。器が大きいというか人間ができているというか」

「そうかそうか。なるほどな。でも安心したまえ。今は君らに手を出さない」

「君らにすることは……」

俺は壁を思い切りたたく。ドンッ！という音がこだまする。

「てめえ、岸島に何するつもりだ!」

「君は文系だね。私は嘘が嫌いだから嘘はつかないことにしてるんだ。だから極力真実を隠して伝えたつもりなんだが、君にはどうやら通じないらしい」

「なめるなよ、俺は文系少年と呼ばれてるんだ」

「面白いな、君は。でも目的は違う。おいで、数夏」

「.....」

「どうした?そうかアメリカに住んでいてあまり会えないからな。私の顔を忘れたかい?」

「.....」

「君もこれからアメリカに住むというのに.....」

「!」

このクソ野郎何を言っているんだ.....岸島がアメリカにすむ.....?

「どづいうことだ!」

「どづいうこともなにも。親が子供と住みたいということに理由があるのかい?」

「岸島は住むって言っているのか?」

「これから言うに決まってる。きつとね。5日、6日はここにいるつもりだ。その間に決まるさ」

「本当にいい加減にしろよ.....」

「だいじょうぶだ。学校は休んでもらうが出席日数のことは安心していい。ま、アメリカに来てしまえば関係のないことなのだからね」

「……………なんで急に岸島と一緒に住むことにしたんだ？」
「親として当然。と言いたいけれど嘘は嫌いでね。半分は商売の
めだ。」

「商売……………」

「数夏の数学能力はとてすばらしい。これさえあれば私は失敗し
ない」

「岸島は金持ちだったのか……………」

「ああ、違う。私は金持ちだが。日本に金は送ってないからな。
数夏は金持ちじゃない」

「なんであんなだけいい思いしてんだ」

「人間として当然だろう。欲望は私にもある。金は独り占めしたい
だろ」

腹が立つとはこの時のためにあるのかと思うぐらいだった。人の親
をてめえ呼ばわりするのも気にならない。

「でもこれから金持ちになれるぞ」

「てめえ……………岸島の誕生日知ってるか？」

「さあな。確か今月から来月ぐらいだったはずだが。そんなもの妻か
ら聞けばいい話」

「そうか……………」

俺は拳をつくる。握りしめる限界まで。

「7月7日だ。おぼえとけ！この野郎おおおおおおおおおお
おおおおお！！！！」

俺はここでもう限界を超えていた。我慢できなかったのだ。

「やれやれ。カルシウム不足だぞ。やれ」

『はっ』

すると親父の後ろからボディガードみたいな黒スーツのやつがたくさん現れた。そいつは俺ら。岸島以外の全員をとらえる。そして一気に床に押し付けられた。

「がっ………てめえ！手をださないって……」
「今は。とிட்டんだ。嘘はついていない。」

「七実……くん」

「………未空」

「私も動けない……」

「くっ……そ……」

「さあ、こい。数夏。お前が来なければこいつらの関節をはずしていく」

「!?!」

「岸島！だめだ！」

「だい……丈夫ですよ……」

「数夏ちゃん！」

「………数夏」

「行ったらだめ！」

「だいじょうぶです。皆さん。私は平気ですから。お父さん、行きましょう」

「いい判断だ。お前たち。私がこの部屋から消えて1分たったらそいつらを離してやれ」

『は』

「少年。さすがは数夏の計算をはずしただけあるな」

計算をはずす………？始業式のとときか！一生会わないとかいって同じクラスだったときの……。

第17片 理系少女と文系少年の7月7日 残り6日(後書き)

というわけでいよいよって感じですよ。

今までの日常とは少し違った日常。

続きものですよ。サブタイトルとかがもう。

でわ

第18片 理系少女と文系少女の7月7日 残り5日

「1分たったので解放させてもらいます」

黒スーツどもはそう言ってあじさい荘からでていった。

「ちくしょう！岸島！」

俺はすぐさまあじさい荘を飛び出す。しかし岸島の姿はなかった。車か何かで移動しているのだろうか。まわりを見てもそれらしい人はいない。

「な、七実くん……」

「くそ！くそ！くそ！」

俺は何もできなかった。泣いていたのに。震えていたのに。なのにどうして……。無力。その2文字が俺をおいつめる。しかしそれに構ってる暇はない。俺は岸島を追わなくちゃいけない！

「ちょっと出かけるぞ」

「ななみん……。一回落ちつこつよ」

「落ちついてなんかられねえ。そんな時間もねえんだ」

「……………未空」

パライイイイイイイイイイイイイイイイ

ハンドベルの音がした。それは俺の脳内に響き同時に落ち着きを取り戻す。

「・・・・・・・・・・・・・・・・焦りすぎ」
「緋色・・・・・・・・」

緋色のハンドベルは脳を停止させる。そこから復活した脳はすっかりとしているのだ。こいつのおかげで俺は落ちついた。

「すまん・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・大丈夫。あの人5日、6日はこっちにいてと言っていた」

「でも・・・・・・・・」

「だいじょうぶだよーん。あの人嘘が嫌いなんですよ？」

「その・・・・・・・・それに6日あれば作戦とかもたてられる」

「そうだよな・・・・・・・・気持ちばっかりが先にいつちまってた・・・・・・・・」

「場所の特定もしなきゃいけないしねーん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・だいたいは見当がついている。

数夏の家」

「あいつの家？」

そういえば場所は知らなかった。家の場所も知らないけれど。

「じゃあ、あいつの家も探さないといけないのか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・それも見当がついている」

「なんでだよ！」

異常なぐらいだった。こいつ見当でなんでも片づけられると思っ
んのか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・大丈夫。ちゃんと後をつけただけ」

「それは大丈夫じゃねえだろうが！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・でもそのおかげで行動に移せる」

「いやいやいや！そうだけでもね！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・分かった。次はちゃんと堂々とやる」

「最初からそうしてくれませんかねえ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・わがまま」

「俺が悪いのかあああああああああああああああああああああ
あー！」

落ちついていたのになんかまたおかしくなってきた。しかも原因が
落ちつかせた人だよ。これには参るね。

「まだ5日ぐらいはあるんだしー。あじさい荘で作戦会議！」

「そうだな・・・・・・・・明日リビングでどうだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・いいよ。話し合う議題は？」

「あの黒スーツの対処法。それと岸島を助け出す！」

「アバウトー。でもそれぐらいが私にはちょうどいいよ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・今日はもう部屋に戻る」

「私も・・・・・・・・」

「おう。またあとでな・・・・・・・・」

グーギョルルルル

「うん。高松。お昼ご飯作ってくんね？」

どんな状況でもお腹は減るものだな。これはしょうがないよね。緊
張感が足りないとかじゃないよ！

というのが昨日決めたこと。今日は7月2日。学校だ。岸島はやはりこなかった。学校休ませるとか言ってたもんな、あのクソ親父。

「はー・・・授業が全然はいらねー」

そんなつぶやきをもらしても誰も反応しない。いつもなら岸島が反応してくれるのに。俺はこの3カ月ぐらいの間、岸島に依存していたんだな・・・と思う。今、とてもさみしかった。

「岸島・・・」

「おやおやー。ななみんな数夏ちゃんが恋しいのかい？」

ニヤニヤして近づいてきたのは山梨。それにしてもすげえ胸。いや、違う違う。

「そんなんじゃねえよ・・・」

「ん？なんで元気がないのかなー？」

「だからそれに岸島は関係ないって!」

「さびしいんでしょ？」

「なわけあるか」

「寂しいんでしょ」

「違うっての」

「さびしいんだね」

「はい・・・」

なんでそんな責めてくるの!??3回もきかれたらうなずくしかねえじゃねえか!

「そうかそうか。可愛いところがあるんだねー」
「その可愛いところを無理やり発掘したのがお前だぞ」
「可愛いところも多いね」
「うるせえよ！」
「まあ、いいや。でも数夏ちゃんも今、君と同じ気持ちなんだろうよ」
「え？ああ、確かにみんなと会えないのはさびしいよな」
「いや、そうなんだけども！鈍感男はこれだから困るんだよー」
「俺ほど人の恋愛に機敏なやつはいないぞ」
「嘘をつかないで。まったくこの修行僧だよっていうくらい疎いくせに」
「煩惱がないと！？そういいたいのか！」
「いや、修行僧だから煩惱はまだあるんじゃないかな？」
「残念ながら俺の脳の中は煩惱だらけだ。脳内メモリーで俺の名前をやったら金やらHやらでうまってると思え」
「それは逆にききたくなかったね」
「ほら、もう次の授業始まるぞ」
「ほいほーい。あつそうだ」
「ん？」
「作戦絶対成功させようね！」
「ははっまだ作戦も決まってるのか」
「うん！どんな作戦でもこなす自信があるよ！核爆弾を防ぐことも！」
「急に規模がでかいな」
「おっぱいもでかいけどね」
「余計なこと言っんじゃねえ！」
「むむ。煩惱だらけの七実くんは喜ぶと思ったのに」
「いや、普通の会話には含まれたら誰でもよろこばねえよ！」
「じゃあ、座るねー」

「おう……なんで最後に俺を疲れさせたんだ……」

岸島のいない学校生活。あまり楽しくないけれど元気はでてきた。やっぱりみんなそろって学校に行きたいよ。一人でも欠けたら意味がねえんだよ。

○

「作戦会議」

「いえーい」

「さーてまずは黒スーツの男だね。あいつらどうしようか……」

「戸張ちゃん」

「お、どうした小鳥少佐」

「こ、小鳥少佐！？あ、あの……私がなんとかできるかもしれませんが」

「ほほう。確かに君の身体能力はすばらしいからね」

「でもその動きを少し止めていたただかないと。速さだけなんでパワ

ーは……」

「……それなら私のハンドベルで」

「ひいろーん軍曹！さすがですよ！脳を停止させちゃうわけですか！」

「……でも一時的」

「では、そのあとはこの戸張中尉が引き受けよう」

「すいませーん。戸張中尉」

「なんだい？七実・マルコ・未空」

「なんで俺だけミドルネーム！？」

「どうしたんだい？マル」
「マルコじゃねえよ！」
「どうしたんだい？」
「・・・を読んじゃった！」

あじさい荘1階。最近みんなが集まる場所に俺らはいた。残念ながらみんな全員そろったわけではないけれど。そのみんなを取り戻すため会議していた。

「まあ、いい。それで俺は何をすればいいんだ？」
「あ・・・その・・・石ころ攻撃だ！」
「邪魔なら邪魔って言うてください！」

俺だけ規模がおかしかった。子供の遊びレベルじゃねえか！いや、子供でも危ないか・・・。

「で、次は数夏ちゃんだね」
「それは俺がやる」
「おーかつくいー」
「みんなが作った道を俺は行くことにする」
「要するに足手まといだね！」
「なんで悪く言ったの!？」

気にしてるんだから！ふれないでほしいんだけども！

「まあ、大まかにならそんな感じだね」
「簡単に決まっちゃったな」
「・・・」
「うん」
「今にも行動できるよね・・・」

『・・・・・・・・』

やることがなくなった。と思っていたら・・・

「おい、みんな忘れてないか？黒スーツをこえた先には・・・」
『数夏父か！』

「そうだ」

「じゃあ、それ任せる」

「・・・・・・・・・・適任」

「その・・・頑張つて」

「お前らめんどくさいからって押しつけるなよ！」

「足手まとい・・・」

「やってやるーじゃねえか！」

「扱いやすいな、ななみんは」

そんなこんなで会議は終わった。あとは個人で計画を立てそれを見んなで合わせるだけ。

「必ず助け出す・・・」

俺らの思いは1つになり、そしてそれを行動に移るときがやってくる。

第18片 理系少女と文系少女の7月7日 残り5日(後書き)

というわけでまだまだ続きます、誕生日編！

そして挿絵をつけた話もあるのでぜひ、見ていただきたいです。

絵は下手くそなのでその雰囲気だけでもつかんでくれればと思います。

作品のイメージが！という人は見ない方がいいです！ええ。

でわ

第19片 理系少女と文系少年の7月7日 残り3日

「戦いに勝つには相手の場所をよく知ることが大切だー！」

「おー」

「というわけで数夏ちゃんの家まで行ってみよー」

「わー」

「いやいやいや！お前危険だろ！」

「何をおっしゃる。敵を倒すにはまず味方からって……」

「それじゃあお前以外全滅だよ！」

「あれれ？」

敵を騙すにはまず味方からの意味合いを使う場所じゃない。というわけで7月4日。なんでいきなり一日飛んだかって？全員部屋にこもりっぱなしだったからだよ！作戦練ってたら誰もリビングに行かなかった。

香織さん困ってたな……。事情説明してないし。

「というわけでこの山梨戸張についてきたまえ！」

「おー！」

「なんでいつものテンションなんだ」

これこそ緊張感がないって言われるな。でもこんな感じだからこそ
・ ・ ・かもな。

「緋色軍曹。ここらへんでしょうか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・こつち」

「ちよつと緊張するね」

「ちよつとどころじゃないけどな」

というわけであじさい荘から少し離れた住宅街。まわり周辺はみんな同じ高さの家が建っている。放課後でもう5時近いがまだ明るかった。

「むむ、ここですかな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そう、ここ」

「ふつー・・・だね」

「ああ、普通だ」

そこにあつたのは普通の一軒家。2階建ての普通の家だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「岸島つて書いてあるしここだね。よし！七実・マルコ・未空！」

「誰だそれは」

「偵察にいけい！」

「無理だよ！バレるわ！」

「役立たずなマルコだな！マル○オイの方がもっと役に立てるぞ！」

「同じマルで比べんなや！むこうは魔法使いだぞ！」

「あ・・・・・・・・少し・・・騒ぎすぎ」

「あ・・・・・・・・」

そして家の様子を見る。よかったバレていないようだ。しかしもうこれで目的を果たしたんだろ？

「うお！ほんとだ！表札に名前書いてある！」

「あ？どこだ？」

「……………未空なんか急にピリピリ」

「うん……………」

表札には岸島きしま正元しょうげんともう一つ岸島数夏の文字が。

「さてと」

俺はポケットからマジックをとりだし、岸島数夏の文字ではなく、岸島正元の文字を塗りつぶす。キュッキュツという音が聞こえる。まあ、マジックの音だけだ。

「これでよし」

完璧に名前を塗りつぶしたところでやめた。

「必ずとりもどす。そしてお前は泣かす！クソ親父！」

俺はかつこよくキメて帰ろうとする。しかしそこに緋色が重大な一言をぶつける。

「……………でもそれ犯罪」

「え？」

「表札に落書きはいけませんな」

「うん……………消さないと」

「……………はい」

俺はこのあとスポンジを持ってきてもらいマジックを消すことにし

た。まあ、犯罪とまで言われちゃあね。でもさりげなく傷つけておいた。スポンジの緑の部分はこういうことにも使えるんだぜ。

○

バシシッ

いきなり鳴り響く音。それはお父さんが私をぶつ音でした。私は痛いながらも泣くのを我慢してお父さんの言葉を待ちます。

「……ぶつのは1回で終わりだ。しかし計算をはずすのはよくない」

「はい……」

「お前は私たちにとって重要な人物。簡単な計算を外しちゃあいけないよ」

「ごめんなさいです……」

「もういいよ。晩御飯にしよう」

そうして食卓に行きます。とても広い家。でもそこには人はいません。黒スーツの人たちも部屋にこもってますし、今ここにいるのは私とお父さんの2人。岸島家。いえ、第2の岸島家とでもいいかもしれませんか。

「今日は数夏に話がある」

「なんですか……?」

「私たちはまた家族に戻ろうと思う」

「え?」

「お前だつて憧れていなかったか？ みんなで食卓をかこむのに。お母さんと私、そしてお前の3人で話し合いながら楽しく食事すること」

正直言うと憧れていました。お父さんは私が物心ついたときにはいませんでしたし、お母さんと食事することはあつてもアメリカにいるお父さんと食事することはなかったんですから。

「みんなで休日をごして、生活する」

それにも憧れていました。お母さんは今、部屋の掃除をされていてここにいませんが大きい家で休日をごす。みんなで遊んでごす。

「それは・・・アメリカに行かなくてできないことなんですか・・・？」

「ああ、残念ながら商売にもお前が必要というのも本当なんだ。でもそれはお前やお母さんを養うために必要なことなんだよ」

「そうですか・・・」

アメリカに行く。その実感はあまりありませんでした。しかし今は揺らいでいます。ここに残るか。それともみんなでアメリカに行くか。お父さんは厳しい人ですが悪い人ではないような気がします。

「まあ、まだ時間はあるんだ。ゆっくり考えるがいいさ」

「はい・・・」

私はどうしたらいいんでしょう。

○

「……………調べることに成功した」

「ないっすー！ひいろーんよくやったよー！」

「それで……………」

「岸島正元ってのは何をやってるやつなんだ？」

岸島正元。岸島の父親。名前がわかったということ調べていたのだ。

「専門は脳……………みたいだね」

「脳？」

「……………能？」

「それは違う。いらんボケをはさむな」

俺はギャグに冷たい男。しかし男には冷たくあたることも必要だということだよ。というか俺の冷たさ以上に今のギャグは寒い。冷たい。

「脳っていうと……………記憶力とかそういう系統か？」

「それよりも数学よりのものらしいね……………その計算をしている間の脳を見たりとか」

「なるほどな。それで岸島を必要としたのか」

「むー！難しいよー！分かんないよー」

「山梨。黙ってるんだ。そうしたらこんどアメちゃんをあげよう」

「やったー！っていくらなんでもアメじゃ喜ばないよー！」

「チヨコレート」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

黙った。アメはダメでもチヨコはいいらしい。

「高松続けてくれ」

「うん・・・・・・・・。その・・・計算してるときの反応も見たりするよう
だけど・・・他にもあるみたい」

「数学よりのなら他になんもないだろ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・数学よりというのは表向きの表
現。要するに脳をいじる科学者」

「マッシュサイエンティスト狂科学者。狂気の科学者って感じらしいよ」

「狂気の・・・・・・・・科学者・・・・？」

「でも変なこととはしてないみたい。法に触れない程度に何かしらや
つてみたいだよ。もうやめてるみたいだけど」

俺の背中に嫌な感じの汗がふきでる。俺は死神にとりつかれたと錯
覚するほどの恐怖に襲われていた。しかしやはり現実。実際の狂気
はこんなもんなんだよな。漫画とかじゃやばいのもたくさんあるの
に。

「意外と人間らしいんだな。じゃあなんで岸島は連れて行かれるん
だ？脳の研究もしてないのに岸島を連れていく理由がわからない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・きつと計算能力の高い人間
が必要なんじゃない。数夏自信が必要になる違う理由があるから」

「そう。もっと違う理由・・・それは・・・・・・・・」

「それは？」

ゴクリ。俺は生唾を飲み込んだ。という表現が正しいような行動を
おこした。俺は鳥肌が立った。それは止まることなく俺の全身を包
みこみ・・・・・・・・。

「結婚……らしいよ」

『は？』

全員が啞然とした。

○

「結婚ですか!?!」
「ああ、いやなに。そういう話があるというだけだ。まだ返事をしたわけじゃない」

私はお父さんから驚きの告白を受けていました。結婚。それはまだ高校生の私には考えられないことです。そして自分で言うのもなん

ですが相手の方はロリコンなのでしょうか？いえ！私は大人の女性ですよ！

「でも私はまだ16歳です」

「もう結婚できる年齢だろう？でも19歳まで待つらしい。そして大学にももちろん通ってもいい。でも結婚してても大学には通えるだろう」

「でも・・・」

「なに、相手はとても爽やかな青少年だ。無論問題ない。それとも他に好きな人でもいるのか？」

「すっ！すすすす！好きな人！？そ、そんなのいないですよ！」

「じゃあ、いいじゃないか」

「いえ、簡単には決められません・・・」

「そうかだがそつちも時間がある。ゆっくり考えればいいさ」

ええ、これは困ったことになりました。あと約2年後ですか・・・でも先ほどどうして七実さんの顔が？急に七実さんを思い出しました。なぜでしょうか。

○

「最悪だよ。こいつー」

めずらしく山梨が怒っていた。こいついつもは温厚なんだけどな。

「要するに自分の地位を上げたいがために娘を結婚させようとしてるわけでしょー？」

「……そういうこと。でもお金持ちの世界じゃよくあることも」

「でも……でもさ。そんなのってないじゃん……。自分が納得いかない結婚なんて」

「19歳まで待つっていつてるらしいけど……。でも返事はOKだろうって岸島父が発言したみたい」

「ところで小鳥ちゃん。そんなどこを調べたらのってるの？」

「簡単に週刊誌とかにのっているよ。信憑性はないけど手掛かりぐらいにはなると思う……」

「ところで小鳥ちゃん。七実くんがだんまりなんだけど」

「それは……」

結婚？岸島が？なんで？どういうことだ？だってあいつ自分1人じやなにもできないんだぜ。勝手に自分で負担を背負い込んだりしてるし、料理だって作れねえ。それにさ、結構話すのにもコツがいるんだぜ。あいつバカ話ばかりするからなあ。そのたびに俺がツッコんでやらなきゃ。そうするたびに岸島は笑顔になってさ。笑ってくれるんだ。それはまぶしくて可愛くて俺にはもつたいないと思うぐらいだ。

なのに……なのによ……。

結婚？わけわかんねえ。俺らは今まで通り学校行ってバカ騒ぎしてただけだろうが！なんでだか知らないが急に岸島が遠くに行ったような気分になるんだ？どうしたって止まらない不安。

「岸島……」

お前はこの結婚に賛成なのか？親の地位のための結婚に。分からない。でも岸島が決めたことならそれを最優先にしなくてはいけない。

俺が口をだしていいものじゃない。もし結婚するなら結婚式でスピーチだってしてやるよ。でもさ……

「素直に祝えそうにないわ……」

俺はなぜか嫌がっているんだ。なぜだかわからない。でも胸のモヤモヤは広がる一方。

そんな中。いよいよ作戦決行日がやってくる。

第19片 理系少女と文系少年の7月7日 残り3日(後書き)

というわけでもう誕生日編クライマックス!?

というよりこれが基本短編をつなぎあわせたよつなもののなので短く
なってしまったのかもです。

でわ

第20片 理系少女と文系少年の7月7日 残り1日？

7月6日。作戦決行日。放課後俺らはあの豪邸の門の前までできた。

「とういか七実くん、この前から元気がないよねー？」

「そ、そうか？」

「……………うん」

「数夏ちゃんなら大丈夫だよ……」

「いや、誰も岸島のことだなんて言っていないけどな」

でも、ま凶星でしたよ。さて、と。じゃあやりますか。俺はインターホンをならす。こんな遠い位置にインターホンがあっても通じるのだろうか？

『はい』

たぶん黒スーツの声だろう。俺はインターホンのカメラ部分からかくれて、バレないように声を変える。

「すみません。宅配便なんですけど」

「……………七実くんって古風だね」

「うん……ちょっとありきたりかな？」

うるせえよ！今、真剣なんだから！

『ああ、はい。じゃあ今、門を開けますね』

ウィーンという音がしたと思うと門があいていた。さあて、ここか

らがかっこいいぞ。みんなこの七実未空の活躍を見る！さあ！パー
ティーの始まりだ！…………前もこんななかつたか？

「じゃあ、失礼しまーす」

『あ、いえ。今私がそこまで行きますので』

「あー、いいですよいいですよ。危ないですよ、近づいたら」

『危ない？』

「怒りをもった人間は爆弾にも匹敵する。というわけで……………」

「爆弾のお届け物です」

『なっ！おい！』

ブツッ

「さあ、こつからだな！みんな作戦はおぼえているか？」

「うおい！インターホンで正体バラしてどうすんの！」

「……………バカ」

「でも…………その…………相手をひきつけられるよ」

「うん。慰めはいいからいっそ罵倒してくれ！」

爆弾というよりDMの変態男のお届け物だった。

「まあ、ちよつとはやくなつちやつたけれどここでドンパチだね！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・庭の方が広くていい」
「じゃあ行くよ・・・・・・・・」

ここから俺は全力疾走で家まで行かなきゃいけない。家まで遠いな！
息が続かねえよ！

「おい！いたぞー！」

「ほら！きちやつたよ！七実くんのせいだよ！」

「しょうがねえじゃん！いたいセリフいっぱいあんだもん！」

「そんな理由!？」

そう言ってる間に黒スーツのやつらが集まってくる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」こは私

そう言っつて緋色はハンドベルをとりだす。

「・・・・・・・・・・・・・・・・いつもより長め。凍れ」

パリアイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイン

変な音が長めに鳴り響く。脳の一時停止だ。しかしそれはハンドベルを見ているか振っているものを見ないと意味はない。だから俺らの一番うしろに緋色を配置し、俺らは一時停止されないようにしたのだ。そのおかげで黒スーツどもは動かなくなる。

「じゃあ・・・・・・・・私ね」

そこに高松の雷瞬。すごいスピードで動きが止まった黒スーツどもをなぎ倒す。しかもほうきで。それはゴミを掃除するっていう高松ドS都市伝説に新たな名前を刻むという意味かな？黒スーツをゴミと見立てるとは・・・実力者だな。でもそうしないと委員長能力である雷瞬はでないんだよな。あくまで規則を守ってないやつを救うためのものだし。

「うっし！快調！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・未空なにもしてない」

「そっだよー、なんでそんな主人公面？」

俺はなんでここにいるんだろうとかね。いやいや！やれることはまだあるはず！だっしやらー！

「ほら！ふざけてる場合じゃないよー！次がきてるー」

「おし！任せたお前ら！」

「ヘタレ！」

「うるせえ！」

「もう甲斐性なしに頼れない！ここは私の妄想だね！」

「おい！いつ甲斐性なしになったの！？さっきまでヘタレじゃなかったっけ！」

いつもと変わらないような気がするがまあ、いい。作戦は順調だ。

○

お父さんにぶたれた頬のはれがひどかったのでガーゼとか自分でやってみたけど上手くいかないです！なんでこんな難しいことみんなはできるんでしょうか！

「外が騒がしいな」

「え？そついえばそつですね・・・」

確かに騒がしいです。どこのどいつがそんなことを・・・。騒音だつて立派な公害ですよ！まあ、きつとどこかの子供でも騒いでいるのでしょうか。明日、私はたぶんアメリカに飛び立つことになります。覚悟はまだ決まらないうけど・・・でも・・・もう・・・。

「たっ！大変です！」

「どうした？」

黒スーツの人があわてて部屋に入ってきました。ここはリビングみたいなものですが広すぎて落ちつきません。金持ちの家は苦手ですね。

「人が・・・人が入ってきて今、乱戦状態です！」

乱戦？どういうことでしょうか？子供の遊びに付き合っただけでるんでしょうかね？しかしお父さんはニヤツと笑いました。

「そつか・・・侵入者の特徴は？」

「全員高校生みたいです！制服を着用しています！」

ん？高校生？子供の遊びじゃないんですか？

「他には？」

「一人はハンドベルを持っており、もう一人は妄想とか言って仮説を話しています。さらにもう一人はほうきでまわりに雷を纏ったようになぎ倒しています」

あれ？どっかできいたような特徴ですね・・・。

「もう一人・・・いるんだろう？」

「はい！何もしていない男が一名おります！」

「そうか・・・私がですよ」

「は！しかし・・・」

「いい、大丈夫だ。数夏、お前はここから絶対に出るな」

「はい・・・」

それにしてもなんか気になりますね・・・。ハンドベルに妄想。雷に役立たず・・・。あれ？えっと・・・そんなわけではないですね。私は平気と言いましたし・・・その・・・そんなわけ・・・。

「・・・」

そんな・・・。そんなはずは・・・。でも私はどこか喜んでいました。理由は明白。私はまだ未練が残っているようです。

○

「はーはははは！どうだ！私の妄想は！」
「怖いよお前！なんだぬるぬるの気持ち悪い影に捉えられるって！黒スーツの動きは止まったけれど！かわいそうでしょうがないわ！」
「いいじゃんいいじゃん。目的は足どめだしー」
「そうだけでも！でもお前ぬるぬるの影ってなんだよ！」
「いや、触手みたいな感じだよ」
「最悪！そしてどこかエロチック！」

そんな感じで俺らは庭を走っていた。もちろん動きが止まった黒スーツは高松に殴られてる。ほうきで。一番怖いのは高松かもしれない。

「で、もう奥のほうに家が見えてるわけだけど……。なんだあの豪邸！」

「いや、ほんとすごいよねー」

「……………私、ちょっと持って帰る」

「何を！？家を！？一部分だけ持って帰ってどうすんだ！」

「その……………七実くん、前」

「へ？」

すると目の前に黒スーツの男がいた。こいつ高校生相手に容赦するつもりないよな！もうサングラスが怖いもの！

「ちっ！こは俺に任せろ！」

「おお！急に男らしい！」

「……………未空やっちゃえ」

「うん……………頑張れ！」

「いつくぜー！」

俺は右手を握りしめる。まるでそこに異能の能力を全て消す能力が

あるかのように。実際は喧嘩慣れしてないただの握りこぶしだけ
ね！幻○殺しじゃなくて悪かったね、ちくしょう！

「くらえ！」

パシ！簡単に黒スーツに受け止められる。．．．．．

「打つ手なしだ」

「弱い！みんなー！この人は使えないよー」

「お前！だつて無理だろ！渾身の一撃だよ！？それが受け止められ
たときの絶望感！少年漫画の人達はこんな辛いことを乗り切つて強
くなつてるのかよ」

「．．．．．残念」

「うん．．．」

「おおっと！俺を傷つけるなよ、やけどするぜ」

「それは七実くんの心がじゃないかな？」

「じゃあどうしろと！俺には何もできないよ！」

「あ！これがポケットの中に！これ使つて！」

「さんきゅー！山梨！」

そして俺はそれを見る。．．．．．

「え？これ手榴弾なんすけど．．．」

「そうだよ！ピンをとつて使つてね」

「俺を人殺しに仕立て上げるつもりか！」

「だつて今しか使うところないじゃん」

「今だつて使わねえよ！目的は人殺しじゃないからね！？」

「じゃあ私のポケットには1回叩くと2枚になるビスケットしかな

いよ

「緋色ー！お前は何かないかー!?」

「……あつた」

「おし！ナイスだ！」

そして俺はそれを見る……………

「なんでアニメ○トのポイントカード!?」

「……相手の目を」

「目をどうしろと!?そんな惨いことしないよ！」

「……他に私のポケットには竹刀しかない」

「もうそれでいいよ！おい！というかお前のポケットに入るの!?」

「……見栄張った」

「ここぞか！高松お前なんかあるか？」

「ごめん……スラムしかないよ」

「なんでまだ持つてるんだよ！もういいだろうが！」

「でもね。なんか可愛いよ」

「可愛いよ。可愛いけどさ。ルー○で返してこいよ……………」

そんなわけで打つ手はなし。しかし……………

「隙あり！」

「ふう……………」

俺は隙をついて相手を殴り倒した。しかも顔面。

「よし！いくぞ！」

「だからなんで主人公面!?不意打ちだよ、不意打ち！」

「勝負にはな、汚いなんてないんだよ。あるのは勝ちと負けだけだ」

「汚いもあるよ！なにこの主人公は！」

いつも通りとか思わないでね。これでもここシリアスパートだから！うん、グダグダなのは認めるけど。愚だ愚だ。こっちのほうがあるかもしれない。漢字的に。

「よし、家につっこむぞー」

「おー！」

しかし家の玄関近くなつたころそこに人影が立っているのを見つけた。それは俺がもっとも怒るべき存在で。もっとも憎む存在で。もっとも怖い存在だった。

「てめえ……岸島父！」

「ようこそ、岸島家へ」

「何が岸島家だ！お前の名前、表札に傷ついてんだろっが」

「ほう、あれは君がやったのか」

「……」

うん、言うんじゃなかった。

「まあいい。何をしにきたのかな？」

「岸島をとりもどしにきた」

「私も岸島だが」

「……」

「七実くん男でしょ。どどーんと！」

「いや……緋色が言えばいいだろ」

「……私大きい声だせないからここからじゃ聞こえない」

「じゃあ高松が……」

「私……戦闘で疲れて……」
「……」

なんだこいつら。ここぞとばかりに息があってやがる。

「……す……うか」

「は？聞こえないな」

「……すう……か」

「日本語も話せないような知能のやつには興味がない。され」

「ああもう！分かったよ！……」

そして俺は叫ぶ。

「数夏を助けにきた！」

ここからが本当の本番だ。

第20片 理系少女と文系少年の7月7日 残り1日? (後書き)

というわけでまだ続きます。

次あたりにまた挿絵をいれようと思っているので更新は遅れるかも
しれません。

またいつもの日常が書きたいと思いつつも誕生日編楽しくやらせて
いただいています。

でわ

第21片 理系少女と文系少年の7月7日 残り1日？

「岸島を助けに来た！」

> i 1 3 5 2 2 — 1 0 5 8 <

「あれ？前回とセリフ変わってない？」

「うるせえな。いいんだよ別に」

「・・・・・・・・・・ヘタレ」

「うん・・・・・・・・少し」

「いや、もう勘弁してください・・・」

本人がいる前ならいいが本人がいないなかで勝手に呼び捨てにすることはできない。普通に恥ずかしいからだよ！さっき名前で呼んだとき岸島に聞かれてなきやいいけど・・・。

233

「ふむ。文系童貞とやら」

「名前！間違ってる！誰が童貞だこの野郎！」

「経験があるのか」

「・・・・・・・・・・ない」

「じゃあ、無駄な時間は使わずな」

理不尽です。これがこの社会のありかたですか。ゆとり教育といい・・・まったく。でもそんなゆとりが大好きなダメ人間です。

「で、君は助けに来たと」

「おう」

「数夏を」

「岸島を」

「ヘタレ！何もたまたましてんだよー」

「いや、俺が悪いわけじゃなくね？」

「ふむ、君は面白いな」

「そうですか？俺はあんたが面黒い」

「そうか、やはり文系なんだな」

というやりとり。というか余裕ですね。こっちはもういっぱいいなんだが……。

「君は少し勘違いしているようだね」

「は？」

「数夏を無理やりアメリカに連れて行くとは思ってないさ。それどころか数夏が行きたくないというのなら連れて行かない」

「じゃあ……」

「でも、だ。数夏はアメリカにくると思うぞ。なぜなら数夏は家族に憧れているからな」

「……」

身に覚えがあつた。5月5日。子供の日。親が典型的な共働きで誕生日なども祝ってもらえない。そんな岸島はどこか寂しそうで。見ている辛かった。そう考えたら岸島は親と住むべきなのかもしれない……。

「でも……結婚もさせるんだろ」

「おや？どこでその話を？まあいい。数夏にはもう話してある。私はそれを含めてアメリカに来ると言ったんだ」

「岸島が結婚する……？」

「その通りだ。顔もいいし、性格もいい。2年後が待ち遠しいよ」

なんだこれは。これはおかしい。俺らは何かをやる前にやられている。倒されている。もうすでに諦めた方がいいという空気がただよっている。なんだこの異常な異質な空間は。

「きしじま岸島正元よつげん……端的に言って証言ってところかな」

「証言……」

まさかのダジャレだった。でも言ってる。こいつは証言のように淡々と坦々と言うためやけに現実味が帯びてしまう。これは話し方の問題。こいつは話し方がうますぎる。俺たちに絶望を見せようとするやりかた。誘導尋問とか得意そうだな……。

「それでも君は『助ける』とほざくのかい？」

「……」

「どちらがお姫様をさらいにきた患者なのかわからなくなっちゃったね」

悪者……俺が？俺は自分の都合だけで。岸島のことを考えずに行動していたというのか。

「本当に君は面白い」

俺らがやったことに意味はあるのか。岸島は本当にアメリカに行きたいのか。本人がいない今、確かめることはできないけれど……けれど。やっと叶った家族団欒。それをぶち壊しているんじゃないかなろうか。

「俺は……」

「七実くん……」

「……未空、迷ってるの？」

迷う。迷う。その言葉の意味が2つの答えの間で揺れるということならば俺は迷っている。『助ける』か。それとも『奪う』のか。俺は岸島のことを考えてなかった。自分がさびしいから。そんな思いをしたくないから助けると言っていたのか。助けるんじゃない奪う。その意味は段違いだ。

「どうすればいいんだよ・・・」

俺は岸島の幸せを選ぶべきだ。そうに違いない。そう心で分かっているても言葉が出ない。俺は明らかに迷っていた。

「お前・・・これはお前の名前をあげる結婚じゃねえのかよ・・・」
「ふむ。確かにむこうは金持ちだ。私を超えるな。でもそれならば今すぐにも結婚させるべきだろう？でも2年待つ。それに顔も性格もいいなんて条件をわざわざ選んだ。探したんだ」

「・・・」
「私は娘を愛している。だからこそ自分の名前をあげるなどという無粋な理由で娘の結婚を選んだりしない」

そう、あれは週刊誌。所詮紙の塊。信憑性は薄い。そんな中きかされた真実かどうかわからない言葉。本人から発せられた言葉。

「本気だよ。私は」

「・・・」

完全に心が折れる。どうしようもない。俺ごときでは何もできない。何もできないんだ。家族団欒、将来有望。俺にはできないことばかりが集まっているアメリカ。岸島は・・・。

「七実くん！ここにきて諦めるの！？」

「……未空」

「無駄だよ。彼は私の『証言』によって心が折れている」

「……！」

雷瞬。しかしそれは……

「君の雷は少しやっかいだね」

「な……んで……」

黒スーツに白髪の子に止められていた。ほづきを素手で。そいつは目つきが悪く無口そうな印象を与える青年だ。

「ふーむ、君たちは私と同じく少し変わったものを持っているようだ。だが……歳が違いすぎる。経験がないんだ。君らはまだ甘い」

「七実くん！」

「……ここは私が」

「氷結少女よ。話は聞いている。要するにその音を聞かなければいいのだから」

「……！？」

「妄想開始！」

「妄想少女よ。残念だが私にそれは通用しない。妄想などなくても今が十分理想。妄想であると言えるからな」

「やってみないと……」

「分からない？わかるだろう。理屈で理解なんてしなくていい。ただ分かれ」

「くっ……！」

「みんな！」

高松の声が聞こえる。俺は動けない。みんなが頑張っている声は聞

こえるのに何もできなかった。無力で無知で無能。全ての無が俺に襲いかかるような錯覚さえあった。

「面白いな君たちは。まだ諦めてないのか。でもそれは無駄な労力だ」

「無駄な要素などないんだよー」

「……………そう。未空も含めて」

「みんな頑張ってるんだ。七実くんも戦っている」

俺は何をしているのだろうか。みんなが頑張ってる中寝てるというのか。おかしい。それはやってはいけないこと。白い、何も無い俺でもやってはいけないこと。

「物好きな連中だ。親の仲を引き裂こうというのかね。君たちはただの友達だろう。そんな中途半端なものたちに何か言われる筋合いはない」

「でも…………でも友達なんだよー」

「……………それだけで助ける理由になる」

「助ける？幸せを壊すことを助けるというのかい？」

しかしそれに高松は反応しない。無視、だ。

「もしかしたら友達以上なのかもしれないしね」

「雷瞬よ。お前と数夏は恋仲だというのか？」

「ち、違います！そうじゃなくて…………ええと…………ええと…………」

「何を迷ってるんだよー、ことりーん」

「……………簡単なこと」

その答えは知っている。ただ確証が持てない。違う。勇気がないん

だ。親から引き裂いてまで岸島を連れ帰る勇気が。

「簡単すぎて言葉にするのもめんどくさいんだよー」

「妄想よ。お前が言っていることがよくわからないぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・それでいい。私たちにしかわからない」

「友達とかそういう簡単な仲間じゃない」

「さっぱりだな。生憎そんなものは習ってこなかった」

「習うものじゃないんだよー。これは体験しないと分からない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あなたには一生分かりそうもないけれど」

「白髪さん。もうそろそろどいてくれませんか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「では・・・・・・・・」

シユンツと移動する。腕力こそ人間だが速さは神の領域である雷瞬。

「速さでは負けません」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「本当にわからない。けれどお前たちは数夏を奪うことなどできない。これが数夏の幸せだったらどうする？そこから無理やり連れて帰るのかい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「無駄だろう。君らにはそれができない。私ぐらい非情になるべきだな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「友達以上といったな。それは親友というやつだろう。簡単なことじゃないか。習わなくてもわかる。これは簡単。その簡単を引き裂くのも簡単だ」

「違います！」

「！」

玄関前に岸島がいた。それでもまだここからじゃ遠い。どんだけ広いんだこの庭。

「あの部屋から出るなと言っただろう」

「あの部屋とは言ってませんよ」

「……なるほどな。へりくつだがいい返答だ」

「お父さんもへりくつだらけでしょう」

「……」

「私たちは親友という簡単なものじゃないんです！それ以上！もっともつと上！」

「それは後々勉強するよ。そんなことより、数夏はアメリカにきて結婚したいだろう？」

「嫌です！」

「え？」

岸島は思いっきり息を吸い込みそして一気に叫ぶ。気持ちを届けるように。

「あんな完璧の気持ち悪い野郎と結婚するより七実さんと結婚したほうがまだマシです！」

俺は思わず笑ってしまった。岸島のいつものバカ具合に徐々に触れることができたからだろう。それ以外の理由もありそうだが俺は心の底から笑ってしまった。

「ははっ」

「……………まあいい。では家族と一緒に住みたいだろうか？結婚は後でいい。しかし家族3人で過ごすのはいい話ではないか？」

「嫌です」

「……………なんだと？」

「嫌です！私はみんなと暮らしたい！」

「この小娘が！」

岸島父が岸島をぶとうとする。小娘っていうやつがこのご時世にいうことにも驚いたがそれどころではない。俺は2人の間に入り、岸島父の腕を握る。止める。力をこめて。

「知ってるか？俺はなへタレで甲斐性なしなんだ。そんな俺の方がマシだなんて相当結婚嫌がつてるぜ」

「ふん。だが家族との暮らしは別問題。そこをどけ」
「嫌だね」

「お前らには関係ないだろう。今すぐ帰れ」
「嫌だと言ってるだろうが」

俺はより声を強める。

「はなせ！私はいつを無理やりにも結婚させる！家族なんて今はどうでもいい！」

「！..！」

岸島はそれをきいてへたりこむ。

「数夏ちゃん!？」

「.....ふえ.....うう.....」

岸島は泣いていた。家族の事を踏みにじられた。嘘ではない。だからこそ性質が悪い。嘘はつかないという性格上あいつの言葉は本心だからだ。

「ところであの岸島の顔のガーゼどうしたんだ？」

「私がぶった。計算を間違えたからな」

「機械じゃないんだぞ。間違えて当然だ。それとあのガーゼはりかたが下手くそだが？」

「あれは数夏が自分でやった」

「そうか。女の子なのに顔にあざができるぐらいの、腫れるぐらいの威力で殴ったのか」

「当然だ。教育には厳しいからな。だが反省している。顔に傷がついたら結婚の話がなくなってしまう」

「なるほどね。お前は嘘をつかないんだよね？」

「ああ」

「ってことは岸島のことを愛しているのも事実。結婚相手を血眼に

なつて探したのも事実だろう」

「それがどうした」

「いや、もつたいないよ。お前いい親なのにさ。でも感情に身を任せて子供を殴ろうとした。その時点でお前は親失格みたいなもんだよ」

「・・・・・・・・・・」

「最後に1つ。岸島の誕生日覚えてるか？」

「さあな。聞くのを忘れていた。あとできこつ」

俺は拳を握りしめ・・・・・・・・

「0点だ。お前には中間点もあげれない！」

ゴッ

鈍い音がする。俺は友達の親なのに全力で殴った。しかも顔面だ。少しは岸島の痛みを味わえ！岸島父が倒れる。気絶というわけではないが起きる気力がないみたいだ。

「俺たちには関係ない・・・か。そんなわけねえだろうが！親友よ

り上！そんな仲間が困ってたら全力で力になるに決まってるだろう」
俺はそう言っただけで豪邸の玄関まで歩き出す。

「正元さん！……貴様！」

白髪がしゃべる。そして俺のほうに攻撃をしかけようとしたところ
で……

「速さでは負けないと言ったはずですよ」

「私たちもいるよーん」

「……未空はやくいって」

「おう！頼むぞー！」

> i 1 3 5 2 5 | 1 0 5 8 <

俺は走る。思いっきり。ここで逃してしまわぬように。

「岸島！」

「うう……ぐす……七実さん？」

岸島が俺に気付く。まだ泣いているみたいで目には涙がたまっている。

「私は平気だつて言ったじゃないですか……それなのに……な
んで……」

岸島がなんかしゃべってるが関係ない。俺は岸島に抱きついた。

> i 1 3 5 2 1 | 1 0 5 8 <

「はわっ！な、ななな．．．七実さん！．．．あ、あの．．．」

「よかった．．．」

「え？」

「本当によかった。間に合わないかと思った。アメリカに行っちゃうのかと思った．．．」

俺が泣いていた。いや、もうしょうがないじゃん。結婚させられるって聞いた時今日まで眠れなかったわ！

「七実さん．．．」

「結婚するのと思った。そう考えたらどんどん岸島がはなれていってしまつようで．．．」

すると岸島も俺の背中に手をまわしてくる。小さい手を。

> i 1 3 5 2 3 | 1 0 5 8 <

「だいじょうぶです。私はここにいます」

「岸島．．．ありがとな」

「なんで七実さんがお礼を言うんですか．．．。私の方がお礼言わなきゃですよ。ありがとございました。本音を言つと．．．」

悲しかったです。さみしかった。心細かった．．．うう．．．」

「え？おい、岸島？」

「ふえ．．．ひっく．．．」

「泣いちゃったー！やばーい！」

「な、ななみん。何してるの？」

「はっ！？」

俺らの前には黒スーツを撃退した山梨、緋色、高松がいた。それと俺は今岸島と抱き合ってるわけで。それを第3者がみたらどう思うかなんて明らかだった。しかも岸島泣いちゃってるし……。

「こ、これは！やましいことじゃないんだ！」

「え？でも数夏ちゃん泣いてるけど」

「おい！岸島！いい子だから泣きやもうねー？」

「うう……ぐす……」

「ほらみる！泣きやんだろうが！」

「……でもさつきプロポーズしてたし」

ああ……さつきの岸島のセリフね。あれはさすがに本気にしてねえつての。

「あ、あれは！そ、その！言葉のあやというか……完璧な人間よりダメ人間の方がいいというだけで……」

「おい！岸島、顔を赤くして話したら信憑性がなくなる！そしてさらつと俺のことバカにしたろう！」

「ぐす……ごめんなさい……」

「素直だー！そして泣いちゃったー！」

「七実くん……女の子を泣かちゃだめだよ」

「高松！誤解だ！岸島。俺から確かに抱きついたが……さすがにもうはなしてもいいんじゃないか？ほら、もう心配はいらないしさ」

「嫌です」

「え!？」

「もうちよつとこうしていただけます。あの……ダメですか？」

> i 1 3 6 7 9 | 1 0 5 8 <

顔を赤くして上目づかいで見してきた。しかも目に涙つき。俺はもう

ダメだ。弱すぎる。

「かーわーいーいー！っておい！なんでだよ！」

「……数夏になにをしたの？」

「お前もなんでだよ！何もしてねえわ！」

人さまの家で大騒ぎだった。いや、その人様を殴ったのは俺だけとさ。

「おい、もう帰るぞ。岸島は俺が抱っこしていくから」

「抱っこなんて失礼です……」

「じゃあ、降りろよ」

「嫌です……」

なんだこれ。ほんとおかしくね？

「七実くん……」

「ん？」

高松が神妙な顔ではなしかけてきた。俺は悟った。これはただことじゃないと。

「どうした？」

「私も抱っこ」

「無理だあああああああああああああああああああああ！
！！」

俺にも限界があるんすよ。腕2本岸島支えるので精いっぱいだしね。

「ことりーん。残念だね」

「うん・・・でも負けないから」

「誰に宣戦布告してんだ？」

「・・・いいからあじさい荘」

「そうだな。戻るか。俺たちの場所に」

「はい」

俺らはあじさい荘に戻るべく来た道に戻っている。まあ、まだ庭の仲だけどね。

「・・・親友以上・・・か」

「ん？誰かなんか言ったか？」

「え？なになに？靈感解放？」

「ちげえよ！」

一瞬岸島父みたいな声がきこえたがまあいい。俺らが門の近くにきたときには黒スーツたちも立ち上がりみんな豪邸に戻って行った。

「いやーなんか俺もあじさい荘久々な気がするなー」

「・・・記憶障害」

「まさかそこまで言われるとは思わなかったよ」

「みなさん、ありがとうございました。本当に感謝してもしきれません」

「いいんだよ。数夏ちゃん。私たちの勝手な行動でもあるんだし」

「そうだよー！気にしないでよ」

「・・・あたりまえのことをしたまで」

「いい雰囲気だが、岸島。お前いつになったら俺に抱きつくのやめるんだ？」

「まだです」

「そうか」

もうそれでもよかった。本当に本当に。みんな集まったのは久々だ。それだけで嬉しい。

「岸島。まだ言ってなかったな・・・」
「ふえ？」

『せーの！おかえりー』

「・・・はいっ！ただいまです！」

第21片 理系少女と文系少年の7月7日 残り1日？（後書き）

というわけで挿絵つきなのですが・・・見たくない人は見ない方がいいです。

あくまでこういつ感じだよーっていう構図を書いたものなので・・・

では次回で。

次回で誕生日編完結ですよー

第22片 理系少女と文系少年の7月7日

朝。あれからの翌日。私はあじさい荘の自分の部屋で目覚めました。ここで本当に戻ってきたんだなと実感します。というわけで岸島^{きじま}数夏^{うか}です。今回の語り部はなぜか私です。・・・休みたいんですけどしょうがないですね。

「ではもう1階におりましょうか」

そういつて着替えます。さ、サービスシーンがいつもあると思わな
いでくださいよ！描写なんてしません！普通に恥ずかしいです！

「さて、髪をリボンで・・・と」

寝るときはさすがにはずします。そしてこれで準備完了。今日の服
はゆったりめのワンピース。いつもストッキングというかタイツみ
たいなのをはいているので今日は生足で。・・・生足って表現
なんかえっちないですね・・・。

「よし！」

鏡を見て身だしなみを整える。そして一階にあります。ちなみに洗
顔も歯磨きもすませてますよ。部屋に洗面台があるんですよ。豪華
ですね！。

「みなさん。おはようござい・・・います・・・？」

「お、岸島。おはよう」

「ああ・・・はい」

「おー！数夏ちゃんー！おはよー」

「お、おはようございます」

「……おはよう」

「はい……おはようです」

「おはよう……よく眠れた？」

「はい。よく眠れました。おはようです」

いや、あいさつはいいんですよ。あいさつは。問題は寮の1階がおかしい。確かに今日は休みですけどこの状況はなんでしょうか。

「あの……みなさん？この飾り付けは……？」

「ふふふ！よくぞ気付いた！岸島……」

「……」

『誕生日おめでとー！……！』

7月7日。今日は私の誕生日。

○

「え……と……。まだ信じられないんですけど。昨日は何もありませんでしたよね？」

「ああ、昨日は忙しかったしな。作業が夜中まで続いたんだぜ」
「じゃあ、寝る時間は・・・？」

「だいじょうぶい！気にしないで！私たち眠くないから！」

「でも・・・」

「・・・今日はお祝い」

「そうだよ。主役がそんな顔してどうするの？」

「でも・・・申し訳なくて・・・」

昨日は私のために頑張ってくれた。戦ってくれた。だからこそ今日は休むべきで・・・。こんなことに睡眠時間をとられちゃいけないはずなのに・・・。この飾り。折り紙の輪をつなげたやつにでかい看板。それに・・・笹？

「申し訳なくないぞ。親友より上。そんな俺たちだろうが。これも好き勝手にやらせてもらったんだ」

「七実さん・・・」

「そのかわり！私の誕生日の時はよろしくね！」

「・・・私も」

「うん・・・私も」

「もちろん俺もな」

「私も忘れないですよ」

「あれ？めつきり出番がなかった香織さん」

「誰のせいだというの！？あなたたちが勝手に行動するから・・・」

「今はお祝いですよ。説教は後で。というわけだ岸島」

「・・・はい・・・はい。ありがとうございます」

私はまた泣きそうだった。でもお祝いだから。泣きませんよ。あのあと七実さんに泣き虫って言われ続けたんですから！2時間ずっと！それに抱きついてしまいました・・・。あとからきますね。これ。なんでしょう？このちよっと嬉しい気持ち。

「じゃあ！ゲーム始めます！」

「おー！」

「ゲームですか？」

「……………そう。皆が一人一人ゲームを考えた」

「それをやるんだよ」

「じゃあ！私1ばん！じゃじゃじゃ……………じゃーん！」

そしてどこからか用意したフリップボードを戸張さんはだします。

「頭に『大人』ってつけるゲーム！」

『は？』

全員はてなでした。これみんなそれぞれ何をやるのか知らないのですね。

「これは名詞の最初に『大人』ってつけてエロい言葉にするというゲームだよ！」

「最悪じゃねえか！」

「……………楽しそう」

「緋色ちゃん！？私は……………」

「これ普通に恥ずかしくないですか……………」

「勝ち負けはね……………。エロくない意味になっちゃったら負け！」

はいスタート！」

「強引！」

というわけで始まつちやいました！戸張さん、七実さん、緋色さん、私、小鳥さんの順番です。

戸「じゃあ私から！無難に大人のゲーム！」

七「無難ってなんだよ！．．．．．じゃあ．．．大人のサンドイッチ．．．」

緋「．．．．．大人のボール」

私「緋色さん！？それは洒落にならないレベルでは！？．．．お、

大人の．．．風船．．．」

小「数夏ちゃんも十分洒落にならないよ．．．。その．．．大人の．．．もぐら」

戸「うーん、じゃー．．．大人のミルク！」

七「おーい！お前なんつー爆弾投げてきやがる！じゃあ．．．大人の橋」

緋「．．．．．大人のジュース」

私「緋色さん．．．。えつと．．．大人の氷」

小「お、大人の布団．．．」

戸「大人のからし！」

七「大人のふり○け」

戸「あうとーっ！」

急にストップがかかりました！

「大人のふり○けて本当にあるじゃん！」

「でもそれなら緋色の大人のジュースだってお酒のこと言っじゃないか」

「これは勝敗がつきませんね」

「うん．．．恥ずかしいだけで面白くないしね」

「えー！なんだよーいい案だと思ったのにー」

というわけで次は．．．

「．．．．．私」

「お、緋色か。一体何をするつもりなんだ？」

「………大人のゲーム」
「おい！みんな緋色をおさえろ！」

そうしてみんなで緋色さんをおさえます。私は緋色さんに何をされるどころだったのでしょうか……？

「………冗談」

「だろうな。じゃあ、はやく教えてくれよ」

「………しりとり」

「えー！？ふっーじゃん！ふっー」

「さっきのよりはマシ………かな？」

「………命がけの」

『命がけの！？』

恐るべき補足をしました。これは危険な臭いがしますね。というかお祝いとか言ってたのにテンションがお葬式です……。

「ま、まあ！でも無難だよな！やろうぜ」

「………失敗したら命はない」

「………」

みんな汗だらだらです！なんでしょうこれ！サバイバルなんですか！？

緋「………しりとり」

七「え！？始まったの！？………りんご」

戸「ごりらー！」

小「ラッパ」

私「パンダ」

緋「………思いつかない」

みんな『語彙が貧困!』

というわけで緋色さんがアウトだったんですが……。

「……………」

『……………』

「……………包丁貸して」

「高松。全部の包丁をかくしてくれ」

「うん」

というわけでこの30分後ようやく緋色さんを説得でき、次へといきます。

「じゃあ、私だね」

「お、高松か」

「楽しみです!」

小鳥さんは普通ですからね!きっと面白いゲームに違いありません!

「ババ抜きなんだ」

『……………』

え……………?普通のなかの普通。普通の満点をだしてきました。さて、これはどうすればいいんでしょうか……………。

「み、みんなー!やろうぜっ!」

『お、おー!』

このあと特に描写の必要ない状況が続く。普通に終わりました。ええ……………楽しかったですよ!

「じゃあー次は俺だなー」

「自信满满だねー！」

「……期待」

「うん。なんだろ？」

みなさんの視線が集まる中七実さんは声を張り上げて……

「プレゼントゲーム！」

『？』

本日2度目のはてなです。プレゼントゲーム？なんででしょうか？

「このゲームはプレゼントを岸島に渡すゲームですまる」

「ああー！ずるい！汚い！まるじゃないよ！」

「……卑怯」

「うるっせー！ここからは俺のゲームだ！口出しすんな！」

「……まあ、一理あるね。私から」

そう言って私にプレゼントをくれる小鳥さん。

「え？いいんですか？」

「うん」

「じゃあ、開けさせてもらいますね」

マグカップでした。

「普通の中の普通だな！」

「七実くん！失礼だよ！」

「は！しまったつい！」

「普通だなんて照れるよ……」

「それで照れるの!? 普段なんて言われてるんだ!」

普通に照れるってどういことですか……。

「あの、ありがとうございます。使わせてもらいますね」

「うん」

次は緋色さんらしいです。

「……私のプレゼントは私」

「はいはい! みなさん手伝ってー」

というわけで次は戸張さん。

「これどーぞ」

「ありがとうございます……って」

「どう?」

「どうもなにもバールスライムじゃないですか!」

「うん。スライムが気に入らなかったみたいなので」

「そもそもほしいって言ってませんけど!」

「うん、まあ、照れ隠しだよ。私なりの」

「照れ隠しで異世界にまでいつちやうんですか!」

「メタルはごめん……無理だったよー」

「いやいや! さもメタルが欲しいって言ったみたいになってますよ
!」

「ふむ、私のプレゼントも喜んでもらえたし。次は七実くんだね」

「話が勝手に進んでますね」

でも私のためなんですもんね。バールスライムをしまう容器的なも

のが欲しかったのでバケツを用意しました。いや、確かに失礼ですけど。でも他にどうしようと……。

「じゃあ、俺だな。ほい」

「あ、ありがとうございます」

そう言ってくれたのはリボンでした。猫の肉球模様のリボン。

「……………」

「あれ？無反応？」

「いえ、その七実さんなら肩たたき券やらお手伝い券あたりをくれるのかとばかり」

「小学生!？」

「意外と普通なものだったんで驚いちゃいました」

「その発言が俺を傷つけてると知ってくれ」

「でもおふざけなしで驚きました」

「フォローするんじゃないかねえのかよ!さらにおいうちだった!」

「ありがとうございます。本当に嬉しいです」

「お、おう、そか……」

なんか七実さんが照れています!めずらしいですね……。

「それとまだあるんだ」

「?なんでしよう」

そこにあったのは……

「猫耳……。猫の手に猫の足。猫のしっぽ……………」

「おう!」

コスプレ衣装でした。え？どういうことですか？これは私にくれるのですかね？なんかもっふもふなんですけど。これ明らかサービスシーン狙いですけど。

「俺的に萌えを表現してみた！」

「……………はい。ありがとっぺいします」

「なんかテンション下がってる！」

最近変態少年の名前が似合ってきた七実さんです。それぐらいしゅうがないですし、まだだいじょうぶな方でしょう。

「着ないのか？」

「いえ、その……もうちょっと大事な場面で着ようと思います」

「そうか」

はい。着るときはあるのでしょうか。分かりません。なんかまわりの皆さんが「私たちに相談した結果がこれかよ……」と呟いていますがなんのことでしょうか？

「でもリボンはつけさせていただきますね」

「お、そうか。ってかなり似合うな」

今、結んでいたリボンをとり、肉球のリボンを結ぶ私。今日はこれで過ごしましょう。なんか予想以上に嬉しいんですが、これが誕生日パワーというものですか！

「みんなー、ケーキ焼けたよー」

その香織さんの一言でみんな食卓の方に急ぐことにしました。

○

「香織さん、ありがとうございます」

「お礼なんていいのよ。ささ、食べて食べて」

『いただきまーす』

そうしてケーキを口に運びます。生クリームといちごのシンプルだけれど最強の組み合わせ……。

「おいしいです！」

「そう？よかった」

「俺、甘いもの苦手なんだよなー」

「じゃあ、あなたの誕生日には塩を作ってあげるわ」

「やっほーう！ケーキ大好物ー！」

手のひら返したような変化ですね。

「まだイベントはあるんだよ」

「え？」

もうすっかりイベントは終わりだと思ってました。

「はいこれ」

「これは？」

縦に長い紙切れ。私のはピンク。緋色さんのは赤。戸張さんが緑で小鳥さんが黄色。そして七実さんのが黒色です。

「今日は七夕でもあるんだよー。ってことで誕生日と七夕合体企画！誕生日短冊！」

「あの笹はそのためにあるんですか・・・」

すみっこにある笹が気になってしょうがなかったんですが・・・。
この短冊を結ぶんですね。

「では、お前らー！願い事書こうよー！」

『おー！』

「おいおいおいおい！」

七実さんが止めます。なんだっていうんでしょうか？間の悪い・・・。

「俺の短冊黒なんだけど」

「で？」

「で？じゃねえよ！書けねえだろうが！」

「白色使えば？」

「新しい紙はないのか！」

「むー、わがまま。ほいこれ」

「さんきゅ・・・っておい！なんでこげ茶なんだよ！」

「え？イメージ？」

「また中途半端な色だから反応がとりづらいわ！」

「わがままだなー・・・。ほい」

「金色!？」

「金箔」

「無理！重い！俺には重いよ！どんだけ金かかってんだ！」

「はいはい」

「青か。定番でいい感じだな」

そうやって時間が過ぎていく。みんな真剣に書いているようで何もしゃべりません。もくもくと書き続けてます。15分後。みんなが書き終わりました。

「さーて笹をベランダにだすぞー」

「七実くんお願い」

「だろうな・・・よつと」

文句をいいながらもベランダに運びます。ベランダというか庭ですね。意外と広い庭。食卓から庭に出れるようになってます。そこに
出て笹を立てます。

「さー！みんな飾れー！」

そしてみんな思いのつまった短冊を飾ります。ふむどこの位置がいいでしょうか？

「岸島、ここに飾れよ。俺のとなりだけだよ」

「あ、はい」

七実さんが誘ってくれたので飾らせてもらいます。なかなか綺麗です
ね。笹。

「まだお昼だけど綺麗だよねー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん」

「ほんとだね」

「そうだな」

「はい！綺麗です！」

風のおかげで笹がなびく。それがどこか気持ちよくて・・・そして心地よかったです。

「私は帰ってこれたんですね」

「そうだぞ。帰ってきたんだ。いつもどおりの日常に」

「また私たちと一緒にだね！」

「・・・これからずっと」

「うん、よろしく」

「はい！」

ここが私の場所。それがわかります。みなさん暖かくて・・・そして安心できる。あの豪邸なんか比べ物にならない。ここがいい。でもあじさい荘も寮にしてみればかなり広いんですけどね。

「なあ、岸島は何を書いたんだ？」

「え？」

「短冊にだよ」

「ああ」

「私はねー！世界平和！」

「・・・恋愛成就」

「私はいつも通りを願ったよ」

「俺は笑顔だな。みんな笑顔」

「私は・・・」

「私はみんなとずっといられるように」

「ははっ。なんか普通だな」

「な！いいじゃないですか！」

「うむ、いい願い事だね」

「………気にいった」

「私も」

「ほら見てください！」

「分かったよ」

そして私は言いたかったことを言います。

「あのもう1つ願い事があるんですけど……七実さんに」

「俺に？なんだ？できることならなんでもいいぞ」

「あの………」

「ん？」

決意をかためて……。

「数夏って呼んでくれませんか？」

「は？はあああああああああああ？」

「いや、そんなに驚くことじゃないと思うんですけど・・・」

「ああ・・・そうなんだけどさ・・・恥ずかしいな」

「なにいつてんだいー！豪邸で叫んだでしょうに」

「あれはノリだろうが！」

「・・・呼んであげて」

「うん。呼んであげて」

「あ・・・ああ・・・」

「その・・・数夏・・・」

「ふふっ」

「なっ！なんだ！なんで笑うんだよ！お前が言えって！」

「いえ、嬉しいんですよ。ふふっ」

「おい！おい！いいいいいいいいいい！」

> i 1 3 6 7 8 | 1 0 5 8 <

私は戻ってきたこの場所に。そして私は17歳になりました。

「身長は12歳だけだな」

「いらぬことを！」

こんな感じですが楽しいです。

第22片 理系少女と文系少年の7月7日（後書き）

誕生日編終わりましたー！

というわけで次からバカな日常が始まるのでお気をつけてー！

でわ

第23片 理系少女と文系少年の時間

皆さん。最近は男子も家事の裁縫、料理、掃除ができないといけな
いという。それは正しいのだろうか。いや、できないよりできた方
がいいとは思っけれど。それにより台所を汚されたり、作業が進ま
なかったりしたら逆にイライラしないかい？うっとおしい！もう貸
せ！みたいな感じにならないかい？

「というわけで家庭科の宿題だが」

「なんでしよう？」

「俺には無理だあああああああああああああああああああああ
あああ！」

俺、七実未空^{ななみみそら}。これが神の与えた試練だというのなら俺は全力で神
に逆らう。

「なにかっこいいふうに言っているんですか。ただ不器用なだけで
しょう」

「もうやめろ。俺をこれ以上追い込むな」

家庭科の宿題。裁縫がでたんすよ。内容はエプロン作り。ええ、ま
あ、これが苦手だね。今は被服室。家庭科を受けるための教室に居
る。いるのは俺と岸島のみ。

「情けないですね。裁縫もできないんですか」

「お前。その指を見せてみる。なんだその大量の絆創膏。誰かに手
料理でもふるまったのか？ベタな展開なのか？」

「う、うるさいです！私も苦手なんですよ！」

「でもこれできなかつたら成績やべえよなあ・・・」

「私は七実さんと違い順調なので問題はないです」

「……………」

「黙るぐらいならツッコんでください」

「ツッコんで欲しかったのか。新手のツンデレだな」

そう。これはまずいのだ。締め切りも近付いてるし……………。こうして昼休みにもやらなきゃ間に合わない。

「ふむ。時に岸島よ。お前のそのエプロンについてるワッペンというマークはなんだ？」

「……………」

「え！？まさかの無視!？」

「私は岸島じゃないです」

「まさかの告白!……………ってそういうことじゃないんだな」

何をかくそう俺はあの7月7日からこいつのことを名前で呼んでいる。数夏。これが予想以上に恥ずかしい。それなのにこいつは今までどつり七実さんって呼ぶし。あの後は大変だった。高松が「私も名前で呼んでください!」って何度も言ってくるという事件があった。最近流行ってるのか?名前呼び。しかも本人もなんで名前呼ばれたいのか分からないみたいだし……………。

「あー、その、なんだ。す、数夏のエプロンについてるマークはなんだ?」

「あ!これはですね……………」

めんどくせー!分からない!名字で呼ぶ時と名前で呼ぶ時のテンションが違う理由がわからない!

「これはアルパカです」

「斬新！」

数ある動物の中からまさかの選択だった。なぜにアルパカ。

「だってなんか可愛いじゃないですか」

「いや、そうだけでも。猫とかも可愛いだろう」

「あれは萌えの可愛さです」

「お前は猫をどんな目で見てるの!？」

普通の可愛いとどう違うのが分からなかった。猫萌えてなんだ。。。

「アルパカは癒されるんですよ」

「癒しね。。。じゃあ、俺も癒されたいので誕生日にあげた猫な
りきりセットを着てください」

「敬語でお願いされました!?!というかまだ諦めてなかったんです
ね。。。」

「写真撮ってエプロンにはるから」

「余計に着るわけにはいけなくなりました」

「写真撮ってアイドルグループの事務所に送るから」

「それで分かりました!?!っていうと思ったんですか?」

「写真撮って俺が1人で楽しむから」

「それが一番嫌ですよ!」

断られてしまった。おかしいことは言っていないのに。。。

「うーん。。。」

「どうしたんですか?」

「いや、俺、白ワンピースが好きだからよろしく」

「写真撮られる前提で話されてます!?!」

「あー楽しみだなー。その時のために弟の手術代やらでためてるお金でデジカメ買おう」

「重いです！その重さには耐えられませんよ！」

「いや、弟いないんだけれどね」

「無意味な嘘！」

「妹ならいるけれど。近所の子で実妹じゃないけど」

「驚きの真実！」

妹がいるのはマジでもないな。実妹じゃなくて近所の子だったんだけど……。今、その子は中3かな？中2？何してるんだらうか。

「なんか七実さんのまわりって女だらけですよね」

「なんか悪いイメージがつく。言い方には気をつけるよ」

「なんか七実さんって女、侍らせてますよね」

「なんで悪化した!？」

「いえ、ここで素直になるのも私らしくないかなと」

「そんなこと気にしてるなら俺のこと気にしてくれないかな」

「というか話が脱線してることに気づいてます？」

「気づいてるけど怖くてふれられなかった」

臆病。というか脱線させなければいい話なのだけれど……。

「で、家庭科進んでないみたいですけど」

「もうね。さつき針がチクツとしたときに心もパキッて折れた」

「弱すぎませんか!？」

「あーめんどくせー。針山に針刺すのめんどくせー」

「それめんどくさがったら何もできないですね」

「岸島……じゃなくて数夏はできたのか？」

「いいえ。でも七実さんより進んです」

「……………おっし！分かった。早くできた方がなんでもい

うことを聞く！という条件で」

「お、いいですね！負けませんよ！」

「という条件でやった夢を見た」

「夢の話でした！」

「俺の惨敗。いうこと聞かされてお前に下着をはかせたよ」

「なんかおかしくくないですか!？」

「というわけでその条件な」

「その条件？」

「俺が勝つたら下着をはかさせる。俺が負けたら下着をはかせてやる」

「言い方が違うだけで何も変わってませんよ！」

おっと。こんな感じだから変態の2文字が浸透していくのか。

「ごめん。俺は神士だった。ごきげんよう、マドモアゼル」

「そんなキャラでもないですけどね。マドモアゼルじゃないですし。

・・・とそういえば七実さんに手紙を預かってたんです」

「誰からだ？」

「お父さんからです」

「嫌な予感！」

「ちなみにお父さんはもうアメリカに帰りましたよ」

「その情報は手紙と関係なくね？」

といつつも手紙を開けてみる。

文系少年よ。おぼえているかな。岸島父だ。

先日は世話になったな。いや、あのときは私、どうかしてた。

数夏のことは本気で愛していた。なのに自分の事ばかりでまわりが見えてなかった。

今はもう名前なんてどうでもいい。もう関係ない。娘の幸せを一番に考えて行動することにするよ。

そして君にもお礼が言いたかった、ありがとう。

君が止めてくれなかったら私は最悪なことをしていただろう。感謝してもらいたくない。それと数夏をよろしく。

娘はお前にやらんからな！そこは勘違いするなよ！

まさかもう名前で呼んでるんじゃないだろうな。

もしそうなら許さんからな！

バーカバーカ！う〇こ、う〇こ！

.....。

「小学生か！」

俺ができる最高のツッコミだった。というか名前で呼ばせたのあなたじゃありませんでしたっけ？なんで人のせいにしてんだ、このおっさん。

「私は内容を見てませんがどんな内容でしたか？」

「七実様に服従するとよ」

「嘘でしょう。というか嘘と信じたいです」

「嘘だ。安心しろ」

でも最後のほうになったら文章力皆無だな、おい。

「まあいいですけど……。七実さんはなにかワッペン的なものをつけないんですか？マークみたいな」

「アルパカは遠慮するが……。そうだなあ……。一番はお前の写真だ」

「それ以外でお願いします」

「星がいいかな？」

「ロマンチックな雰囲気になりましたね」

「川の星とかな」

「天の川とか綺麗そうですね！いい感じじゃないですか！」

「いや、荒川アンダー〇ブリッジ」

「その星！？」

また伏字だった。最近増えたなー……。どれもこれも山梨のせいだと思っただが。俺のせいでもあるな。

「もうお昼休み終わっちゃいますよ！」

「あ、マジだな」

「ここは私の計算で……」

「お、久々登場！」

「うん、間に合いませんね」

「期限の計算！？んなことしてないではやく終わらせるように布の長さの計算とかしろよ！」

「いえ、ですが期限もやばいですよ。私が計算で間に合わないって言ったら間に合いません」

「どこの言霊だ」

「私は涼〇ハルヒ的存在ですからね……。世界の中心です。閉鎖

空間どこにでも作っちゃいます」

「迷惑！そしてその解釈の仕方はどうかと思うぞ！」

でもこいつの計算がほとんどあたっているのも事実。間に合わないって言われたら間に合わないような気がしてくる。

「いつつ……」

「どうしました？」

「針刺さった……。もうダメ。帰りたい」

「急にホームシック！？もう、今絆創膏あげますから」

「いや、その前にお前がこう、指を舐めるとかさ」

「そんなのできるわけじゃないですか！」

「でもヒロインなら無自覚でやつちゃうだろ？」

「変態が身にしてみたってますよ！そしてあなたがそれを言ったせいで無自覚でできなくなっちゃいましたし！」

「分かった。じゃあ、言わなかったことにする」

「分かってないです！あなたの問題じゃなく私の問題です！」

「なんだ、残念だな……。痛い。このままじゃ指がなくなってしまう……」

「重傷ですね！そんなんで同情を誘えると思わないでください！」

一瞬だった。俺は気付かなかった。違和感にさえ。そう違和感。

「が……はっ……」

腹に穴があいていた。それに気づくまで30秒近くかかったほかに驚く。やつは笑みを浮かべて勝ちを確信している。

「くそ……。この傷じゃ立てない……。誰か治してくれないだろ

うか・・・」

「いやいやいや！」

俺の妄想を否定する。失礼だな。

「その傷はどうやっても治らないと思いますよ」

「えー？そうか？腹に穴が開く程度だぞ」

「普段どんな怪我をしてるんですか！」

「それぐらい辛いつてことの比喩だ」

「絶対お腹に穴のほうに辛いと思いますけど・・・」

「というかもう時間じゃないか？」

その瞬間チャイムがなる。昼休み終了の合図だ。

「お、もう戻るぞ」

「あ、はい。その絆創膏・・・」

「さんきゅ・・・」

その瞬間だった。ええ、まさかのマジで指をくわえられました。お
おおおおおおおマジかよ！なんだこの展開。

「ん・・・」

そして何かエロい！なに！ん・・・ってなんですか！そんな声だけで興奮するのが高校生なんですけど！

「お、おい・・・岸島？」

軽くちゅぱつとって俺の指からはなれる岸島。顔は真つ赤だが俺も真つ赤だということを知ってほしい。

「き、岸島じゃないです……」

「あ、ああ……数夏？」

心臓のバクバクが止まらない俺。これはなんだろうか。いや、女子からそんなことやられたらこんな感じにならない男子はいないんじゃないかなろうか。というか嫌がったのにどうして!? まさか! もうこれ嫌われたかな……。変なこといいすぎたかも……。

「その……はやく治るようにおまじないです……」

「さんきゅ……」

何この感じ! なんかわんな空気になっちまった! こんな展開神のみぞ知る○カイでしか見たことねえよ! 俺もなにお礼言ってるの! 誰か! 誰かああああああああああああ!

「教室に戻りましょうか……」

「そ、そうだな」

今回はこんな感じで終わりなのか? いやいや。物語にはオチが必要だ。ああ、こんな青春みたいなオチではなく、普通のやつが。

「……」

頭真つ白。なのでしょうがない。俺は先ほどのシーンを写メで撮ったことを白状しよう。これでオチがついたろ? 変態? そんな言葉痛くもかゆくもないね。

「なに写メとってるんですか！」

「そっぴゃ、お前地の文読めるんですけどね！」

こんな感じで始まるゆるーい時間。やはりこいつがいるのといないのとは大きく違うことが分かった。

第23片 理系少女と文系少年の時間（後書き）

はい、次回もこんな感じでやりますので。はい。

今回はなんか急に発展したなーと感ずるかもしれないですが、まだ2人とも何にも気づいてない状態です。

このあともちよくちよく何かしらのイベントを挟もうかなど。

ただ話してるだけじゃあきますしね・・・。

でわ

第24片 理系少女と文系少年の難問

眠い。俺は眠いんだ。7月中旬。暑さもいよいよ化け物じみてきたこの夏。もう教室は夏休みムード。盛り上がる盛り上がる。そんな中俺はあじさい荘にいる。1階のリビング。夜。12時なろうかという時。

「くそ……」

俺にはもう気力がない。もう何もできない。意識は朦朧としていて視力も低下している。何も見えない。何もできない。これが絶望。これが……。

「いや、だから何かっこつけてるんですか。テスト勉強でしょう、ただの」

というわけで俺は今、絶望を味わっているのです。

「いやいや、あのな。普段から努力してるやつにはわからないだろうがサボってるやつは大変なんだよ」

「なんで偉そうなんですか」

「現代文、古典はいいとして……問題は化学と数学か……」

「得意不得意ありますもんね」

「なんかお前余裕じゃね？」

「そうですね？ふふふ……何をかくそう私は文系の教科までカバーしてますからね」

「なに！？お前唯一の弱点が！」

他にもあるけども！でも目立った弱点が！

「ずるいぞ！」

「日々の努力が結果を生むんですよ」

「くそっ！じゃあ、問題を出してやる」

「どんとこいです」

「漢文、推敲で迷っていた句。静かな中で静かに門の中に入るとも
う一つは？」

「門を通り抜ける」

「なるほど。レポートが使えたのか」

めちやくちゃでした。正解は門をたたいて入るだ。

「ま、これでちゃんと勉強しなきゃな」

「うー……」

「数学は難しいよー」

と声をあげたのは山梨戸張。こいつも文系だからな。

「俺も同感だ」

「……日頃からやっていたらよかった」

緋色。結露緋色。こいつは理系だから数学には困らないよな。問題は現文だが。

「その……私も」

「そっか。お前も文系だったな」

高松小鳥。こいつも文系だ。数学は苦手な人にとってはほんとに嫌なんだよな。

「数学難しいですかね・・・」

「お前は理系だからわからないだろうよ」

「そんなもんですか」

「そうだよ・・・。はあ・・・どうしよう」

「しょうがない。俺が助けてやる」

「おろ？七実くんも数学苦手じゃなかったけ？」

「だから、数夏。土下座するから教えてくれ」

「あなたにはプライドというものがありませんか・・・」

「プライド？あんなの初期装備だろ？」

「初期装備!？」

「マジで防御力弱いから最初の方で鉄の鎧と防具変えたからなあ」

「そんな理由でプライド捨てたんですか・・・」

「ほんと和紙で切れるぐらいに弱い」

「相当ですね」

「だから俺にはもうプライドなんか無い」

「なんか男らしい言い方ですね」

「男らしいんだ。人を守るんならプライドなんて捨ててしまおうと

いうことだ」

「美化しないでください!」

そんなこんなでいつものやりとり。その後すぐに勉強に戻る。

「この数学はあれだな。親が子供に自分はどうやって生まれたの？
って聞かれた時の答えぐらい難しいな」

「いえてるよ!。ほんと途中式も分かんないよ・・・」

「うん・・・どうしようか？」

「何言ってるんですか？みなさん」

「?どうした？」

「いや、子供ってキャベツ畑で捨るか、コウノトリが運んでくるんじゃないんですか？」

『・・・・・・・・・・』

だんまりだった。あれ？これやつちまったかな。まさか高校生にもなつて知らないやつがいるとは思わなかったんだ。というかお前えつちいこととかつて言つてなかったか？いや、確かに下着見るだけでもえつちいことつて言えるが・・・。

「お前・・・純粹なんだな」

「え！？ちよつとまさか違うんですか！」

「いや、いいんだよ。俺はキャベツ出身だ」

「いやいやいや！そんな言い方はしないと思うんですが！」

これはまずい。早急に話をそらさなければ。ただでさえ最近変態的な内容が多いんだ。どこかに綺麗な話をいれとかないと読者さんもげんなりしてしまう！

「そんな言い方するよ。山梨お前コウノトリっぽくね？」

「ああ・・・うん。そうだよ。私コウノトリ方言がちよつとあるからね」

「コウノトリ方言！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・私もよくわからない」

「緋色も！？・・・・・・・・お前はキャベツ出身だと思う。キャベツ色が強いもの」

「キャベツ色ってなんですか！あきらか誤魔化してるでしょう！」

気付かれる前に・・・先手を！

「そんなことよりお前、知ってたか？明日晴れるんだぜ」

「雑！明らか話をそらそうとしてるでしょう！」

「知らない方がいいこともあるんだ」

「数夏ちゃん。もう男の人にそんなこと言ってはダメだよ」

「なぜでしょう?」

「あれだよ。あのー・・・元気になっちゃっから」

「山梨、お前はしゃべるな」

危険因子は味方にもいたらしい。今回の話は今までの中で一番ひどいんじゃないか。少なくともあじさい荘でする話じゃない。できれば男同士で語り合いたい内容のはず!

「不満じゃないなら私とでもいいんですよね?」

「あ、ああー!もちろんだとも!」

俺は大人な対処をする。今回は変態少年と痴女しか出てこないのかって書かれそうだがもう知らん。俺はこれでも一生懸命なんだ。

「私、将来は子供3人ぐらいほしいですね」

「なぜ俺に話す」

「だって七実さんの子供がほしいですもん」

おおおおおおおおおおおおおお落ちつけ!落ちつくんだ!相手は意味を知らないんだぞ。動揺する方がおかしい。おおおおおおおおおおおおおおお落ちつけ!

「でもな、それだったら俺と数夏が結婚しなきゃいけないんだぞ」

「え・・・?」

なぜ顔を赤くする。

「そ、それだったら・・・その・・・」

「そんなことも考えてなかったのか。どうして俺の子供をほしいと

思っただ？」

「理系と文系が合わさった最強の子供ができるな・・・と思いきして」

やはり理由は純粹だった。純粹か？

「な、七実くん！」

「どうした？高松」

「私もこ、子供がほしいです・・・」

「でもお前も俺と同じ文系だから最強の子供は生まれなぞ」

「あう・・・」

なぜか縮こまる高松。そして俺を親の仇みたいな目でみる山梨。なんか悪いことしたかな？なんか「そういう意味じゃないのに・・・」
「私は分かってるよ。ことりん」みたいな会話が。俺にも説明してくれ。

「もうこの話はいじやないか」

「よくないです！知りたいんですけど！」

「いや、でもさ。ほらテスト勉強も」

「じゃあ、そういう勉強をしましょう」

「ぶしゅー。エネルギーガタリマセン。エネルギーガタリマセン」

「七実くん！？数夏ちゃんひどいよ！」

「私ですか！？」

「男子高校生には酷な言葉なんだよー」

「私はただそういうことを教えてほしくって・・・」

「ピピピピ！テキハツケン。センメツシマス」

「ちよ！七実くん！三角定規は危ない！」

「何を動揺しているのですか？」

「数夏ちゃん！もうダメ！七実くんの理性がなくなりかけてる！」

そんなこんなで5分後。無事戻る俺。ふう……。

「よし、勉強するか」

「誤魔化さないでください」

「いや、だつてテスト近いしさ」

「私が将来子供つくるとき真実を知らなかったら恥をかいてしましますよ」

「ああーもう！じゃあ、俺が最初の相手になるからそんなとき教えてやる！」

「七実くんはもうしゃべらないで」

俺も危険因子だった。もうあれだよ。自分でも何言っているのか分からないや。

「お、何騒いでるの？」

その瞬間香織さんが帰ってきた。しめた！みんな笑顔になる！

「香織さん！緋色と数夏が勉強で知りたいことがあるらしいです！」

「お願いしますー」

「私たちじゃ答えられなくて」

「お、なになに？いいわよ。教えてあげる」

「あの……子供ってどうやって生まれるんですか？」

「……知りたい」

「……」

無言だった。というか化石化？そんな中俺らの方をにらんでくる香織さん。いや、ごめんなさい！ほんと俺らには手に負えないっす！

「あのねー……………」

「香織さんは子供つくろうとしたことあるんですか？」

「……………」

「……………ないの？」

「う、うるさいわね！相手がいないのよ！相手が！」

「香織さん！ちょっとは規制してください！」

欲望が混ざってます！

「がはっ…………く…………。その質問をされると私の中の悪魔が……………」

「

いつから中2病設定になったんだ、あんたは。

「ごめんなさい…………答えられそうにないわ」

「そう…………ですか。悪魔ならしょうがないですね」

「あれ！？信じた！？」

「ふう…………暴れるな……………く……………」

「……………」

俺ら3人は部屋に逃げた。明日朝どうしようかは後で考えよう。朝になっただらもう興味はなくなってると思うが。まあいいや。今日は数夏にその話題はふらせない。そう思った。

「七実さん！」

「！！！？」

もうこれは主人公のみ許されるここで終わると次回には続かないという技を使う！次回には続かないから安心してくれ！次はみなさんが驚くようなピュアな話をお届けするぜ！

「七実さん。大きくなったら私と子供づくりたいですか？」

「お前はあああああああああああああああああああああああ
！！！」

ピュア……ねえ……。

第24片 理系少女と文系少年の難問（後書き）

次回こそ綺麗な話を！

でわ

第25片 理系少女と妄想少女の大小

「聞きたいことがあるんですけど」
「ん？」

私はこれから寝ようと思ったところに数夏ちゃんがきた。ここは図書室の放課後。んー、なんだろ。お、そうだそうだ。語り部は今回、山梨戸張やまなしとばらだよーん。驚いたっしょ？そんなわけでどんな質問だろう？

「あの……私に胸を大きくする方法を教えてください！」

うん。これこの前変な話したからピュアでいこうということにならなかったっけ？七実くんは怒られそうだなー……。でもま、今七実くんいないし、ていうかどこに行ったんだろう……。

「いや、でも数夏ちゃん。そういう胸の需要もあるんだよ」

「そういつってなんですか!？」

「控えめな？」

「控えめにしてるんじゃないですよ!もつとポインと!」

「むー、そのままでもいいと思うんだけどな」

「そ、そうでしょうか?でも男の子は大きい方がいいですよね？」

「そんなことないと思うけど……」

まさかまさかの質問だよ……。私はこれでも巨乳キャラだからね!ふふん!……。まあ、でも七実くん若干ロリコンだし。私の予想だけだ。

「七実くんは小さい方がいいんじゃない？」

「だ、誰が七実さんのことだと言ったんですか!男の子って言った

「んですよ！」

「あー、顔を赤くして可愛いなー。でもこれはまだ自分の気持ちに気付いてないねー……。」

「数夏ちゃん。女の子に胸の話をするということは……お約束わかるね？」

「え……。なんでそんな笑っているんでしょうか……。」

「うへへへへー！揉ませろー」

「うあー！ちよつと！戸張さん！自分のほうが大きいじゃないですか！」

「小さいのも可愛いんだよ」

「うわっ！」

「ふふふ、捕まえたぜー」

「あつ！ちよつと！……んっ！ああ！」

「これ声だけでも規制されちゃいそうだね」

「じゃあやめてくださいよ！」

ちつちやい体を頑張つて動かして抜け出す数夏ちゃん。私はロリコンに目覚めたんじゃないかな。いや、数夏ちゃんに失礼だね。

「じゃあ、ロリー」

「ロリー!？」

「あ、考えてたこと口に出っちゃった」

「いやいやいや！失礼ですよ！」

「まだ何考えてたか言っていないよー」

「大体わかりますよ。まだ子供はどこから生まれるかも教えてもらっていないに……。」

「それは知らない方がいいね」

「ほらほら、読むよー」

「むう……」

文句を言いながらも黙る数夏ちゃん。素直な子だ。

「えーとなになに」

読み進めていく私。いやー読みきかせなんていつぶりだろうか。いつぶり……。いや、いいや。振りかえないよー！私は前を向いて歩く女だからね！

「あれ？」

「すうすう」

数夏ちゃんは寝ていた。ほんと可愛い子だなー。微笑ましいや。

「羨ましいや……」

私はそんな本心を言葉にしていた。私はなぜその言葉を言ったのか理解できない。でもどこかで分かっているような気がする。

「お、お前らここにいたんか」

すると図書室に七実くんがきた。なんか疲れてない？

「どうしたの？なんか疲れてない？」

「ああ……あいつと会ってきた？」

「あいつって？」

「例の黒だよ」

「ああー……って日本にきてたんだ」

「よつやくむこつの世界から帰ってきたんだ。出席日数の関係でね」
「そうなんだ。じゃ、もう学校きてるの？」
「おう。で、数夏に紹介しようかと思っただが・・・」
「寝ちゃってるんだ」
「どつやらそのようだな」
「本を読ませてたらね」
「ん？どんな本なんだ？」

そついつて私の持っている本に目をむける。

「・・・うんまあ、絵本か」
「可愛いでしょ」
「期待を裏切らないな」
「怒られるよー」
「まあ、ここで騒がれても困るしな」
「図書館は静かにだしね」
「高松にも怒られそうだ」
「うん、じゃあ私はしばらくここにいるよ」
「俺もいるぞ」
「でも次移動教室だよ」
「お前もだろ。同じクラスだし」
「いいよ」
「いや、いるつての。さあて暇だし本でも持ってこようかな」
「エロ本はやめてねー」
「おまえ！やめろ、普段からエロ本しか読んでないやつみたいじゃないか」
「そつでしょ」
「違つわ！見る！なんか注目浴びてんじゃねえか！」
「それは七実くんのせいだと思つよ・・・」

その時チャイムがなった。今日は講習が放課後にあるのだ。

「あ、数夏もう起きる」

「ん・・・むにゃむにゃ。あー、七実さんじゃないですか」

「そつだ。もう行くぞ。授業に遅れる」

「はい」

「おい、・・・・・・・・山梨も行くぞ」

「うん」

今の間はなんだろうか？まあ、いいや。

「おい急げ」

「分かってますよ」

「うん」

私は妄想少女。私の妄想はいいことばかりじゃないんだ。でもでも。そんなの気にしないでもいい場所がここにあった。

「お前ら、変な話してねえだろうな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なんでだんまり!？」

シリアスにはむいてないね。これ。

第25片 理系少女と妄想少女の大小（後書き）

今回は少しバカ騒ぎ成分を抜きました。

次はかなりやばいことになると思いますが・・・。
かなりバカ騒ぎです。

それどころかついに・・・

でわ次回

第26片 文系少年と暗黒少女の最終住人

「あー、次頑張ったら講習か」

と言いつつ机に突っ伏す俺。七実ななみ未空みそら。今日は講習があるため授業が終わっても残らなきゃいけないのだ。

「だりー」

めんどくさくてめんどくさくてしょうがない時。ふと教室の生徒の話し声を聞いた。盗み聞きじゃないんだからねっ！

「知ってるか？今日、2年の3組・・・隣の教室か。そこに黒い衣装のやつがいたんだと」

「はあ？なんだそれ？制服じゃないってことか？」

「そうなんだよ。世間で言うゴスロリ？とかいうやつらしい」

「先生注意しないのか？」

「してるらしいけどまらでかかないらしい」

「変わったやつもいたもんだな」

それを聞いて俺は青ざめた。まさか・・・あいつが帰ってきてるのか？

○

「さてと」

放課後。講習まで時間があるため、やつを探しにいこうと思う。数夏と山梨は図書館の方へいったような気がするが……。何しに行くんだろつか？そうは思いながらも俺は隣の教室3組へと行くことにした。

「いるかなー……っと」

異質。その2文字が限りなく似合うゴスロリ。髪は黒くストレート。顔は可愛いが誰も寄せ付けないような圧迫。そして子供みtainな背丈。数夏といい勝負だ。

「おーい、その喪服」

そうぶざけて呼ぶとそいつはピクツと反応して席から立ちこちらへと向かってくる。懐かしいな。1か月2か月ぶりだ。でも背は伸びてないんだな。

「誰かしら。今、この服のことを喪服と呼んだのは」

「お、きたきた。久しぶり」

「あなたは誰？私の知っている七実未空ではないわね」

「いや、俺だから」

「これは人格転移かしら。なかなかすごい術式を使っているようね」

「おい、落ちつけその邪気眼」

こいつの名前は柏部未海^{かしわへみみ}。中2病の邪気眼持ち。なんだろうこの感じ。俺の妹○こんなに可愛いわけがないの黒○さんに似ている。まあ、でも決定的に違うところがあるんだが……。

心外だった。

「冗談よ。でもごめんなさい。私はもう行かなければならないの」「どこにだ?」

「悪魔の神城によ」

「お前ひきこもるつもりだろ。引きこもるつもりだろおおおおお
おおおおおおお!!」
「では」

「ではじゃねえよ!お前講習はどうした!」

「あんなもの受けても受けなくても同じよ。それくらいあなたも分
かっているでしょう」
「ぐ……」

そう、こいつは学年トップの成績を持っている。頭がいいというレ
ベルじゃない。次元が違うと思わされてしまうのだ。確かにいろん
な意味で次元が違うが……。

「まあ、でも紹介ぐらいいいじゃねえか」

「嫌よ」

「まあそう言わずに」

「嫌」

「そんなかたいこというなって」

「嫌」

「すぐに終わるからさ」

「嫌」

「げへへーまあ、いいじゃねえかねえちゃん……はっ!」

変態になっていた。駅とかでいそうなやつだった。

「な、何するのよう！」
「お、でたでた」

THE二重人格みたいなもの。昔から邪気眼だったわけじゃない。だから突然驚くことをさせて素に戻せば話は簡単だ。それにしても・

「お前って意外と子どもっぽいパンツはくんだな」

「!!」

「いや、背丈はぴったりだがいつもの性格とは……………ってわかったわかったから！攻撃するな！」

「うう……………恥ずかしい」

顔を赤くして涙目になる柏部。これはSに目覚めてしまいそうだ……………。いつもは冷静なやつがこうね。取り乱したりすると萌える！これが萌えか！

「なんでスカートめくつたの？」

「パンツが見たかったから」

「なっ……………そんな理由で……………」

俺は小学生か。好きな子をいじめるっていう例のあれか。でも好きというか面白いという感情が強いんだがな。この時の柏部は可愛い！

「ていうかキャラが崩れてるぞ」

「はわっ……………あなたのせいじゃない！」

「減るもんじゃないし」

「考え方が変態のそれになってるわよ！」

「そうかなあ」

「は、恥ずかしいことしないでよあ……」
「うん、もつとしたくなった」
「ドS!?!」

この時の柏部はツツコミにまわる。いいなあ……。なんかこづい
いね!

「……ふん、私は帰るわね」

「あ、戻った」

「私はいつも冷静なの」

「図書館の話だが」

「嫌」

もとに戻るのはやすぎ。素のお前と会話しないと意味ないのに。素
のこいつは素直だからなあ。

「じゃあ、また会いましょう」

「あ、そうだ。さすがにくまのプリントパンツは高2にもなって……」

「う、うるさ……い!」

走って去っていく。なんか変態という名が染みついてきたなあ。

○

「お、ここにいたか」

俺は図書館にきていた。そして山梨と数夏を見つけ、中に入っている。数夏寝ているようだ。……え？どうして？なんで寝てるの？

「どうしたのなんか疲れてない？」

「あいつと会ってきた」

「あいつって？」

「黒だ」

「ああ……日本にきてたんだ」

あいつは『暗黒少女』と呼ばれている。文系で妄想力も長けているが邪気眼まじりになる。文章の状況把握が得意。

「で、数夏に紹介しようと思ったんだが」

「寝ちゃってるんだ」

「どうやらそのようだな」

誤魔化した。スカートめくりして帰っちゃったとはいえない。

「本を読んだら寝たなんて子供みたいなやつだな」

「そうだよな。でも可愛いよ」

「……絵本？」

「うん。これ読んでほしいって」

「期待を裏切らないな」

想像通りのやつだった。そしてチャイムもなる。講習に間に合わなくなるので急いで数夏を起こす。

「もう行くぞ、授業に遅れる」

「はい……むじやむじや」
「おい……」

あれ？……名前が……あ。

「山梨も行くぞ」

「うん」

なんで山梨の名前を忘れたんだろう。もう歳だといいてえのか。まだ16歳です！そして気になることがあったので聞いてみる。

「お前ら変な話してねえだろうな」

「……」

「……」

「なんでだんまり!？」

しかし俺もそれ以上追及しなかった。だって俺もやっちゃってたこと思い出した。スカートめくり。

「ま、たまにはいいよな。そついう話も」

『あれ!？』

というわけで3話連続でおかしい感じになってしまった。次は……分らないや。

第26片 文系少年と暗黒少女の最終住人（後書き）

というわけでまたまたこんな内容。

若干反省しつつ、半分開き直ってます。

次こそは！でもたぶん……？

今回は前回と日にちがかぶってます。前は山梨視点。今回は七実視点。

一方そのころ……のサイドストーリーです。

今回は普通にバカ騒ぎということで、でわ。

第27片 理系少女と文系少年の純心

「ピュアになろうと思う」

俺、七実未空はとうとうこういつた。最近変な話が多い。ここで軌道修正しなくては。理系も文系も関係ねえじゃねえか。タイトル詐欺だ！

「というわけで煩惱をなくそー！いえー！」

「いや、どこの僧ですか」

そこに数夏がツツコミをいれる。

「そうよ。私に煩惱を消せということは不可能なことね」

さらに柏部が追い打ちをかける。ここはあじさい荘1階リビング。いつもの場所で3人でした。すでに数夏には柏部のことを紹介しておいた。反応は・・・

「七実さんのハーレムはすごいですね・・・」

という失礼なものだった。しかしふざけてる様子はなく本気でそう思っているようだ。「は、ハーレム！？そんなわけないじゃない！」と柏部も動揺するし。

「ていうかお前はまたゴスロリなのか」

「ゴスロリじゃないわ。これは心情の天使の加護が・・・」

「わー、数夏の私服かわいいー」

話をそらす。

「そ、そうですか？照れますね・・・えへへ」

「うん、とつても似合ってるよ。この部分とか」

「そうですか？ってなんでさりげなく胸を触ろうとしてんですか！

しまった！もうピュアじゃねえ！だって俺好みのワンピースを着てたからつい。

「すまん。煩惱よ・・・なくなれ。無無無！」

「それはそれで怖い光景ね・・・」

「で、具体的に煩惱を消すってどうやればいいんですか？」

数夏はききじょうずなのだろうか。軌道修正が上手い。この作品の軌道修正は下手くそなのに。

「考えてなかったな」

「言いだしつpegが一体何を言っているの？」

「そうですね・・・じゃあ、無難に遺伝子組み換えの話でもしまし
ようか」

「それが無難なお前が急に心配になったぞ」

普段どんな話をしてるんだ、こいつは。

「人間のクローンって生み出せるんでしょうか？」

「強行突破！？俺まだその話でいいなんて・・・」

「人間のクローンは難しいんじゃないかしら」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

みんなして真面目な話をしていた。

「じゃあ、人体強化とかはどうでしょう？手に水かきがついてるとか」

「どんな河童だ」

俺なら嫌だ。水かきなんて絶対いらねえ。

「それは私も嫌ね・・・」

「ていうか泳げたらんなもん必要ねえだろ」

「・・・」

「・・・お前力ナツチなのか？」

「・・・こくり」

ゆっくりうなづく数夏。ごめんね、なんか。泳げないとは思わなくてさ。いや、でもこいつのことだからありうるかもな・・・。

「ていうか柏部もカナツチじゃなかったっけ？」

「・・・」

「無理して答えなくていいけど・・・」

泳げないやつがいっぱいだった。3人中2人泳げなかった。という俺もあんま泳げない。泳げない率が俺のせいで100%になっちまった。

「そ、空は飛んでみたいよな」

無理やり話をそらす。空気が異常に重かったのだ。

「そうですね・・・翼とかも生やすことができるんでしょうか？」

「空を飛んでみたいっていうのは人なら誰しも夢見たことがありますそ

うね

「俺は高所恐怖症だからそんなに思わないけど」

ヘタレの登場。そんな目で見るなっ！スキーとか・・・まず山に登れない・・・。

「ってことは『翼をください』っていうのはそういう人体強化の歌だったんですね！」

「それは違うと思うぞ」

そんな歪んだ曲ではない。もっといい歌のはずだ。いや、そうに違いないだろう。

「ということで一応とりとめもない話をしてみました・・・」

「うん」

「これはなんか続かないわね」

「うん・・・」

なんだろうか……。ピュアさを求めると会話も楽しくない。いや、楽しいけれど縛られてる感じがする。

「やっぱり素がいいってか」

「そういってね」

「はい、規制することは駄目ですね」

これで話が續かない俺らに落胆した。ピュアじゃない方がいいってべどういことだよ・・・。

「それにしても・・・」

と柏部が俺に小声で話しかけてくる。

「あなた変わったわね」

「俺か？」

「そうよ。前会った時はひどく荒れてたじゃない」

「そうかな？」

荒れてたというのはよくわからない。でも俺はあのころを明確におぼえている。

『俺は疲れた。何も無い。何もできない俺に愛想をつかしたんだ』

そうあの頃のセリフを・・・

『俺はもういない。存在しない。俺は・・・俺は・・・』

「七実さん？どうしたんですか？」

「ん？ああ、ごめん」

気付かぬうちに自分の世界に入っていたらしい。

「あなたはそういう能力を持っているの？そこまで自分の世界に浸れるとは驚きだわ」

「やめろ、俺を中2病に仕立て上げるな」

「それよりも早く話題決めないとこの話のタイトルが決まらないんですよ」

「お前はなんの話をしているの!？」

メタ発言。

「んー確かにこのままじゃ雑談で終了しちまうな」
「それがこの話といわれればそうなんですけどね」
「でもインパクトがたりないわね」

その通り。ただ雑談してるだけじゃインパクトに欠ける。どうすりやいいのかが。

「私が砂〇の雪でも歌いましょうか？」

「やめる。色々理由はあるけどやめる」

まず伏字使うような歌を歌うなよ。

「そついやあテストどうだった？」

「数学は大丈夫なはずです！」

「国語なら大丈夫よ」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

最近テストが終わった。しかしその結果は得意科目以外残念だったようだ。まあ、分かってたけどね。

「というか柏部はトップだろ」

「分からないわ。私だって完璧じゃないもの」

「そついうものなんか。そついやあ、数夏も頭よかったよな。文系教科もそれなりにできてただろ？」

「んー・・・そんなに頭はよくないですよ。文系の答えも数学でだせる問題じゃないとできませんし」

「数学でだせることに驚きだよ」

ほんとうにこいつすげえな。確率とか使えばいいのかな？俺はその

確率の普通の問題さえ解けないけど。

「そっか。じゃあ数夏。俺の前あげたプレゼントを着るか」
「脈絡がないですね！今の会話のどこにそんな伏線が！？」
「いや、そういうものなんだよ。会話の1つ1つをチェックしないと」

「それでもそんな伏線はなかったと思いますけど・・・」

「まあいいじゃないか」

「そんな侵略者みたいな口調でも嫌です」

「そうか・・・そうか。もう俺は生きる気力がなくなったよ」

「ずいぶんと軽い生きる気力ですね・・・」

「俺にとつては重いんだよ！」

「まあ、そうですね・・・」

「反応が軽いな！」

「私にとつては重いですよ」

「まあ、そうですね・・・ってならんよ！明らか軽いだろうが！」

「いや、私もそんな反応したかつたんですけど」

「はあ・・・もう・・・はあ・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・分かりましたよ！」

「え？・・・マジ？」

「なんなのかしら。この超展開は。k t k rなのかしら？」

「やめる。k t k rとか会話でつかわねえよ」

ていうかメールでも使わない。意味知ってるやついるのだろうか。

「ふっ・・・あつと驚かせてあげますからね」

「いや・・・無理にしなくても・・・」

「もう後には引けません！」

。そう言って部屋に入る数夏。

「罪悪感でも生まれているのかしら？」

「う、うるせえ！」

冗談だったんだけど。ここで冗談だって言ってもなんか失礼だし . . .

「よし！次回へは続かない！」

「主人公って楽なときがあるわね」

特にオチもなく終了！たまにはオチがないのもね。
つも？

第27片 理系少女と文系少年の純心（後書き）

グダグダすいません・・・。

次の更新はいつになるやら・・・。
なるべくはやくしたいのですが最近忙しくて・・・。

1日1更新したいですね・・・。

第28片 理系少女と文系少年の弁当

「私がお弁当を作つてあげますよ」

「え……?」

おかしいな。七実未空。16歳にしてとうとう耳がやられたか。それとも空耳かな? そういえば数夏がなんか言つてたような気がするけど……。

「ごめん、もう1度言つてくれないかな?」

「だから、お弁当を作つてきてあげますって」

「誰が?」

「私が」

「……」

「……」

これは一大事じゃないのかい? 誰か説明してほしい。でも説明できる人間など俺しかいないんだけど。しょうがない。ここに至るまでの経緯を話そう。

「いやー、最近はパンばっかだよな」

「はむ?」

俺の言葉に数夏がパンをくわえたまま振り向いた。それまでこいつは俺と昼食を食べているにも関わらず空を見てやがった……。俺との会話はそんなに楽しくないか……。

「ふおういへはふおうへふほね」

「ごめん。食べるかしゃべるかどっちかにしてくれ」

「もぐもぐもぐ」

「……………」

「もぐもぐもぐ」

「食べる方を選ぶなよ！いいたいことがあるならしゃべるを選べ！」
「ごくん。いえ、そういえばそうですね、と」

普段はパンなのだが香織さんの調子がいいときは弁当の時があるのだ。それは週1ぐらいのはずなのだが……。

「最近、香織さん忙しそうだもんな」

「そうですね……………」

忙しい。理由は分かっている。それは住人が増えたからだ。数夏ももちろんだが柏部も戻ってきたからな。たぶんそれが関係しているんだと思う。

「お前が気にすることはないさ」

「……………」

「数夏？」

「パンばかりじゃ栄養が偏りますよね」

「え？……………ああ、まあそうだよな」

「わかりました」

「？」

「私がお弁当を作っただけですよ」

ということだ。諸君。詳しい人なら分かると思うがこういう時弁当はほとんどの確率でまずい。いや、そこらへんの物語基準で考えちゃって申し訳ないんだけど。

「お前、料理できるの？」

「いえ、これからやってみます」

これ避ける方法はなものだろうか。頑張れ未空！こいつを止めれるのはお前しかないぞ！

「いや、でも俺パン好きだしさ」

「好き嫌いは駄目ですよ、めっ！」

ごめん、食べれる物ならいいんだけどさ。好き嫌いとかじゃなくてね。もう展開が予想できるぞこれは……。

「でもさ、ほら……」

「なんですか？」

……理由が思い浮かばない……。その気持ちは嬉しいんだけどさ！でも俺も腹を壊したくないっていうかなんというか……。

「なんでもない」

「そうですか」

俺、弱すぎる！口げんかで勝ったことがないんだよな。日本語が難しいとはきくが、難しいと思う前に使えないという恥ずかしい感じだよな、これ。

「期待しててくださいね！」

「わかった。ハンター？ハンターが来月で完結するぐらい期待してる」

「それは期待してるんですか！？」

そんなこんなで放課後。俺は一番最初に寮に着いた。香織さんもないみたいだし、行動をおこすのは今しかない・・・か・・・。

「ふふふ・・・食料全部消滅作戦！これで明日弁当は作れなくなる！」

「んにゃあ？なにしてーんの？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「やあ、山梨。俺は忙しいんだ。今すぐ寮から出て行ってくれないか？」

「そんな大々的なことで忙しいんだ。何やるの？何やるの？」

ちくしょう！これしきで下がる山梨じゃなかったか！ちい！俺の作戦が・・・ハッ！

「山梨。これから俺は大変なことをしようとしてる。それを女子のお前に見られたくないんだ」

「え？それってなにに？」

「工口本の隠し場所」

「・・・・・・・・」

無言で去っていく山梨。これで俺の作戦は完成する！フハハハハハハハ！

「って緋色に高松まで！？ちょ！冗談だつて！冗談だよおおおおおおおお！」

そんな様子を香織さんが何をしているの？という様子で見えていたが気にならないくらい弁明していた。これで作戦はクリアだ。

第28片 理系少女と文系少年の弁当（後書き）

どうもお久しぶりです。

ようやく骨折が治ったのでバンバン更新していきます！

あと、新作の天使の挑戦〜3つのセカイ〜をよろしくです。初SFファンタジー！

ちなみに推測屋は終わりましたが短編でやっていこうと思いますので
でわ

第29片 理系少女と文系少年の弁当？

「お弁当か・・・いいお嫁さんじゃないか」

「山梨。ふざけてるんだな？ふざけてるんだろ！」

「いやいや、本当に幸せな悩みごとだなあって思っただけさ」

「確かに嬉しいことではあるが、俺はあまり無理をしたくない」

「相変わらずのドヘタレだね・・・」

山梨に話してみたがまあ、考えてみればバカツプルののろけにしか聞こえないだろう。これは俺だけの問題だしな。それに・・・少し信じてみようと思った。数夏の料理の腕を。

○

「さて、料理しますか」

「そんなノリでできる程うまくねえだろうが」

「失礼ですね、七実さんは・・・」

そんなこんなで朝5時。なんか数夏に起こされて今に至るわけだが・・・寝させてほしい。

「ではまずはご飯を炊きましょう」

「おお、そこからか」

「では、隠し味に牛乳を・・・」

「待て」

これは止めるしかないだろう。俺に何を食わす気だ。

「なんですかいったい・・・」

「いや、そのご飯炊くだけで隠し味ってなんだよ」

「おいしそうじゃないですか」

「せめて事前に試せよ！おいしそうってなんだよ！」

「でもカレーにも隠し味が・・・」

「お前が作るうとしてるのはご飯だ。カレーに牛乳みたいな感じではいけない」

「分かりましたよ」

そっいつて作業を再開する数夏。心配でしようがない。

「じゃあ、フライパンに油をひいて・・・」

「待て。それは洗剤だ。んなベタな間違いをするな」

「塩を・・・」

「それは砂糖。ベタすぎんだろ」

「分かりましたからっ、後は私にやらせてください！」

「わかったよ・・・」

俺ももう疲れた。休ませてもらおう。

「わかりました！これすごいです！火を使ってないのに焼けてますよー！」

心配すぎる。

「お前、ほんとに大丈夫か？」

「今のところ順調ですよ、えっへん」

偉そうに胸をそる数夏。ない胸は強調されても変わらないな。

「何か言いました？」

「いや、お前の胸はすばらしいな」

「この合間に何考えてたんですか！」

誤魔化そうと思ってとっさに言った言葉も誤魔化せるものではなかった。

「またバカにしてたんでしょ」

涙目で見てくる数夏。………うん、まあ、そうっちやそうだよね………

「こ、これでも脱いだらすごいんですからっ！」

「………そうか」

「なんですかその慈愛に満ちた表情は！わ、分かりました。じゃあ脱ぎます！」

「おおーい！ちょっと待て！どこの痴女だお前は！」

「で、でもそれじゃないと七実さんが信じてくれない……」

「分かったから泣くな！」

お前はたぶん脱いでもそんなに変わらないと思うぞ。

「お、俺は弁当を作っしてほしいから」

「分かりました……。お弁当を作ります。胸の話はまたあとで………」

忘れるつもりはないみたいだ。変なフラグ立てるなよ……。

○

そうして昼休み。俺は数夏が作業をしている間寝てしまったため料理の過程を見ていない。とても怖い。

「七実さん」

「そんなキャラじゃないだろう」

「お弁当ですよ」

「お、おう」

確かに怖い。しかし今、なんだかすごい恥ずかしい。女の子からお弁当ってどんな感じで受け取ればいいんだ？普通にもらえばいいのか？

「ああ、ありがとうニカツ」

「そんなキャラじゃないでしょう」

ツッコミ返しだった。俺も思ったさ、おかしいって。

「で、開けていいか？」

「もちろんです！あ、その前に机の中にある、大量の飲み物を渡してください」

「………はい」

もしものための流しこみ作戦はなくなった。信じようとか言ってた

のこね。

「ではどうぞー！」

「……………」

もう無言な俺。

カパッ

「ん？おおおおおおおおー！」

「ふふっどうぞですか！」

「……………おいしそうだね……………」

「そうでしょうそうでしょうー！」

確かにおいしそうな目玉焼きだった。……………まあ、よかったさ！おいしそうなもの！誰も失敗しないもの！いやあ、よかったよかった。

「じゃあ、いただきます」

「わくわくわくわくわく」

「あむ……………」

んぐんぐんぐんぐ……………。

「どうですか？」

「これ材料は何？」

「えと、緑の野菜にあと、近くにあった赤いものに、あとはそうだ！クラゲ！」

「目玉焼きの要素が1つもねえ！」

「目玉焼き？」

「違うんかい！この白と黄色はどうやってだしてるんだよ！」
「・・・・・・・・分かりますん（＾o＾）／」
「作ったのお前！そして顔文字を活用すんな！」
「それおいしいですか」

そういえばまずいわけではないな・・・。

「ああ、まずくはない。おいしいよ」
「本当ですか！」

「うん」

「隠し味のおかげでしょうか？」

「隠し味？」

「戸張さんに言われた隠し味なんですよ」

「嫌な予感しかしないが一応きこつ。それはなんだ？」

「はい！愛です！」

「ブフーツ！」

あの野郎！変な知恵いれやがって！

「お、おお、そうか」

「うん！」

無邪気！実に目が無邪気！これじゃあ変なことを考えてる俺がバカみたいだ。

「そうかそうか。偉い偉い」

「えへへー。うん？」

頭をなでる。子供みたいだな、こいつ。よしこのまま流そう。いきなりはずかしいわ！

「ありがとうな、数夏」

「いえいえ、そんな」

「おやーっ！お2人さんあつあつだねー」

「うぜえ！その煽りやめろ！」

「戸張さんのおかげでおいしくできました！」

「それはモ〇ハンのあれかい？」

「やめろ」

○

「ふうん。元気になったんだ・・・未空」

廊下。笑いあつ3人を見ている人がいた。

「あー、駄目だなー。これは駄目だ」

その場から立ち去ろうとする。

「これは潰したくなる・・・ふふふ」

男は去っていった。

第29片 理系少女と文系少年の弁当？（後書き）

どうも、お久しぶりです。

全然更新できてませんでした・・・すみません・・・。

これからは頑張ろうと思います。

でわ

第30片 香織さんとあじさい荘住人の記録

あじさい荘には日記がある。住民が交代でその日あったことを書いていくという。ちなみにそれには住民情報も住民同士で書いている。今日はその住民情報のページを公開。

1 ページ目

住民名：山梨戸張やまなしとほり

記録者：香織

いつも元気なのよ、この子。なんにもない日でもね。テンションが高いったらありやしない。でもそれにまわりのみんなもつられて元気になるからいいんだけどね。その元気にみんな救われているの。確か『妄想少女』って呼ばれてるわね。一番最初にあじさい荘に入ってきたの。それにこれでもかっ！ってぐらい胸が大きい。どこでそんな成長したのかしら？未空くんあたりが喜びそうね。髪型は長い髪を細長く1本で結んでる。

住民名：高松小鳥たかまつこどり

記録者：戸張

どもー！戸張だお！うんうん、これは私の紹介じゃないってね。知

つてる知ってる。ことりんはねー、大人しい！うん、とにかく大人しい！恥ずかしがりやで声も小さいね。確か授業で先生に愛でられた時も恥ずかしくて何も言えなかったとか。でもベスト委員長だよ！そのせいで『雷瞬少女』って呼ばれてる。私の次にあじさい荘に入ってきた人。可愛くて優しい私の親友！髪型は俗に言うツインテールってやつさ！

住民名：柏部未海^{かしわへみみ}

記録者：小鳥

あ、えと、いい子だよ。その、最初はそんな黒々とした服も着てなかった。見た小説やアニメ、漫画に影響されやすいらしいんだ。それで今は真っ黒。七実くんは昔の未海ちゃんを知らないから昔から・・・その、じゃ、じゃきがん？っていうやつかと思ってるらしいけど。当初はお嬢様みたいな口調だったなあ。「〜ですわ」って言うてた。でも優しくて頭よくて私の尊敬する人。でも『暗黒少女』ってよばれているのはなんでだろう？服の色？3番目に入ってきた子。今は黒髪のロングだけどむかしはお嬢様みたいに金髪で巻いてたよ。

住民名：七実未空^{ななみそら}

記録者：未海

どうも、ごきげんよう。それで彼の説明をすればいいわけね。一言

でいうなら変態だけど二言でいうなら気持ち悪い。変態。ね。そんな彼も緋色さんを助けたことがあるとか。驚きね。ただのヘタレかと思っただけならまだ役に立つヘタレだったなんて。まあ、いいわ。彼は自称『文系少年』。先生方にうわさされてるわけじゃないのに自分で名乗っているわ。タイトルにまで使ってしまった方がいいのかしら？一時期はかなり暗かったのだけれど、数夏さんに会ってから元気になっているわね。えっちい約束でもしたのかしら？4番目の住人よ。

住民名：結露緋色^{けつろひいろ}

記録者：未空

上の俺の紹介がなんかひどいがまあいい。緋色と俺は幼馴染だ。小学校ぐらいから同じ。でも実際は幼稚園からもう同じなんだよな。すごい無表情に無言。でも笑う時もあるらしい……。俺は見たことねえや。前に緋色に見たことがあると言われたけどおぼえていない。男の子も女の子も好きになれる梅^{ばい}というやつらしい。『氷結少女』って呼ばれてるんだが、あのベルはどうやってできてるんだ？きれいな髪の色でロング。俺の次の住民だから5番目か。もちろん香織さんを抜いてだけどな。

住民名：岸島数夏^{きしますつか}

記録者：緋色

.....私の嫁。

住民名：岸島数夏

記録者：未空

おい！緋色、お前何書いてやがる！俺がかわりに書く。第一印象は変なやつだった。なんでもかんでも計算で片づけようとしているおかしなやつだった。今でも計算は毎日しているな。毎朝の朝ごはんを確率やらで出しているけれど一度も間違ったことはない。やつばすげえわ。『理系少女』と呼ばれている。女の子だから文系というイメージはあまりないけれど文系が多いよな。それでもこいつは元気にやっていた。それで俺も元気をもらった。なんだかんだいっていいやつだ。それとお子様体型。胸は貧乳。髪の毛は長い。髪の毛の下の方ででかいリボンで結んでいる。それが意外と可愛いんだよ。6番目の住人だな。

住民名：香織^{かおり}さん

記録者：岸島数夏

私の書くことがないと思ったらあるじゃないですか。香織さんです。名字？はて？そういえばきいてないですね。ご飯がおいしくてお母さんみたいな人です。ちなみに年齢は20代前半とか。でも時々ム

キになるので前半ギリギリってところでしょうか？それと美人です！胸が大きいです！羨ましいです！あとは髪型ですね。肩よりしたぐらいの長さでいつも動きやすいようにポニーテールにしています。そういえば出身の高校は私たちが通う桜浪高校さくらなみこうとかきいたんですけど本当でしょうか？

これで住民情報を終わりとする。次回このノートに書くときは新しく住民が来た時。みんな、あたたかく迎えてあげましょう。

戸張：うーっす。

小鳥：落書きはいけないよ・・・

戸張：そういうことりんだって私を注意するために書いてるじゃん。

小鳥：はう・・・

未空：おいおいおいおい！こらこら！なにやってんだ。

戸張：七実くんも落書き共犯者！

未空：はっ！しまったつい・・・口で言えばいいものの・・・。

数夏：面白そうです！私にも書かせて下さい！

未空：お前は子供か！

緋色：・・・数夏可愛い

数夏：緋色さん！？

未空：おろ？そういえば柏部は？

戸張：なんかねー暗黒の世界がどーのこーの・・・

未空：あいつまた引きこもったのか。単位足りてるのかなあ・・・。

戸張：なんか親御さんみたいなセリフだね・・・。

数夏：で、これをここに代入すれば・・・。

小鳥：ああ！なるほど。ありがとう、数夏ちゃん。数学の宿題できそうだよ。

未空：これは数学のノートじゃねえよ！

未海：騒がしいわね。

戸張：はいこれでみみちゃんも共犯！

未海：なっ・・・どういうこと!？

未空：うわ、ノートぐちゃぐちゃ・・・。

この会話みたいな落書き意外にも何ページにもわたって落書きがされている。でもそれはみんなが元氣な証拠。このノートは宝物みたいになるんだろうなあ。

香織

第30片 香織さんとあじさい荘住人の記録（後書き）

記念すべき30話目にキャラ整理ですね。

一応それぞれのキャラが書いているので飛ばさずに見ていただけたらなあと思います。それぞれの能力についてのまとめはまたいずれ・

でわ

第31片 文系少年と妄想少女の改変

えっと、ども七実未空です。いやー・・・なんか1話分ぐらい出番がなかったような気がするけれど。なんなんだろうか。いや、でもまあ、いいや。なぜかというと・・・。

「えー、明後日から夏休みですが・・・」

教室では担任の先生が夏休みの注意事項を話している。日差しも強く暑さが目立ってきた7月下旬。実は夏休み間近だった。しかしなぜ夏休みの前という中途半端な時期の話をするのか。それは簡単なことだった。

「さて・・・と」

学校が終わるとすぐに寮へ帰り、ご飯の準備をする。本当は高松とかにやってほしいことだが、今日どうしてもはずせない部活の重要活動があったためまだ学校である。

「おーい、生きてるかー」

俺はある部屋の前にたち、呼びかける。が返事はない。余程のことらしい。最初は軽く見ていたつもりだが返事がないとは重傷なのだろう。とりあえず、手に持ったご飯が冷めないうちにドアをノックして開ける。すると中では人が横たわっていた。

「あー、七実くん？」

「おう、おかゆ作ってきたぞ」

山梨戸張。夏風邪である。

○

ことが起きたのは前日の夜。頭痛をつつたえてきたときからだつた。

「いやね、それでそいつが・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・なるほど」

「数夏しようゆ」

「いや、七実さんの方が近いでしょう」

4人で仲良く話しながら食卓を囲ってた時。もちろん柏部は自分の部屋でゲームという栄養補給をしているが。

「ひいろーん。あのベル鳴らしてー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・どうして?」

「なんかねー、頭ぐわんぐわんすんのよ。だから冷やしてもらおうかと」

「それ、大丈夫ですか?」

「数夏ちゃんは優しいねー」

「それ、大丈夫か?」

「ああ、七実くんいたんだ」

「反応がやけにつめてえ!」

「頭だけじゃなくてのどもいたいー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・それは風邪」

そして思考を巡らせて……

「あ、あいつ、影を実体化させてぬるぬるさせて黒スーツをとらえてた……」

「でしょう。妄想とは本来描写を詳しく相手に与え、そしてさも現実を起こったかのような錯覚を起こさせる。その分、自分の脳には負荷を与えるの」

「それは妄想がより人間に被害を与えるとその分脳に負荷が……」

「そう。で、今回の夏風邪がその代償。よかったわね、夏風邪で。下手したら脳が破裂よ」

「!?!」

「……そんな……私のせいで……」

「……数夏は悪くない」

「そつだ。お前は何も気にしないでいい。というか柏部。お前詳しいな、そついうの」

「『妄想』という能力に興味があっただけよ」

「ふーん、つて数夏！泣くな！よし、こうなりや俺が必殺のギャグで！」

「……殺してどうするの?」

○

そんなこんなで今に至る。ほんと、夏風邪でよかったよ。

「もうあんますごい妄想を使うなよ」

「うん・・・こんな辛いのもういいや」

そう注意したが本当はあの話のあと柏部がこっそりと教えてくれた。

「あの妄想は人を殺せる」

「どういうことだ？」

「殺すという妄想を突きつけることで人を殺せる。人は自ら身体機能を停止させる。そういうこと」

「ふーん、でその代償はどんなもん？」

「自分も死ぬ」

「なるほどな、わかったよ、ちゃんとずっとく」

そんなやりとりがあったうえでこの会話。俺はこの事実を突きつけることはできなかった。

「ま、ゆっくり休め。明日終業式だし、もう夏休みだからな。出席日数も足りるだろう」

「うん、ありがとう」

「ほら、おかゆ食わせてやるよ」

「ありがとう」

俺はただひたすらに看病していた。ちなみに数夏がないのはあいつがいると山梨に謝っちまうからな。

そればかりはいけない。絶対にダメなんだ。

○

「おい、山梨いってくるぞー」

「うん、いってらっしゃいー」

俺はドア越しにあいさつをして学校に出かける。

「数夏、行くぞ」

今度は数夏にドア越しに声をかける。しかし……

「あ？あいつもう出かけたのか？」

俺は一階におり、玄関から出て明日の夏休みへの期待を躍らせながら学校へ行く。

○

「ん？数夏はまだきてないのか？」

教室。まだ数夏はきていなかった。しかしもう遅刻ギリギリである。

「何やってんだ、あいつ」

すると……

「もう終業式始まるぞー」

「あ、すいません、まだきてないやつがいて」

「ん？誰だ？」

「えつと……」

「なんだちゃんと全員いるんじゃないか」

「え？」

数夏が来たと思ってあたりを見渡す……しかしその姿はない。

「あの……1人」

「だから誰だ？」

「岸島数夏ですよ！あいつがまだきてない！」

「岸島数夏？……はあ、お前は何を言ってるんだ？」

「え？」

「岸島数夏はもう亡くなったろう？」

俺は違和感を感じなかったと言えぱうそになる。恐ろしいことが起きていそつな予感。嫌な予感だ。それは見事的中して……そして……

岸島数夏は死んでいた。

第31片 文系少年と妄想少女の改変（後書き）

30片でキャラをまとめたのでどどん！と話を動かしました。

ええ、短い話が多い中での長編突入です。

夏休み前の彼らの活躍に期待！していきたいんですがねえ・・・。

でわ。

第32片 文系少年と妄想少女の改変？

「それは笑えない冗談ですよ、先生。数夏がなんだった？」

「いや、この前亡くなっただろ。先生も本当に悲しかった・・・お前も葬式にいただろう」

「俺が・・・？」

「確かにお前と岸島は仲が良かったからな。でも混乱するな」

意味が分からなかった。なくなったってどういうことだ・・・？死んだって事なのか？なんで？昨日までは普通に話せていたのに。そして今日も同じ日常だったはずなのに。

「おはようーっす」

「中丘。遅いぞ、もう終業式が始まる」

そう言っただけの中丘という生徒は数夏の席に座ろうとする。それを防ぐように俺はそいつの胸ぐらをつかんで壁に叩きつける。

「なにやってんだ、お前」

「いつっー、いきなり何すんだよ、七実」

なぜ俺の名前を知っているんだろう。俺はこいつを知らない。そう、いなかったやつがいるんだ。

「そこは数夏の席だ」

「数夏？岸島なら死んじゃったろうが」

「そんなはずねえだろ！昨日まで俺はあいつと一緒にいたんだぞ！」

「はあ？何言っただけ？岸島はもう2か月前に死んでいるだろう・・・」

「」

「なにいつて・・・」

そこで気付く。まわりがおかしいんじゃない、俺がおかしいと思われていることに。まわりのクラスメイトからは同情の視線をむけられている。そう、数夏の死を認めたがらない可愛そうな人だと思われる。

「なんなんだこれ・・・ちくしょう!」

「おい、七実! もう終業式だぞ!」

俺はどんな言葉も聞こえない。もう何も考えられない。考えたくない。廊下をひたすら走り、玄関まで行く。これからどこへ行くかなどは分からない。けれど、何かに集中しないとやってられなかった。死ぬしかないと思ってしまふように。

ドンッ

「つつ・・・」

「おつとつとごめんなさい」

俺は前を見ずに走っていたため誰かにぶつかってしまふ。声からして女の子だろうけれど。俺は顔をあげた。

「す、すみません・・・」

「あ、こちらこそってなんだ七実くんじゃないか」

「え・・・?」

知り合いか?と目をこらす。

「なんで・・・?なんでだよ・・・」

「ん？」

「なんでお前がここにいるんだ！」

「なんでって今日遅刻しそうになってたんだよー、間に合うかな？
終業式」

そこにいたのは俺の知り合いで、そして今日ここにいるはずのないやつ。

「山梨……」

「ん？なんだい？そういえばなんで七実くんはここにいるんだい？」

「お……まえ……熱は？」

「熱？なんの冗談だい？私はいつも元気だよー！」

「そんな……くっ！まあいい！数夏を知らないか？」

「す、数夏ちゃん？」

「おう、あいつ俺にドッキリしかけてるのかもしれないんだ」

「そ、そうなんだ……でもね、七実くん……」

「死んだなんて言うんだぜ。ひどい冗談だな」

「七実くん……その……数夏ちゃんはね……」

「山梨……？」

「死んだんだよ」

「！……ちっ！」

俺は玄関から飛び出す。しかし山梨と話して少し考えることができた。次はちゃんと目標がある。

「やっぱり無理だったか・・・」

俺が来たのは住宅街。数夏の親父の家があった場所だ。本当ならまだ残っているはずなんだが、そこはどでかい空き地になっていた。

「あの、すみません」

「?なんでしよう?」

「ここに住んでいた岸島っていう人はどこにいったんでしようか?」

「ここには誰も住んでませんでしたよ」

「え?そんなはずは・・・」

やはりおかしい。あんなでかい豪邸、人が気付かないはずがない。つてことはなかったことになってる?

たまたまいた女の人にきいてみたが何かおかしい。

「でもこんな不思議な空き地、あやしくないですか?」

「え?普通の空き地でしょ」

「・・・そうですね。ありがとうございました」

「ええ」

俺は寮に戻ることにした。

○

「緋色・・・数夏は・・・」

「・・・私も分からない」

「高松も駄目か」

「うん・・・ごめんね」

俺は緋色と高松に全て話した。昨日まで山梨を看病していたこと。そして昨日まで数夏と一緒だったこと。しかし緋色も高松もやはり数夏は生きていないと言っている。ちなみに香織さんに話したところ泣きながら慰めてきたので諦めた。

「そうか・・・いや、いいんだ」

俺はある確信があった。さっきの住宅街での女の人は空き地を普通の空き地だと言っていた。あんなドームが何個も入るような空き地を。そう憶測だがあれは俺にしか見えていない。俺がおかしいと錯覚させるようなことばかりだが俺はおかしくなんかはずだ。それを証明するためには・・・。

「おい、柏部」

俺は柏部の部屋の前でノックした。しかし返事はない。

「・・・」

「入っていいわ」

返事があったので部屋に入る。しかしその前に数夏の部屋の前に行く。あいついつも勝手に俺の部屋入ってきてるし、俺も入っても・・・駄目ですよ。しかしドアが少し開いていてその隙間から中が見える。

「不可抗力・・・不可抗力・・・不可抗力」

そういつつ見ると中には何もなかった。俺は少し残念に思い、閉じようとするのと1つだけ物があった。

「ふふっ……」

俺が数夏の誕生日にあげた猫のコスプレ。

俺はそのままドアを閉め、柏部の部屋に入る。

「柏部」

「あなたが聞きたいことは分かるわ。だから大きい声を出さないで頂戴」

「お前……」

「まず、私は正常よ。それとおかしいのはあなたじゃない。おかしいのはこの世界」

「この世界？」

「私も時間がない。座って頂戴。1回で理解しなさい、低能な人間」

この世界がおかしい。そう言われただけでも救われた気がした。この世界で起こっている不思議。それを知らなければならぬ。

「説明するわ。これは全部『妄想』よ」

その一言とともに俺らの作戦会議が開始された。

第32片 文系少年と妄想少女の改変？（後書き）

いつもはこう、日常を書けばいいのですがこれは難しい。

自分で書いといてなんなんですけど。

まだ改変編は続きます。

でわ

第33片 文系少年と妄想少女の改変？

「全部・・・妄想？」

「説明はするわ。だから座って」

「お、おう」

俺がくることを分かっていたのかすでに座布団が容易されていた。・・・こいつこんな格好してるから勘違いしやすいが趣味が意外と可愛らしいんだよな。この座布団もハートのピンククッションだしな。

とうかこいつの部屋に初めて入ったが、アニメ、漫画関連のものももちろん全体の8割を占めているが他の2割はピンクだった。あとはクマの人形とか。普通の女の子みたいだな・・・。

「何をじろじろ見てるの・・・？」

「い、いや、なんでも」

「・・・まあ、いいわ。じゃあ説明するわよ。ドアは閉めたわね」

「ああ」

「じゃあ、まずこの異常な世界について」

「驚いたぜ、数夏が死んだことになってるんだもんな」

「ええ、でもこのまま汚染が続けば死んだぐらいじゃすまないけれど」

「？」

「存在の消滅」

「存在の・・・」

「生まれなかったことになるの。存在ごと消える」

「そんなことってできるのかよ」

「できるわ、彼女の『妄想』なら」

「そこがよく分からない・・・」

俺は質問することにした。そう、『妄想』。山梨がだす妄想はこんなに色々な人を巻き込む程のものではないはずだ。もしできたとしてもなぜ山梨は数夏を消そうとしているんだらうか・・・。

「今、あなたが思っている通り、普段の戸張さんなら人を巻き込むような妄想はしないわ。それにこの現象のように日本中、世界中に広まるような感染力もない」

「じゃあ・・・どうして」

「あなたが一番知ってるじゃない」

「え？」

「私は言ったでしょう、普段の戸張さんなら・・・と」

「普段の・・・？」

普段の？というといつも通りのだよな。山梨は今日も普通だった。普通に学校にきていたはずだ。どこもおかしいところは・・・いや、それか。普通に学校にきていたこと自体異常なんだ。だってあいつは・・・。

「夏風邪・・・か」

「その通り。今、戸張さんは夏風邪を引いている」

「でも学校にきてたときは熱なんてなさそうだったけれど・・・」

「あれも妄想よ。妄想で熱を感じさせないようにしているだけ。一時しのぎよ」

「ってことは夏風邪のせいで暴走してるってことか」

「そう。夏風邪というイレギュラーな要素によって戸張さん自信が混乱し、その妄想がどんどん広まるような妄想をしているの」

「じゃあ、どうすればこの妄想は終わるんだ？」

「熱が下がるまでよ」

「そうか・・・」

俺は安心していた。もう一生このままかと思ってしまったがもし解決策がなくてもいずれもとに戻るということに。しかしそれは間違っていた。

「でも、もしね。その熱が下がらないうちに数夏さんを知っている全員が妄想にかかってしまったら元には戻らない」

「!!!」

「ちなみに今のところ彼女を覚えているのは私とあなたよ」

「2人・・・だけ・・・」

「ちなみに私はもう駄目ね。時間の問題。私は妄想に対抗する術を少し心得ているのだけれど、それでもこの感染力には無理よ。耐えられない。でもあなたはどうか？」

「どうって・・・」

「あなたはそんな術などないのになぜ今、妄想にかかってないの？彼女と親密じゃないものから記憶は消えていく。でもいくら親密でも普通ならもう感染しても普通だわ」

「そんなこと言われても俺は何も・・・」

「別に答えると言ってるわけではないわ。あなたが妄想に対抗できるのならそれでいいじゃない」

「は？」

「あなたが妄想を食い止めるのよ」

「・・・まあ、ここで無理なんて言っつもりはねえ。で、どうすればいい？」

「分からないわ」

「・・・」

「具体的な方法なんてない。あなたが探すの」

「いや、果てしなさすぎんだろ」

「でもやるの。私には何も言えないわ」

「はあ・・・やっぱりなあ・・・ま、そう都合よくはいかねえよな」
「ごめんなさい・・・役に立てなくて・・・私はいつもそう・・・
結局こうなの・・・」

「いいんだよ。お前は十分だ。だからもう頑張らなくていい」

俺は柏部の頭を手をおいて頭を撫でる。

「は・・・はう・・・」

「何を言っても信用されないかもしれない。この状況を打破できる
解決策なんてないかもしれない。でも諦めるわけにはいかねえだろ
うが。数夏が・・・みんなの記憶が・・・偽物の記憶で埋め尽くさ
れた世界には俺はいたくねえ。」

「七実・・・くん・・・」

「みんなも頑張ってくれたんだよな」

「ええ、私だけじゃなく、緋色さんも小鳥さんも必死で抵抗してた
わ」

「じゃあ、俺がそんなみんなを助けるためには1つしかねえだろ」

「でもあなたは何をやるの？時間なんてない。あなたが感染するま
であとどのぐらいの時間があるか分からないのよ」

「大丈夫なんて俺は言えない。はつきりと助けるなんて言えない」

「ならあなたは どうして諦めてないの？」

「諦めるなんてできねえだろうが。苦しんでるのは俺らだけじゃな
い。山梨もなんだ」

「・・・できるの？」

「だからできるなんて言えない。頼りないかもしれないけれど・・・
言わせてくれ」

「任せる！」

俺は柏部の頭から手を離すと立ち上がり部屋を出る。あじさい荘を出て解決策を探す。終業式も夏休みも無視する。みんなですごさねえと俺は夏休みなんて認めない。俺は走り出す。我武者羅に闇雲に。

第33片 文系少年と妄想少女の改変？（後書き）

どうも。

お久しぶりです。

なかなか更新ペースが上がりません・・・。

まだ改変編が終わっていないのでなんとも言えませんがよろしくお
願いします。

でわ

第34片 文系少年と妄想少女の改変？

任せるとは言ったものの・・・なかなか難しいよなあ・・・。手がかりもなし。どうしたらいいかも分からないなんてさ。やるべきことはやった。岸島の家についても意味はなかったし、それにもう誰も覚えていないだろう。柏部ももう・・・。

「あー、そういえば世界が完璧に変わるまでどんくらいかかるんだっけな・・・」

大事なことをききそびれていた。いや、きっとそれも柏部には分からなかっただろうな。とりあえず、俺は寮を出て手当たりしだい探すことにした。俺はこのようにすることに耐性がある。それは昔、ここまで大きくなかったが妄想が暴走する事件があったのだ。まさか人を消すぐらいの力があるとは思わなかったが。

「まずは学校か？そこぐらいしかねえよなあ・・・」

「おやおや？そこにいるのは七実くんじゃあないかい？」

「え？」

そこにいたのは山梨だった。

「七実くん終業式に出ないなんて不良の第1歩ですな。ことりんやひいろんもいなかったし」

「ああ、それはな・・・つて高松や緋色も？」

そうだ俺はバカか。緋色も高松もさつき寮にいて話しただろうが。でもなんであいつらが？

「なんかねー、七実くんが心配なんだってさ。私も心配だったけど、先生の言い訳役に1人いるでしょ？先生を納得させるのは大変だったんだから」

「そうか・・・さんきゅ」

この感じだとこいつ自信にこの世界の改変の自覚はねえのか・・・。
やっぱり能力の暴走。

「で、七実くんはどこに行こうとしているのかなー？」

「ちよつと買い物だ」

「買い物かー、私も行ってあげようか？」

「そ、それは大丈夫だ。俺1人で十分」

「なんだいなんだい？私がいたら困るようなものを買うのかい。じ

ゃあ、先寮に戻ってるねー」

「おう」

俺は山梨と別れとりあえず学校に行くことにした。

「学校・・・って今終業式終わったばつかりだろ。うわー、先生に見つかったら何言われるかわかんねえな・・・」

俺は学校に行く途中のムカデ橋を通りながら考えていた。空には輝いている飴がいくつも見える。そういえば、と思い今自分が歩いているところ、すなわちクッキーの部分を食べてみる。

「やっぱり、腹ごしらえは必要だな」

ちょうどお昼時だったからな。ちょうどいいやと思いドラゴンの頭の上に乗る、ラーメンを食べ、ドラゴンから降りて、学校のシンボルでもある赤いティラノサウルスが見えたので急ぐ。

恐竜だよ絶滅してるはずなんだよ！

「これはあれかな・・・主人公らしく戦えってことかな」

残念だけど俺にはなんにもないんだけど。手から火がでたりとかすればいいんだけどなあ。

「これ確実に死ぬよね。俺、学校に入るだけで命失うんだけど」

まだやることいっぱいあるんだけどなあ・・・。

「しょうがない。場所を変えよう！」

俺は探す場所を変えた。いや、逃げたわけじゃないよ！ただちよつとね、都合が悪くてさ。

「ティラノサウルスは・・・」

俺はチラッとティラノサウルスを見た。すると・・・。

ティラノサウルス。赤。学校。妄想。校門の前で立ちすくむ。校門の前で方向転換。ティラノサウルスは学校のシンボル。

「ぐあ・・・」

見た情報が文字として俺の頭の中に流れ込む。なんだこれ・・・。するとティラノサウルスは消え、まわりのファンタジーな要素が消えていく。

「？なんだこれ妄想が解けていく？」

まわりはあっという間に元の世界に戻っていく。

「あ？なんだっただよ・・・今の。まあ、ちよつどいいや」

俺は学校に入ることにした。

○

「ああ・・・やっぱり何もねえな」

俺は教室を1通り見ていた。うーん、先生に見つからないようになっていづのも難しいな・・・。俺のことを知らない先生ならいいが・・・。

「最後に・・・」

自分の教室によることにした。いるわけがないけど。でも何かないかと最後まで確認していなかった。手がかりぐらいはあるかもしれない、あるのは数夏のかわりにある男子生徒の座席だけだ。

「はあー・・・」

ガララ

教室の戸を開ける。

「あーあ、おっそいですねえー遅いです。黒曜石はぐったりです」
「は？」

「待ちくたびれちゃいました。普通女の子を待たせませんよ。デートのときには10分前です」

「誰だよ・・・」

「ん？ああ、そうですね。黒曜石はまだ自分の名前を名乗っていませんでした」

そこにいたのはながい黒髪。でも下の方でカールされておりボリュームが半端じゃないことになっている。服は黒を基調としたドレス。しかし前に白いエプロンをつけているためどうやってもメイド服にしか見えない。しかしそんな全てを俺は見たことがなかった。

「どうも黒曜石と申します。以後お見知りおきを」

そいつは俺に向かって笑顔を向けた。

第34片 文系少年と妄想少女の改変？（後書き）

どうも、お久しぶりです。

また更新が途絶えていましたがようやくできました。

次もいつになるか分かりませんが地道にやっていきます。

でわ。

第35片 文系少年と妄想少女の改変？

小学生だった。初めて出会ったのは小学5年生。クラス替えで初めて見るような顔ばかりの中に彼女の顔もあった。僕は気にもとめなかった。それはそうだ。まさしく他人である彼女を気にとめるとすれば顔だろう。確かに可愛かった。しかしそれだけの話で小学生である僕には何も感じなかった。

「これ」

「ん？」

そんな彼女と初めて言葉をかわしたのもクラス替えしてから3カ月たったあとだった。それも意味のない理由で。ただ僕が消しゴムを落としたのを拾ってくれた彼女。長い髪は2つに結ばれることが多かった。

そんな彼女。

「これ消しゴム」

「あ、ありがとう」

「どういたしまして」

そんな彼女は常に転んでいるような危なっかしい子だった。ひざまで隠れるソックスをいつもはいていたけれど、そのひざは絆創膏がはられていることを僕が知ったのは初めての会話から1週間後のことだった。保健係だった僕は転んだ彼女を保健室へと連れて行った。その後も教室に連れていってあげようと治療が終わるまで待つていた際に見たのだ。ついでにパンツまで見えてしまったが黙っておこう。

「じゃあ、教室行こう」

「うん・・・ありがとう」

僕はこれでお礼を言いあったことになる。しかしこの時も僕はこの子のことをなんとも思っていない。むしろなんか消しゴムを拾われたことが気に入らないとさえ思っていた。

「本を読むの？」

「・・・うん、一応」

でも彼女は違った。そんな僕に対して他の人と同様に接してくれたのだ。よく考えれば別に避けてたわけでもないのが当然ではあるのだが。

「ふうん、すごいね」

「そうかな・・・みんなも普通に読んできると思うけど」

「あたしは本なんて読めないよ」

「そんなこと・・・」

少し嬉しかったのを覚えている。しかしただ褒められるのも恥ずかしいため・・・

「君にも読めるよ」

「あたしは・・・」

「君にだって目があつて頭があるんだから」

「うん、そうだね。読んでみるよ」

僕はなんてバカだったのだろう。このすぐ1カ月後には彼女のことを好きになっていった。それはなんの理由もなくただ自分に優しかったからという単純な理由で、バカな男子だったというだけだ。しか

し僕は知ってしまった。彼女が僕だけじゃなくみんなにかくしていたことを。それは些細なことだった。

「あれ？」

今度は僕ではなく彼女が消しゴムを落とす番だったのだ。しかし僕と違ったのは消しゴムが落ちて音も音がしなかったということだ。落とした高さが問題だったのかどうかは分からないが。小柄な彼女だからそれもあるかもしれない。彼女は気付いてないのか僕が今度は消しゴムを拾う番だと思い、拾う。

「……………」

声をかけるのが恥ずかしいため、僕は前にまわりこんで消しゴムを手に乗せ差し出した。それに気づいたのか彼女は、

「?どうしたの？」

「あ、いや、そのこれ……………」

我ながら意味が分からない。だが消しゴムで気付くだろう。そう思っていた。けれど。

「?」

「えっと…………その消しゴムお、落としてたから」

これで分かると思ったた。思っていたのに。

「消しゴム?ど?」

彼女に消しゴムは見えてなかった。それだけじゃない世界が見えて

なかったのだ。彼女は目が見えてなかった。それだけでも驚くべきことなのに。それなのに僕は。僕は彼女に。

『君にだって目があって頭があるんだから』

こんなひどいことを。僕は彼女に顔を合わせる事ができなかった。そして中学に行く時彼女は引越してしまい、僕が彼女と会うことはなかった。

○

「がっ……」

「あれれ？どうしたんですか七実さん」

「なんだよ……今の……」

「もしかしてー見えちゃいました？過去が」

「過去……」

「変更は進んでる。岸島数夏との過去の選別が始まりました」

「選別だと……」

「岸島数夏と関係のある記憶を消し、関係ない記憶は残す作業です。まあ、その際に過去を見ることもあるらしいですが。あの反応。悪い過去でも見たんですか？」

「う……るせえ……お前は誰だ……」

「黒曜石っていったでしょう。黒曜石は黒曜石なんですよ」

「……」

「そして岸島数夏の代わりです」

「!?!」

ここで俺は黒曜石、もといメイドみたいな恰好をしている女の子のいる場所は数夏の席ということに。

「岸島数夏がいなくなったこの世界には穴埋めが必要です。それで生まれたのが黒曜石です。まあ、そうですね・・・存在でいうなら岸島数夏は完璧に消えました。黒曜石がここにいるというのがまず証拠ですね」

「・・・・・・・・」

「まあ、勘のいい人なら気付きますが、岸島数夏を戻す方法」

「・・・・・・・・」

「無言ということは気付きましたね。それは黒曜石を殺すことです」

「まだ黒曜石は妄想の状態。殺しても罪にはなりませんし、穴埋めである黒曜石がいなくなれば他に替えがなく、岸島数夏はもどに戻る」

「で、俺にどうしろと?」

「簡単な話です。黒曜石を殺したらどうですか?っというだけですよ。さあ、殺すなら殺しなさい。黒曜石はめんどろなので抵抗しません」

「断る」

「・・・・ここで良い子ぶっても意味はないですよ。黒曜石以外見えないし、その黒曜石もここで死ねば・・・・」

「うるせえよ。良い子ぶるとか関係ねえだろうが。お前は今ここにいて、そして生きてる。それを邪魔する権利は俺にはねえ。殺しなにかもつてのほか。確かに数夏を戻そうとしたらお前は消えるかもしれない。でも俺はお前を殺さない」

「ではどうするんですか?」

「この世界に証明するしかねえだろ。数夏がここにいたということ

を

「いやでももう岸島数夏は・・・」

「いるよ」

「!？」

「いるさ、今でもあいつはいる。だからついてこい、黒曜石」

「ふっ・・・何やら面白いことになりそうですね」

俺は走る。簡単だったんだ。こいつが穴埋めとしてでてきたということは数夏はもういないということ。じゃあその世界に数夏がいたことを示せばいい。さっきまでは数夏すくなからずいた。でも今は違う。

「・・・・・・・・ちっ・・・時間がねえか」

「忘れそうなんですか？」

「・・・・・・・・」

「恥じることじゃないと思いますよ。あなたは一番頑張ったのですから」

「・・・・・・・・バカ野郎が消えるんじゃないぞ」

時間はもうない。そのために走る。ある目的地へいくために。

第35片 文系少年と妄想少女の改変？（後書き）

1カ月ぶりです。

遅くなりましたがとりあえず。

これは日常を主にしたいので今書いているような日常以外のものは
すぐ終わると感じるかもしれません。がよろしく願います。

でわ。

第36片 文系少年と妄想少女の改変？

「なあ、数夏」

「はい？どうかしました？」

「いや、あのさー・・・ずっと気になってたんだけどお前って何から何まで名前書くよな」

「これはなくさないようにするためです」

えんぴつに定規、カバンからなにまで書いてあったのを見つけた俺は質問してみた。

「でもお前、ちょっとそういうの恥ずかしいみたいな年頃じゃあ・・・」

「え？」

数夏の顔はとても高校生には思えなく、背の低さもあり、中学生・・・小学生ぐらいに見えてしまう。

「うん、よしよし、偉いぞー」

「なんか失礼なこと思いましたよね、今」

「お兄ちゃん嬉しい」

「誰がお兄ちゃんですか！同学年ですよ！」

数夏無邪気に騒ぎながら・・・

「なんで無視してかってに地の文に入っちゃったんですか!？」

「お前こそ地の文を読むな！」

○

あの話が本当だとするならば俺のみたものが妄想じゃなければ・・・

「ここは？」

「俺らの家、あじさい荘だ」

「それはなんとなくわかりますけど・・・」

「いいからこい」

俺はあじさい荘の中に入っていく。そして数夏の部屋の前に到達する。あじさい荘の中には人が1人もいなかった。どうやらでかけているようだ。

「ここに何かあるんですか？」

「まあな」

俺は躊躇などしないで部屋に入る。そこには俺があじさい荘を出る前に見た・・・

「猫の・・・コスプレ衣装？」

「ふふふ・・・そうさ。これが証拠・・・」

俺は猫のコスプレの近くに行き、よく見る。絶対にどこかにあるはずだ。絶対に。探せ。俺！時間がない・・・って

「あれ？」

「どうかしたんですか？」

「俺ってここを出てからまだ1時間もたつてないのにこんなに妄想の浸食が？」

「何を言ってるんですか。妄想の前に時間の概念なんてありません。時間はもう3日目に入ろうとしています」

「なっ……」

そんな……もたもたしてらんねえ！探すしかないのだから。

「あつた！」

「まったく……あなたは一体何を探して……」

それを見た黒曜石もかたまる。そこにあつたのは……

「名前……ですか……」

「そうだ。確か山梨はこれをまだ数夏が持っていると思つてないからな。俺だつてさっきというか時間で言うところ3日前までは知らなかった。捨てたものだとばかり。だから妄想は消し忘れたんだ」

「そして……」

「そう。数夏には所持品に名前をかく癖があつただから……これは数夏のいた証拠になる！」

「なるほど……でこれをどうするんですか？」

「……」

「え？」

「分かんない……」

「これはこれはとんだヘタレ主人公についてしまったものです」

「なんか……こう……掲げるとか？」

「コスプレ衣装を！？変態の所業なんですけど」

「他にどうしろつてんだよ！お前妄想ならなんか知つてんだろ！」

「だから言ってるじゃないですか……」

その場で黒曜石は嘆息した。

「黒曜石を殺しなさいと。包丁で刺しても大丈夫です。痛みの方は苦手なんであるべくすぐやれるやつを……」

「だからそれは却下だって。殺すんじゃないくて戻すんだよ、元の世界に」

「でも実際どうするんですか？」

「むー……誰に認めさせればいいのか……山梨とか？」

「今回の妄想に山梨戸張はあまり関係ないです。確かに意思はありますが、それを通して山梨戸張に話しかけるのは無駄ですよ。もう少し妄想の力が弱かったら別ですが」

「じゃあ、本格的にどうすっかなー」

しかしその瞬間さわやかな鈴の音が鳴り響く。

「なんですか？この音」

「これは……緋色のベル？」

ベルが鳴った瞬間、妄想の世界は壊れ出す。しかしそれも所詮まやかし。頭が正常に戻る時間もわずか。しかしその少しだけでいい。妄想が弱まった今なら妄想を通して伝えることができる。

「山梨。数夏はいるぞ。これを見る。名前だ。これがあいつがいたっていう完璧な証拠だ。そしてお前はもうちゃんと休め。下がる熱も下がらなくなるぞ」

バキバキっという音がする。この音はだいぶ前にもきいたことがある。

「世界が壊れる音……か」

「っていうことは黒曜石もこれまでのようですね」

「ん？ああ、お前とはもつと別の会い方をしていれば仲良くなれたかもな」

「あなたは敵にたいして何を……」

「だってお前も数夏だったんだろ？代わりとはいえ他人のような気がしなくてさ」

「……黒曜石も。黒曜石ももつと違う出会い方をしたかったかもです。あなたのまわりは賑やかで面白そう」

「疲れるけどな」

ニツと笑う。こいつは会ったときから戦う意思みたいなのがなかった。殺されるのを待っていたんだ。こいつ自信だれかの代わりなんて嫌だったんだな。まあ、憶測だけど。

「じゃあ、またな」

「うん、岸島数夏と仲良くね」

その瞬間、黒曜石はいなくなった。それと同時に世界が崩れる。俺は長い夢を見ているような感覚で。その夢が覚めたような感じがした。ただそれだけ。今回の夢だったんだ。

○

なんだろうか。この感じ。夢？妄想？なんだっけ？からだには力が入らない。なんだこの浮遊感。浮遊感とも違う・・・あれ？なんか気持ちわる・・・なにこれ。

「あ、目がさめた七実くん・・・」

「あ、ああ、うっぷ・・・気持ちわる・・・はきそう」

「ええ！？ちよっ・・・ひいろーん、袋！あの七実くんのカバンでいいや」

「なんで俺のカバンがエチケット袋！？トイレ行ってくる・・・」

目が覚めるとそこには山梨がいた。熱は下がったのか？というか俺は長い夢をみたような気がする。はて？なんだっただっけな・・・。

「あれ？吐き気がおさまった」

なんだよートイレの中に入ったところなのにーとか文句を言いながらポケットからティッシュを・・・するとなにやら紙がでてきた。

「んだこれ？」

開いて見ると黒曜石という名前のやつから。なんかどっかできいたことあんなこの名前。内容はまとめると吐き気がするのは妄想汚染のせいらしい。軽く記憶がないんだけど妄想汚染っつーことは俺はまた妄想の世界に入ってたのかね。

「はー今度の妄想は数夏を消したのか・・・なんでまた・・・」

黒曜石という人の憶測によると、俺はあることをきっかけに誰とも話さず、元気がない日々があった。これは説明しなくても分かる高校1年生のころのことだ。まわりにはなんとかしてあげたいという

人がたくさんいて手を尽くしたがどうにもならなかった。しかし岸島数夏は1日、2日で元気を与えた。それが羨ましかったらしい。この憶測は外れてるな。山梨はそんなことで羨ましがらない。

「記憶が消えてる理由は書いてないな・・・」
「・・・それは妄想の世界いすぎたせい」
「おおわ！」

俺の後ろには緋色がいた。

「なんだ緋色か・・・ってここトイレなんだけど」
「・・・大丈夫。私はあなたに興味がない」
「あそう・・・」
「・・・今回は少し妄想をあびすぎ。脳が上手く解釈できなくてなかったことになった」
「そんな長い時間妄想にいたのか・・・」
「・・・帰ってきてくれてよかった」
「緋色・・・」
「・・・明日から夏休みだからたくさん遊んでほしい」
「寝かせる。つてか今日終業式!？」
「・・・もう用意しないと」
「やべえ！」

俺は自分の部屋に戻り、制服を着る。もちろん夏服である。Yシャツの長袖をひじまでまくり学ランなのでネクタイはもともとないがボタンをあける。ズボンも薄いのを選ぶ。俺は急いでカバンに荷物をつめ・・・

「七実さん、おいていきますよー」
「ま、待ってくれ！」

なぜだろうか口元がゆるむ。長い間きいてなかったかのような感じを覚える友の声。俺はその声が待つ方へ駆け足でいく。おいてかれないように。負けないように。

第36片 文系少年と妄想少女の改変？（後書き）

これで改変編終了とさせていただきます。

次からはじみーにたわいもない日常を書いていくのでよろしく願
いします。

でわ。

第37片 文系少年と河内先生の騒動

あー、どもども。七実未空です。いやーなんかいいね、久々だね。こういう短編な感じ。あいさつはここまでにして、終業式を終え、今日から夏休み。夏の暑さがじりじりとそして草木は花を咲かすのではなく真緑色をしている。そんな夏休み。高校生ならば誰しも楽しみにしているわけだが……。

「あつっー……」

俺は違った。基本暑さが苦手なのだ。冬の方がまだマシだと思えるぐらい。暑さはまだ本格的になっていないというのに……なんだこれ。もう無理なんだが。

「1階でこの暑さかよ……」

俺は朝起きると同時に自分の部屋の暑さに吐きそうになり、みんなが使う1階。全てをリビングとして使っているように見える広い部屋に降りてきたわけだが……暑い。ちなみにエアコンはなしだ。

「だるいー」

「だるいのは私も同じなんですけども」

俺の座っているソファの隣のソファに座っていた数夏がしゃべる。うん、みんなも同じだっていうのは重々承知なんだけどさ。文句を言わずにはいられないんだよ。

「ほら、どこかに足をぶつけたとき、痛いって言った方が痛みがへるみたいな原理だね。暑いときにも暑いって言った方が……」

「暑いときに他の人の暑いを聞くほど暑苦しいことはないと思いますけど」
「はい」

俺もそんな経験があるから何も言えない。そうだよ、嫌だよ。なんかイライラするよね。

「でもさー、夏休みって普通海とかプールとか行くよな」
「なんで主に水辺なんですか・・・」

別に水着に興味があるというわけではないよ。本当だよ。いや、マジで！

「夏祭りとかあるでしょう。私はとりあえず何か食べたいです」

「あまり混んでるところは行きたくないんだけど」

「え？七実さんって浴衣の帯で女の子が縛られてるのを見るのが好きなんじゃないんですか？」

「浴衣って言えばいいだけだろうが！なんでわざわざ生々しい表現にするんだよ」

「・・・・・・・・」

「俺の普段の行いかよ、この野郎！」

とまあ、会話で暑さを誤魔化そうとしたのだけど・・・無理でした。セミの鳴き声が聞こえるわけじゃないけれど、どこかうるさい！と叫びたい自分がある。ほんと夏は苦手だな！

「そういえば七実さんたちって去年の夏とかどうしてたんですか？」

「去年の夏・・・別にそこまですごいことはしてないけど・・・祭り行った程度かな」

「やっぱり祭りですか」

「そのやっぱりに悪意がこめられてないか」

すると俺の携帯が震える。携帯を開くとクラスの友達からだった。内容は数学の提出物を出してないだろということ。忘れてた。とりあえず、学校に行つて提出するかな。

「数夏、俺これから数学の提出物出してくるから」

「あれ？出してなかったんですか？」

「おう、忘れてた」

「いつてらっしゃい」

「いつてきます」

○

「あー河内先生いますかー？つと」

俺は学校の職員室にきていた。河内先生とは新しく入ってきたばかりの若い先生だ。若すぎる気がしないでもないぐらいなのだ。が優しいので生徒からの人気はある。俺のクラスの数学の先生である。

「ああ、七実くん」

「河内先生、すみません！」

「え？なにがだい？」

「この数学の提出物出し忘れてました」

「じゃあ、受け取ります。次は忘れないようにね」

「はい」

この程度で終わってしまう。さて、これから何しようかなとか考えていると……。他の先生が俺らの方に近づいてくる。あの先生は、皆川先生だ。国語の先生でこれまた俺のクラスの国語教師である。天然そうで気が弱く、背も低いので生徒になめられがちだがそれすらもかわいそうだからという理由でだれも皆川先生に突っかかる人はいない。若い先生である。

「皆川先生、こんにちは」

「あ、七実くんこんにちは」

俺はこんな良い先生に囲まれていながらもこの状況をめんどくさいと思っていた。理由は簡単。

「河内先生もこんにちは」

「み、みみみ皆川先生！？こ、こんにちは」

「・・・・・・・・・・」

めんどくさい。まあ、生徒ならだれでも知っているようなことだが河内先生は皆川先生のが好きだ。それでいてあまりしゃべれないから進展はまったくしないんだけど。

「七実くんはどうしたの？」

「あ、いえ、提出物を忘れて。じゃ、用がすんだのでこれで」

「ま、待ってくれ、七実くん」

「ええ！？」

「ここに俺を1人にしないでくれ！」

「そんなんだから皆川先生といつまでたっても……」

「な……お、俺は別に皆川先生など……」

帰り道。数夏に河内先生の哀れ話をお土産にしようとする時よりも軽い足取りで進む。ぽてつとその時、何かに頭がぶつかるのを感じた。しかしそれは逆で頭に何かがあたったみたいだ。

「ん？ペットボトルロケット？」

昔、小学生のころペットボトルロケットを作ったのを思い出す。水の力か何かで飛ぶ自分で作れるおもちゃのはずだが……。

「なんか……ごつい……」

エンジンみたいなのがついてた。スーパーエンジン、ペットボトルロケットつきみたいな感じだった。スーパーエンジン、ペットボトルロケット添えみたいになっていた。これじゃむしろペットボトルロケットがおまけみたいなものだろうに。

「はぁーなんかなー」

夏休み初日にしてはなかなかだったと思う。夏休みの宿題に絵日記があるわけでもない。だったら書けないことも満喫しなければ。俺は高校生なのだから。

第37片 文系少年と河内先生の騒動（後書き）

どうも。

もうそろそろ話も40話に近づいてきました。

今回は先生たちをだしましたが、これで終わりではありません。

次回は全く別の理系少女と文系少年。をおくりたいと思います。

でわ。

第38片 恋愛少女と飛行少年の騒動

「あつ！今日日直だった！」

「ちよつと沙紀ー。朝ごはんはー？」

「ごめん！急いでるから！」

私は小森沙紀こもりさき。ごく普通の女子高生だ。今日はたまたま遅刻してしまっているけど本当は朝も平和です。ほんとうに。私はドアを押し上げ、ようやく、朝の光を浴びる。とても気持ちがいい。しかしそんな暇はない。

「はあ．．．はあ．．．急がないと．．．」

私は走る。この時この瞬間を。一生懸命後悔しないように．．．。ていつかなんか暑い．．．なんだろう。これ。

「あ．．．．．あ．．．．．」

今日から夏休みでした。

○

開始早々すぐ後悔することになるとは思わなかったけれど現在、私は学校にいる。なぜか引き戻すのも恥ずかしくて学校まできてしまった。家から近いし、別に疲れる以外はなにも無駄じゃない。廊下

を歩き、自分がおかしいと考え始める。

「ほんと・・・何してるんだろう・・・私」

「あれ？小森？」

「え？ああ！」

いきなり声をかけられ後ろを振り向くとそこには私の憧れであり、
気になる人である先^{さき}_{いづち}先輩がいた。メガネをかけていて黒髪の大人
しそうな先輩だ。

「どうしたんだ、こんな時間に？」

「あ、いえ、その・・・なんとなくです」

「なんとなくて学校に？それはあやしいな」

先輩。先輩も十分あやしいです。部活はあるかどうかも分からない
飛行部とかいうやつだし、学校にいる理由がまったく分かりません。

「まさか、登校日と間違えたとか？」

「は、はあ・・・」

先輩ー！その手に持つてるの日直がつける日誌ですよね！？あなた
もだろ！あんたもこれ絶対登校日と間違えたでしょう！隠そうとし
てるよ、この人こんなにボロボロなのに助かるうとしてるよ。

「あ、じゃあ、先輩ももしかして登校日と間違えたとか？」

よし、助け舟をだしましたよ。これできつとお互い間違えたことを
認めあえる関係に・・・

「あ、いや、僕は・・・ぶ、部活だよ」

隠し通そうとしてるー！もう無理だよ。やめてください、先輩。もうその日誌が証拠ですから。間違えたことを認めれば良い話ですから。

「いや、本当に部活さ、ほら。このペットボトルロケットを飛ばそうと思ってね」

無理がある！それは無理があります！なにそのペットボトルロケット。それでなにをするの。飛ばすの？それを飛ばすために学校にきたんですか。

「へ、へーそうなんですか」

嫌われてはいけない。私はその一心で話し続ける。

「君も飛ばすかい・・・」

え？私もこのペットボトル・・・

「このペットボトルロケットスーパーエンジン型を」
「先輩！」

ここはつっこまずにはいられませんでした。

○

「先輩・・・それ・・・」
「ん？」

スーパーエンジン、ペットボトルロケットつきみたいになってますよ！それペットボトルロケットの方がおまけみたいになってるんですが・・・。

「それ普通水とか使って飛ばすんじゃないから水」

とペットボトルロケットを見せてくる。・・・・・・ちよつと水で湿ってるだけじゃないですか・・・。

「じゃ、行くぞー」

「はい・・・」

ゴゴゴゴゴゴ・・・なにこの地響き。これ工作で作った程度のものじゃ絶対にでない音なんだけど。

「発射」

シューーーーーー

「・・・・・・」

まあ、そうなりますよね。一瞬でロケットが見えなくなる。海にむけてはなたれているため、人にぶつかる恐れはないらしいけど。

「いやー・・・清々しいね」

何が!?

○

ほんとうになんで私はこの人のことが好きなのでしょうと疑問に思うことがあります。でも行動でもなんでもなくただ好きなのだろうと思う。

「いやーいい飛びっぷりだったな」

「はい」

だから私はこんなにかしいことをしていても笑顔でいれる。

「あの一・・・先輩」

「ん?」

だから私は決心する大事な大事なこの言葉を。

「今日、日直だと思って学校きましたよね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その後、エンジンの動力が足りなくて海に落ちる予定だったものが

手前で落ちるときいたとき、人にぶつかりませんようにと神社で祈りました。

第38片 恋愛少女と飛行少年の騒動（後書き）

ちよつと違つたこの町の物語。

先生の騒動とまた違つた騒動を書きました。

そんな感じになっております。

次は普通にみんなが出るかもしれません。

でわ。

第39片 普通少年と混沌生徒会の青春

「生徒会長」

「なんだ、副会長」

「いえ、そのこの今年度の予算の話なんですけど」

「それは副会長の仕事ではなく会計の仕事のはずだが……。会計なりみやの成宮さんはどうした？」

「成宮さんは今現在、ハワイへ旅行中とのことです」

「ハワイ……？それは先日も行かなかったか？」

「はい、今回は夏休み5日目を祝うための旅行らしいです」

「そうか……で、予算でなにか問題が？」

「これなんですけど……図書室におく、漫画本も出費が50万になっているのですが……」

「これを担当したのは？」

「成宮さんがいなかったたので、書記の伊藤くんに任せたんですが……」

「伊藤君」

そう言つて会長は伊藤先輩を呼ぶ。

「これ、おかしくないか？」

「僕にはおかしいことなど見受けられません……」

「いや、ここ。これ、漫画本に50万で……」

「あ、すいません。間違つてました」

「やはりな。これからはちゃんと気をつけて……」

「はい、桁を間違えてました。500万が本当です」

「伊藤君」

「問題でも？そういえば御門副会長も何か本を足してましたよ」

「副会長」

「私は別におかしいものなど足してないです。・・・例えば・・・
これとか」

「副会長」

「副会長。それはさすがに高校生の図書室には置けません。それは副会長自らが妄想していただかないと」

「でも面白いんですよ？」

「エロ本がか。副会長あなたは女性のはず・・・なのになぜこんな本を・・・」

「興味があるからです」

「というか伊藤君も。500万は高すぎる」

「じゃあ、成宮会計に頼むことにしますよ」

とまあ、いつも通りの会話を繰り返している我が桜浪高校の生徒会。お金持ちの成宮会計にオタクのくせになぜかイケメンな伊藤書記。エロ本大好きな御門副会長。そしてそれらを前にしてもあまり動じないちよつとずれた丘森会長。これがメンバーだ。

「はあ・・・」

俺は溜息をつく。まだ無断欠席多しの幽霊部員ならぬ幽霊生徒会の飯島書記もいるのだが・・・。

「ああ、愛実会計。君の意見をききたい」

「いえ、俺は・・・」

愛実凜汰。それが俺の名前。名字が名前っぽい俺は男だし、気にすることはないだろう。それより参るのがこの生徒会の役員だ。夏休み。学校にきて何をするのかと思ったら・・・。みんなどこかおかしい。それがいつも通りっちゃいつも通りだけだ。

「さあ、愛実会計。こちらへ」
「分かりましたよ・・・」

俺は歩いて彼らの居る席まで歩く。俺は1年生だ。会長はもちろん3年生で、副会長は2年生。成宮会計は1年生。伊藤書記は2年生。幽霊生徒会の飯島書記は2年生という具合。3年生が1人しかいないめずらしい生徒会なのだ。

「で、なんですか？」

「これなんだが・・・」

「予算がすごいことになってるんですけど・・・」

「まだ君は1年生だからあまり頼めることではないのだが・・・予算を・・・」

「いや、まず、この漫画本500万もいらないうす」

「あ。でもそれ成宮のところから」

「金持ちでもそんなほいほい500万なんてもらえせんよ」

「そんなこともあるうかと小切手」

「あの野郎。ハワイ行ってる場合じゃねえぞ」

500万は俺には重すぎる。1000円札でさえ払うのに抵抗をおぼえる庶民の俺とは世界が違っらしい。

「ていうか皆さん。夏休みなのによく集まりましたね」

連絡があったのは今日の早朝。夏休みなので用事があるかと思っただけなのにみんな集まった。俺は金もないので何もすることがないだけなのだ。成宮と飯島書記はとりあえずはぶこつ。

「俺が集めたんだから俺は来たが・・・」

と会長。

「僕も基本暇だから。ああ、あと漫画本買つやつ僕が決めていいよね」

と伊藤書記。

「私も特に用事はないですし・・・」

と御門副会長。

「そうなんですか」

なんだこれ。本当に高校生の集まりだろうか。色恋沙汰などきいたこともないし。伊藤先輩はモテそうなんだけどなあ・・・。という俺も何もないわけだが。外からはグラウンドで部活をする活発な声が聞こえてくる。ああ、まさに青春といった感じだ。それなのに俺らは何をしているのだろうか。

「あ、私これから塾に行かないと」

「あ、そうなのか。じゃあな、副会長」

「あ、はい。では」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

とうとう男だけになったんだけど。俺も帰ろうかなと思った矢先伊藤書記がいきなり話しかけてきた。

「愛実。お前8月7日って暇？」

「え？はい、まあ、たぶん」

「会長どうですか？」

「俺も平気だがどうした？」

「いや、なんか海へ行くツアーみたいなのをもらったので」

「へ？俺ら3人ですか？」

「愛実。楽しいか？男3人で。チケットは6枚ある。成宮や、副会長に飯島を誘って行こうじゃないか」

「先輩・・・夏は海だっと思って思えるだけの頭があっただけですね」

「お前は僕をバカにしていけないだろうか」

「じゃあ、副会長には俺から言うておく。成宮会計には愛実会計。伊藤書記は飯島書記に連絡を頼む」

俺はまさかの夏の思い出作りをする場ができてしまったことに驚く。これはまさか本当に青春の始まりなんじゃ・・・。いや、この面子じゃあ・・・いや、この面子は顔だけはいいいからな、ちくしょう。もしかしたらまわりから見たら青春してる風に見えるかもしれない・・・いや、しかし・・・。

「そういえば飯島書記ってくるんですか？」

「ああ、あいつはいつもめんどくさいか妹たちの世話で休むかのどつちかだから。海とか祭りとか好きだから来るんじゃないかな？」

妹たちの世話ねえ・・・。てか飯島先輩って男だっけ、女だっけ？

「じゃあ、生徒会今日は解散。生徒会室の鍵は閉めておくから帰っていいぞ」

「はい、さようなら」

「海については後日メールで知らせますね」

そう言って俺らは帰宅する。はたから見たら青春なんてしていないだろうけど、俺はそれでいいとさえ思った。なぜだか心が躍るのはきつと・・・。

第39片 普通少年と混沌生徒会の青春（後書き）

まさかのまた主人公がでない……。

次こそは出したいと思いますが……。

今回や前回とちょっと違った視点で書かせていただきました。

でわ。

第40片 文系少年とあじさい荘の青春

「高松ー……」

「え？あ……七実くん……」

「あのさ……そーめん飽きた」

スパーンっと俺の頭が叩かれる音がする。

「わがまま言わないの……まったく」

「山梨……もう少し優しい叩き方はできなかったのか？」

外からはベタにセミの鳴き声が聞こえてくる。それが暑さを加速させて俺やみんなをいらだたせる。しかし高松や緋色はなぜかわわつた様子がない。むーどうということだろうか。ちなみにあじさい荘1階の食卓での話である。

「七実くん……そのちょっと違う食べ方とかしてみたら？」

「え？」

と地面につつぷしていたがよっこらせと起き上がろうと前を見る。しかし立ち上がるどころかまた下を見てしまう。た……高松。お前……それ見えるから……。

「あ、ああ……そうだな」

と下をむきながら立ち上がる。あぶねえ……夏になってうちのあじさい荘の面々もそれらしい恰好をするようになった。俺は半袖以外変わったところはないが、高松は7分のパンツに薄いシャツのよくなもの。それは少し危ない格好なのだ。ちなみに数夏は長い髪を

2つにゆったりしている。あとは薄いワンピース。紺色はなぜか夏服の制服だった。山梨もうごきやすそうな半袖短パンになっている。

「違う食べ方ねえ・・・」

俺はそーめんの山を見る。そーめんが安いと行って大量に買ってきた香織さん。しかしその後も贈り物とかでそーめんが増えていき、どうしようもない感じになっている。

「山梨なんかいいアイデアない？」

「そうだなーじゃあ七実くん目隠ししてよ」

「じゃあつてなんだよ！会話が成立していない！」

「さて、目隠しもすんだところだし」

「おい、なんでするんだよ。描写を省略するな」

「あ、あの・・・戸張ちゃん・・・それは・・・」

「なあに気にスナナ！男子高校生の胃袋は鋼でできてるんだよ。オートメールなんだよ」

「それお前が言うことじゃねえだろ。何がオートメールだ」

「どうした、鋼の」

「鋼の!？」

「でも・・・それはちよつと・・・」

「高松！教えてくれ！俺のそーめんにいったい何がされてるんだ」

「えつと・・・ふあさーって・・・」

「なんだよそれ！怖いよ、食い物の表現じゃないよ、ふあさーって」

「これをこうすれば・・・」

「あ・・・あれ？なくなっちゃた・・・」

「何が!？」

「いいよ、目隠しとるからねー」

シウルと目隠しがとられる。目の前にあったそーめんのめんつゆは

なぜか消えていた。

「逆に怖いんだけど」

「逆についていうか・・・怖いよね・・・それ」

「さあどうぞ、召し上がれ」

「いや何にもないから。致命的に何もなから」

「ええー、あるでしょー」

「お前には一体何が見えているんだろうね」

俺は食卓から立ち上がる。

「あり？どこにいくの？」

「いや、普通にお手洗いだ」

「お手洗いだつてーぷぷ、七実くん男なのにお手洗いつてぷぷ」

「何に対する笑いだよ・・・」

「七実くん自体」

「それ悪口になってるからな、ちゃんと反芻してみろよ」

「反芻つて牛がするやつだよ。草を飲み込んで出してー飲み込んで・・・」

「食事中だから！」

俺は走ってトイレにむかう。願わくばあの消えためんつゆは夢だったということでありませよつにと。

○

「あれ？七実くん、遅かったから食べちゃったよ、七実くんのめんつゆ」

「別にいいけど……」

「ことりんが」

「た、高松！？大丈夫か！？」

「う、うん……意外と」

「そうか……でもあれ俺少し口つけてたけどいいのか？」

「！？」

「あ、ことりんにとどめの一撃を！」

「え？そんなに嫌なの！？いや、確かにいやだろうけど倒れることなくね！？」

「違うんだよ七実くん。鈍いから分からないだろうけどこれは嬉しい倒れ方なんだよ」

「倒れ方で最近は感情を表現できるとは驚きだな。てか嬉しいわけねえだろうが」

「くっ……七実くんの心は岩よりかたい……ね、ことりん」

「いや、いいから助けてやれよ、高松顔真っ赤だぞ」

「誰かさんのせいだね」

そんな夏のお昼。夏休みはもう1週間過ぎていた。

「あれ？数夏いなくね？」

と俺はお昼を食べ終わったあと、気付く。1階で漫画を読んでいたらそういえばと思う。

「数夏ちゃんは……でかけてるはずだけど……」

と元気になった高松が答えてくれた。大丈夫なんだろうか。あんな

倒れ方をしていたけど。

「でかける……ねえ……」

するとガチャとドアの開く音がする。ん？と思い玄関の方を見ると数夏が帰ってきた。

「ただいまです」

「おう、おかえり」

「おかえりなさい」

「ふうー暑かったです」

「お前髪長いもんなー……2つに結んでも暑そうだよ」

「でも……可愛いよ、数夏ちゃん」

「えへへ」

「そういえばお前どこに行ってたんだ？」

「え？普通に香織さんにおつかい頼まれて……」

「ああ、そうだったのか」

「海へのチケットをゲットしました」

『なんでだよ（なんでなの）！？』

高松とつつこみかはもる。

「いえ、福引をやっていたもので……それでまさかの3等」

「マジかよ……」

「海へのチケットで、ファミリーチケットなのであじさい荘全員で行こうかなっとおもいました」

「え……全員……」

「なんかすごいことになってきたなあ……」

「じゃ、じゃあ、私は戸張ちゃんに伝えてくるね……」

「お、おう……じゃあ俺は柏部と緋色に伝えるか……数夏、お

前は・・・」

「分かってますって・・・香織さんを誘ってきます」

「よし、俺の夢が現実に！」

「思考がだだもれなんですけど」

海へ行くことになった俺らは期待に胸をふくらませ、今から用意を始めるぐらいわくわくしていた。

「お前の胸はふくらまないけどな」

「うっ、うるさいです！」

夏の思い出を、求めて・・・。

第40片 文系少年とあじさい荘の青春（後書き）

連続投稿です。

次はまた別の視点になりそうですが付き合ってもらえれば幸いです。
でわ。

第41片 普通少年と【色花】少女の香り

「みなさん、ただいまですわ」

「お、成宮。帰ってきたのか」

「はい、みなさん元気そうだなによりですわ」

今日はなぜかまた生徒会が集まった日。7月。もう少しで8月になるつかという時。成宮が帰ってきた。

「愛実くんも元気そうで」

「おう」

成宮オカリナ。クォーターだが外見は完璧日本人だ。

「あ、あの一、み、皆さんおはようございます」

「あ、皆川先生」

皆川先生は生徒会の顧問だ。まあ、よわよわしい先生ではあるがいい先生。

「あ、先生予算ができました」

「あ、ありがとうございます」

なぜ、先生がお礼を言うのだろうか。まあ、いいやと思いつつぶと気付く。あれ……？

「伊藤先輩」

「なんだ？」

漫画本を読んでいる伊藤先輩に話しかける。なにその非法法ちゃん
つて。表紙の女の子すっぱー悪い顔してんだけど。そしてなんかす
ごい量の金持ってるんだけど。

「あ、その予算なんですけど・・・なおしました？」

「なおしたとはどういうことだ？」

「いえ、あの500万」

「ああ、なおしてないぞ」

俺はふつと先生を見る。涙目のままかたまっていた。ええーちよ・
先生フリーズしてんだけど。

「先輩、先生フリーズしてますよ」

「僕は何も悪くない」

「今回は主犯あなたですよ。冤罪じゃないです」

「愛実。頼む」

「また俺ですか・・・」

そう言いつつもやらなきゃいけないような気がして先生に話しかけ
る。

「あのー先生・・・」

「はっ！あ、あの・・・これ、はその」

「いえ、それはただのおふざけで・・・」

（このままじゃ生徒になめられちゃう・・・。びしっと言わなきゃ
・・・）

なぜだろうか。何かの覚悟を決めたような表情になる皆川先生。

「愛実くん!」

「は、はい！」

「こ、これは……」

「すみません、その別に悪気が……いや、悪気しかないですけど……でも」

「え、えっちな本は却下です！」

「先生」

うん、言いたいことは分かるけど500万の方にもつつこみをいれてほしいね。予算はもちろんやりなおし。久々にきた成宮にやつてもらったことになった。というか本当に500万にはノータッチか。ここはエロ本を冗談で済ますことができ、500万はマジで冗談なんかじゃなくなる生徒会だ。

「会長、今日は何をするんですか？」

「いや、なんとなく」

「会長暇なんすね」

「みんなとも会いたかったしね」

二ヘラと笑う。会長は常に笑顔を絶やさない。笑い以外の感情を見たことがない。正直それは気持ち悪いとさえ思うのだがそれが会長。それ以外は会長でさえないとまで言える。

「私もみんなと会いたかったですわ、すわすわ」

「それはやめろ。絶対にだ」

尊敬しているからといってもやっていいことと悪いことがある。〇わすわと表記したいぐらいだ。俺ならちゃんと〇わすわと表記するだろう。まあ、まずですわと言わないから意味がない。だからそれはウソだ。らしく言うとは嘘だけど。これも嘘〇けどと表記したい。

「じゃ、じゃあこの予算案受け取りますね」

「はい、よろしくお願ひします」

「先生、その500万なおしておいてくださいよ」

と言ひ先生の後を追うように俺は生徒会室から出ていく。

「おや、愛実くん、どこに行くの？」

「いえ、ちよつとそこの水道まで水を飲みに行こうかなと」

会長に聞かれたので俺は嘘偽りなく答える。

「ふうん・・・そう」

ニコリと笑つ。

「いつてらっしゃい」

俺を呼びとめた意味はなんだろうかと思つぐらいに清々しいいつてらっしゃいだつた。会長の笑顔の裏のように会長の発言の裏もなかなか見抜けない。俺は探偵でもないので見ぬけても意味はないけれど。

「じゃあ、愛実くん、アドバイス」

「は？」

アドバイス？そんな話の流れだつたか？それとも何か水道で裏技でもあるというのだろうか。右から3つ目の蛇口をひねると炭酸飲料水が出るとか。ないない。自分で思つて自分で否定する。

「『お花』に注意してね」

「お花……？」

会長はまた笑いながらいつてらっしゃいと言ってくれる。見た目だけは女みたいなので俺としても男にいつてらっしゃいと言われた、気持ち悪いという理由から足が動かないのではない。お花？なんだそりゃ？

「は、はあ……」

俺は曖昧に返事をしてその場を後にする。生徒会室から水道はかなり近いのでいつてらっしゃいと言われるような距離ではない。俺はすぐに水道に到着する。蛇口をひねり水を飲む。もう1度蛇口をひねり水を止める。

「ふう……」

口を軽くハンカチでふいてからすぐ後ろを向き、生徒会室に直行しようとしたところ人とぶつかってしまった。背もまあまあ高く、顔を見てなくても美しいと感じる女の人だった。制服を着ている限りこの生徒らしいが俺は生徒会だからといって生徒の顔を全員覚えているわけではない。ましてや俺は1年生なのでまだ入学から3カ月ぐらいしかたっていないのだ。会長は生徒の顔を全員覚えてるらしいが……。

「おっと……」

「あらあら」

顔を見なくてもといったがそれは正しくない。顔が見れないのだ。扇子。それが彼女の顔を隠している。しかし長い黒髪は綺麗でそしてでかい髪飾りでひと房くくつてある。そして次に俺が見たのは胸・

・・・って別にやらしい意味ではない。確かにでかいが大きさを確かめたのではなく校章を確認したかったのだ。

「あ、すいません」

校章の色は青。3年生だ。でも2年生だろうが1年生だろうがこんなに綺麗な人には謝らざるをえないだろう。

「いえいえ、いいですよ。私も不注意というか不確かだったというか。それに人とぶつかるって少女漫画みたいで女の子の憧れでしょう。それを味あわせてくれたあなたにお礼したいぐらいですよ」

顔や声色から察するにこれは皮肉ではないらしい。顔もようやく見えたが確かに美しく、本当に恋をしてしまっんじゃないかというぐらいだ。しかし俺は冷静だった。

『【お花】に注意してね』

彼女の髪飾りは和服が似合うようなでかい【お花】の髪飾りだった。その他の扇子や顔、身長にスタイルどんなものをとっても和服が似合いそうな彼女。成宮もお金持ちだがこの人もお金持ちのような気品。

「えーと・・・3年生の方ですよね」

「ええ、3年生の【色花】よ」

色花？下の名前か？名字ってことはあるまいと思っただが自分自身の愛実という名字を思い出し思考をやめる。まあ、芸名みたいな名前だなお互い。

「いろ・・・はな・・・さんですね。それは本名ですか？」

「あらあら、ここで偽名を使ってどうするんですか？私は生徒ですし名前で嘘をついても意味はないように思えますけど」

「あ、そ、そうですね」

クスクスと笑う。常に笑顔なのは会長と同じだがその裏に何かあるようにすら思わせないのは会長と違うところだ。

「あなたは？」

「えつと俺は愛実です」

「それは本名ですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

なんか一本とられたみたいなお空気になっている。クスクスと扇子で口を隠し笑う色花（仮）さん。

「名字です。俺の」

「あら、珍しい名字をお持ちなんですね」

「ああ、はい」

「ではお会いできた嬉しさと一期一会のこの出会いに感謝してあなたにはこれを差し上げましょう」

その手には1本の花。俺は花の名前に詳しいわけではないので名前すらもでてこないが、しかしそれはとてもきれいに輝いていた。

「悩みごとがあったら私にお話してください」

「え？」

「そういう活動・・・というか部活をしておりますので」

「は、はあ・・・」

「では御達者で」

そうして悠然と去っていく色花（仮）さん。俺はしばらくその場でたたずみながらも生徒会室へ戻ることにした。

○

「あらあら、これはこれは珍しい方とお会いできました」

「おかしいな、同じ学年だから会わない方がおかしいんだけど・・・」

と区切り。

「君が俺を避けていない限りね」

ニコツと笑う。丘森はその顔のままだった。ずっと。

「私はあなたを避けてはいませんよ、丘森会長もとい丘森くん」

対する相手【色花】もクスリと扇子を口で隠しながら笑う。

「君さあ、俺の生徒会の後輩に手をだしたでしょ？」

「手？なんのことですか」

「さっき話していた男の子、愛実会計だよ」

「あらあらあの子は生徒会の子だったのですね」

「分かっていたくせに」

「ふふ」

ニヤリとクスリと笑う。

「じゃあ、最初に言っておこうかな」

「何をですか？」

ニコツと笑った丘森はそのまま目を元に戻す、いわゆる目が笑っていないという顔になる。

「生徒会には手を出すな」

「ふふふ・・・そう言うと思いました」

「それと君にはそのバカっぽい口調似合わないよ」

「あらあらどこまでご存じなのかしらこの会長さんは」

「俺は生徒会長だからね」

ニコツと笑い、色花も笑う。そして扇子を口の前からよけて・・・

「そうですね・・・生徒会長。生徒の長というだけあって私の動き、というより活動というより部活動には口を出さなければならぬということですか」

色花は急に饒舌になる。というよりこれが本来言葉に強い色花の姿だろう。丘森は笑顔を崩さず。

「そつちのよくしゃべる君の方が俺はいいと思うよ」

「心にも思っていないことを笑顔で言えるあなたには本当に参ります。いえ、それはもうすでに笑顔などではありませんね。エガオという負の塊のようなもの。気味が悪いです」

「はは・・・よく言われるよ」

ああ、と色花は仕切り。

「生徒会には手をだしませんよ。あなたが怖いですからね」

同時に扇子で口を隠す。

「戻っちゃった。残念だなあ」

「また心にも思っていないことを」

「それは君も同じさ」

丘森は口に出す。この学校で唯一許された彼女の名前を。称号を

「君も饒舌になったほうが楽なんだろう？ね、この学校で与えられる
2対の称号のうち1つを持つ【文系少女】の君にはね」

「ふふっ・・・」

この学校には本来2つの名前しかない。理系の最上位、頂点には【理系】の称号。文系の頂点には【文系】の称号を。妄想少女や氷結少女、雷瞬少女は先生の趣味でつけたものであり、学校に認められた称号ではない。この2つの称号をもつものは色々な場面で有利なのである。

「それよりも2年生にいらると言われてる【理系少女】の方が私はすごいと思いますよ」

「ふふ・・・そうかもね」

「それにあなたも【生徒会長】でしょう?」

「俺の君ほどの力を持っていないからね。ちょっとはいいだろっけどあってないようなものだよ」

そう言いつつ丘森は考えていた。全ての生徒の顔を覚えている生徒会長は考えていた。

(この人に2年生に自称で【文系少年】を名乗っている男の子がいるってことは伝えない方がいいかな)

しかし色花はクスリと笑う。

「ではごきげんよう」

「そうだね」

その瞬間丘森は気付く。胸ポケットに花が入れてあることに。

「あははったく……あなたどれない女だよ」

会長は生徒会室に戻る。自分の根城へ。自分の拠点へ。花の花粉が飛ばないように、胸ポケットの花はゴミ箱に捨てていきながら。

第41片 普通少年と【色花】少女の香り（後書き）

長くなりましたが久々の更新ということで許してください。

次も書き始めているのでまたそれまで。

でわ。

第42片 理系少女と文系少年の休憩

「そういえば七実さんの文系少年って自称ですか？」

「文系少年？あぁ、自称だね」

俺は数夏からのいきなりの質問に対して冷静にこたえる。というか俺は文系文系言ってるけど数学とか理科よりは得意というだけで別に国語ですげー点数とってますよ！というわけではないのだ。そう自称まさに自分の中だけで付けられてる悔しさから生まれた悲しい名前。

「この学校って文系、理系っていう名前で先生に認められると大学進学とかに有利なんですよね？」

「そうだなあ、確か。俺はどうせ自分は関係ないと思ってたから聞いてなかったけど、就職にも有利らしいぞ」

「そんなすごいことがあるんですね・・・」

「まあ実質学年1位みたいなもんだしな。いや、先生に認められるということはそれ以上かもな。ただでさえうちの高校は桜浪高校って桜で有名なんだから」

「桜・・・ですか」

「そう、普通春にならないと咲かない桜が2月ぐらいに咲いたりすんの。異常としか思えないだろ。でもそれが桜浪高校たるゆえなんだよね」

この前夏の暑さでだらだらしていたグダグダな話とは大違い。というのここはでかいデパートの休憩所である。すなわち冷房がきいているのだ。この休憩所にはたいして人はいない。しかし数人ジュースを飲んだりしている人が見受けられる。

「とまあ、ここまで語ってみただけれど全部先生とか高松からの受け売りなんだよな」

「小鳥さんすごく真面目にきいてそうですね」

「ていうかお前もきいとけよ。理系の称号はお前のものだろうに」

「いえ・・・私はまだ進路に迷ってまして」

「迷うっていうか2年生の夏・・・か・・・。俺もまったく考えてないな」

と思いつつ立ち上がり自動販売機へ行く。とその前に数夏の分もいるかどうか聞こうとしたら目をキラキラさせてこっちを見ていた。なんとまあ分かりやすい。餌を欲しがる犬みたいだった。というか同級生相手に俺は失礼な例え方を。

「さて・・・と」

俺はお金を入れて適当に飲料を買い元のベンチに戻る。数夏にジュースを渡す。しかし俺は内心焦っていた。進路についてだ。微塵も行きたい大学もまったたく決まっていないう俺はまわりより遅れているんじゃないかと焦り出す。

「ジュース、それでよかったか？」

「はい」

ゴキユゴキユと子供のように飲む数夏。それを見るとまだいいのかななんて考えてしまう。それはダメなことなのだろうけれどこの冷房で涼しい場所の中少しだけゆるくなってもいいと思ってしまうのは人間として普通のことなんじゃないかななんて思える。

「あら？なにになに？2人でデート？」

「香織さん・・・」

俺らがジュースを飲んでいると買い物袋をかかえた香織さんが俺らのもとにきた。デートっていうかさぁ……。

「香織さんが買い物袋を持ってほしいからって呼んだんじゃないですか」

「そうだったわね。でもまさか数夏ちゃんもきてくれるなんて嬉しいわ」

「いえ、私はただ涼みに来ただけなのですが、この流れだと荷物持ち確定ですね……」

俺はとりあえず香織さんの荷物を持ち、店から出ようとする。しかし俺はふと思い出した。

「香織さんって高校に通ってたんですか？」

「……何よ、いきなり」

「いえ、進路の参考にしたいから……」

「参考になんてならないと思うけど。高校には通ってた。大学には行ってないけど」

「大学に行ってない？じゃあすぐにこの職業に？」

「職業っていうかなんというか。そうね、高校卒業して、1、2年自分で勉強して寮母になつたわ」

意外というのも俺が他人らしさなんて決めれないので言うべきではないのかもしれないが、大学には通っていると思っていた。

「じゃあ、高校はどこに？」

数夏もくいついてきた。てかお前その荷物絶対もてねえだろ。俺は数夏から荷物をひったくり、話の続きを待つ。

「桜浪よ」

「さくらなみ？って俺らを通ってる？」

「ええ、他にどこがあるの。自分の母校の寮母になりたいって思っても当然だと思うけど」

俺らのあじさい荘は学校の用意したものだったりする。だからある程度豪華で広い。少なくとも普通の寮よりは広いと思う。それは学校側がお金を出している個人で開いた寮じゃないからだ。

「と言ってもあのころは桜浪って感じじゃなかったけどね」
「？」

「桜は咲かなかった。というか桜自体あそこにはなかったのよ」

「は？だって俺はあそこに桜が咲いていたから近くに学校を建てて桜浪っていう名前にしたって・・・」

「それは先生からきいたの？」

「えーと・・・噂で？」

「でしょ。私が3年生のころかなあ・・・桜が咲き始めたのは。ほんと、最初は驚いたわ。まだ2月なのに桜が咲いて・・・しかも満開で綺麗。雪だっってまだあったのに・・・」

「ふーん・・・」

意外な事実。こういうふうになんなことを知っていて母さんのようなあたたかさで迎えてくれるから俺はここまでこの人に安心しているのかもしれない。

「ていうかあなたたち水着あるの？」

「水着？」

いきなり話がふつとんだため返事ができない。

「だって海行くんでしょ。私も数夏ちゃんからチケットもらったけど」

「え……でもまだまだ先の話……」

「明後日だけど……」

時間の経過すらも忘れてたとしてもいつのだろうか。でも水着なんてわざわざ買わなくても中学のころ使ってたのでいいような気がする。

「私は買いました」

「へえ、どんなのだ？」

「ふふふ、当日までの秘密です」

「まあ、どうせあれだろ。スクール水着みたいなさ」

「完璧になめているようですね。私のEカップを……」

「E!？お前のどこにそんなもんがあるんだよ！」

「こら、女の子にそういうこと言わないの」

「いえ、でもここでつつこまないと勘違いされてしまうような気がします……」

「誰によ?」

「……読者?」

「何を言っているのあなたは……」

「そうですよ。七実さん。読者ってなんですか？」

「いや、いいやなんでもない。楽しみに待ってるぜ、お前のEをな」

「望むところですよ」

俺は夏らしくない店内で夏らしいかどうか分からない話をしてそれで1日が過ぎていくことを無駄とは思えなかった。ただ店の外は死ぬかと思ったけどな。ほんとにとける。俺が。

第42片 理系少女と文系少年の休憩（後書き）

どうもお久しぶりです。

GW前から書いていたのにここまで遅くなってしまいました。

ではまた次回。

第43片 普通少年と混沌生徒会の海水浴 前編

海。海！海！！夏といえば。という代名詞にもなる海。太陽。夏は暑いものだと言われてもいまいち納得のいかなかったこのじりじりくる暑さだが今日という日は許せる。潮の匂いにまわりの音。他の人も今日のはめを外しているようだ。「お前、この砂一粒の大きさを計算してる場合じゃねえだろ！」ほんと騒がしい。誰だろうか。そんなわけで桜浪高校生徒会は現在海に来ている。

「会長」

「ん？」

「1つ聞きたいんですけど」

「なに？」

「海に来てるのに誰も水着じゃないんですけど」

「それは全員がカナヅチだからじゃないかな」

「こっぴつ生徒会だった。」

「大体伊藤先輩もなんでこんなところにきて漫画読んでるんですか」

「昨日新刊の発売日でな」

「本とか傷んじやうんじやないですか、海ですし」

「よくわからんが僕は同じ本を3冊買う癖がある」

「・・・そうですか」

「なぜそんな癖がついたかというと・・・」

「あーはいはい、そこは別に説明しなくてもいいですよ」

「・・・親友がな・・・死んだときに・・・」

「あれ？意外と重い？」

「なぜあんな宇宙戦争で死んでしまったのだ・・・」

「それはもしや漫画の話ではないでしょうか」

俺は伊藤先輩の話もそこそこに海に行こうとする。しかし俺自身もカナヅチなためまったく海へ行く気はない。ならばなぜ来たかというところは分からない。暇だったからと思っておく。

「成宮は・・・」

ちらつと隣を見ると簡易型の家というか車というか。車の中が家になっっているようなものがあった。中に入ってみると成宮がクーラーをつけながら昼寝していた。

「どこから電気ひっぱってきてんだよ・・・」

「あら。愛実くん」

「おい、もう海についてるぞ」

「そうですよ？なら早く言ってくればよかったのに」

「悪いな。お前がまさかこんな移動方法をとってくるとは思ってたなかったんだよ」

「では少し準備をしてるので待っていてください」

「おう、俺は副会長の様子を見てくるわ」

そう言っつて車を出る。うーん、副会長は・・・と。・・・
・・・ものすごく女の子の水着に食いついていた。質問とかしてる。あの人が男じゃなくて本当によかったと思つたまる

「じゃあ、成宮が来るまで何してようかな・・・」

俺は砂浜を適当に歩くことにした。しかしほんとにいっぱいいるなー。みんな水着だよ。当たり前だけど。俺は水着を着ているものの上からパーカーをはおっている。ちなみに他のメンバーはマジな私服だったりもする。海になにしにきたんだ、あんたらは。

「ん？」

ビーチボールが足にあたる。どこからきたのだろうと拾い上げると・

「おい、すみません」

と声がきこえた。

「あ、えと、これ」

「どうも。すみません」

「いえ……」

相手は俺と同じ年か一つ上ぐらいの男の人。髪は少し長め。もちろんのごとく水着を着ている。

「バレーをしていたんですか？」

「ああ、うん。そんなところかな？ だけど俺の連れに計算女がいてさ。まったくゲームにならなくて、他にも妄想女やら何やらがね・

「えっと……ああ、そうだ」
なぜだろう。楽しいはずの海なのにこの人はひどく疲れていた。大丈夫だろうか。

「えっと……ああ、そうだ」

とパーカーの中から一応入れておいた花を取り出す。

「あ……疲れているようなのでこの花を」

「花？」

「実は前にある人からもらったものでして。もらいものでいいのなら受け取ってもらえませんか？」

「ふーん、花ねえ・・・これ桜っぽいね」

と言って受け取ってくれる。なぜ俺は初対面の人に花をあげているのだろうと思ったが少し違う。俺はこの人を見たことがある。学校で。確か2年生だったはずだけど・・・。

「ありがとう大事にするよ」

と言ってすつとすぐ桜をしまってしまった。？なんか焦ってるのかな？

「では、また2年生さん」

「おう・・・ってあれ？俺自分の年言っただけ？」

「七実くん！遅いよ遅い！私なら秒速5センチメートルであるからね！」「ずいぶんとこまたで歩くな」

という声がきこえてきた。今さらだが俺はあの花をあげてよかったのだろうか。あの【色花】の花を。

「俺が持っていてもしようがないし。色花（仮）さんは悩みがあったら相談しろっていうし・・・俺より今の人の方が悩みありそうだしね」

とさらつと失礼なことを言いながら元の場所に戻る。すると成宮も水着に着替えていた。よかった。心底よかった。俺以外みんな私服だったからこの空間だけだったら一人で浮かれてるみたいだったかなあ。

成宮の水着はビキニだった。……落ちつけ相手は成宮だ。

「愛実くん、探したよ」

「探したって、会長、何かやるんですか？」

「生徒会の集まりとはいえ、普段のように真面目に活動するわけないだろ。もちろん遊ぶさ」

「すいませんけど普段から割とそんな感じですよ」

「というわけで海に入らずに遊ぶ遊びを募集しようと思う」

「まだ募集段階ですか」

「で、何かいい案ある人ー」

皮肉なことに今までで一番会議っぽくなっている。どういふことだこれは。

「んー、じゃあ、はい」

「お、伊藤君。何かいい案思いついたの？」

「みんなで刀持って斬り合うとかどうでしょうか。こう……散れ、

【千〇桜】みたいな

「……」

それは少し危険すぎます。色んな意味で。

「じゃ、それにしよう」

「えー!？」

「楽しそうですわ」

「伊藤君」

「なんですか副会長」

「こう……死ぬ〇弾みたいなのもありかい？」

「あります!」

「ありじゃねええええええ!有名所全部まとめるだけですよ、そ

れ

「じゃあ、俺は念を使うね」

「会長！？使えるの？念使えるの！？」

なんとこのまま後半に続きます。はい。

第43片 普通少年と混沌生徒会の海水浴 前編（後書き）

というわけで後半に続きます。

この作品には直接関係ないですが、前に書いた、天使の挑戦〜3つのセカイ〜を大幅書きなおしました。

前に見てくれた方ももう1度見ていただければ幸いです。

ちなみに天使の挑戦。考えることが多すぎて大変です・・・。

でわ。

第44片 普通少年と混沌生徒会の海水浴 後編

暴走する先輩たちをなんとか止めることができたのは30分後くらいだった。

よかったのはこの後編の時にはもうおさまっていたということだろう。

改めて俺は海に何をしにきたのだろうかと思う。

「少しは海らしいことをしましょうよ」

「海らしいこと・・・か・・・そうだな、あれは2年前の夏・・・僕がまだ中学生の時だった」

「伊藤先輩。それ確実に長くなりますよね。この後編まるまる使う気ですよね！」

「いいじゃないか、愛実会計。僕は海に来たということ少しは浮かれているのだよ」

「どこが!？」

「違いが分からないか?いつも僕が持っている漫画は続きものなので最近10巻ぐらいを読んでいる。しかしよく見てみる。今日は違う漫画の1巻だ」

「分かるわけねえ!探偵ぐらいですよ、そんなことに気づけるの」というかさつきあんた新刊持つてたろ。

「これは僕が浮かれている証拠。ああ、よきかな、夏の海」

「じゃあ、せめて水着を着ていただきたい!」

「なんだ、愛実は僕の水着姿に興味があるのか」

その瞬間副会長がぴくりと反応した。

ほんとにこの人はオールマイティすぎるな、嫌な方向で。

「別にそういうわけではないです。ただ、俺だけ水着ってなぜか恥ずかしくて」

「そういうことでしたら、私も水着ですわ」

成宮が反応する。そうなんだよな、なぜかお前は今日一番まとも

に見えるんだよ。

なぜか。

なぜかな。

いつもなら真っ先に状況をかき乱すぐらいなのに。

「ああ、そうだな。俺は今日お前のことを唯一の良心だと思ってる」

「照れますわ」

「ああ、そうだな。だからとりあえずお前のその水着はやめようか
まともに見える。」

そう、まともに見えるだけであって俺の目はごまかせない。

「水着すげー光ってんだけど。それ完璧宝石の類だろ。それ沈むか
ら。金とかすげー重いのお前よく立てるよな」

「照れますわ」

「褒めてない。どちらかというと呆れてる」

「照れますわ」

「お前の照れハードルはものすごい低いな」
成宮が泳げなくてよかった。あの金の量は普通に沈むだろう。

しかし重力に逆らうように今は少しの動きも見せないし、成宮は
平然としている。

ほんと謎が多い奴だな。

「はあ、もういいです。で、会長は……」

寝ていた。ほんとに自由な人だ。

ちなみに副会長は1人でとても楽しそうなのでほおっておくこと
にした。

人間観察というか水着観察が大変気になっているらしい。

「というか海に来たからと行って何かで遊べばいいというわけでも
ないだろうに」

その証拠にほら。と伊藤先輩が指差す。

まわりには寝ていたり、カップルで話し合ったりしている姿があ
った。

遊んでいるのは子供とその親、それか元気のいい高校生カップル

ぐらいだ。

まあ、奥の方にさつき会ったたぶん先輩であろうお人が女の子と遊んでいるわけだが・・・なぜだろう。とても疲れているように見える。うん、まあ、俺と同じ境遇、同じにおいがする。

「まあ、確かにいざ海に来てみたら何もすることがないですよ、特に俺達泳げませんし」

「だろう。だったら僕みたいに漫画を読むのはおかしいことではないだろう」

「それはおかしいです」

断言した。

はつきりと言わせてもらったがそれはおかしい。

「先輩は悲しい。なぜ先輩がこんなにも冷たいのか」

「後輩も悲しんでますよ」

「なんだなんだ、なんの告白だ？」

「副会長！？いきなり話に入ってこないでください！
それに告白じゃない。」

「いや、実は愛実会計が・・・」

「愛実家計？」

「なぜ間違える！俺はあなたたちの家計まで計算してられませんよ！」

「苦しいボケだがなかなかいいじゃないですか、副会長」

「伊藤君もなかなか後輩いじりが板についてきたな」

青春漫画のごとく握手する副会長と伊藤先輩。

なんだこれ。なぜ僕はここにいるんだとさえ錯覚させる言動。
まるで夢の中に。

妄想の中にいるようで。

「愛実君？」

「っ！お、おお、成宮どうした？」

「いえ・・・愛実君が心ここに在らず。という感じだったので」

「ああ、すまん」

俺はなぜか夢気分だったので意識をちゃんと取り戻す。

「さて、で何か思い出らしい思い出を作るうということなんですかね」

「そんな話してたか？」

伊藤先輩につっこまれる。

確かに何か違う気がするがまあ、だいたいそんな感じだった気がするが。

「つつたつて何も持ってきてないしさ。何をするんだよ」

「それなんですよね・・・問題は」

「ふむ、私としてもちよつとそれは気になっていた」

「水着見てたんでしょうが、あなたは」

「じゃあ、これから私の家から家を・・・」

「家から家を！？お前は何を言ってるんだ！」

「ふああ・・・」

と欠伸をする音がきこえた。

はて？誰だろうかと後ろを見ると・・・

「か、会長？」

「みんなどうしたの？会議なら俺もよんでくれないと起きたばかりでも笑顔を絶やさない。

そんな男がいた。

「いえ、会議と言うか何か思い出を残そうかと・・・」

「思い出ねえ・・・」

あたりも暗くなつてきている。時間がない。

もう変える時間は刻々と近づいている。

「じゃあ、思い出作るか」

「え？」

と全員が会長を見る。

「そろそろだから上を見てみ」

「うえ？」

言葉の意味を理解できないでいた。

「どうした？成宮」

「私、愛実君のことが好きです」

だからどうしてだろうか。せめて伏線や何かこう、恋愛描写を入れてほしい。

これじゃあ、超展開だからとかそんなことはどうでもよく。

俺はただ呆然としていた。

第44片 普通少年と混沌生徒会の海水浴 後編（後書き）

次からは主人公でいきます。

意外と時間がかかりましたが、頑張っていきたいです。

では。

第45片 委員会と【色花】少女の夏休み

「なんでこんなことになっちまったんだ……」
俺は心底そう思う。

新聞部として確かに必要なことかもしれないが、正直めんどくさい。

担当してる新聞の記事もまだ書き終えてないし……。
そのくせ先輩たちは自分の記事で精いっぱいだし、やっぱり俺がい
くしかねえのか。

「おや？」
と声をかけられる。

「君は君は新聞部2年、副部長の皆恵くんみなえじゃないか」
声をかけられたのはインタビューなどをよくさせてもらっている
風紀委員長おんたへんの長鍋さん。

風紀委員初の女生徒委員長だ。

「ああ、長鍋先輩。お久しぶりです」
「うんうん、いいあいさつだね。ほんと見ていて清々しいよ。んで
とぼとぼと夏休みの昼間っから学校の廊下を歩いてどうしたんだい
？」

「いえ、ちょっとインタビューに行かなくてはいけなくて……」
「ふうん……今回は誰にインタビューするの？」

「確か……色花さんとかっていう人だったはずですけど……3
年生ですしインタビューがやりにくそうで……同学年の方がやり
やすいと思うんですけどね……」

「色花……。確かにそうだね。3年生は全員他の作業中ってわけ
で、君は仕事を押しつけられたと」

「そういうわけではないんですけど……今までは同学年の新聞部
がインタビューをするって決まりだったんで驚いただけですよ。あ
と普段なら3人ぐらいで行くの今回は俺1人ですしね」

と経緯を説明する。

ちよつと愚痴っぽくなつてしまったが長鍋さんも気分を害した様子もなく笑顔で笑っている。

「そうだったんだ。ま、気をつけてね」

「あ、はい」

そして別れてからあまりにも遅すぎる10秒後俺はおかしなことに気づく。

気をつける・・・？インタビューをするやつに対する言葉だろうか。

なんだか嫌な予感がしてならないが、まあそんなことはいいとして時間の無駄だ。

推理ごっこはまたあとでゆっくりとしよう。

「確か部活をやつてるとかなんとか・・・」

なんでも屋のような部活をやつてしていると聞いたことがある。

でもそれって正式に認められている部活なのだろうか？

しかし今現在もそうやって部活があり、活動をしているというのなら認められているんだろう。

「おつとここだ」

第2美術室。

普通の美術室とは少し離れたところにあり、する内容もデッサン専用の教室のようになっており、たくさんサンプル品がならんでいる。

本物じゃない花とかも置いてあるのだ。

よくある飲食店の前にある食品サンプルのようなもの。

他にも家の模型、船の模型など様々なサンプルがある。

とここまで話しておいてなんだがデッサン部という変わった部活が俺の入学と同時になくなっていたため、入った事もないし、美術の授業ですら使ったことがない。

なるほど。それなら部室につつてつけかもしれない。

そう思いながら俺は扉を開こうとしておかしいことに気づく。

話し声がきこえるのだ。

部活なら普通かもしれないが少し荒々しい。

ケンカか？

やめてくれよ・・・これからインタビューするのにさ・・・。

「でも・・・」

インタビュ―はやはりしなければならぬ。中の様子を一度伺おうと窓の方にまわる。模型や何やらが窓の方に並んでいて見ずらいがなんとか見える。

はあ・・・あれが色花さんか・・・頭にかんざしのようなものや花の飾りをつけている変わった人。

しかしそれよりも変わったことがある。

なぜだろうか。

この季節に。

室内に。

コンクリートのかたまりに。

花が。

桜が。

桜の木がそこにあった。

そして室内は桜の花びらが散る教室となっている。

「なんだよ・・・これ・・・」

思わずそう呟くがそこで色花さんとやらと会話してるのは風紀委員の人達であることが分かる。

どれもインタビュ―で見た顔だ。

そしてもちろん知り合いでもあった。

なんだあいつらも俺と同じで先輩に頼まれたんだな。

そう思うことが当然だろう。

俺は耳を澄まして中の様子を確認してみる。

○

「色花先輩。ここがなんの部屋か分かっていますか？」

風紀委員の1人がそう色花に聞く。

「第2美術室ですよね？」

「その通りです。ではなぜ許可なくあなたがこの部室を使ってるんですか？」

「あら？でも先生方にも許可を得たはずですが・・・」

「いえ、今回は先生からの依頼でもあるので許可をとったなんていうのは勘違いでしょう」

「大体・・・」

と言いながらももう1人の風紀委員が続ける。

「なんですかこの木は。たとえば部室を使う許可が降りていてもこの木はさすがに許すわけにはいきません」

「あ・・・でもそれは私の大切な・・・」

「まったくしかも桜ってどういうことですか」

と風紀委員が桜の木に触れようとす。

「あ、触らないでください」

「校則違反ですので。取り締まらせてもらいます」

桜の木に触れようとした瞬間。

その風紀委員の腕は弾かれた。

「なっ・・・」

「あーあ。だから言いましたのに。触らないでと」

色花が口元の扇子をとる。

「これだから野蛮な一般人は嫌いなのです。駆除するべきですね。1人残らずこの学校から。いなくなれば私の生活はさらに充実したものになるというのに。特にあなたがた風紀委員には消えていたいただきたい」

「な・・・何をした・・・！」

「何をした？そこらへんの漫画ではないのですから特殊な能力なんて持ってませんよ。それともあれですか？ルビをふった能力が出てくるとでも？なるほどあなたがたはそういうのが好みなのですわ」
俺はいつたいなにを見ているのだろうか。

しかし足も動かなければ首も動かない。

震えてるのか見たくたしょうがないのか・・・どっちだろうか、それは分からないが。

「風紀委員としてあなたを取り締まります」

その2人の風紀委員は何かの運動部にでも入っているのかもすごいステップで色花に近寄る。

しかしそれは間違っていたのかもしれない。

花の甘い香りに騙された。

そのような感じが頭をよぎる。

「私の花の蜜を吸いにきたのですか？・・・身の程をわきまえなさい、羽虫どもが」

「はあああああ！！！」

いつからバトル展開になったのだろう。

しかし信じられないことが目の前で起きる。

「あなたたち・・・触れないで」もらえますか？」

その瞬間2人の腕は不自然なかたちで弾かれる。

風紀委員はそれに驚いたのかその場から動けない。

「あなたがたのその無能な頭は必要あるんですか？ないでしょう。ならば私が少し削ってさしあげます。お礼はいりませんよ。私の部活動はなんでも屋の桜部屋なので」

驚いたことに色花は笑みを崩していない。

「まとめて『あ……』」
しかしその言葉は続かない。
なぜか。

それは完全に俺のせいだった。

俺は思わず窓を開き、教室の中に入っている。

そうさつきいった通り2人は俺の知り合い。

見捨てる理由なんてどこにもねえぞ。

「あなたは誰ですか？」

「お前こそ。人間がするようなことを越えてるぞ」

「厄日ですね。今日は。ではあなたもまとめてやらせていただき
ます。まずはそうですね……」

何かくるのか？

「『倒れる』とかどうですか？」

？なんだ？何もしないのか？そう思ったしかし俺の体は意思に反
してその場に倒れる。

「ぐっ……」

「ふふ……あなた。私になんの用ですか？」

「あ、ああ……なに……ちよっとしたインタビューをね」

「体をはったインタビューですね。まあでもその内容は全て忘れて
もらいます。簡単なことで記憶を変えればいいのです。『忘れて』
ってね」

俺の意識はそこで遠のいた。

○

「まあ派手にやっちゃったねー【色花】さん」

「あらまあ、これはこれは風紀委員長の長鍋さんではありませんか」
「まったくうちの委員までやっちゃってさ。と、あら？皆恵くんもか」

「ええ。申し訳ありません。ですが彼らの方が先に襲ってきたんですよ。ああそれと彼、委員の人を守ろうとしたらしいんですけどね。でもなぜそれを無駄だと知らないのか。無知は怖いですね。いえ、無知の知。すなわち知らないということを知らないのは怖いものです」

「うん、まあそうだね。でもさ・・・」
長鍋は3人を抱えて。

「次、うちの委員とこの子に手を出したら私があなたを殺してしまいかもしれないなあ。知らないわけじゃないんでしょう？無理に脳なんかいじつたら大変なことになるって」
「ええ。そうならないように気を付けます。あなたは少しこわいで」

「ああ、あとさ。扇子を口元にもってきからしゃべってくれないかな？」

「あら？それは失礼かと思いましたが」
「あなたの【言葉】は気持ち悪い。それに殺気だつてびゅーびゅーでてるしさ。その扇子でちゃんと抑えといてよ。あなたのその醜い【言葉】を浴びたら家で何回お風呂に入ってもとれなさそう」

「罵倒されたような気がしますね。私の言葉は汚いって言われたよ
うな・・・」

「汚ねえって言っただよ、ボケ」
そう言つて長鍋は教室から出ていく。

3人を抱えて。

そして慥然と怒りに燃えながら。

「はあ・・・まったく何が無知の知だよ」

長鍋は教室から出て階段を上がりながらそう呟く。

「本当に怖いのは知識の使い道を知ってるお前みたいなのやっだつての。博識の知。ほんとこええわ」

そう言いながら長鍋は皆恵を部活の人達になんて説明しようか迷っていた。

第45片 委員会と【色花】少女の夏休み（後書き）

主人公でいくと言ったこの前のあとがきはなんだったのでしょうか。

申し訳ないです。

次こそは本当に今度こそ久しぶりに・・・。

では。

第46片 文系少年とあじさい荘住人の海水浴 前編

なんかものすごく久々であれ？この人だれだろう見たいになつてしまひそうなので紹介をしたい。

七実未空です、ども。

いやーこんな感じも久々だなー。

まあ、紹介もここまでにして、今の現状を話そう。

海に来ている。それが結果だ。そんな中、何をするかという話し合いになつたわけだが……。

「ふっふっふっ……七実くんよ、一体何をするのかときいたね」

「あ、ああ」

はやくも嫌な予感しかしない。

「私には案があるんだよ」

山梨戸張。こいつは夏でも元気だった。夏バテを知らないのか、こいつは。まあ、海だしな。

「それはー……ビーチバレーですー！」

「あれ？」

意外と普通というとおかしいのかも知れないけれど……これは少し珍しい。

いつもなら突飛な意見が飛び込んでくるんだが。

「戸張さん、なんか、普通ですね」

と思わず不審に思い、怖くなつたのか岸島数夏が聞く。というかお前はさっきまであじさい荘からここまでの距離をまったく意味の分からない方法で求めるというまったく意味の分からないことをしていたらうに。

「ただのビーチバレーじゃないよ！」

やっぱりな。

「失敗した場合、あそこにある島を回つて戻つてきてもらつよー！」
「島つてどんだけ遠いんだよー！」

「え？人差し指ぐらいの大きさだよ！」

「お前は小学生か！地図を見てバカ正直に隣町まで人差し指分だと思っのと同じレベル！」

なんかもう無茶苦茶だった。

まあ、いつもこんな感じだから動じないけれど。

「あの・・・私あんまり泳げない・・・」

おずおずとはいつてきたのは高松小鳥。ここにきてもテンションは変わらず。

しかし水着なのでどこか体を腕で隠している。

もうほんと、神様ありがとう。

「高松は意外と胸があるんだな」

「え？」

泳げなくても気にしなくていいぞ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

あれ？おかしいな。

顔が赤い。

俺は変なことを言ったのだろうか。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あ、地の文と声に出す方を間違えた」

そこで失態に気付く。

「ち、違うんだ、高松！いや、ちがくはないんだけど！そういうことじゃなくて！」

「ほら！いくよー、七実くん」

「え！？ちよ・・・お前待て！」

しかし俺の言葉は聞かず、山梨はビーチボールをバレーのサーブで打ってくる。

俺は完璧に不意をつかれていたのでこのままでは顔にぶつかる。

しかし直前に緋色が打ってくれた。

結露緋色。

こんな時まで無表情でまったくもって顔を崩さない。

「……危なかつた」

「お、おお、さんきゅ、緋色」
しかし。

「ふっ！」

山梨はスパイクを打ってきた。そこまでするかおい。
すっぱぬけたのかまったく違うところに飛んでいくし。

「七実くんー！ボールとってー！」

「おお、待ってる」

文句を言っても無駄だということが分かっているので俺はボール
をとりに行く。

ボールを追い、走っていくとボールを拾ってくれている人がいた。
同年ぐらいだろうか。しかしどこかで見た顔だ。うーん、うち
の学校の人かな？

「おい、すみません」

「あ、えと、これ」

と言ってボールを渡してくれた。

「すみません」

「いえ、その……バレーやってたんですか？」

「ああ、うん……」

といいつつ俺はみんなの姿を見る。せかす山梨にまだ顔の赤い高
松、意外とやる気な緋色に砂の大きさはかる数夏……。

「そんなところかな？ だけど計算女がいてさ。他にも妄想女やらな
にやら……」

ものすごいかわいそうな目で見られている。

そんな疲れた顔をしていたのだろうか。

あとなぜだろうか。彼に仲間意識をおぼえる。

「えつと……ああ、そうだ」

とたぶん同じ学校じゃないかと思われる男子は俺に花を渡してき
た。

「花？」

「実は前にある人からもらって・・・疲れているのならとりあえず花の香りでも・・・」

「ふーん・・・桜っぽいね」

と言つて受け取る。

後輩かな？やはりどこかで見たことがあるような気がする。

個人的な用事じゃなくてももつと大々的な何かで・・・。

しかしそんな思考もそこで中断された。

「ん？」

その花は枯れていた。

最初から枯れていたわけではない。と思う。俺は一応桜かもしれないという素人ながらの判断をした。それは枯れていたらまったくもって見当すらつかないはずだ。

じゃあなぜ？

なぜこの花は・・・。

この花は俺が触つたとたん枯れたような反応を見せたのだろうか。

とりあえず俺はその花を後ろにさつと隠した。

「ありがとう。大事にするよ」

「では、また2年生さん」

「おう・・・つてあれ？」

やはり後輩だろうな。

まあどんな人だったかはいまだに思いだせないけど。

そしてボールを持って元の場所に戻る。

「七実くん！遅いよ！私なら秒速5センチメートルで歩けるね！」

山梨の元気な声がむかえてくれた。

「ずいぶんとこまで歩くんだな、お前」

そう言いつつも俺は不思議と笑顔になっていた。

やはりみんながいると楽しいな。

「あんたたち、私を忘れてたでしょ」

その声は誰でもなく香織さんのものだった。

そこで俺は水着の描写説明を忘れていた。ああ、なんとということだ。

まずは説明しやすい数夏のから。

これはもう完璧にお前はなんの需要にこたえたんだというぐらい寸胴なボディに似合うちゃんとしたスクール水着だった。正直言いますと、胸にでっかく名前を書いたスクール水着なんて本当にあるんだな。ついでに言うとお胸の方も需要に答えていた。ないとまではいかなくとも少しふっくらとした程度。

山梨は普通にビキニ。胸がでがい事を知っている俺はどうしたって目をそらさなくてはならない。健康的で太っているとまでいかなくとも痩せすぎてもいないちょうどいい感じである。

高松もビキニだが下には布を巻いている。あれなんていうんだらうね。レオタード？まあなんにせよ素晴らしい。いい水着です。

緋色は高松のと似たような形状だが高松よりも布の面積がでかい。軽くわすれかけてたけどこいつも子供っぽい体型をしてるんだよね。そして最後、香織さんだが・・・下はたぶんビキニだろうが上は・・・Ｔシャツを着ていた。

「ちくしょう！あんたは鬼か！」

「え？なに？何があつたの？」

「香織さん、今、七実さんは何かと戦っているのですよ・・・」

「あら？そうなの？自分の今後の成績の事？」

「うがあああああああ！」

「香織さん！このままじゃ七実くんが壊れちゃうから！私たちよりも繊細な心を持つ七実くんが！」

「・・・数夏、遊ぼう」

「うおつと！？伏兵！？緋色さん、遊ぶのはいいですがその手を動かすのにはなんの意味が！？」

「あ、あの・・・大丈夫、七実くん？」

「ああ、ああ、なんか今とてつもなく嫌な夢を・・・」

「あんたたち海もいいけど、もう2年生なんだから将来についても・

「・・・」

「あああああ！もう！分かった！香織さんは俺に恨みがあるんだな！よし、こい！」

「いや、何もなければ・・・」

「七実さん、分かりました。進路については後ほど一緒に考えましょう。しかしまずは緋色さんをよけていただきたい！なんで馬乗り状態なんですか！」

「緋色！？お前なにしてんだ！まわりを気にしろよ！」

「七実くん・・・ツッコむところはそこ？」

「ああーもう！緋色、ほら」

「今だちやーんす！」

「おわっちー！お前首絞めてる！」

「・・・・・・未空もまわりを気にしたら？」

「う・・・るせえよ・・・！お前俺、これ死ぬ」

「戸張さん、それ七実くんカタコトになってますから。オデキヤラになってますからちよっとゆるめてください」

「おおーっのごめんよー。いや、七実くんは胸さえ押しつけければ何でもおーけーなのかと」

「さすがに死にたくはない」

「・・・・・・胸がたくさんあつたら？」

「俺はそこで死んでもいい」

「軽い！なんでそんなすぐ手のひら返すんですか！」

騒ぎはなかなかおさまらなかつたが高松が小声で俺に話しかけてくれた。

「七実くん・・・5時に浜辺の奥にある岩の前まできて」

「え？お、おう」

「一人でね」

「いや、いいけど・・・」

その時の高松の顔はどこか思いつめた表情をしていた。

何があつたんだろうと心配して見ていると、気付いたのか香織さ

んがニヤニヤしていた。

「あんだ、ちゃんと行きなさいよ」

「いや、分かっているけど最近香織さんが20代前半だったことを忘れがちに・・・」

俺の失言でヒートアップした騒ぎ。

しかし俺はその時間こそを大事にしようと思っていた。

崩されるわけにはいかない日常。俺はこの日常のためならなんだってしてやる。

ただ、今は本当に鬼となった香織さんを止めてほしい。

ただそれだけだった・・・。

高松のセリフ・・・少し気になるけどなんなんだろうか？

というわけで俺らの海水浴はまだ終わらない。

第46片 文系少年とあじさい荘住人の海水浴 前編（後書き）

次回に続きます。

不定期ながら次の話もはやめにあげたいと思います。

では。

第47片 文系少年とあじさい荘住人の海水浴 後編

一通りの遊びを遊びつくしたところで時刻は5時になっていた。バスの時間は8時なのでまだまだ時間がある。

しかし5時には少しばかり用事があった。高松に呼ばれていたのだ。

「なんなんだろうな・・・」

俺は頭をかきながら高松が先に言っているであろう浜辺の奥へと行く。みんなにはお手洗いだと言っている。なんかいい訳が少し男らしくないがまあいい。

少し歩くとすぐ高松の姿が見えた。

「あ・・・七実くん・・・」

「高松。よ」

うーんと、やはり体調が悪いのか顔色が悪い。でも何か言いたそうな高松を見て俺は黙ることにした。

「あ・・・七実くん・・・七実くんは流れ星って知ってる？」

「ん？」

これは高松流の罵倒だろうか？流れ星っていうのお前の軽い脳みそで理解できてる？という意味なのだろうか・・・。

「ち、違うの！そ、そういうことじゃなくて・・・その・・・流れ星って消えるまでに3回願い事を言ったら願いがかなうって言われているじゃない？」

「ああ、そうだな」

でもそんなのは子供じみた噂だし、俺はまったくと言っていいほど信じてない。それに3回も願い事を言えるわけがないだろうが。

最初から願いを言おうとしていても成功確率は低いのに・・・。

いや、なんか数夏みたいに論理的な思考になってしまった。

「でも、その流れ星・・・なんで願いを叶えるなんて噂がたったんだろう・・・？」

「・・・・・・・・」

高松は将来詩人でも目指すのだろうか。というか俺はなんでここにいるんだろうという気がしてならなかった。

けど俺はここにいる。まだ話は終わってないような気がしたから「流れ星ねえ・・・・。どうせあれだろ、願い事を試しにしてみた人がたまたまその願い事が叶ってしまったってそれを流れ星のおかげだと思っただけが昔にいたんじゃないの？」

そう、自分の努力の結果なのに。それなのにそれに気付かず流れ星に願った人が。

「それか流れ星を不思議に思った人たちが何かすごいものかと思っただけかだよな」

所詮その程度で。

俺が信じる理由にはならない。

何を願おうと自由だけど。

それに俺は関わらない。

「でも・・・・流れ星が願いをかなえてくれた。それを知った時の人はどう思っただろうね」

「あーそれはラッキーとかそんな感じじゃないの？」

「うん、そんな感じだと私も思う」

ニコニコと笑う高松。一体どうしたというのだろうか。

さっきから全く話が見えない。

「だから・・・・私もラッキー程度でいいから・・・・星に願いたかったんだ」

「?いいんじゃないか?流れ星が流れればだけれどさ。俺は信じてないけどそこらへんは自由だし、女子ってそういうのが好きじゃないののか?」

「ん・・・・全員が全員好きてわけじゃないけど、興味はあったよ。少なくとも幼稚園、小学校の時は」

「それは分かるな。俺も思わず願ったよ。おもちゃやらお菓子が欲しいってさ」

「でも・・・流れ星は流れなかつたんだよね」

「ああ、見たことがないな。流れ星。だから適当な星に願ったりしてさ」

「でも私は流れ星を流すよ」

その瞬間高松の顔つきが変わった。

笑顔がとてもしゃべり笑みになっていた。

「私は流れ星を流す。願いを叶える。そのための努力は惜しまない。確かにそれは努力と言えるのかもしれない。」

「私は・・・私自身の努力を星に注ぐよ。私は流れ星を流すから・・・」

何が言いたいのかは分からない。

けれどなんとなく高松の決意は伝わってきて悪い気分じゃなかった。

俺も不思議と笑顔になっていた。

「だから流れ星・・・七実くんも楽しみにしててね」

そして高松はみんなのもとへ戻っていった。

「流れ星・・・ねえ・・・」

そんなになんかえたい願いでもあるのだろうか。

自分で流れ星を流しても叶えたい願いが・・・。

「俺には・・・」

俺には何も無い。

そういうことを含めて俺には何もなかった。

願いもなければ夢もない。

ついでに言えば進路だって決まってる。

俺は・・・。

「まあ、考えるより・・・海を楽しまなきゃな」

俺もみんなのもとへと戻る。

騒がしい毎日へと。

○

「七実さん」

「ん？どした？」

数夏が上目づかいで見てる。

「というか身長差からしてそうなるのは仕方のないことだけど。」

「私、みんなで遊ぶ海がこんなに楽しいなんて思いませんでした」

「そっか・・・、よかったじゃん」

「はい。久々に計算以外のことに熱中できましたよ」

「いや、それはウソだろ」

お前砂の大きさとかはかってたのはなんだったんだ。

「それも含めて海ってことですよね」

「断じて違うがここで否定するのも空気に間違ってるよな」

いい笑顔で言いやがって。

現在は7時。帰りまで残り1時間という時間。あたりは夏だといふのに結構暗くなっている。

「俺も楽しかったなあ・・・去年は海に行ってないし」

「そうなんですか？って柏部さんは？」

「あいつは出たがらなかつたよ。地獄の城がどうたらこうたらって言うてたけどあいつ暑いのも人が多いのも苦手だしさ」

「普通引きこもりキャラと言っても最終的には出てくるみたいなあれが当然な流れだと思っんですけど・・・。柏部さんはマジな引きこもりですね」

「マジも何も現実そういうもんだろ」

しかも夏休みだからなあ・・・絶対羽のばしてるだろあいつ。

「七実さん・・・」

「ん？」

「明日もまたたくさん遊びましょうね」

「おう、夏休みはまだ続くしな」

「はい、宿題も終わりましたしね」

「いや、同意を求めんな。俺は一切手をつけていない」

「それフラグじゃないですか？夏休み最後に忘れてた宿題をやるっていう・・・」

「いや、やめて！お前が言葉に出すと本当にフラグたつから！」

「じゃあ、まずは七実さんの宿題をやり終えてからですね」

「手伝ってくれんの？」

「いえ、苦惱する七実さんを見守るだけです」

「悪趣味だな、おい！」

「まあ、それは冗談として・・・」

その瞬間でかい破裂音がある。

それと同時に大きな光が浜辺を照らす。

「お、花火じゃん」

「ああ、確か旅行の説明にそのような事が書いてあった気がします」

「ほー、なかなか綺麗だな」

「はい」

花火が次々と開く。そして俺らはそれをずっと座りながら見ていた。

「おっとー！お2人さんなに最後ムードになってるのかな？」

「・・・・・・数夏」

「あ、あの・・・花火綺麗だね」

「あら？意外といいサプライズね」

みんなも来る。結局最後まで香織さんのTシャツの中は分からなかったけれど。

「みんなで見ようぜ、花火」

みんなで浜辺に座って花火を見る。

やはりこれも思い出の1つになるんだろつなという景色。

明日もまた晴れるだろうか。

今日のように。

みんなと一緒に過ごす毎日が俺の中で日常となっていた。

今年の海水浴。そのイベントが今終わるつとしていた。

第47片 文系少年とあじさい荘住人の海水浴 後編（後書き）

海水浴終了です。

なぜかすごい長かったような気がする夏。

うーん、更新速度が問題なのだろうか・・・。

なるべくはやめに頑張ります。

では。

第48片 文系少年とそれぞれの秋風

夏が終わり、俺の心までも秋のようにさみしくなってきた9月。夏休み最後の日まで宿題を忘れるという古典的でベタなイベントは発生せず、むしろ最後の日は遊びっぱなしのような気さえする。

そんな今日は夏休みが終了して6日たった日だった。みんな夏休みボケみたいな浮かれ気分も終了して普通の学校生活を楽しんでいた。

しかしそんな中やはり学校へ行くのはめんどくさいという心も働く。

家で寝ていたいなあ・・・なんて考えながら登校していた。

「だるいなあ・・・」

「七実さんはまったくもつてめんどくさがりですね」

「誰だって嫌だろ。夏休み戻ってこないかなあ・・・。ああ楽しかったなあ海水浴」

「現実逃避しないでくださいよ」

「数夏が俺のとなりをちよこちよこ歩いてくる。」

「こいつ歩幅小さすぎだろ。」

「それよりももうそろそろ先生の目が厳しくなってきましたね・・・」

「ああ、進路だろ。そうなんだよなあ・・・この時期だし」

「先生がやたら生徒相手に面談するようになっていた。」

「主に進路があやふやなやつ。」

「それには例外なく俺も含まれている。」

「まったく進路なんてせがまれても決められねえのにな」

「いや、まあ、決めてない俺が結局は最終的に最大的に悪いんだけど。」

「進路は人に相談のしようがないですからね」

「参考にはできると思うんだけど・・・そういや、お前は決ま

ってんの？」

「ええまあ」

「マジかよ・・・どこ？」

「秘密です」

「参考にならねえ！」

今日も面談だろうなあ。

そんなことを思いながら俺の学校生活は始まった。

不覚にもいつも通りだと思いながら。

○

「私はどうしようもなく狂ってる。そう思わないですか？長鍋風紀
委員長」

偽名のような通り名をもつ女の子が私に話しかけてくる。

気持ち悪いとさえ思えるこの人の雰囲気や言動。

確かに狂ってると思えるよ。

放課後、私は治安維持のため学校をパトロールしていると部屋を

不法占拠してるやつに出会った。

「不法占拠とは大袈裟ですね。私は校則を守らなくても法律は守る

人間ですよ」

「残念だけど校則は学校内なら法律に匹敵するんだよ」

「では、私がどのように校則を違反しているか言ってほしいもので

すね」

「はぁ・・・」

違反なんて数をあげればきりがない。
でも言えない。

言っても意味がないんだ。

この前のように倒された風紀委員の記憶は消され、それを先生に
言っても信用されない。

なぜか。

まずこの意味不明なこいつの【言葉】。

それと絶対的な教師からの信頼。

理系と文系の称号をもつものだから教師からの信頼が半端ない。
たとえ警察が乗り込んでこようが信じないだろう。

文系の称号を持つものの【言葉】の前では嘘さえも真実となる。

「【色花】さん、あなたが違反してることは言っても無駄だと私は
判断するが」

「では違反して『ない』のと同じことではないのでしょうか？」

「まあ、あなたがそう『言う』ならそういう『こと』に『なる』ん
じゃない？」

「ふふふ、まあ、それが聞きたかったわけじゃないんですよ、いえ、
あなたなら知ってるかと思ひましてね。聞きたいことがあるんです
よ」

ん？珍しい。

全てを知っているような雰囲気を持つ彼女だが知らないことがある
のだろうか。

「いえ、私興味がないことには本当に無知なんですよ。で興味を持
った時には教えてもらう」

「調べようとは思わないんですか？」

「調べようと思ってても少々難しくくて・・・それに私はもう少しで受
験ですし、時間がありません」

「で、何が聞きたいの？」

「文系少年と名乗る少年に心当たりはありませんか？」

「文系少年？」

聞いたことがない。というより文系の称号は彼女のものじゃないか。

「そうなんですけれども、自称そう名乗っているようでして」

「ふうん・・・悪いけど知らないな」

「そう・・・ですか・・・せっかく私が久々に興味をもったと思ったのに。やはり無理矢理にでも生徒会長にでもききますかね？」

無理矢理にでも？つてことは生徒会長は色花さんに文系少年の存在を隠しているということか。

なるほど。これはもし分かっても教えない方が

「長鍋さん・・・もし何か分かっただらぜひ教えてくださいな」

ああ、なるほど。これは関わりたくないタイプの事件だな。

「何か分かったらな」

私は絶対に教えないと決心してパトロールを続けた。

○

「なんでも屋？」

放課後、俺は山梨からある部活の存在を知らされた。

「うん、桜部？桜花部？なんだっかは分からないけど悩んでるならそこに行ってみたら？」

「いや、でも俺が迷ってることは進路であって他人にゆだねることじゃないんだよ」

「じゃあ、他のことをきいたら？」

「他の事？」

「その部の部長3年生らしいし、参考になることをきいてみたらどう？」

「んー。まあ、暇だったら行ってみるよ」
というよりこれから面談なんだよなあ・・・めんそくせえ。
自分の進路のことだがそう思ってしまったてもしょうがないと思う。
「さて・・・と」
もう行くかな。俺は立ち上がり数夏にアイコンタクトで伝えてか
らその場を去った。
えーと、確か職員室近くの進路相談室だったかな？
職員室でまず先生を呼ばないとな。

○

「会長、会長ってば！」
「ん？どうしたのかな？愛実くん」
会長は笑みを絶やさず俺に振り向いた。
「会長・・・あの・・・生徒会室に【色花】さんが待ってますよ」
「・・・分かったよ。」
会長は歩く足の速度変わらずそのまま生徒会室まで行く。
「あらあら。お久しぶりです」
「・・・で、俺に何の用事かな？」
「ちよっとこちらへ」
そう言って【色花】さんは会長をつれてどこかへ行ってしまう。
それを追いかけようと俺も行くとするが・・・。
「・・・」
会長に目で止められる。

なんで・・・と思ったが今、思えば別に会長への話に俺がついていく必要なんかどこにもない。

俺はなんでついていこうと思ったのだろうと考え直し、自分の仕事をこなすことにした。

「おい、愛実会計。こっち手伝ってくれ」

「あ、はい！って伊藤先輩なに漫画読んでるんですか！」

俺は夏休み明けのふつうの生活を楽しんでいた。

「あ、愛実くん、こちらも頼みますわ」

「お、おう・・・」

成宮への接し方はまだ分からない。

あれは告白・・・でいいのか？

でもむこうは普通に接してくるし。

結局あときは花火やら帰りの準備とかで返事もうやむやになっ

ちやっただけ。

「むう・・・」

どうしたものか。

それよりも仕事だ仕事！

第48片 文系少年とそれぞれの秋風（後書き）

タイトルが苦しいと思うのは気のせいです。

というわけでもう少しで50話ですね。

長かったような・・・短かったような・・・。

しみりするのは50話をむかえてからです。

では。

第49片 文系少年と文系少女の言葉

「生徒会長さん。私に文系少年さんについて教えてほしいのですが」

「……………」

「ではそつですな私に『教えて』くたさらない？」

「……………」

「……………もしかして耳栓してるんですか」

「……………」

「聞こえてないみたいですね、本当に」

「……………」

「ふふふ……私の【話】はまだ終わってませんよ」

○

「なんでも屋があやしい？」

俺はさつき山梨から聞いたなんでも屋である桜部だっけ？そんな感じの部活について山梨からさらに情報をもらった。

いや、さつきと言われた内容がめっさ違うんですけど。

「情報に振り回されるいい例が私だね！」

「なんでそんなにいばれるのかはいいとして……あやしいってなんだ？」

「うーん、それがね。その部の部長さん。なんでも屋って言うんですけど決して自分が自ら手伝うようなことはしないんだってさ」

は？手伝うこととはしないって？

「そう。たとえば、私の恋を叶えてくださーいとか相談してもその人は手伝わない。協力さえしない。するのはただ励ますだけなんだってさ」

まあ、高校生の部活だ。なんでも願いを叶えられるわけじゃないし。

「でもそんなあやふやな部活がよく今まで残ってこれたな。普通廃部になってもおかしくないだろ」

大会があるわけでもなく、やるのはただただ励ますだけ。そんな部活は廃部になるだろ、存在意義も分からないし。

「ですが生徒からの指示は莫大だそうだよ」

「なんでまた？」

「そこに相談すると相談したことがいい方に傾くってさ。さっきの例だと恋ができませんでしたーとかね」

確かに自分で言うのもなんなんだが高校生というものは恋愛について悩むことが多いよな。

創作でも現実でもさ。

でもそれを話すとなくなかなか難しい。

それで頼るってわけか。

高松が言った流れ星のような存在を。

「ふうん」

「ま、私は恋を鯉ほどにしか思っていないけれどねー」

「今は俺も似たようなものかな」

魚の鯉ほどにしか興味がない。

というより俺は……。

「今はってことはもしかして昔はいたのかなー？」

「そりゃ、いるだろ。普通に初恋は幼稚園の頃だったぞ」

「ニブチンの七実くんが珍しいね」

「誰がなんだって？」

「うっん、なんでもないっすよ！んじゃね」

「いや、待てよー！」

山梨はまだ学校に用事があるのかどこかへ行ってしまった。

「おーい、数夏。帰るか？」

「あれ？さつきまで戸張さんがいませんでしたっけ？」

「いたよ。もうどっか行っちゃったけど。まあ、また変な情報を集めにでも行ったんじゃねえの？」

「変な情報？」

「ああ、お前にはまだ話してなかったな」

一応数夏にも話しておく。まあ、こいつはそういうあやふやな感じのことは嫌いだろうし。

そついつ占いより自分の数字、頭を信用するだろうな。

その予感やはり合っていたようだ。

「そんなあやしいものが学校内にあっただんですね」

「やっぱお前はそういうのが嫌いか」

「ええ、まあまあ嫌いですね」

「というか相談受ける方もあれだよな。よく励まされただけで実行にうつせるものだよ」

占いで知らない。

やってることは普通の人と同じ。

なのになぜ好評なのか。

それはよほど言葉に説得力のあるやつじゃないとありえないだろうな。

言葉に異常をもってるやつなんて聞いたこともないけど。

「きっとそのうち聞かなくなりますよ、そんな部活は。流行はすぎるものですし」

「そつだよな」

「それよりも私も噂を聞いたのですが・・・文系でも理系でもない人がいるって知ってます？」

「いや、確かに両方得意とか両方苦手とかっていう人はいるだろうけど」

「どんなテストも文系教科理系教科がまったく同じ点数という人が

いるらしいです」

「たまたまじゃねえの？」

「それが1年生から2年生にかけてのテスト全部です。まあ、教科によって点数は変わるので同じ点数というか同じ比率だということですけど」

「そんなやつがいるのか・・・」

「あくまで噂ですけど。それは文系にも理系にも所属しない【無】所属の人間と言われているらしいですよ。まあ、うちの学校じゃありませんが」

「俺はまあ、迷うことなく文系だったけれど、理系への未練っていうのはやっぱりあるんだよなあ。そんな俺からすれば羨ましいっちゃ羨ましいかもな」

【無】所属ねえ・・・。

俺はもし、そんな科、文系も理系も関係ないような所属があるなら入っただろうか。

いや、ねえな。

こいつも同じく理系を選んでいたと思う。

変わりなく進んでいる。

そんな気がする。

「なんか俺も情報に振り回されてるような気がするな」

「七実さんは情報の他にも振り回されてる気がしますよ」

「それは主にお前にな」

○

「あれ？そういえば会長はどこにいったんですか？」

「愛実会計。それは愚問というものだよ。会長には放浪癖があるのかというぐらいフラつく人だからね。それは僕にも分からないと言
うものだよ」

「伊藤先輩にも分からないんですか・・・」

「何か用があつたのか？」

「いえ、なんだか心配になつて」

生徒会室で俺は伊藤先輩に質問しながら心を落ち着かせようとした。
た。

しかしそれは無理な話で。

どこからくるのか分からない不安が俺を追い込んでいく。

「まあ、そんなに心配するものでもないさ」

「そうですかね・・・」

○

「あらあら、これはこれは風紀委員長さん。どうしたのですか？」

「ん？ああ、偽名さんではないか。いやいや、用という用ではないのだがもうすぐ卒業である私たち。何か思い出でも残したいとは思
わないか？」

「そうですね・・・。私たちが知りあつたのも必然なんですよ。

ほんと偶然なんかではなく必然」

「その前にちよつと聞いていいかな？」

「なんですか？」

「君、ねじ曲がった心で人を励ますのはやめていただけじゃないかな？」
「……………」

「いやね。君が偶然を求めて人を励ましているという噂をきいてね。そして偶然を引き起こすために君の【言葉】を使っているともきいたんだ」

「それは誰からですか？」

「それを言ってしまったら君は何をするんだい？」

「……………」

「明らかに情報源を消すんだろうね。物騒な意味じゃなくて記憶的にだけだよ」

「ふふふ。ききたいことはそれだけですか？」

本当に不気味な奴だ。

ただ不気味すぎてそんな雰囲気を作っているようにさえ思える。

「ああ、それだけじゃないよ。あと1つだけ」

私はポケットからメリケンサックを取り出す。

「生徒会長に何をした？」

「面白いですね。あなたは本当に鋭くてうっとおしいナイフのよう。まさしく私のど元を狙う、つまり確信をついているようですよ。」

まあ、でもしかし私はここであなたを・・・」

彼女はニヤリと笑った。

第49片 文系少年と文系少女の言葉（後書き）

お久しぶりになってしまいました。

あ、後1話で・・・。

では。

第50片 文系少年と文系少女の言葉？

「あなたは面白いですね。私にケンカを挑むなんて本当に驚きです。あなたのことだから部下を使ってくるものかとばかり」

「はっ！ふざけるのもいいかげんにしろ。私はお前を許すことができなさそうだ」

「あなたが許さなくてもいいんですよ。私は私をすでに『許している』」

私はメリケンサックをつけた一世代前の不良のような装備で【色花】に挑む。

何度も何度も拳をふるう。

しかし。

けれど。

一撃も当たらない。

すべては彼女の言葉に弾かれるのだ。

「私には何をしようと『触れることができない』んですよ」

「くっ！」

両手につけたメリケンサックを握りしめる。

右手左手と順に彼女に叩きつけるようにふるう。

しかしどんなに力を入れようとも。

まったく彼女には届かない。

体が自ら拒否するかのようには届かない。

「私は必然だらけのこの世の中に飽きました。恋の話。自分に気があると思うと告白し、なさそうなら告白しない。ならば必然的に結果は決まり切っている。告白する奴は大抵成功し、告白しないのだから成功はしない。なんででしょうか？これは。つまらないじゃないですか、そんな世の中」

くっ！話す余裕もこいつにはあるのか。

「はああああああああ！」

ガツガツガ!

殴る殴る殴る。

けれどそれでも届かない。

先生は生徒会より彼女を信用してるぐらいだ。風紀委員長でも意味がない。

ならば私が彼女を変える!

しかし今思いっきり殴れるのは彼女に攻撃が通用しないと置いてあるから。

私は私の行動を私自身で否定しているのだ。

その気持ちと想いの矛盾が私自身の心を弱くする。

私は負ける。

それぐらい占い師や預言者を頼らなくても分かる。

私は負ける。

でもその前に。

少しだけでも。

抵抗を。

「はっ、お前も不幸だな。そんな能力を持ったせいで探究心に身体がのつとられてる。世の中がつまらない? 違うよ、つまらないのはあんただ。殴れなくても伝わってくる、お前の気持ちの悪い言葉がな」

「負け惜しみ。というやつですか? 私がつまらないという表現はあながち間違いではないでしょうね。あなたは文系なのでしょうかね、いえ、そんなことはどうでもいいですね」

すると【色花】は両手を広げる。

何も起こらない。

というより、やつがいつも持っている扇子が手にはもうなかった。こいつ……普段から扇子で口を隠してるのは能力をおさえるためか?

「私はこの世界を変えたい。なんてことは思っていません。しかし私は私の目が届く範囲の縮小世界を変えたいとは思っています。つ

まらない私が見たつまらない世界をね」

「お前の目の届く範囲だと・・・それはすなわちお前の全て・・・世界じゃないか」

「それは私の主観でしょう？客観的に見るとその世界はひどく小さく狭い。世界の一部というのもおこがましいようなもの」

一旦距離をとり、態勢を立て直す。

「縮小された世界。その世界の改変こそが私の目的。必然だけであふれたつまらない世界を偶然で塗り替える。なんとも面白そうだとは思いませんか？」

「私には何を言っているか分からないな。お前のわがままにしか聞こえない」

「実際その通りなんですよ。私の自己満足のためです」

「そのためにお前は他の人を傷つけたのか」

「そこなんですよ」

彼女の口元には笑みが広がっていた。

・・・なるほど。扇子はやはりあったほうがいいな。

しかし私の反論は本当に意味がない。

私にもわかつてる。彼女がなぜその自己満足を続行できるのか。

「確かに私を怨んでいる人も多いでしょう。恨み妬み嫉みという感情は恐ろしいですからね。しかし私に相談してきた約7割は私に感謝している」

主に恋愛相談。

彼女に相談しにくる人たちの相談内容だ。

その相談を聞いた彼女は彼女の『言葉』を使い相手に言い聞かせる。

例えば「好きな人に告白したいけど勇気がない」そんな内容だとする。

それを彼女は言葉を使い『成功する確率が高いわけじゃない』『けれど』『あなたはそのままでもいいのですか？』『動かないと見れないものだってあるものですよ』

それを聞いた相談してきた相手はその気になり告白をする。普通この程度の言葉ですぐ行動する人などいない。しかし。彼女の『言葉』は少し違う。

少し違うだけでものすごい効果を発揮する。

その告白が成功するとあそこに相談するといいいというような噂が流れ、失敗すると偶然を見れるのだ。

もともと成功するならそれは偶然ではなく必然。

しかし失敗した場合。彼女は偶然を見ることになる。

普通告白する予定のなかったことに言葉で無理矢理告白を促せ偶然を見つける。

それが彼女の生きがいであり、彼女の部活の存在意義でもある。

「私は何一つ悪いことはしていないんですよ」

「ああ、確かにそうかもな。女子同士で励まし合って告白まで持っていくのは珍しくはない。しかし相談にのる理由に悪意、そしてお前しか使えない特別な『言葉』を使うのはおかしいと思わないか？」

「思いませんね」

「こいつ……はつきりと……」

「言った通り私の自己満足ですので。あなたに介入する余地はありません」

「でも私は風紀委員長でね。学校の風紀が乱されているんだ。動かないわけにはいかない」

「風紀？何がですか？私は励まし合ってるだけじゃないですか」

「いいや、『変な占いを学校内で流行らせ、勉強を怠る』ことがだよ」

「言葉の照準……成程。やはりあなたも文系でしたか」

「お前ほどの力はでないがね」

「さて、」

彼女は仕切りなおす。

「少し話すぎましたね。もうそろそろ終わりにしましょう」

「はっ！こっちのセリフだよ。大馬鹿野郎」

○

あつっー……。思わず地の文で思うほどうなだれていた。

「いやいや、夏休みが終わっても暑さに休みはないってか、この野郎！」

「いや、七実くんは一体なににキレてるの……？」
現在俺は登校中である。

数夏が日直らしくはやく出ていったわけだが俺が出ようとしたときに山梨も出ようとしていたため今日は山梨との登校になる。

「いやーごめんね。登校相手が私で」

「なぜ謝る……」

「数夏ちゃんと登校したいのかと思ってね」

「いや、俺としては1人が一番落ち着くんだけど」

「そんな生涯ほっち宣言してないでさ！」

「してねえよ！やめろよ！ちよつとマジであんま友達いねえんだから！」

「……………」

「だんまり!?」

「ああ、七実くん。そういえば一時間目の授業なんだっけ？」

「いらぬい！そんな無理矢理な話の方向転換なんていらぬい！」

「七実くんのために酸素を読もうかと」

「惜しいよ！窒素と二酸化炭素も読んでほしい！」

「あ、たんぼぼだー」

「なに！？急にラリったの！？ああ、もう、朝なんだから静かにしてくれよ……」

「七実くんのツッコミもなかなかのうるささだと思っただけど……」

「まあ、元をただせば私のせいかな。とどこか自分で納得して秋とは思えない暑い中登校していく。」

「そういえば山梨……っつと」

俺はなぜいつも俺より登校するのがはやいお前が俺と同じ時間に登校しようとしたのかを聞こうとするとかかが俺にぶつかった。

「？」

あたりを見回してみると誰もいない。いや、いる。ちょっと頭が見える。

ああ、なるほど。数夏ぐらいの大きさの背丈……いやちょっと大きいかもな。そうぶつかってきたのは見覚えのある、しかし1、2度しか見たことのない女の子だった。

「うわつと……あ……ごめん！まわりをあんまり見てなかったよー」

「あ、ああ、いや。別にいいよ」

「ほんとごめんね」

そう言いながら走り去る。

なぜだろうか……背が低いのに揺れるぐらい胸がある……それに他にも数夏と違う点があるとすれば髪の毛だろう。

ショートカットだった。まさに運動部に入っています！というよきな髪型。

短すぎるわけではなく、ショートカットの中でも長い部類だと思う。

背は低いが足の速さは半端なかった。

「大丈夫？七実くん」

「・・・・・・・・・・えーと今の人って誰？」

「確か・・・・・・・・隣のクラスの下野さんだったと思うけど」

「下野さん・・・・・・・・・・？」

「あつれー？どうしたの？もしかしてラブコメ的展開？これは浮気じゃないの？数夏ちゃんに怒られるよ！ああ、でも気になるよねーなんてね」

「・・・・・・・・・・」

「な、七実くん・・・・・・・・？」

「ん？あ、ああ、どうした？」

「いや、なんでもないけど・・・・・・・・」

「そうか」

山梨の様子がおかしい？何かあったのだろうか？

○

「・・・・・・・・・・といわけで気をつけるように」

そこで朝のホームルーム終了のチャイムがなる。

先生の話はちょうどいいところで終わり、みんな次の授業の準備へ入る。

しかしみんなが気になってることは1つだった。授業ではなく、別の物。

「生徒会長と風紀委員長の人、今、怪我で休んでるんでしょ？」

「階段から落ちたってあやしくない？そんなベタな原因がある？」

「でもベタってことはよくあったからベタなんですよ」

「いやいや、違ってます。なんかやばいときにいい訳として使うこと

多いからベタなんだよ」

とまわりの女子が何か言っている。が、しかし。

私はまた別のことを考えていた。

「山梨さん次移動教室だよ？」と友達に言われ、準備をしながら考えていた。

朝の七実くんについて。

うーん・・・なんだろうかあの感じは・・・嫌な予感がするんだけど・・・。

まさかね。いやいや・・・ないない。それはない。

と、私は自己完結して移動を始める。

○

「さあて・・・ふふふ。文系少年とやらはどこにいるのでしょうか？楽しみですね。どんな人なんでしょうか・・・放課後が楽しみです・・・」

不気味な笑いは近づく。言葉を使って。巧みに目的を目指しながら。

第50片 文系少年と文系少女の言葉？（後書き）

かなり遅れてしまいました・・・。

内容を忘れてしまっているかもしれません。がよろしくお願いします。

たまにでいいんで前の話も見てくださいと嬉しいです。

では。

第51片 文系少年と文系少女の言葉？

放課後。

俺は授業を終え、帰宅しようとして荷物をまとめる。

「七実さん、七実さん」

「?どうした、数夏」

「今日は先に帰っててください」

「ん?ああ、日直か?別に待ってるぞ」

「ほんとですか?じゃあ、すぐ済ませてきます」

「いや、丁寧にはやれよ」

「分かってますって。びゅびゅっ!びゅ!って感じでやってきます」

「いや、それ全然丁寧じゃないから。風もきってるし、空もきってるから」

そんなわけで俺の帰宅はまたしばらく後になりそうだった。

数夏は教室を出ていき、職員室に行ったらしい。

さて、何をやるべきか・・・と暇な頭なりに考えようとしていると・・・

「あら?すみませんがあなたのお名前を教えてください」

俺の真横に。気配がなく急にそこに現れたかのようにいた人物がいた。

なぜ俺は気付かなかつたのだろうか。

「!?...なんだ...?」

「驚かなくていいですよ。それより質問に答えて下さる?」

「.....あなたこそ名乗ってくださいよ、先輩」

かろうじて先輩ということだけは判断できた。

「確かにそうですね。私の名前は【色花】と申します」

いろはな?偽名か?なんて漢字を書くんだ?

「俺は七実...未空だ」

「ああ、なるほど。あなたでしたのね。苦労しました。生徒会長に

尋ね、風紀委員長に邪魔され、本当に長い道のりでしたよ」

「なに？」

生徒会長に風紀委員長？それって今日確か怪我したとかで・・・

「お前か？」

「はい？」

「お前が生徒会長と風紀委員長を・・・」

「さて、それはどうでしょうか？」

「この・・・！」

「あなたこそそこまで他人のために怒れるなんてすばらしいのでしょうか。あなたは私の世界に偶然を持ちこんでくれる。そう信じた結果ここまでとは！」

「なんだ・・・こいつ・・・？」

言動が理解できない。

まるで違う言語を使っているようだ。

いや、実際違うのだろう。彼女と俺の言葉は。

幸いなのは数夏がいなかったことか・・・。

「さて、ではあなたは私に何をしてくれるんですか？」

「・・・」

なぜだかは分からない。

だが俺はここで確信した。

こいつは普通じゃない。

「あー、そこまですよ」

「？」

「？」

またそこに1人の男の声が聞こえた。

いろはなという人も驚いてるということは予定外ということなのだろう。

しかしその顔は口元を扇子で覆われているのに笑顔だと分かった。

「ああーあ、結局ばれたのかよ、これはやりにくいわ」

「あら？あなたは確か生徒会の・・・」

「伊藤だよ」

「会長の仕返しですか？」

「さあーね、僕は家に帰って溜まってるアニメを見なきゃいけないんだよ。だから迅速に終わらずぞ」

「生徒会だからといってあなたに何ができるのですか？」

「まあ、そうなんだよね。結局僕は無力なわけだからさ。何もできないんだよねー」

そう言っつて顔に笑みを浮かべる伊藤とかいう男。

「僕、1人ならさ」

バラバラバラバラ

なんだろうとか、変な音が教室の外から聞こえる。

「あー、あー、犯人につきますわ。お前は包囲されている」

「あ、おい、成宮。お前そのヘリコプター・・・まあいいか」
教室の外をヘリコプターが飛んでいた。

その中に女の子が乗っているようだが・・・。

「なんだ・・・この状況」

とても回収できるようなものだとは思えないんだけど・・・。

どうすればヘリコプターが飛んでくるんだ。

「さすが成宮だな。僕は人の声が聞こえない程度の大きさの音を出してくれと言っただが・・・まさかヘリコプターの羽の音と自分の声を使うとはな」

伊藤とかいう男が何か言っているが聞こえない。

んだが……」

「では私は一度へりを置いてきます」

「どこにだよとかいうツツコミはもついらないか」

あーあ、ほんとめんどくせえな。

まあ、けど会長のためでもあるしな、俺らでやるしかないんだけど。

「あー、えーと、色花先輩だっけ？あんたに文系少年……ってのは自称だったか？まあいいや。文系少年には近付かせない」

「ふふふ、どうやって？」

「言っておくが僕にお前の言葉は『聞こえない』し『届かない』ぞ」
「……あなたも文系なのですね」

「違うよ、僕は理系でもあるんだよね。でもだからこそ僕に言葉はきかない。というより僕の方が理解を放棄するということかな」

「なるほど。私の言葉を理解しないということですね。すなわち無の境地といったところでしょうか？何も考えないとは確かに私への抵抗となりますが……それじゃあ、あなたも何もできないのでは？」

この【色花】の言葉は理解してしまうといけない。

脳が理解してしまうとその言葉通りに身体が動いてしまう。

ならば何も考えず言葉を理解しなければいい。難しいことではあるが例を出すと分かりやすい。

ぼーっとしているときに話しかけられても言葉が聞こえないことがある。

授業中、友達と話している時。

その状態を常に続ければ確かに言葉は届かない。

しかしそれは普通にできることじゃないだろう。

まして自分のやりたい時にその状態になることなど難しいはずだが僕にはそれができる。

【色花】の能力なども予想だが大体合っているとみていいだろう。

何しろあの会長が常に耳栓を持ち歩くぐらいだし、言葉を聞くこ

とに意味があることは正解だろうな。

「僕がするのは時間稼ぎだけ。特に何かするわけじゃないんだよ」

「時間稼ぎだけで大丈夫なんですか？明日も明後日も私はここに現れるかもしれないよ」

「ならその次の日もその次の日も時間稼ぎをするさ。文系少年がお前と匹敵するぐらいの実力をつけるまでね」

「……なるほど。彼はやはり【自称】止まりの実力ではない……ということですね」

「さあね。僕は他人のことに興味がなくて」

「まあ、いいです。私は彼を追いますがよろしいでしょうか？」

「んー……もういいかな？彼もさすがに帰っただろうしね」

「確かにもうすでにいない確率の方が高いと思いますけど……諦めたらそこで試合終了なんですよ」

「……あなたはいつからそんなキャラになったんだ……」

そう言いながら教室から出ようとする【色花】を止めずに見送る。僕の仕事はこんなもんかな。まだ生徒会の業務の方の仕事があるんだけどなあ。

予習もしてねえしさ。でも、ま、アニメの時間は削らないけど。

ピリリリリ

あ？と思い携帯を見てみると副会長から。

「もしもし、副会長ですか？」

『そうだ。まだ色花はいるか？』

「いえ、もう逃がしました」

『はやくないか！？まだ予定だと5分は足どめしてなければ……』

「すみません、5時半からアニメの再放送をやるので」

『もっと頑張ってくれよ……』

「いえ、NAROTOですよ」

『ナルサス！？』

「あなたは本当に忙しいですね、エロ副会長。一応女性なのですから少しは……」

『ツーツー』

「あの野郎！」

先輩とか関係なかった。もうそんなことはどうでもいいぐらいだった。

「つたく・・・あーじゃ、帰るかな」

その時ガララと教室のドアが開く。

こんな時間に・・・とはいえ部活がある生徒は普通にたくさんいるわけだが教室に入る人間は少ないと思う。

ドアの方をふと見ると。

「あれ？七実さんがいなくなっかわりに違う人がいます」

「・・・」

ん？どっかで見たことあるかと思ったら文系少年と一緒にいる女の子だった。

しかしそれとは別にまた見たことがある。

彼女は・・・

「理系少女・・・!!」

そこにいたのは理数系の教科1位を全てものにしてる理系の最
高峰。

理系少女だった。

「おいおい・・・マジかよ・・・」

「あれ？どうしました？見た所あなたも2年生のようですが？」

「ん？数夏ちゃんどうしたの？」

さらに女の子が1人。

大人しそうな黒髪ツインテールの女の子。

高松小鳥。雷瞬少女だった。

「ああ・・・これはアニメの再放送無理かもなあ・・・」

とそこで僕は頭にひっかかりを見つける。

あれ？

なぜ、この時間まで文系少年は教室のしかも自分の机に1人で座っていたのか。

確か部活には入っていないはず。
ならなぜ？

そう、それはこの彼女たちを待つためではないのか？

「確かに七実さんが待っててくれるといったのですが・・・」

「どこにいつちやっただらうね・・・でも約束を破るような人じゃないからいると思うんだけど」

「むー、しかし小鳥さん、助かりました。日誌をひろってくれて。危うくなくすところでしたよ」

「ううん、別にいいよ。それに私、この後図書室で部活あるし」

「あー君たち」

と僕は2人の世界に入っている2人を呼ぶ。

「文系・・・じゃなくて七実未空とここで待ち合わせを？」

「ああ、はい、一応」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ってことは・・・・・・・・。

「あいつ！まだ帰ってねえのかよ！」

そうきつと文系少年はこの少女2人のところによってから帰るに違いない。

待ち合わせをしていたのならなおさら。

文系少年は約束を破るはずがない。それはこここのところの彼を見ていれば分かる。

なら行き違いになったということか・・・。

ということは文系少年はまだこの2人を探して回ってるということ。

俺はポケットから生徒会人数分の携帯電話を取り出す。

なぜそんなに携帯を持っているのかというと成宮から借りたわけだが。

「あー、生徒会役員現在学校にとどまっているものにつく」

ちなみに同時に通話している状態だ。

「今、担当している雑務、仕事などを一旦全て放棄。守るべき対象

はまだ学校にいる」

むこうからの声はない。

ただただ聞いてくれているようだ。

その方が助かる。

「あ、あのー七実くんは・・・？」

「お前たちは2人ともいますぐ帰宅しろ。理由を話している暇はない」

「え・・・えと」

「生徒会役員。聞こえるか」

各々の声が聞こえる。

「これより、準備に入る。準備のできたものから追え。んじゃ、健闘を祈るっつーことで」

ピッ

通話終了。

「あの・・・」

「俺はとりあえず君ら2人を校門まで見送る。ついてきてくれ」

「七実さんは？」

「今、他の仲間が探してるから安心しろ」

「は、はあ・・・」

「ほら、行くぞ」

「どっどこ？」

「!?!」

ふいに声が聞こえる。

「あー驚いてる驚いてるー。面白いな驚愕の顔。まあ、黄味も色々な意味で驚愕してるんだけどね」

「なんだ、お前は?」

「色花先輩はねー部活で人を励ましているんだよ。その時点で気付いてほしいけれど」

「あー、なるほど」

「頭の回転がはやいね。さっきまで驚いてたとは思えないよー」

その場にいたのは女の子だった。

背は150ちよいそして長い茶色の髪の毛。しかしその髪の毛はクセがあるのかどこか跳ねていてそして微妙にカールがかかったみたいになっている。

「お前もその一員ってことか」

「その通りー。黄味も部員なんだよねー」

とりあえずどうしようかなこの状況。

「俺の名前は伊藤だ」

「黄味の名前は黄味だよ」

「で、どうしたら通してくれるんだ?」

「黄味が負けを認めるときだね。んー何で勝負するかは君たちで決めていいよ」

「は?」

「黄味はスポーツが好きなんだー。だからそこらへんの種目にしてもらえるといいな」

「.....」

緊張感の欠ける奴だな。

なるほどね。こいつは別に七実未空には興味がない。

遊びたいだけということか。

だったら早く決着のつく方法で.....

「え……えと……」

「ん？」

雷瞬が何か話したそうにしている。

「伊藤君……だったっけ？ちよっと……」

ゴニヨゴニヨと小声で話す雷瞬。

あーなるほど。確かにこれはいいかもな。

「黄味とやら。勝負内容が決まったぞ」

「ん？なにになにー？」

「ゴルフだ」

「へ？」

「ゴルフだよ」

「いや……えっとー教室で？」

「ああ、そしてお前の相手はこの雷瞬少女だ」

「いや、うん……それはいいけどゴルフってどっせやって……」

「簡単なゴミ捨てだよ」

第51片 文系少年と文系少女の言葉？（後書き）

どうも。

最近というか最初から不定期なのでなるべく間をあけないようにしました。

長くなってしまったかも……。

では。

第52片 文系少年と文系少女の言葉？

「簡単なゴミ捨てだよ」

勝負内容をゴルフということにしたのは簡単な理由からだつた。

まあ僕は特に何もしないんだけど。せいぜい解説役として頑張らせてもらおうよ。

「んー説明をよろしくお願いします。黄味はバカではありませんけれどさすがに説明不足だよー」

「お前口調が安定しないな・・・まあそれはいい。説明をさせてもらおう」

ゴルフ。

ゴルフというものは簡単に言えば。

野球を球を遠くに飛ばせば勝ちというように簡単に言えば。

玉を穴に入れたら勝ちというようになるだろう。

まさしく今からやろうとしているこのゲームもゴルフとよべるものだろう。

箸はしを持ちそれをたまたまあつた飲み物の入れ物、パックなので四角い入れ物をゴミ箱に入れるという簡易型、学生が考えられる遊びの範疇のスポーツ。

それが勝負内容。

3回挑戦してより多くゴミ箱に入れた方の勝ち。

「それが勝負内容なの？」

「ああ、その通りだ小柄な少女よ」

「黄味は小柄な少女じゃなくて黄味という名前があるんだよー」

「でも僕は観戦だなあ、な、理系少女」

「ええ、私たちの出番はないようですね」

「んー？つてことはそのツインテールの子が相手なのかな？」

「う、うん・・・そうよ」

「じゃあさ、じゃあさ、もう始めようよー黄味はやりたくてやりた

くて仕方ないんだよ、ゲームゲーム！」

ゴミ箱を教室の端におき、その真反対に移動する。

さてと……。

「じゃあまずは黄味からでいい？いい？うずうずしてるんだよねー」

「ど、どうぞ……」

そういつと黄味とやらは位置につきパックを地面に置く。

その場でいくらか素振りをする。まあ、こいつがどんなにゲームが好きだろうが得意だろうが関係ない。今回のこのスポーツは問答無用でお前に不利なんだよ。

「いつくよー！」

大きく箒をあげ……

「よいつしよー！」

パコーンというかわいた音がする。

僕は少し驚いていた。何にかというと箒を使ってパックを打ったことだ。

自分たちで提案しておいてだがこのスポーツは少し難易度が高い。普通の人なら教室の端から端まで飛ばすことなどできないくらいだ。

しかし……

「ああーおしいー！」

ゴミ箱に入るところかその後ろの壁に当たっていた。

そして跳ね返ったパックはゴミ箱をかすりギリギリ外に落ちた。

「あつぶねえ……」

「んじゃ、次は君の番だね」

「あ……はい」

そい言つて彼女、雷瞬少女はパックを地面に置く。

その時……

「ん？あれれ？どうしたのかな？雰囲気全然……」

ブワッ

「残念だけど僕達にゲームを選ばせた時点で君の負けだよ」

「君じゃなくて黄味っていう名前が・・・」
そして黄味とやらは目を見開く。
そう、もう地面にパツクはなく、ゴミ箱にちょうど綺麗にホール
インワンするところだった。
「・・・・・・・・え？」
「ゴミはゴミ箱に・・・それが決まりですよ」
「小鳥さんかっこいいです！」
「んじゃ、続けようか黄味さん」

○

「いねえ！」
俺は職員室の中に入って確認したりしたがまったく見当たらない。
確実に行き違いになったらしい。
意外とこの学校階段が多いので道のりは山ほどあるのだ。
「あー、くそ。この状況もよくわかんねえし」
「状況なら私が説明してあげますよ」
「・・・・・・・・あー・・・せつかく逃がしてもらって悪いんだけどさ・・・エンカウント率高くね」
「私自信も少し驚きました」
「んで、状況説明よろしくお願ひしますよ、【色花】先輩」

「簡単にまとめると私はあなたを倒したいということ・・・ですね」

「なるほど・・・って簡単すぎるんだけど・・・」

「いえいえ、私は偶然というものの、奇跡というものが好きなのです。自称でも文系を名乗るあなたはきつと私の世界を変えてくれる。そしてどうすればいいの考えました。あなたが私の世界を変えてくれるための最もいい方法。それはあなたから自称文系の称号をとりあげること」

「・・・いつとくけどさ、俺は別にその文系っていう称号に興味なんかないんだ。俺のは完璧自称だし、それに文系文系いつてるけど数学や理科ができないから文系になったっていう軽い理由だし。そんな俺からそんな意味の無い称号をとりあげたって意味がないと思うけど」

と、俺は自分の見解を話す。

こいつが何を言っているのかがよくわからないけれど何も争う必要はないんじゃないかと思う。

文系なんて称号が欲しいならくれてやる。

というかこの先輩・・・確か文系少女じゃなからうか・・・。

だとするなら俺の文系をとったってそれこそ意味がない。

「とりあえず物騒なことはやめよう。文系称号が欲しいならくれてやる」

「あら？本当ですか？」

「ああ、その代わりもう争いごとはやめよう」

「ええ、もちろんあなたとの争いはもうやめます」

？あなたとの？

まあ、いいか。

「んでどうすればいいんだ？負けを認めますっていえばいいの？」

「ふふふ、ええ、そうですね・・・文系らしい解決というかなんというか・・・私が私の勝ちでいいですか？と聞いたらそれに返事をしていたらだければ」

「じゃあ、はやく終わらせましょう」

「では『私の勝ちでいいですか』?」

「ん」と……は………」

それ以上は言えなかった。

理由は俺と先輩の間に自転車がつっこんできたからであってそれ以上でもそれ以下でもない。

ガツコオオオおおお!!!

と大きな音が響く。

自転車は壁にぶつかり止まる。

「負けを認めないでください!」

その自転車に乗っていたのは………

「あ」

「あ」

海であつた少年だつた。

うちの学校だということは何となく分かっていたが……あの腕章。生徒会だつたのか。

道理で見たことあるなあと思つていたんだよ。

生徒会選挙の時に少し見たことあつたことを覚えていたのか。

「負けを認めたらいけないって何が?」

「文系同士の話し合いでは言葉が最も重要。たとえ心がこもつてなくてもいい。言葉が絶対なんです」

「いや、それでいいじゃねえか。こいつは俺を狙つててそれでお前らが傷つくのも頑張るのも嫌なんだよ。それに文系の称号だけだろ?命を渡すわけでもあるまいし」

「そういえば完璧に説明不足でしたね……その先輩は人の心を弄んでるんですよ。自分の世界のために。そのせいで会長も……」

「………弄ぶ?」

会長というのは生徒会長のことだろうな。

だが弄ぶというのはよくわからない。

「校内で流行っている占いをご存知ですか?」

「ああ、あの当たるとか有名な」

「それですよ、それ」

「？」

「彼女は偶然をもとめてる。必然的な内容だと気に入らない。気に食わない。そこで思いついたのが占い。考えてみれば占いほど人の心を扱いやすくさせるものなんてないですね」

「どういうことだ？」

「時間がないんで説明は手短かにいきます」

○

私は生まれた時からこうだった。

どうしたって変わらない。

そんな狂った少女だった。

第52片 文系少年と文系少女の言葉？（後書き）

お久しぶりです。

なかなか書く時間がなく遅れてしまいました。

とりあえずこの作品も半分ぐらい進んだ気がします……。

100話までいくのかと言われればそうではないような……。

決まっていないことが多過ぎですね。反省しながら書き続けたいです。

では。

第53片 文系少年と文系少女の言葉？

私には母親しかいなかった。

父親は亡くなったのか、離婚したのかもよくわからない。

けれど母親は悲しそうな表情をしたことはなくいつも顔には笑顔を浮かべていた。

そしてそんな母親が私は大好きだった。

だから私も父親がいなくても苦ではなかった。

「今日ね、鉄棒で逆上がりができたの！」

「おおーそうかそうか！よくやったじゃないか」

「へへー」

小学生のころは褒めてくれるのが嬉しくて些細なことでも成功したらすぐ母親に報告した。

それに対して母親は同じ反応ではなくその時そのときで別の反応をしてくれた。

「今日は〇〇の好きな食べ物を作ろうと思うんだが、何が食べたい？」

「やったー！えつとねー・・・ハンバーグでしょー、カレーに・・・」

「お前はそんなに食べる気がよ・・・1つだ1つ」

「ぶー」

「反論なんか聞き入れないぞ」

「だって食べたいんだもん」

「お前ねー太っちゃうぞ」

「いーもんいーもん」

「太りすぎて誰も結婚してくれないかもしれないぞ」

「そのときはデブ専を探すもん」

「お前はそんな言葉をどこで・・・」

「それにそれに、あたしはね、ママと一緒にずーっといるの。だか

ら結婚なんてしない」

「お前はいつまで私に養われるつもりなんだよ」

と言いつつも母親は笑顔だったことを覚えている。

その笑顔につられて私まで笑顔になっていた。

運動会。

私は母親しかこなかったけれど、それでよかった。

父親が羨ましいと思わなかった。

だって私はママが好きだったから。そのママに見てもらえればそれでよかったから。

「ビリだったよー・・・」

「はーったくお前は運動音痴だよなあ・・・成績はいいのによ」

「うん・・・」

「でもさ、ビリってのはダメなことじゃないんだよ」

「?なんで?」

「1位のやつは頑張っても頑張っても上にはいけない。そこが限界だからだ。だからどうしたって目指すのが次回も1位になることになる。でもお前はまだ上に行ける。まだ1位を狙える。だから頑張れる。1位のやつが1位に居続ける頑張りはなビリのやつが1位を目指す頑張りには勝てねえんだ」

「ほえーそうなんだ!」

「ま、お前の頑張り次第だったことだよ」

ニカツと笑う。

今、考えれば1位にとどまるのも楽しいはずだがそれでも私はママの言葉に賛成だった。

本当に素晴らしい人だ。

本当に素晴らしい人

だった。

「交通事故ですってー」

「まあ、あそこの家って父親もいないんですよ、かわいそうね、残された子供は」

「それにお葬式中、子供は泣かなかつたんだって。まだ死というものがよくわからないのかもね」

交通事故だった。

事故だった。

それで私の大好きな人は死んだ。

死んでしまった。

簡単に。

あっさりと。

私はその最後の場にいた。

母親はその時も笑顔を浮かべていた。

病院の病室で

「・・・・・・・・・・・・・・・・○○・・・・・・・・私はたぶんいなくなるけど・・・・・・・・」

強く生きる、頑張れ。お前はまだ1位になれるから……かけ
つこの練習……一緒にできなくてごめんな……」

〇〇……私の名前。

それが母親の最後の言葉。

死というのが分かっていない？

そんなわけがない。

小学生だぞ、小学生を馬鹿にするな。

死んじやったら戻ってこない。

ママはもう戻ってこない。

でもそんなことを思っても涙は一切でてこなかった。

なぜ？

なぜ？

なぜ？

簡単だ。

涙というのはいつ出てくる？

嬉しい時。

笑いすぎたとき。

目にゴミが入ったとき。

そして

悲しいとき。

ならもうわかるだろう。

いや、待て。違う。

そんなことはない。

私はママが好きで尊敬していた。

そう、死というのが実感できてないんだ。

心のどこかでママがまだ帰ってきそうだから。

だから涙が出なかった。

そんなのは言い訳だ。

そうどれも違う。

悲しくなかったわけでもない。

死が実感できなかったわけでもない。
どれでもない。

私はただただママが死んで。
ママが死んで。

喜んでいたのだ。

なぜ？

なぜかって？

そんなの簡単じゃないか。

まわりのみんなは父親、母親がいる。

私はいない。

そんなのドラマの中でしか見たことがない。

まるで偶然の産物。

奇跡とも呼べるような出来事。

そんな出来事に心踊らないわけがないだろう。

父親がいなくても苦じゃなかった！？

少女は狂っていた。
狂った文系の少女だった。
狂った文系少女の足はまだ遅い。

○

「今から説明します」

「………あ、ああ」

なんだ今のは？

あの先輩が何かしゃべってるなあと思っていたら言葉のなかに映像というか記憶の断片が見えたような気がした。

なんだ？あれは？

あれはあの先輩の記憶なのか？

だとしたら救われない。

なんだあの惨状は。あの惨劇は。

「おや？もしかして見られてしまいましたか？私の記憶を？ふふふ
どうですか、いい母親でいい父親だったでしょう？」

「生徒会役員。もう説明はいらない」

「え？」

「あいつが生徒を苦しめてるといことが分ければいい。もういい」「じゃ、じゃあ、はやく逃げてください。ここは俺らが・・・」「大丈夫だ。ここから先は若干私情がふくむからさ、お前たちを巻き込むわけにはいかない」

「ダメです！今のあなたじゃ、やられるだけ・・・」

俺は微笑む。

できる限り優しく。

不安を与えないように。

「大丈夫だ。俺があいつを助けてくる」

「た、助けるって・・・？」

俺は色花先輩に向き直る。

「さあ、先輩、グラウンドに移動しましょうか？」

「ああああ、結局物騒な感じになってしまつたんですね」

「ちげーよ」

「では一体何を？」

俺はこいつを許せない。

それと同時にこいつはかわいそうだ。

そう思った。

だから

だから

「救ってやるよ、お前を」

「ふふふ・・・ふざけたことを言いますね。私を許さないという目で見た人間はこれまでにたくさんいました・・・救ってやるとはまったくもっておかしい。私は魚ではありません、掬うことなんて不可能。私は花です、花を止めるには、摘むしかないのですよ」

こいつが何をしてきたのかはよく分かっていない。

生徒を傷つけたのも事実だろうという曖昧なことしかわからない。けれどそれじゃあ、こいつは救われなさすぎる。

「こいつは可哀想じゃないか。」

「では行きましようか、文系少年」

「ああ、そうだな、文系少女」

第53片 文系少年と文系少女の言葉？（後書き）

2回目の更新なんていつぶりでしょうか？

今回はスムーズにできたので30分ぐらいで考えることができました。

なので少し不安なのですが、間をあまり開けたくない終わり方をしていたもので。

でわ。

第54片 文系少年と文系少女の言葉？

「あ！？文系少年が文系少女と接触！？んで、どうなったんだよ・・・
・・・はあ！？グラウンドで決闘！？なんでそうなるんだよ・・・
まあ、いい、僕もグラウンドへ行く」

はあーとため息をつく。

何がどうなってるのかさっぱりわからない。

文系同士の戦いでは負けを言葉で認めた方の負けになる。

だからまだ文系少年が戦うには早いそう思っていた。

だから毎日時間稼ぎをしていつか文系少年が力をつけるまでかやつが卒業するまでやるつもりだった。

でもそれももう意味がない。

ぶつかってしまった。

「あの・・・七実くんは・・・？」

「お前らは帰れ」

「え？」

「七実さん、また危険なことしてるんですか？」

「そんなのは本人にきけよ、僕もよくわからない」

「数夏ちゃん・・・」

「これはまた七実さんのお節介が発動したようですね・・・」

「んじゃ、いつてらっしゃいー」

「・・・」

黄味とやらが言ってくる。おいおい。

お前は僕たちを止めに来たんじゃないのかよ。

「あーそれはいいんだよー黄味は遊びたかっただけだしねー」

「部長に怒られないのか？」

「君も黄味と同じ臭いがするよーだから言っけれど黄味に部長の言葉は効かないんだよー」

「・・・」

厳密にいうと効かないわけじゃない。

僕も完全な無なわけじゃないんだから。

「それと君ら女の子。君らの友達にも黄味に似てる人がいないかな

？」

「………？」

「いや、いいんだよ、気にしないでさーさあ、はやくいつてらっし
やいー」

○

「私に勝てると思ってるんですか？」

「ああ、まあな」

「私は校内1位、あなたはそうでもないのでしょうか？」

「知ってるか？1位で居続ける頑張りよりなビリが1位になる頑張りの方が強くて大きいんだとよ」

「よく知ってますよ、その言葉」

「そうか。俺はさつき知ったんだ」

グラウンド。

放課後なのに活動してる部活はなく、静かだ。

そついえば急遽、今日は部活が全部なくなるというアナウンスが流れていた。

それもこいつがやったんじゃないだろうか……。

「それで私を倒す目処は立っているのですか？」

「倒すんじゃないねえっての」

「救うんでしたね」

「じゃあ、いくよ」

俺は間合いを詰めるためにダッシュする。しかしそれは攻撃するためではない。

攻撃されるためのダッシュ。

攻撃される理由はいつの言葉を聞くためだ。

「無策で敵につっこむほど危ないことなんてないんですよ」

「知るかよ、そんなこと」

「『ふきとんで』ください」

「!？」

ぐわあっと。何かに押されるように後ろに吹き飛ぶ俺の体でも違う。

何かが違う。

今、押されたような感覚はなかった。押されたように吹き飛ばされたが押されたような感覚はない。

矛盾してるようでいていないはずのこの言葉。

俺は自ら吹き飛んだのだ。自分の足で。

「ぐっ……がぁ……」

背中を地面に思いっきり打ち付けられる。

肺の中の空気が全て吐き出され激痛が俺の体を襲う。

「何が起こったかわからないでしょう？ですがそれが当然であり、必然。本当につまらない。案外あなたを倒しても私の世界は変わらないのかもしれないね」

「うる……せえよ」

「口だけは強気のようにですが……立つ力すらあるかもあやしいです」

俺はもう1度間合いを詰めるために走る。

しかし結果は同じ。

「『ふきとんで』ください」

「ぐっ」

また何かに押されるように自分で吹き飛ばす俺の体。

「があ……」

また体に激痛が走る。

「もう諦めたらどうですか？」

「はあ……はあ……」

俺は足に思いつきり力をいれ立ち上がる。

漫画の主人公じゃないのだ。無敵じゃない。衝撃はかなりのもので2回やられただけでもかなりのダメージがある。走ることはもう無理かもしれない。

でも、俺は歩いてでもこいつを止める。救ってみせる。

「あなたがただ負けましたというだけでいいんですよ。それで痛い思いはしなくてもすみませう」

「お前は自分の世界を変えるためには手段を選ばないんじゃないの？ たのか？」

「そうですね？」

「じゃあ、なんで俺に痛みを与えたくないような言葉を使いやがる」

「……気の迷いかもしれないね」

「見てもらえないんだろ？人が傷つくのを」

「そんなわけないでしょう？私は色花。あなたを倒して世界を変える者です」

「お前はわざと俺にお前の記憶を見させただろ？」

「ええ、そうしたほうが私のことを恐れてくれると思ったんですが逆効果でしたね」

「ああ、そうだな。俺はあれを見てお前が可哀想だと思ったんだ」

ふむ、と色花先輩は扇で口元を隠す。

何かを考えてる様子だがこの間も油断してはならない。
油断できない。

やつは言葉を発するだけで人を吹き飛ばせるぐらいの力を持っているのだから。

「どこで可哀想だと思ったのですか？狂った時？それとも母親が死んだとき？だとしたら哀れむのはお門違いというものです。私は料理もできましたし、あの頃から言葉の照準ぐらいは使えましたのでコミュニケーションにもさほど問題はありませんでした。そして狂いというのは私にとって存在意義でもありますので」

「それだよ」

「？」

「お前のその思考こそがかわいそうで哀れなんだよ」

○

「うーん予想外だ『無』あ・・・」

桜浪高校屋上。そこに1人学ランの男子生徒がいた。

しかしその学ランは桜浪高校の学ランではなく・・・。

「ここまで文系少年と文系少女の接触がはやいと困るんだよね」

と言いつつもその男子生徒は常に笑みを浮かべていた。

「ま、でも僕には何も『無』いわけだし、最初からスケジュール『

無』んてものも『無』いに等しいんだけどね」

「で、何が狙いなんだ、君は？」

そこにもう1人男子生徒が割り込んでくる。しかしそれは桜浪高

校の生徒であつた。

「だから僕には何も『無^な』いんだつてば。だからこそ何かを得ようとするのは当然の行為でしょ。だから僕は欲しいんだよね、【桜】が」

「……それが狙いか？」

「うん、まあそうか『無^な』？うんたぶんそうだと思つよ」

「まあいいや、俺は他にやることがあるからここまでにしておくよ。ただ1つだけ、あまり人の物を無くしすぎるなよ」

「んー」

「聞いてないな……」

「気にしない気にしない、じゃあね、生徒会長さん」

○

「私の思考ですか？」

「俺はお前が料理できるのかと心配した覚えはない。なのになぜ料理ができる、コミュニケーションには困らないという話になるんだ」

「……」

「お前は背けてるだけだよ、母親の死から目をな」

「それで？」

「？」

「それで私が改心するだけでも？母親の死と向き合え、それはもうとつくの昔にし終えました。そして今の私がいる。それが答えですよ」

「そうか……言葉の照準だったか？言葉の威力を高める言葉の指

定

「それがどうかしましたか？」

「お前母親が死んだとき、母親が死んで喜んでいたときお前は言葉の照準を使ったか？」

「!？」

「お前は心を表す言葉の照準を使ったか？」

「……」

「もう残念だが、終わりだぜ。言葉を失うっていうことはお前にとつて致命的。すでに勝負はついたよ」

「……終わりですか……ふふふ……あはははははは！私は世界に【色】と花の【香】をつける【色花】！！私が母親の死を悲しんでる？私が人が傷つくのが嫌い？だったら、風紀委員長と生徒会長についてはどう説明するんですか？」

「くっ……」

それだった。

唯一不可解なこと。

こいつが母親の死を悲しんでいるのなら他の人を決して傷つけるはずがない。ましてや母親が死んだ事故のように振る舞い大怪我させるなどもつてのほかのほかはずだが……。

「ああ、それについてはもう証明できているよ」

「!!」

「お前は……」

「俺がここにいることが証拠だろう」

「生徒……会長……」

第54片 文系少年と文系少女の言葉？（後書き）

いよいよ文系少女編が終盤になってきました。

ここまでくると急に日常が恋しくなりますね。

これが終わるとしばらくまた普通になると思うのでそうなくてもよろしく願います。

では。

第55片 文系少年と文系少女の言葉？

「生徒・・・会長!？」

そこにいたのは色花の手によって入院させられているはずの生徒会長だった。

「なぜ・・・なぜあなたがここにいますか!？」

「いやいや、愚問だね、色花」

にかつといつもおりに笑う生徒会長。俺もそれぐらいは知っている、この会長がいつも笑顔なことぐらい。そしてそれは今回俺を安心させた。

「俺はダメージをほとんど受けていない」

「・・・そんなはずはありません。私はあなたを殺すつもりで・・・」

「殺す?そんな言葉を簡単に使うものじゃないよ。ああ、ちなみに風紀委員長も無事だぞ」

「・・・」

「君がはやく動き出すように大怪我したふりをしていたんだよ。それにしても殺すとか言っておいて外傷になりそうな攻撃をしてこないなんてね。そのおかげで君を騙すことができた」

そういえばそうだった。

こいつはいつまでたっても俺を吹き飛ばすだけで具体的な攻撃はしてこなかった。

その理由はなんとなく分かる。

さすがの俺でも。

他人の俺でも分かる。

こいつは・・・

「君は未だに母親の事故を引きずっているのだから」

「・・・」

「俺は見たよ」

そこで俺は会話に介入する。

「俺はお前の過去を見た。そのお前は『言葉の照準』を使つてなかつたよな。母親が死んで嬉しいと言つたお前の言葉は嘘っぱちだつたつてことだよ。いや、自分では本心かと思つていたのかもしれないけどな」

昔から使えた『言葉の照準』。

それがどういふものか分からないけれどきつとその照準では嘘をつけないような気がする。

全部予想の範囲できいても教えてくれないだらうけれど。

「もう休んだらどうだ。文系少年を狙つたのは自分の世界を変えてくれそうだからではなく自分を救つてくれそうだからだろ？お前は否定するのかもしれないけれどね」

ニコツと笑う生徒会長。

こいつが占いだかなんだかはきつと自分を救つてくれる人を見つけるためのものだったのかもしれない。現実から目を背ける自分を立ち直れない自分を救つてくれる人を。

「ま、なんか最後は生徒会長に全部かつさらわれた感じですけどね
今回色花を救つたのは俺ではない。

俺は何もしていない。

色花の弱さが色花自信を救つたのだ。

「んで、何か言いたいことはあるかい？」

「.....」

「？」

「『ふ』『き』『と』『へ』『』」

「!?!」

ものすごい勢いだつた。

俺と生徒会長は思いつきり吹き飛ばされる。

しかし今回は着地に成功してほぼノーダメージ。それは何回も吹き飛ばされた俺だけでなく会長もだつた。

というか今の会話の流れは確実に改心パートだつただらうが！

「私に近づかないでください」

「……?」

何か様子がおかしい。

「私に近づくと怪我をしますよ」

「……いやいや、火傷するぜ的テンションで言われても……」

「お前さ……」

俺は思わず口を出す。

こいつが俺らを吹き飛ばしたのは怪我させようと思ってのことではなく、きつと自分に近づかせないようにするためだったんだと思う。

自分がまた傷つけてしまわないように。

そうしないように彼女は独りを選んだんだ。

そんな色花はやはり可哀想だった。

「人を傷つけることは人間関係につきものだよ。それに傷つくところが見たくないのならお前がその力を使って守ってやればいい」

「私が守る……?」

「人を傷つけるために力を使うんじゃない、人を守るために力を使えばいい」

「私が人を守る……」

「その代わり、人を守るお前を俺が守ってやるよ」

「え……?」

俺は隣にいる会長のようニコツと笑う。

「俺の名前は七実未空。よろしくお願ひします、先輩」

「……私は……私の名前は……色花……じやなくて……私の名前は……!」

「また私たちがいない間にそんなことをしていたのですか・・・七実さんのお人好しもそこまでいったら本当にもう病気ですね」

「お前は人を素直に褒めることができないのか・・・」
そつちもなかなか病気だと思おうと俺は小さな声で付け加える。

翌日。

俺はあじさい荘にて何があつたのか数夏に伝えていた。
今回はこいつも学校にいたので事の顛末ぐらいは伝えておかないとな。

「ま、でもそんな七実さんも私は好きですよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

マジで照れる俺がいた。

ほめられることに慣れていない俺はもう我慢できなかつた。

「それはそうとして生徒会の人たちの驚く様つたらなかつたな」

会長が何事も無く生徒会室に入るとそこにいた副会長に驚かれ、
そしてそれが後にグラウンドにきた書記の人、会計の人などに伝わり最初は幽霊じゃないかと思つたと言つていた。
だけでもみんな笑顔だつた。

それだけでなんとなく一件落着感が出るよな。

「いやーそれにしてもこれで次からは日常パートですか。あのつまりらない日常を淡々と語るもはやどこが文系でどこが理系だか分からないパートに突入ということですか」

「お前はなぜそんなに日常を目の敵にするんだよ!」

確かにその通りだけでも!

タイトル詐欺もいいところだけでも!

でもそんなにはつきり言わなくてもよくない!?

「ま、でもそんなことを思っている人たちに朗報ですがだいぶ受験が近づいているということでもうそろそろ嫌でも勉強の話題が出てきますよ。なので理系文系はこれからかもしれませんね」

「お前は一体誰なんだ・・・」

「さあ、はやくこの非日常パートをしめてください。いつもみたいに俺はこの日常が一番好きなんだ・・・みたいなぬるい終わり方で」

「そのセリフのせいで余計しめにくくなってることを知ってるか?」

でもこの非日常はこれでおしまいということだ。

なんかものすごく長かったような気がする1日だったけれど。

・・・
・・・
・・・
・・・

「しめの言葉が見つからねえよちくしょう!」

「え?いつもどおりのこの日常が一番・・・はどうしたんですか?」

「そのセリフ!そのせいで使えねえんだよ!」

え・・・では次もよろしくお願いします。

はい。

第55片 文系少年と文系少女の言葉？（後書き）

ようやく非日常編終了です。

ここまで見てくださった皆様、ほんとうにありがとうございました。

もしよければ、これからもよろしくお願いします。

まだまだ本編自体は続きます。

では。

第56片 文系少年と妖精少年の耳

みんなが固唾を飲んで見守る中俺はみんなの前にたつ。

「くっ……こんなことって……」

山梨が驚愕と絶望を浮かべた顔をする。

まわりを見渡してみるとみんなだいたいそんな顔をしていた。

「これはこの物語で一番……一番恐ろしい話かもしれませんね……」

数夏が泣きそうな顔をしている。

小柄な体型なので泣きそうな顔がよく似合うといつかなんといつかか。

正直言つて幼稚園児みたいだった。

「……晴天の霹靂」

緋色がさらにつぶやく。

そしてなんとといって驚きなのはこの異常な自体にまさかあの柏部の部屋のドアが開いていた。

こっちの会話を聞かためなのか……普段はここまでしない。

そこまでこの現象に恐怖を覚えているというのか……。

「くそっ……みんな……そんなに怯えて……」

俺は悔しさに唇を噛み締める。

なんでだ……なんでだよっ！

「なんで……」

俺は震える。

そして前を見る。

前を見て息を吸う。

そして……

「なんでお前ら俺が男友達連れてきただけでそんなに恐怖するんだよっ……」

大変失礼な住人たちでした。

○

「いやー、驚きましたよ。七実さんがまさか男友達を連れてくるとは……」

数夏は俺の隣に座る男を見ながら俺に言う。

「うん、ことりんがね、今日部活だつてことを相当悔やんでたよ」

「高松がそこまで思うほど俺の男友達つて珍しいの!？」

若干へこむ。

日曜日。

あじさい荘一階のロビー&リビングをかねる部屋にて俺の友達紹介が始まっていた。

「というか2人で遊ぶ予定だったのだが……」

「なんかすまん、佐藤。みんな珍しがっちゃって」

「いやいや、いいっすよ。楽しいっす、賑やかで」

佐藤は笑顔を見せてくれる。

背丈が高く髪が耳がかくれるぐらい長い男。

弓道部に所属している。

一応俺の友達である。

「佐藤……そんな普通の苗字の人を連れてくるなんて……」

「いえ、まだわかりませんよ。もしかしたらどこかおかしところがあるかもしれせん」

「………要注意」

なんか俺の女友達がひどく失礼だがまあ、いちいち気にしてなど

いられない。

とりあえず紹介しとくか。

「こいつはクラスメイトの佐藤だ」

「はじめましてっす」

『はじめましてー』

女性陣があいさつをかえす。

「びっくりするほど普通だね！」

「ええ、これは普通ですね」

「……………プレーン」

くっ……………緋色に至っては無味無臭とでも言いたいのか。

俺が欲しかったのはこういう普通な感じの人なんだよ！

「さあ、自己紹介も終わったし、俺の部屋でゲームでもしようぜ」

「そうっすね」

そうして立ち上がるとき何かが佐藤から落ちた。

「ん？何か落ちたよ、佐藤君」

と山梨が言う。

それに気付いた佐藤はあわててそれを拾おうとかがむ。

「ああ、ポケットに入っていた小銭みたいっす」

そしてその小銭をとった瞬間今まで耳を隠していた髪の毛がはら

りと前に傾く。

そして……………

『!?!?』

全員が固まる。

そこにあつたのは耳だ。

ただの耳。

だが……………

『(エ……………エルフの耳だ――――)』

――!(?)』

心の中の叫びが全員一致した。

「(え!?!?なんで!?!?なんでエルフ耳なの!?!?)」

俺は動揺をかくせない。

エルフ耳というのは耳の上、上部がとんがっている耳のことを言う。

ちなみにエルフとは妖精のようなものであり、もちろん現実にはいない。

「ん？どうかしたつすか？」

『い、いや・・・なんでも！』

全員でハモる。

なんだこれ。さっぱり分からない・・・。

友達を連れてくる みんなに紹介 実はエルフ new

状況を整理してみてもまるで無駄だった。

なにこれ。

まったくもってカオスな状況だった。

「・・・七実さん・・・七実さんって意外と顔が広いんですね・・・」

「いやいや・・・エルフ界にまで進出した覚えはないんだがね！」

一応こそそと話す。

「七実くんが人外萌えだったことは知っていたけれど・・・エルフとはなかなかだね」

「まず人外萌えじゃねえよ！」

「・・・未空・・・すごいね」

「待て、尊敬の眼差しで見られるのもなんか違う！というかなんでエルフって決まってるんだよ」

「え？だってあの耳が完璧に・・・」

「今だったら整形か何かでエルフ耳にできるところだってあるらしいんだから、別にエルフと決まったわけじゃ・・・」

ちらりと佐藤を見る。

完璧なエルフ耳だった。

「あ・・・やっぱり人間界は少し息苦しいな・・・」

『（ええええええええええええええええええええええええ！？）』

まさかの発言だった。

そしてそれを発したことに気づいてないらしくソファに再び座りまわりを見渡している。

佐藤はまだここで会話を楽しむと思っっているのだろうな。

「七実さん！今、人間界って言いましたけれど!？」

「い、いや、ほらたまに地球のことを人間界っていうじゃん」

「どこの異世界人ですか！」

「これはまずいんじゃないかな・・・なんかこう・・・条約とかに引つかかるんじゃない？」

「エルフ保護条約かなんかですかね・・・」

「お、落ち着け！まだ・・・まだエルフでよかったと考える。もし悪魔族とかだったらやばかったぞ」

「七実さんが一番落ち着いてください」

あじさい荘に旋律が走っていた。

みんなエルフ耳から目がはなせなくなる。

その瞬間ゴトツという音が聞こえる。

「？」

全員それを見る。

そこにあつたのは木でできた弓矢だった。

「(ほ、本物の狩猟道具だあああああああああああああああああああ
あ!!--)」

そこでみんながまた騒然とする。

「あ、いつけね？弓矢落としちゃったつす」

「いえ、あなたは他に大きないけないことをしていると私は思うの
ですが・・・」

「数夏、静かに！」

くそ！どういうことだ。俺は普通に友達と遊ぼうと思ったのに条約にひっかかるようなことにまでなってしまうている・・・いや、あきらめない！俺は人間説を諦めない！

もう普通な人というのは諦める。

「いや・・・あの柏部、耳とんがってる人とその話するの？」

「耳がとんがっているからって・・・種族差別っすか・・・」
「？」

「なんだよ種族差別って！」

「七実くん・・・これはやっかいなことになったね」

「・・・ああ・・・」

あいつがエルフかエルフじゃないかはもうどうでもいい。
よくないけれど。

けど柏部が出てきたのは残念すぎる・・・これは最終的に妄想の
出し合いで収集つかなくなりそうなんだよね。

「あの・・・さ、佐藤」

「なんすか」

「と、とりあえず俺はこれから1人全裸スパゲティ祭りをやる予定
なんだ。悪いが帰ってくれないかな」

「・・・わ、わかったっ
す」

明らかにドン引いていた。

いや俺がここまでしないと大変なことになるんだって！

「七実美空・・・あなた純粹無垢なエルフにむかってなんてこ
とを・・・」

「柏部、もう色々ツツコミが追いつかないんだよ。高松が居る時
に呼ぶことにしよう」

「七実さん・・・なんかどつと疲れたんですけれど」

「俺もだよ・・・」

「じゃあ、また明日学校でっすー」

「あ、ああ・・・」
ボタンと扉が閉まる。

「あー・・・」
全員疲れが出る。

「なんでエルフを連れてくるんですか・・・」

「俺も初耳だったんだよ、エルフ耳なだけに」
「……」
「……何も上手くないからドヤ顔をやめて」
「してねえよ!」
「私、もう明日のために寝ようかな……」
「俺もそうしたいよ、宿題がなかったら……」
「七実さん、明日数学のワーク提出ですよ」
「いやあああああああああああああああああああ!」
「いや、それは七実くんが悪いでしょう」

○

翌日、教室にて。

「あーしまった弁当忘れたっす」
「おいおい、マジかよ……洒落にやらんぞそれは」
「そうっすね……」
すると教室のなかに誰が入ってくる。
「お兄ちゃん!お弁当、これ忘れてたよ!」
「ああ!悪い、いち!」
佐藤の妹であるいちごちゃん。
話にきいてはいたが可愛い子だな。
みつあみをしているが髪の色は茶色で後ろ髪の方は結んでいない

長髪。

小柄だがメリハリのついた体。

確か高校1年生だったか。同じ学校なんだよな。

「七実さん！箸の持ち方が違うよ」

「あ、ああ、すまん」

世話焼きというのも本当みたいだ。

しかし美少女に世話されて喜ばない男などいない。

「お兄ちゃんもエルフ耳が出てるよ」

「ああ、すまんっす。人間界の空気に弱いのに俺としたことが」

「そうだぞ、佐藤。いちごちゃんに言われるまでもなく……」

「……」

あれ？

「家族公認なのかよ……」

げんなりした。

久々の日常パートでこれはげんなりだよ。

とりあえず次回に続かない！

第56片 文系少年と妖精少年の耳（後書き）

久々の日常パートは書いてたのしかったです。

次もよろしくお願いします。

では。

第57片 文系少年と理系少女の行事

「七実さん、七実さん、そういえばもう少しで体育祭ですね」「ん？」

と数夏に言われ、ふと気付いた。

もうそんな時期か……。

9月の中旬。学校が終わり夕飯を食べた後にあじさい荘の1階、みんなのリビングでくつろいでいた。

「とうかうちの学校の体育祭ってなんか長いですね」

「ああ、確かにそうだな。1週間って学校は公立ではなかなかないはずだ」

「去年その理由が分かりましたが……」

「……うん、『あれ』はやりすぎなような気がするよ」

と数夏と一緒にげんなりする。

体育祭。

生徒達の間では何も飾ることなくそう呼ばれる。

実際の名称は『桜体育祭』。

これもまたシンプル単純な感じの名称ではある。

「今年もこの行事ラツシュがくるのか……」

桜浪高校では秋に行事ラツシュと呼ばれるそのまんまな行事のラツシュがある。

9月の下旬に体育祭。

10月の中旬に学校祭。

10月の下旬から11月にかけて2年生はさらに修学旅行がある。そしてそんな非常に忙しい時期にこれ全てを完璧にこなせる生徒など極一部しかない。

なのでみんなどっかかんかの行事は手を抜くのである。

「それがみんな『体育祭』なんだよね」

「そうなんですよね。学校祭に修学旅行ときたら自然と体育祭が重要視されませんよね」

そして体育祭に1週間使う理由。

それは5日間にわたる生徒会主催の毎年変わるポイント稼ぎ種目があるのだ。

体育祭では勝てば勝つほどポイントをもらえ、ポイントの高いクラスが優勝となる。

そして最後の5日間には今からでも逆転できるように生徒会が企画を考えるのだ。

自由参加だがあまり参加者がいない種目でもある。

「その5日間にも種目は他にあるし、あんな疲れそうな種目に参加するやつなんていない」

「去年はなんてしたっけ？」

「去年は5日間借り物リレー」

「……」

地獄だった。

俺はあまり運動が得意でもなく、去年も行事ラッシュだったため、迷わず体育祭をすてた。

俺だけでなくクラスのみんながそうだったので試合ではもちろん勝てるはずもなく。

そして暇になった俺達のクラスはその借り物リレーを見ていたわけだ。

「私はあまり見ていないんですけど……すごく評判が悪かったのを覚えています」

「範囲はグラウンドだけじゃなくて学区内だった……」

「もうそれだけでなんとなくわかります……」

5日後にはみんなヘトヘトで体力温存どころか絞り出してしまったような雰囲気だ。

「俺は絶対に参加しない」

「でしようね。私もですけど」

「私もやりたくはないよー」

と山梨が会話に参加してくる。

こいつ行事とか好きそうなのに体育祭に関してはまったくやる気がない。

それが意外だったりするのだが。

「今年とかやばいものになりそうだよな」

「今年の生徒会長は変わり者っていう噂があるからね」

俺の場合、実際生徒会長と会ってはいえるのだが・・・なんと気が抜いてはいけないような相手だった。笑顔なのに、笑っていないような印象があった。

「とんでも企画になりそうですね」

「・・・・・・」

考えていた。

いつから俺は勝ちに対しての関心が薄くなったのか。

人間が変わることは難しい。長い年月と少しずつの変化に耐えながら、ひたすら努力しなければならぬ。

目に見える変化なんて起こるはずもなく、いつの間にか努力することをやめていた。

ひたむきに頑張ることを忘れていた。

努力をして変化したのならそれは努力の天才であり凡人ではない。結果がでたのなら努力の天才という天才であり、凡人は努力をしても結果がでることなどないのだ。

だからやめた。

勝つことにはこだわらず、本気を出さなかった。

本気を出して負けたときの言い訳がなくなるから。

本気で挑んで負けた時にはさすがのものがなくなるから。

俺は何もせず、ただただ過ごす方法を覚えた。

時間を。

変わらない日々を。

「どうしたんですか、七実さん」

「ん？あ、いや・・・なんでもない」

「七実くん、どうかして体育祭消せないかなー」

「それは俺よりもお前の方がむいてるだろ」

「私の妄想はさ、全員が嘘を信じたら本当になるみたいに誰か一人が妄想にかからないだけでかなり不安定なものになるんだよねー」

「世界変えたときは？」

「私には記憶がないんだけど、熱が出てたりしてたから・・・たぶんそれで制御できなくなった限定解除状態だったんじゃない？」

「お前は人間界で力を制御されてる死神か何かなのか・・・？」

「ふふん、そんなところだよー」

そんな笑顔を見せられては何も言えない。

その時、あじさい荘の入口が開かれる。

「やあ、みんな元気？」

「・・・・・・生徒会長・・・」

生徒会長がそこにいた。

「なんでここに？」

「なんでって・・・あじさい荘ってただの寮じゃないでしょ？学校付属の寮なんだから場所も簡単に特定できる」

「・・・・・・」

やっぱりなんかあなどれないな・・・この人。

「あら？お客さん？」

とそこでキツチンから香織さんが出てくる。

「生徒会長です」

数夏が答える。

「生徒会長？君がそうなのね」

「ええ、あなたが寮母ですか？」

「香織よ」

「・・・・・・香織さん。上の名前は？」

「上なんてどうでもいいわ。私は香織」

「・・・・・・似てますね」

「似てる？」

「とここで声を出したのは山梨だ。」

「うん、実は昔一人で……」

「で、君はなんの用なのかな？」

生徒会長が話した瞬間に香織さんが遮る。

「？」

「なんだ？」

「おしゃべりがすぎましたね。俺はただ誘いにきただけだよ、文系少年に理系少女、そして妄想少女」

「？」

「なんですか？」

「ほえ？」

「体育祭の生徒会主催競技に出てもらいたい」

「……」

沈黙が起こる。

「俺は遠慮します」

「私も」

「断ります」

目の前に生徒会長がいるのに誰一人頷かなかった。

「はつきりものをいう子たちだなあ」

でも笑顔。

「でも興味が出たら教えてよ。いや、教えなくてもいい。だから参加用紙に名前をよろしく、じゃあね」

「と言うとすぐさま去っていった。」

「……」

しかし興味があったのは香織さんのこと。

似てるとかなんとかって言っただけど、誰に？

でも聞いても香織さん教えてくれなさそうだな。

またキッチンに戻っちゃったし。

「七実くんどうする？」

「どうするったって香織さんが教えてくれない限りはどうしようも」「いや、そっちでなく」

「ああ、競技か……。とりあえずギリギリまで考えておく。山梨と数夏は？」

「私も考えることにします」

「私は天地がひっくりかえっても参加しないと思う」

山梨は参加しないらしい。

「あともう少しで……。か……。」

体育祭は近づいてきている。

温度差があるけれど、行われる。

そんな体育祭が。

第57片 文系少年と理系少女の行事（後書き）

大変遅くなり申し訳ありません。

次はもっともっとはやいと思うのでお付き合いをお願いします。

ではまた次回。

第58片 文系少年と妄想少女の死線

まさかだった。

目先のことにとらわれるとはよく言うが目先すぎると案外目には入らないもので今日までその存在に気付かなかったのは痛いと言っ
ていい。

「まさか体育祭の前にテストがあるなんて……」
嘆いても時間は戻らない。

俺は自分の部屋で死に物狂いで勉強していた。
リビングに行きたいところだがもうみんなと喋っている時間さえ
惜しい。

「うわああああ！これ久々に死線が見えるよ。見えたらうえに超えて
しまいそうだよ、その線！」

もう悪あがきだった。

テスト勉強初日から悪あがきという珍しい状況に俺は少し考える。
……

絶望しかみえない。

「どうするか……」

まともによっても勝機はみえない。

国語の現代文、古典はいい。俺の得意分野だ。

だが問題は暗記科目と数学である。

「数学って……数学ってほんと……」

俺がさめざめと泣きながら数学に取り掛かるうとした。
その時だった。

「によるーん」

「……」

変な声が聞こえた。

「お困りのようだね」

「……」

おかしい。

ドアが開いた様子もないし、そもそもそこまで大きい部屋じゃない。だから人の出入りは必ず分かるというものだ。

声は後ろから聞こえている。

「……………」

「……………」

俺は思い切って後ろを向く。

「やあやあ、久しぶりだね」

「……………」

沈黙。

天井から人が生えていた。

屋根裏とかそういうんじゃないかと本当に生えている。

なんか天井と同化している。

そして一番の問題は。

「……………誰？」

知らないやつだったということだ。

「えーおぼえてないのですか？」

「覚えるもなにも初対面なんだけど」

俺の知り合いにはこんな意味の分からない化け物はいない。

というか天井に生えてるということ以外は普通の女の子だった。

黒髪でメイド服みたいなエプロンを着ている。

「……………」

なんか見覚えがあるな……………」

「黒曜石はただあなたに会いたかっただけなのに……………」

「涙を見せてみるもあなたはまるで興味をしめしてくれないみたい

です……………」

「……………」

「どうやら名前は黒曜石というらしい。

黒曜石？」

「山梨が改変した後の世界を救って……………」

いた手紙に書かれていた名前ですんなようなやつがいたはず・・・」
「むー、黒曜石は怒り心頭、あなたが初対面だったムエタイキック
をしているところですよ」

「俺としては初対面なんだけれどね」

「ところで七実美空。何をしているのですか？」

「いや、話を変える場面ではないだろ。まず聞きたいことがある」

「はい？なんでしょうか？」

「お前は人間じゃないな？」

「はいっ！」

はいっ！って満面の笑みで答えることじゃないだろ・・・。

「山梨の妄想か？」

「いえいえ、黒曜石はもう山梨戸張の妄想の中だけの黒曜石ではな
いのです。自立型妄想というべきでしょうか」

「意味が分からない」

なんかよくわからんが妄想は妄想でも山梨の妄想の中だけではな
くいろいろな場所に出れるようになったということか。

「それって幽霊と変わりないんじゃないかね？」

「いえいえ、黒曜石は誰にでも見えますよ。一応、見えている間は
実体がありますしね・・・よつと」

そう言っつて黒曜石は天井から抜け地面に降りる。

ドサツという音がするからマジで実体があるのか。

「で、黒曜石の質問には答えてくれないんですか？」

「ああ、俺か？俺は・・・」

「？」

「俺はテスト勉強をしているのだった！」

そこで重大なことに気付く。

なんてこつた・・・。

「俺はお前みたいな半幽霊を相手にしている場合ではない」

「黒曜石です。半幽霊ではないですよ・・・テスト勉強ですか。
なるほど」

「ん？」

「いえ、黒曜石はバカなので何も思うことはないのですが」
「……」

手伝ってくれるのかと思った。

そんな俺がバカだった。

「でも今回は本当に時間がないからな。人に手伝ってもらう時間もないかもしれない」

「そんなに追い詰められてるんですか？」

「まあ……それなりに」

「黒曜石の好物は人の不幸です」

「帰れ」

いるだけならまだしもいる上に楽しそうにされたらたまったもんじゃない。

「なんという言い草！」

「いや、もうなんでもいいけどさ……」

手を動かすのは忘れない。

うーん……この問題は一度微分してから解けると思ったんだけどな。

多分グラフが……。

「迷ってますねー手伝いましょうか？」

「お前バカなんだろ」

「し、失礼な！」

「お前が言っただよ！」

「くっ……わかりました。じゃあ黒曜石が先ほどまでいた家の女の子のパンツの柄をお教えしましょう」

「お前は何を言ってるの!？」

「黒曜石は半幽霊ですからね。そんなのいとも簡単に見えますよ。地面から生えれば！」

「半幽霊を肯定しやがった!あとお前が行なっているのは犯罪だ！」

「あれは人間を縛るための法でしょう。黒曜石のような黒曜石は縛

い
「

俺の心はもうすでに折れていた。

第58片 文系少年と妄想少女の死線（後書き）

とりあえずはやめにといいことで。

体育祭は次回からの予定となります。

よろしく願います。

ではまた次回。

第59片 文系少年と理系少女の体育祭 1日目

体育祭当日。

すなわち体育祭1日目である。

俺はだるい体を無理やり動かすためにグラウンドに出る。俺は一応サッカーに出場予定なんだけど今は何をやっているのだろうか。

「お、七実」

「ああ、竹内くん」

同じクラスの竹内くんが話しかけてくる。サッカーで同じチームなのだがもしかしてもう試合が始まるということなんだろうか？

桜浪高校のグラウンドは広く、サッカーもいくつかの試合をやっており他にもキックベースなどもやっている。今頃体育館ではバスケットボールもやっているところだろう。

「もう少しで俺らのチームの試合だ。とりあえずチームで集まって作戦会議をしよう」

「わかった」

俺は竹内くんの後につづく。するともうグラウンドの一部に俺らのチームが集まっていた。

「おー、七実くん」

「よ、山梨」

そこに山梨もいる。サッカーは男女共同でチームを作れるためこのようなチームになったわけだ。で、ここからポジションを決めなければならぬ。

「ところで相手は？」

「相手は3組だつてよ。気をつけるべきはサッカー部の連中じゃないからな」

「む？」

サッカー部じゃない？普通はサッカー部を真っ先にマークしたほうがよくないか？ちなみに俺らは2組でとなりのクラスだったりす

る。

「3組にはあいつがいるからな」

「あいつ?」

俺と山梨以外は分かっているのかみんなうんうんと頷いている。というかこれすごくチームワーク抜群なんじゃなかるうか。頷き方がみんな同じだ。

「下野だよ。下野しものふたば双葉。バスケット部ですげー足が速いやついるんだ」
「……………」

最近下野さんが話にすごく絡んでくるんだが、偶然だろうか。黒曜石もなんか言ってたもんな。あいつの場合内容がパンツだったけど。

「じゃあ下野さんをマークしろってこと?」

「そう。でもそこだけに人員を割くわけにはいかないからな。下野はお前に任せた、七実」

「俺!?!」

運動に自信がないなかそんな要注意人物をマークしろってすごく無理な話じゃないか。

「足には自信ないんだけど……………」

「いや、完全にマークしなくていい。少しでも邪魔できれば儲けものだ」

「はいはい!じゃあ七実くんはディフェンダーってことで」

「おい、山梨。なぜ俺がディフェンダーなんだよ」

「七実くんに向いてるかなあつて」

「本当は?」

「私がオフェンスをやりたいから少しでもオフェンスやりたいライバルを減らしたい!」

まさかの仲間内ですでに心理戦が始まっていた。

俺は別にどこでもいいけど…………でも下野さんが期待されるというのなら下野さんにボールを持たせて突っ切らせるのが普通。そこで俺の出番というわけだな。

そこから俺らは30分ほど簡単なミーティングを行い、試合に備えることにした。

○

「今年もすごく盛り上がったね、体育祭」

「で、君は何をしにきたの？」

「生徒会長、そん『無』に冷たくし『無』いでよ」

「君は何を考えてるかわからないからね、警戒もするぞ」

「何もしないよ、君にはね」

「………ま、いいけど。体育祭をぶち壊すようなことはやめてくれよ」

「うん、そん『無』ことしないよ。いくら僕でもね」

○

『えー、今から2年3組と2年2組のサッカー試合を始めたいと思います』

というアナウンスがはいる。

すでに俺らのチームはベンチというか休憩所的なところに集まっ

ており、クラスの応援も結構な数になってきた。

「すげー応援されてるな・・・」

「なに怖気付いてるのさ、七実くん」

「いや、こういうの慣れてないから」

「まあ、でも3年生と試合しなくてよかったことを喜ばないと」

「まあな」

学年は関係ないので3年生とあたる確率も十分あったわけだ。しかし相手には・・・。

「あ、下野さんだ」

下野さんがいる。小柄な体なのにどこからそんなエネルギーを出しているのだろう。

「じゃあ、両チームともコートに入ってください」

審判をしている生徒にそう言われる。

すごく緊張するな・・・これ。

俺達はコートの中真ん中に整列する。

『よろしくおねがします!』

全員が声を揃えて叫ぶ。

というかこれ、いつサッカー物語になったんだろう・・・。

「よし、ポジションにつくぞ!」

俺達はそれぞれポジションにつく。

キックオフは相手からだ。

そしてそのボールを受ける相手が・・・。

「やはり下野さんか」

俺の予想通りやはり下野さんの足のはやさを使って突っ切る気だな。

しかしサッカーをなめてはいけない。足の速さだけでどうにかなるスポーツではないからだ。

ピーっ!

と笛の音が轟く。

キックオフだ。

下野さんにツインテールの女の子・・・名前はわからんから津井さんなんてどうだろうか。津井さんが下野さんにボールを軽く蹴る。「よし！」

ここでどう相手が出るかによってこちらの動きも決まる。

下野さんはボールをもらった瞬間に走り出す。

やはり下野さんに突っ込ませる作戦か。

「つて、え？」

そこで俺は異変に気付く。

ゴール前にいる俺はゴールキーパーの方を見るが彼も驚いているようだ。

「は、はい！」

下野さんの足の速さはボールを持ってても衰えなかった。

真っ直ぐ突っ切ってくる。

「お、おい！誰かとめる！」

止めるつて、それ、俺らディフェンダーしか止めれなくね・・・？サッカーの人数はオフェンス3人、ミッドフィルダーが4人、デフエンス3人で構成されている。

ミッドはもうすでに抜かされているため、俺らしか止めれない。

「く、くそ！」

俺はがむしゃらに向かう。

もうそれしか手はないからだ。

というかこわい！止まらないだろ、これ！

しかし下野さんはそれを見越していたように急に止まる。

「え・・・？」

「ごめんね」

彼女は笑顔でこちらを見て、思いつきり横にボールを蹴る。

「え？でもそこには・・・」

そう、そこには誰もいないはずだ。味方でさえ下野さんの足の速さについていけなかったのだから。

その考えがすでに間違いだと気付く。

そこには下野さんの味方、津井（仮）さんがいた。

「!?!」

津井さんはそのまま、ゴールにシュート。

あっさりと決まる。

「なっ……」

そう、忘れていた。

彼女の足の速さに匹敵する速さの人がいると考えることを忘れていた。

それがすでに相手の作戦だったのだ。

「下野さんの足の速さを囷とした作戦……!」

これで点数は相手が1点とって0-1である。

相手チームの応援である歓声が響く。

「津井さんも足が速かったのか……」

「……?」

津井さんが首をかしげる。

あ、津井さんって俺がつけた名前だった。

そりゃあ、首かしげますね。

「……」

でもこれで注意すべき相手が見えてきた。

頑張ろう!という気持ちと裏腹になぜか笑えない俺たちであった。

第59片 文系少年と理系少女の体育祭 1日目（後書き）

次もサッカーが続きます。

よろしくお願いします。

では次回。

第60片 文系少年と理系少女の体育祭 1日目？

前半と後半。前半と後半の間には作戦会議時間のようなインターバルもあるそんな簡単なサッカールールにしている。

高校生の体育祭レベルなのだからあまり本格的なルールにしてもしょうがないというものなのらしいが。今の俺たちにはそんなこと考えている余裕はない。

「くっ！」

下野さんと津井（仮）さんを止めるのに必死だった。

少し助かったのは2人ともサッカー部ではなく女子バスケット部なので足でボールを扱うことに慣れていないこと。

なのでこちらのサッカー部が止めればなんてことはない。

相手にもサッカー部がいるのだが足が速い2人なので味方も追いつかない。だがこちらも追いつかない。抜かれたら終わりである。すなわち。

もうサッカー部でない俺は役に立たないということだ。

しかし点差は1点差の0-1であり変わっていないのは完全にうちのチームのゴールキーパーのおかげである。

「はぁ・・・はぁ・・・あー・・・くそっ・・・」

普段から運動しているわけではない俺はもう体力の限界にきていた。

汗が目に入ったり、顎から流れ落ちたりと邪魔になることがあったがそんなことはもうどうでもいい。

役に立っていないのに無駄に走るからこうなるのかもしれない。

「七実くんっ！」

山梨との声で気付く。

目の前には下野さんが来ていた。

これはどう考えても俺が止めるしかない。これ以上、まだ後半も残っているこのゲームでゴールキーパーを疲れさせるわけにはいか

ない。

「……………」

俺はここで考えた。

俺はここでもう諦めていた。チームの勝利を。

小さい頃、小学生ぐらいのころは勝ち負けにとても敏感だったのに。

紅組、白組だったけれどそれでも俺が目立っていなくても関係なかった。とにかく勝ちたかった。

でもいつの頃からか勝利を求めなくなっていた。

それがもうここで出てしまっている。

心のどこかで諦めているんじゃない。心全てで諦めている。

「……………」

しかし体は動かさなくてはいけない。

それが使命であるかのように、自分の意思とは関係なく、使命であるように。

「……………」

しかしあっさりと抜かされる。

それはそうだ。勝つ意思がないのだから勝てるわけがない。敗戦ムードを一人で盛り上げている。

そんな俺が止められるわけがないのだ。

ゴールキーパーの内山くん。ごめん。

あとは頼んだ。

俺は何もできなかったよ。

そう込めた視線を送ろうとした瞬間に笛がなる。前半が終わったみたいだ。

これで5分間のインターバルが始まる。

「大丈夫？七実くん。なんかぼーっとしてたけど……」

「ん？いや、大丈夫だ」

「じゃあ作戦会議だ。問題は足の速い2人だが……どう止めるかな」

「私の妄想はさすがに使えないしね……うーん、さらに2点決めないで勝てないのか」

「じゃあサッカー部をディフェンスに配置するか？」

「いや、それだとオフエンスがからあきになる。相手のゴールキーパーもサッカー部だから勝つことを考えるとそれは得策じゃない」

「内山は大丈夫か？」

「俺は平気。だから勝ちを優先するんだ。守りをかためても勝てないからね」

「じゃあ配置はそのままにしてどうするか……だな……」

「……」

「七実くん？」

「……いや、大丈夫だ」

○

「ふむふむふむ」

「どうした？津神坂つがみざか」

「いやいや、なんでもないよ。わたしはただ広いグラウンドに驚いていただけだよ」

「お前もこの生徒だろ」
「そんなんだけどね。ところで生徒会長、君はこんなところでいてもいいのかい？」
「体育祭なんだ。俺だって参加するさ。というからお前と同じチームでバスケに出ているんだが」
「わかってるわかってる。でもわたしは嘘つきだから分かっていないかもしれないけれどね」
「で、そんなお前に頼みたいことがあるんだ」
「ん？なにかな？」

○

笛の音がする。
後半の開始だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
なるほどね。

確かに恥ずかしかったな、前半の俺は。
ミーティングの時、誰も諦めていなかった。
それなのに俺だけだ。あんなに弱気になっていたのは。

「七実くん！」
また山梨の声が聞こえる。
下野さんが来ているようだ。
だとしたら俺は・・・死ぬ気で止める。

「・・・・・・・・」
相手にフェイントをかける技術はないはず。だったら、動き出し

た瞬間に右か左かに移動すれば止められる。しかしこれは確実にではなく確率半分の賭けである。

でも何も無い俺にはこれしかない。

こい！

相手は左を気にしている。だとしたら俺も左に動けばいい。しかしまだ決断するにははやい。

ギリギリだ。

もっと引き付ける。

もっともっと。

もっと！

今だ！

相手の足が不規則な動きを見せる。どちらに移動する気だ。

左か。右か。

右だ！

俺は相手が動き出した瞬間に右を選ぶ。しかし相手は左に動いていた。

しかしパスをする気がないのはまだここでパスをしても意味がないということか。

のちのちのサッカー部に対して不意のパスを出すんだな。

だから俺は戦力外。

俺なら抜かせると思ったわけか。

「.....」

下野さんにここで抜かされる。

しかし、ここで諦めるさっきの俺じゃない。

がむしゃらに追いつくまで走る。

相手は左にずれることによって少し勢いを失っている。

そしてゴールキーパーの前にサッカー部のディフェンスがいる。

そこへの対処法を考えていても相手は減速しているはず。

だから間に合うには今しかない。

「くっそおおおおおおお！！！！！」

思いつきり走る。

相手はまだパスするわけではないらしい。

だったらサッカー部を抜くつもりなのだろう。

そして案の定サッカー部を抜かすため、動き出すがそれはフェイントらしくパスをする。

予想外。

うまい具合にかわしたあとゴールキーパーめがけて津井さんがシュートする。

しかしそれはゴールキーパーが思いつきり弾く。

そのボールは下野さんにわたり、がらあきのゴールを狙われるが、そこで俺が追いついた。

「!?!」

「よしっ!」

俺は下野さんの前に急に現れる。

ずざざーっ!と滑るように。

それに驚いた下野さんのボールを奪い、味方にパスする。

「七実くんナイス!」

その味方は山梨にパスしたらしい。

「あー・・・疲れた・・・」

俺はその場から動けない。

息絶えだえである。

その後、山梨はオフENSEのサッカー部にパスをしてなんとか1点をもぎとった。

「うおおおおおおおおお!」

とチーム全員で喜び、うちのクラスの応援席もすごい盛り上がりになっている。

ああ・・・そうか・・・なんか疲れが心地よい。

これが勝利の味。

まだ勝ったわけではないけれど、それでも頑張るのは気持ちがいい。

○

結局俺たちのチームは2 - 1で負けてしまった。

でもまあ、これはこれでいいかななんて妥協なんかではなくプレイに満足いったような感じだ。

『ありがとうございます！』

そして試合が完全に終了する。

味方のベンチに戻り、一段落。

汗をタオルで拭い、用意していた飲み物を飲む。

「七実くん、後半すごかったねー！」

「山梨。いや、お前もほんとに初心者かってぐらい良かったな」

なんて負けたのにそんなことを微塵も感じさせない会話で盛り上がる。

そこで。

「七実・・・くんだったっけ？」

と俺に声がかかった。

聞きなれない声。

誰だ？

そう思って立ち上がった目の前に下野さんがいた。

「君、すごかったね！」

いきなりのことで驚く。

「え、えつと・・・」

「あ、ごめんね。双葉の自己紹介がまだだったよね。下野双葉っていうんだ。女子バスケット部」

「え、えつと俺は七実未空。帰宅部」

帰宅部は言わなくてもよかつたんじゃないかと激しく後悔する。

「七実くんが追いついてきたときに驚いたよ。足速いんだね」

「いや、下野さんほどじゃないし、一回シュートして弾くって言う時間があったから追いついただけ」

「すぐそっけなく返してしまった。」

「自己嫌悪する、俺。」

「というか下野さん相手だと上手くしゃべれないな……。」

しかしそんな俺に下野さんは気を悪くしたわけでもなく、さらに目を輝かせる。

「それでもだよ！そこまで考えて動けるってことはやっぱりすごいと思う！双葉は頭がよくないからそんなこと考えられないしね」

「俺もそんなによくはないよ。それに走ることしかできないから。それしかなかったんだ」

「そんなことないよ。走るっていうことは大変で大切なことだから優しい。」

「スポーツ少女優しい。」

「じゃ、双葉はこれで」

「うん、じゃあ」

「そうしてあいさつをかわし、また一休み。」

「ふう……」

「七実くん、モテモテだね！」

「いや、うるせえよ。あともててない」

「ふふふ……ほんとうかな？」

「七実さん！」

「うわっ！数夏！？」

「すごかったです！私感動しました！」

「いや、それはありがたいけれど」

「なのでちゅーしてあげます！」

「いや、意味が分からない！こいつ酔ってるんじゃないのか！」

「きつと体育祭とか学園祭独特の一時のテンションのせいじゃない」

かな？」

「冷静に分析するな！」

「……数夏可愛い」

「緋色！？」

「……最近出番がなかったから」

「いや、うん……なんかつつこみにくい」

「……私がキスをする」

「ひ、緋色さん！？はっ！わたしは一体なにを……」

「ひいろーんの恐怖によつて素に戻ったね」

「わわっ！緋色さん！それはタンマです！」

「……なぜ？」

「なぜ！？いや、それは私は女の子が好きなのじゃないというか」

「……私は好き」

「ひどく意見が一方通行です、ここ！」

こうして俺達の体育祭1日目が終了した。

なんてかっこつけてるわけだけど、2年2組はもう全部の競技で敗退したため2日目以降も試合がないというのはあまり大声で言うことではなかった。

第60片 文系少年と理系少女の体育祭 1日目? (後書き)

というわけで二日目を飛ばして三日目へ。

の前に少しだけ短い2日目を。

ではまた次回。

第61片 文系少年と理系少女の体育祭 2日目

「で、結局会長の方は説得うまくいったんですか？」
と僕こと伊藤が会長に尋ねる。

「大丈夫」

「文系少年とかは？」

「それも大丈夫。ほら」

そういつて会長は今年の生徒会主催競技参加名簿を見せてくる。

「あ、七実未空。それと岸島数夏も」

「でしょでしょ？それと他にもいろいろ。今年は例年より多いね」

「例年より多いなんてものじゃないですよ、これ。去年なんて参加した生徒50人もいたかどうかでしたけれど、今年は生徒の半数以上が参加してるじゃないですか」

「うん、まあ頑張ったからね」

「で、『仕掛ける』側はどうなってるんですか？」

「そっちも大丈夫。ちゃんと話をつけてきたよ。ただまあ、嘘つきが1人いるからそこはどうなるかわからないけれど、そうになったらそなたで誰か投入するさ」

「じゃあ、もうバッチリですね」

「うん」

「僕はとりあえず深夜アニメの録画をしてくるんで、これで」

「……どうでもいいけど、伊藤書記って体育祭で疲れてたりしないの？」

「僕は……まあ、常に寝不足みたいなものですし、疲れてはいますけどそれに慣れてはいますね。ただすごく眠いですけど」

第61片 文系少年と理系少女の体育祭 2日目（後書き）

とりあえず短めに2日目を終わらせました。

次は3日目からのスタートです。

次あたりからまた更新が遅れたりもしますが、どうかよろしくお願
いします。

ではまた次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4372o/>

理系少女と文系少年。

2012年1月12日10時27分発行